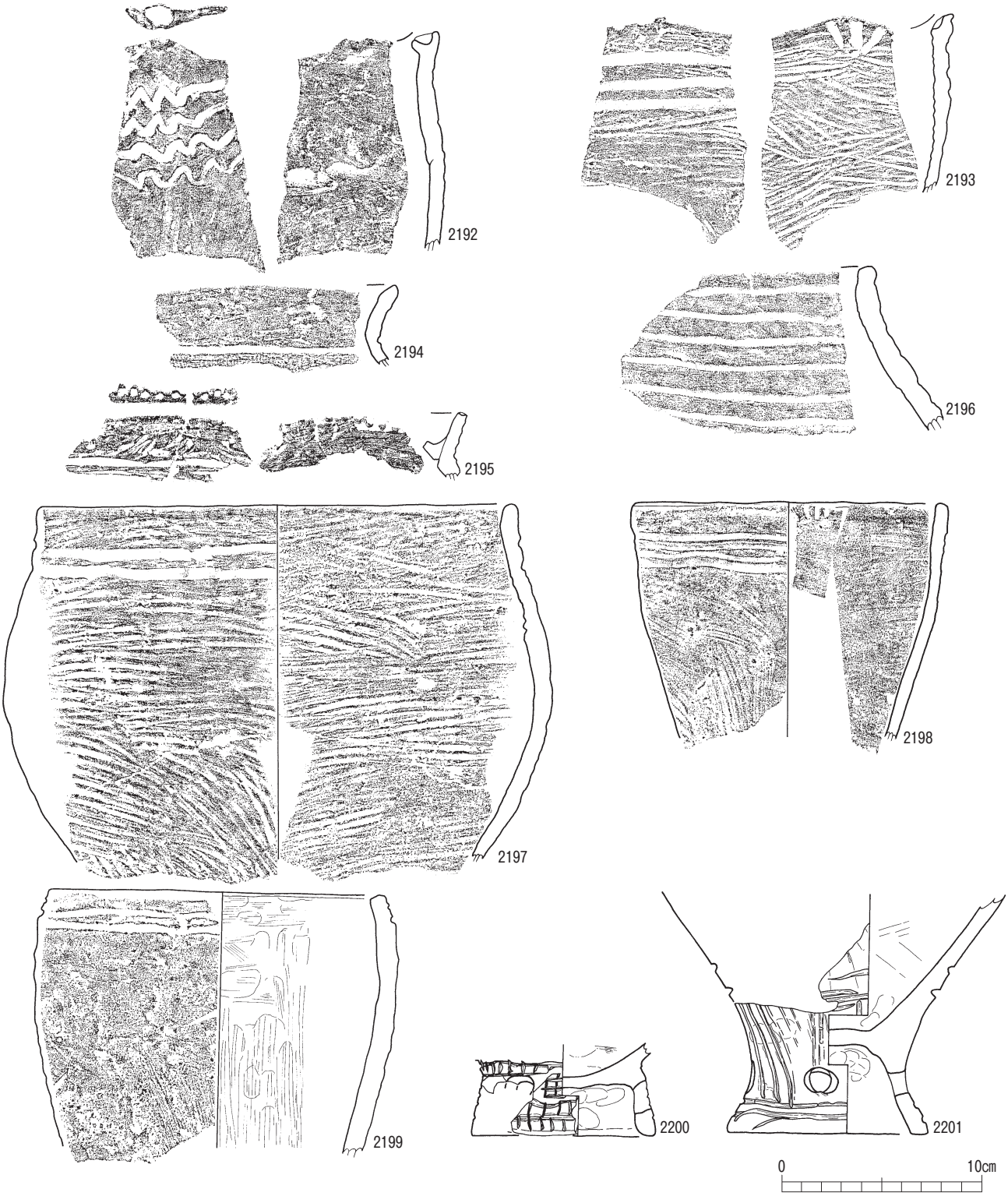


第339図　指宿式土器（183）Ⅲａ類⑨

の短沈線が密に施されている。また，沈線の左右には，巻貝殻頂部による刺突文が施されている。2188は，口縁部に沈線を４本破線状に横位に巡らしている。2191は，口縁部を逆く字状に幅広くし，そこに刺突文や沈線を施しているものである。2192は，浅い凹みのある突起部を有するものである。胴部上部から口縁部に，突起部下位で波状になる横位の沈線を４本巡らしている。2193は，突起部上面から内面に３本の短沈線が施されている。口縁部には，横位に沈線を３本巡らしている。

2194～2197は，鉢である。2195は，内面に突起のようなものがついている。口縁端部には，巻貝殻頂部による刺突文が施されている。2196は，口縁部に横位に沈線を

６本巡らしている。2197は，鉢としたが胴部が膨らむ深鉢の可能性もある。口縁部には，横位に沈線を２本巡らしている。

2198・2199は，小型の鉢である。2198は，口縁部に横位に沈線を３本巡らしている。2199は，口縁部に横位の沈線を２本巡らしている。

2200・2201は，台付き鉢の脚部である。2200は，透かしのある脚部である。くびれ部や脚部下部に横位の沈線を施し，この沈線を切るかのように縦位の短沈線が施されている。2201は，透かしのある脚部である。底部から脚部にかけて，斜位や横位に沈線による文様が施され，脚部下部に横位の沈線が２本施されている。

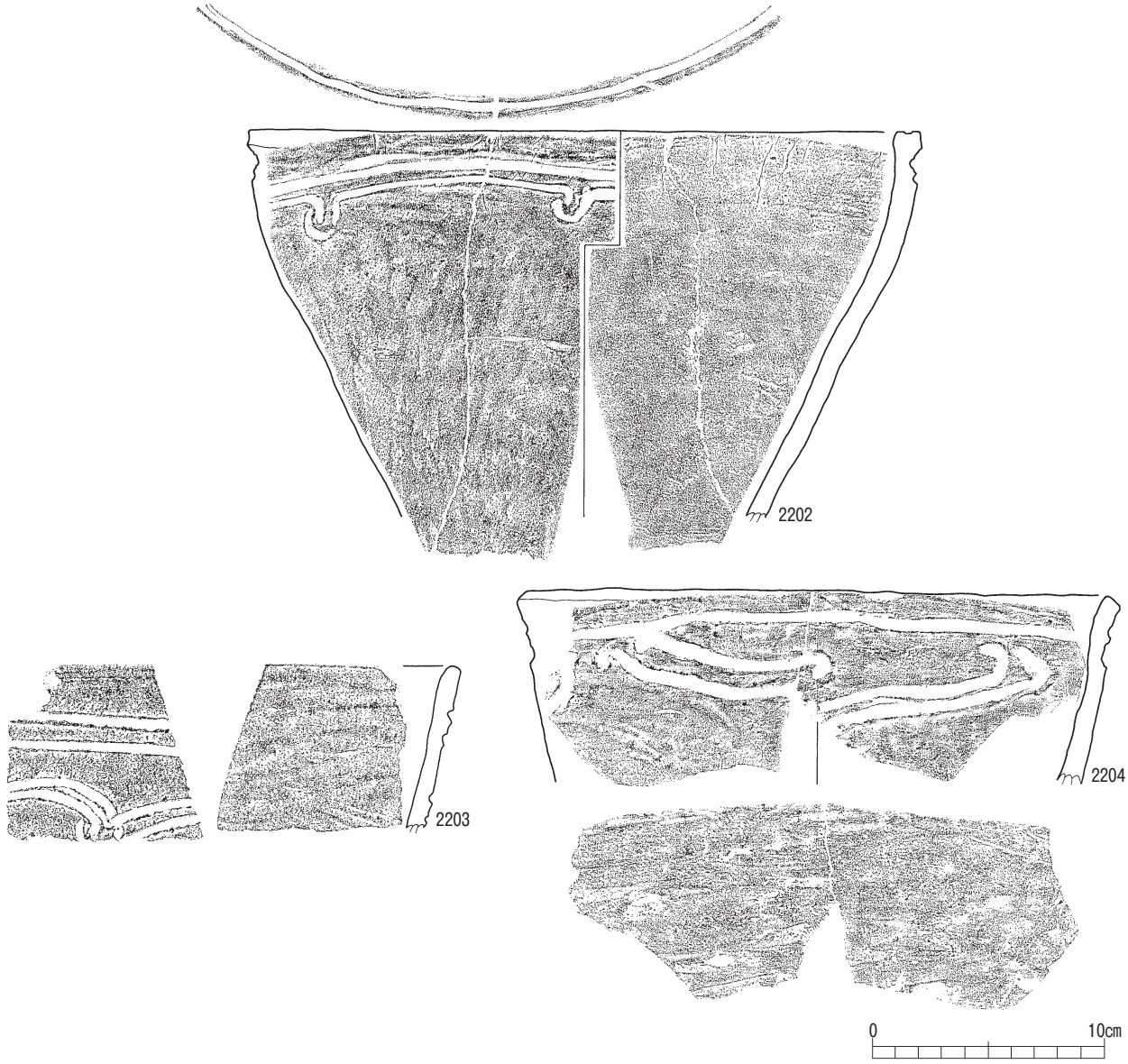
イ　Ⅲｂ類土器（第340図～第347図 2202～2236）

Ⅲｂ類土器は，口縁部付近に入組文のある横位の沈線を巡らしているものである。器面調整は，横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は，丸く収めるものがほとんどであるが，平らに仕上げるものもある。深鉢・鉢がある。

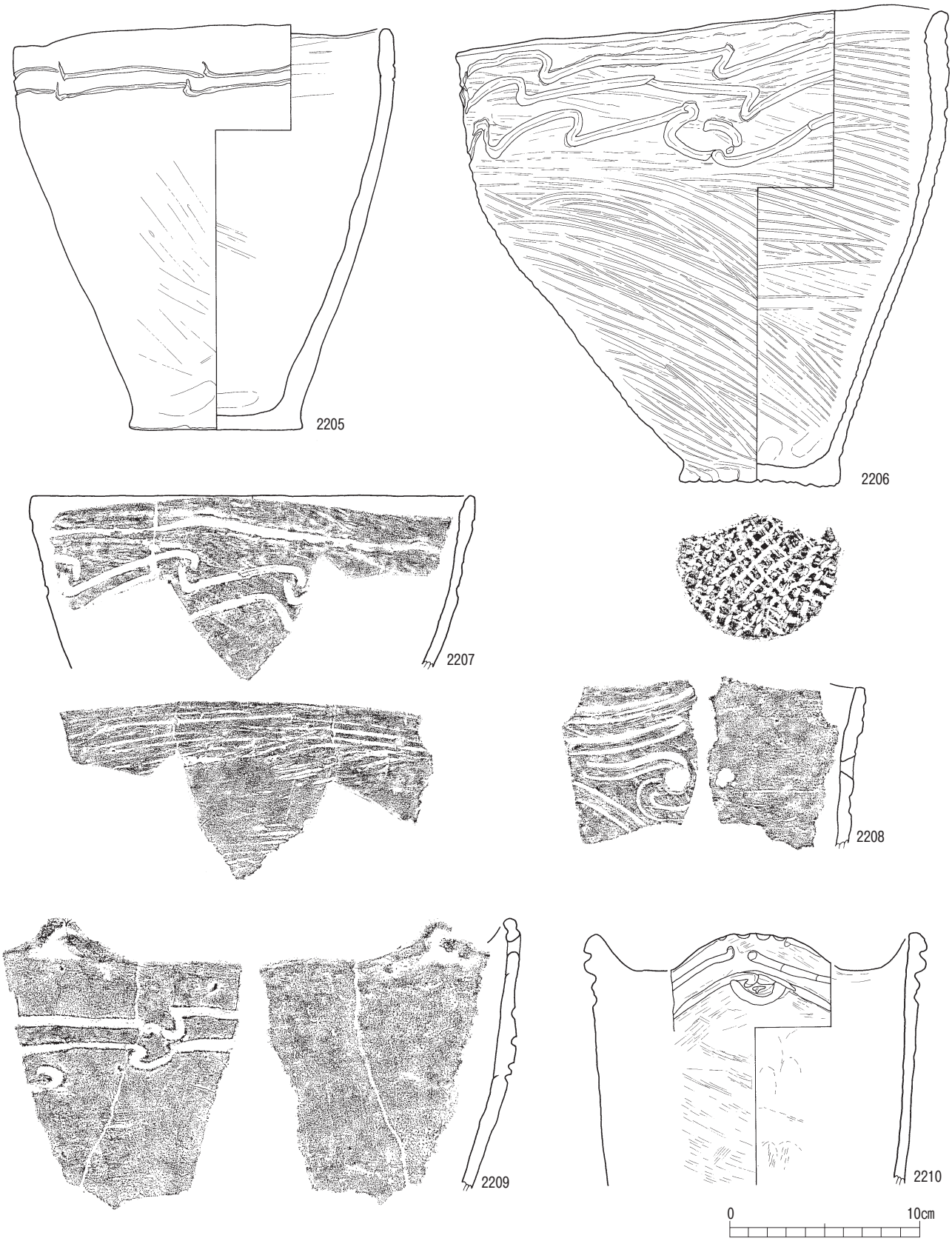
2202～2233は，深鉢である。

2202～2218は，口縁部が胴部から開きながら立ち上がるものや直行するものである。

2202～2207は，平口縁のものである。2202～2204は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしているものである。2202は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしている。口縁部は，平らに仕上げ溝のように沈線が施されている。2203は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2204は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を弧状に巡らしてい

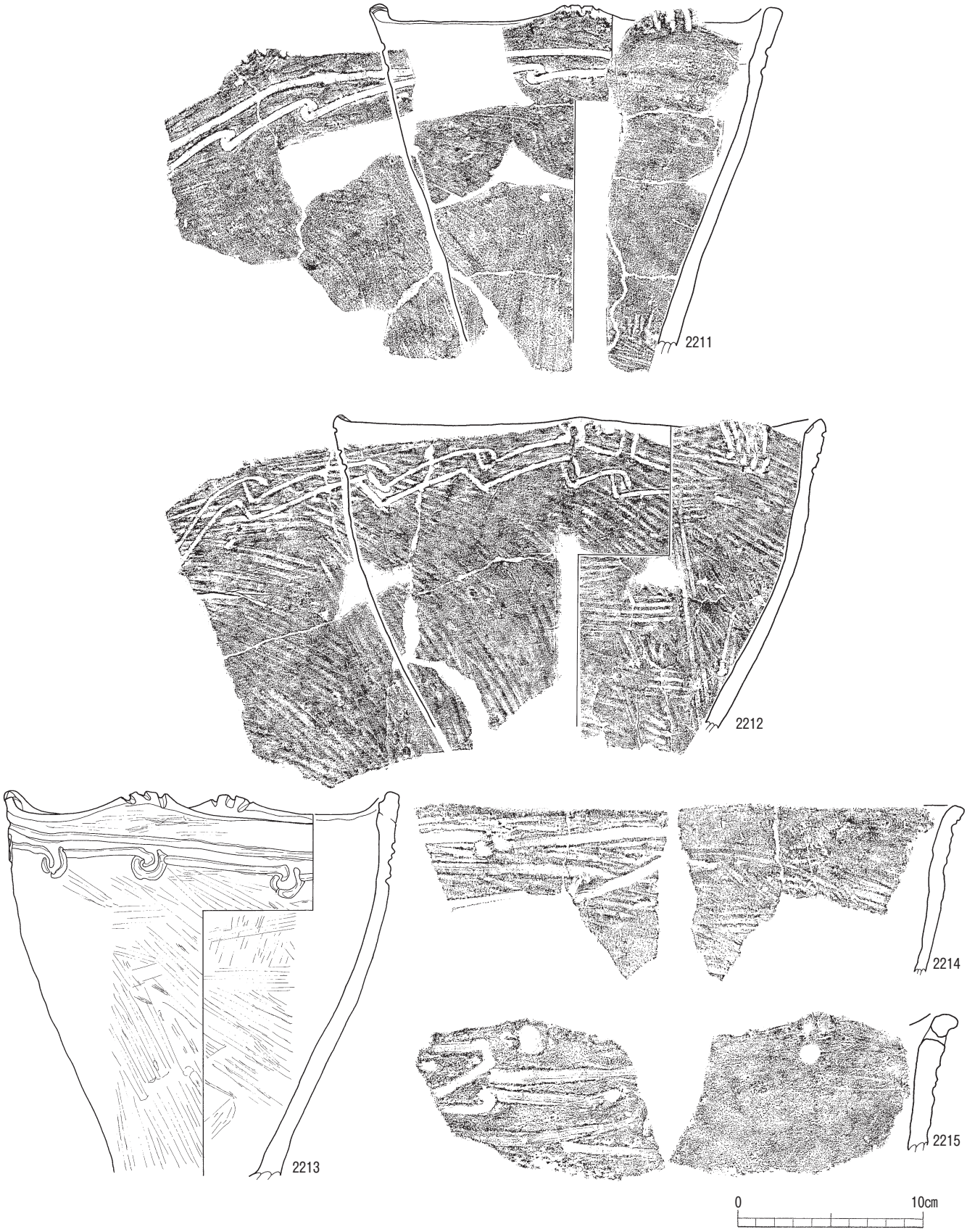


第340図　指宿式土器（184）Ⅲｂ類①



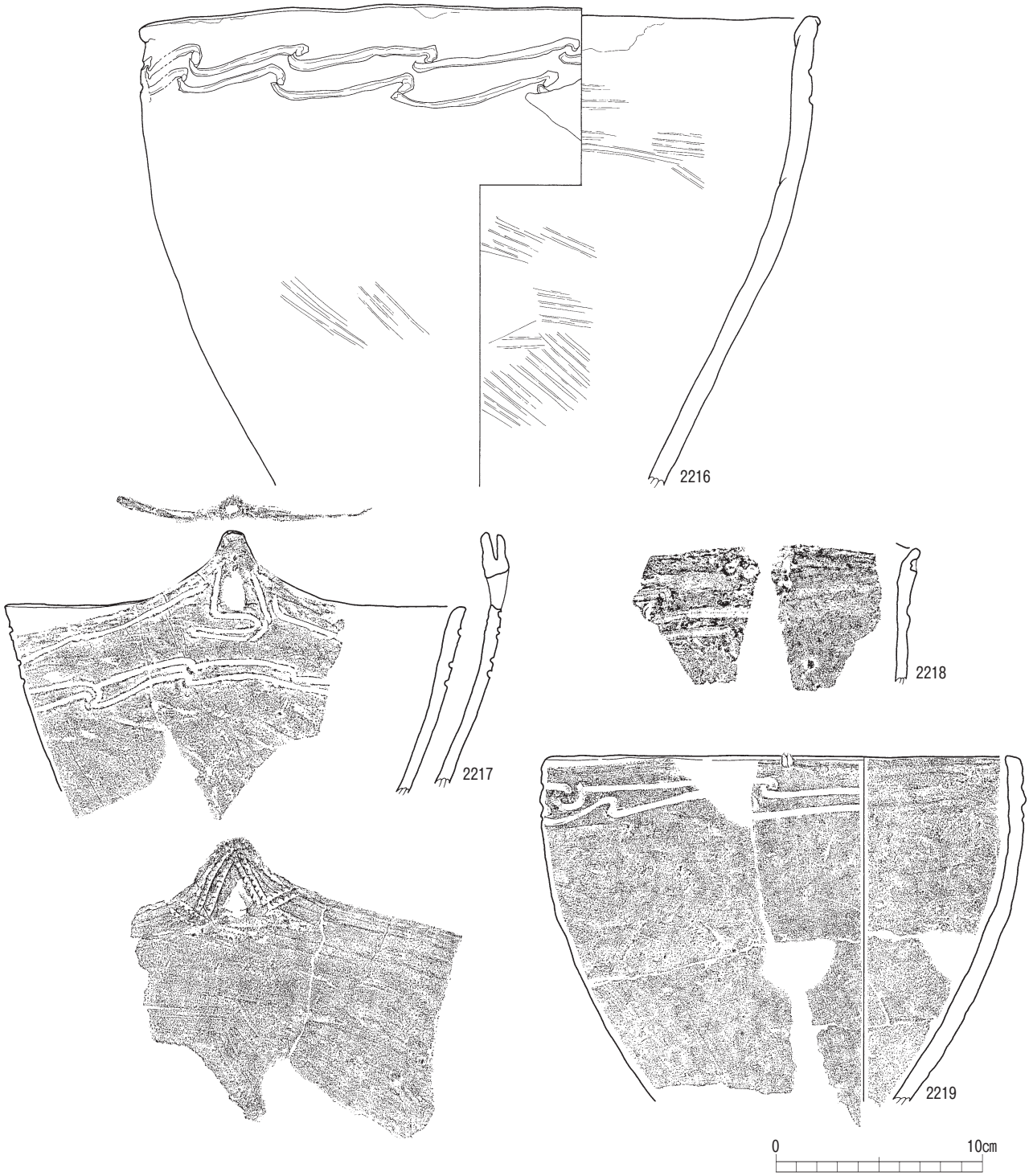
第341図　指宿式土器（185）Ⅲｂ類②

る。いずれも内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされているものであると思われるが，丁寧なナデにより貝殻条痕はナデ消されている。2205は，端部がやや張る底部から開きながら口縁部にいたるものである。口縁部



第342図　指宿式土器（186）Ⅲｂ類③

には，入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2206・2207は，口縁部が肥厚するものである。2206は，底部から開きながら立ち上がり口縁部が直行するものである。底部には，スダレ状の圧痕が観察できる。口縁部

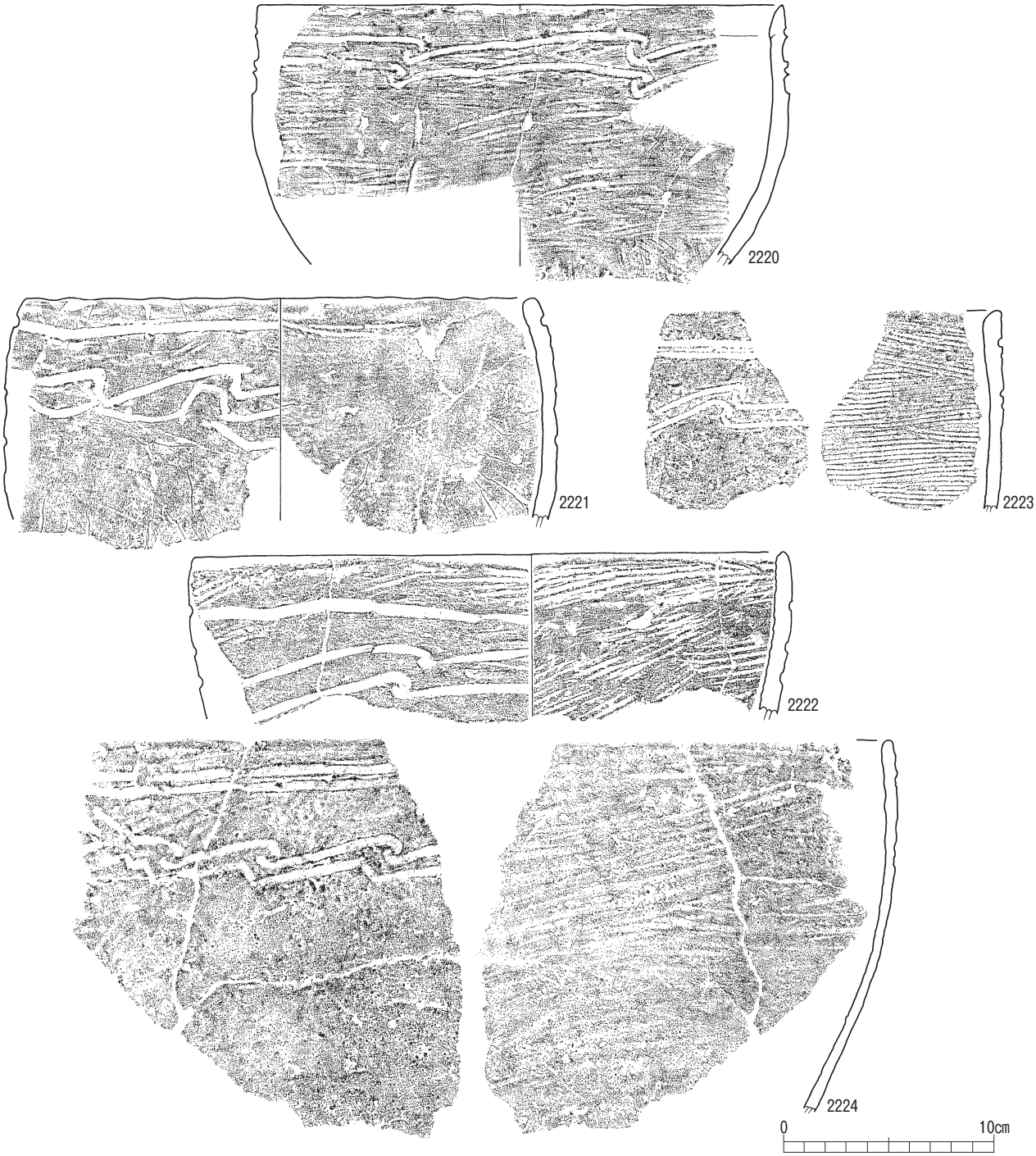


第343図　指宿式土器（187）Ⅲｂ類④

には，入組文のある横位の沈線を３本巡らしている。内外面ともに，貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり観察できる。2207は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。

2208～2213は，波状口縁や突起を有するものである。2209は，ねじり紐状の粘土を橋状に貼り付け突起としているものである。口縁部には，入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2211～2213は，波頂部を４か所に有するものである。2211は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしている。2212は，口縁部に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2213は，底部から開きながら立ち上がるものである。口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしている。

2214～2218は，口縁部が外反するものである。2214は，



第344図　指宿式土器（188）Ⅲｂ類⑤

口縁部に入組文のある横位の沈線を巡らしている。2216は，底部から開きながら立ち上がるものである。口縁部に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2217は，凹みのある突起を２か所に有するものである。突起には楕円状の窓がある。口縁部には，横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2217・2218は，器壁が薄く仕上げられている。

2219～2233は，膨らむ胴部から口縁部が内傾・内弯するものである。

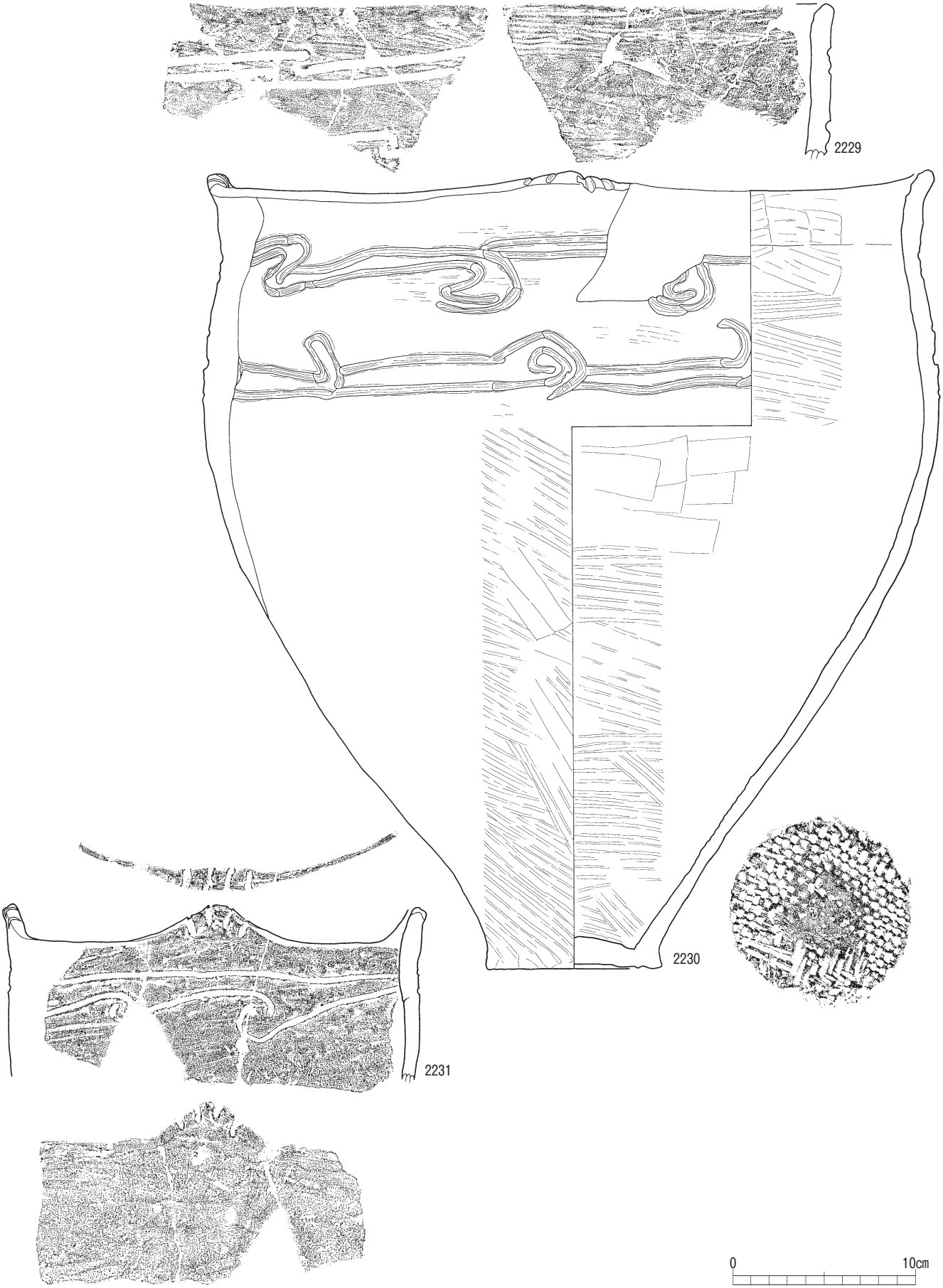
2219～2229は，平口縁のものである。2219・2220は，口縁部に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2221～2225は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしているものである。2221・2222は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2223・2224は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。

2225は，口縁部が肥厚するものである。口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。

第345図　指宿式土器（189）Ⅲｂ類⑥

2226～2233は，口縁部が外反するものである。2226・2227は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。2228･2229は，口縁部に２本１組の入組文のある横位の沈線を上下に巡らしている。

2230～2233は，波状口縁のものである。2230は，端部が張る底部から開きながら膨らむ胴部へいたり，口縁部が外反するものである。棒状工具による刻みが施された



第346図　指宿式土器（190）Ⅲｂ類⑦

第347図　指宿式土器（191）Ⅲｂ類⑧

波頂部を４か所に有するものである。口縁部に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。底部には，網代編みの圧痕がはっきり観察できる。2232は，外面と内面に小さな凹みが施された突起を４か所に有するものである。口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。

2234～2236は，鉢である。2234は，２か所に突起・把手を有するものである。2235・2236は，小型の鉢である。2235は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしている。2236は，口縁部に入組文のある横位の沈線を２本巡らしている。

ウ　Ⅲｃ類土器（第348図～第369図 2237～2366）

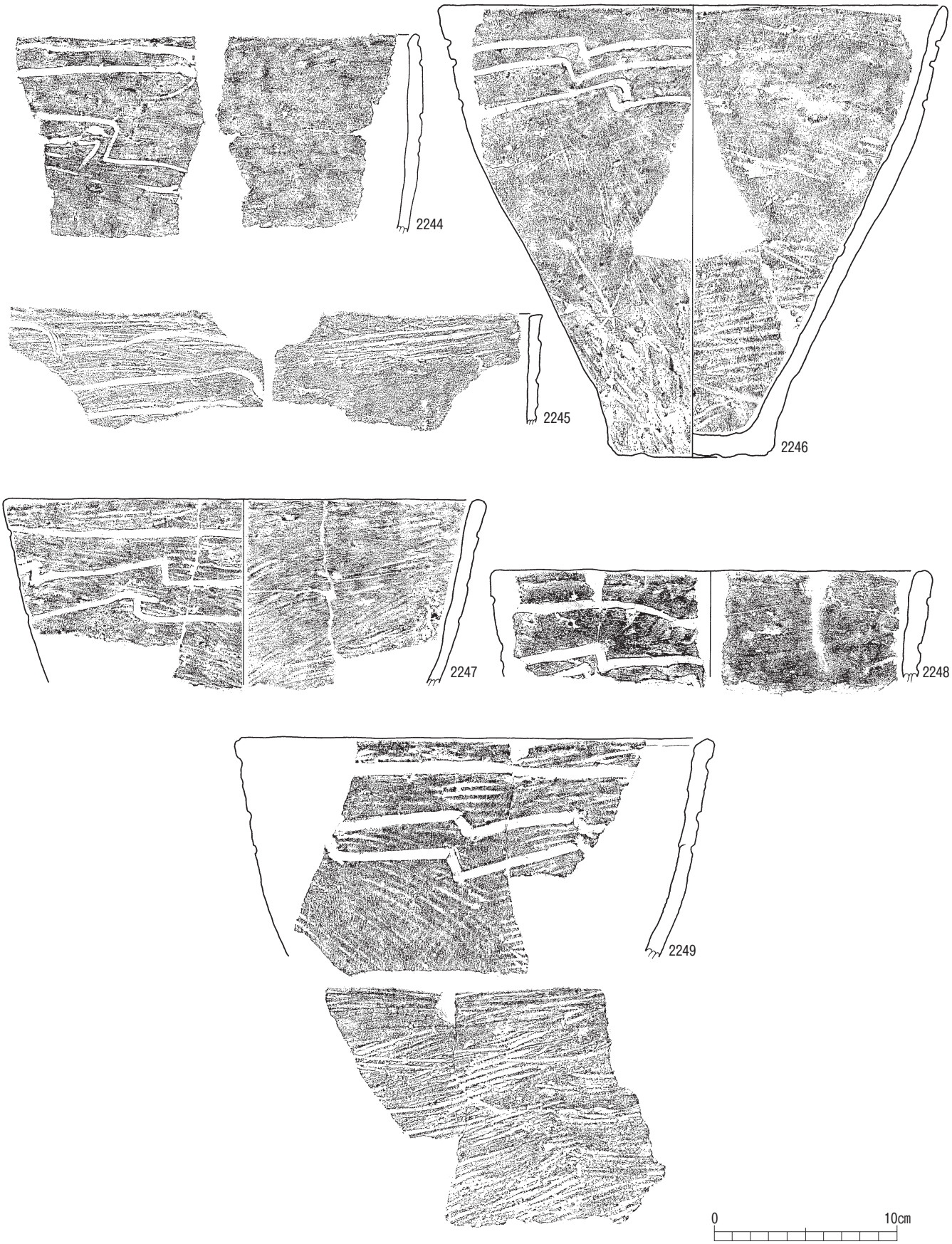
Ⅲｃ類土器は，口縁部付近に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らしているものである。鉤状の折れ方には，ほぼ直角に折れるもの・鋭角に折れ角の強いもの・鈍角に折れるもの・角が丸みを帯びるものとある。描き方も一筆で描いているもの，鉤状の折れ部分まで一筆で描きその後もう一画描くものとある。器面調整は，横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は，丸く収めるものがほとんどであるが，平らに仕上げるものもある。深鉢と鉢がある。

2237～2359は，深鉢である。

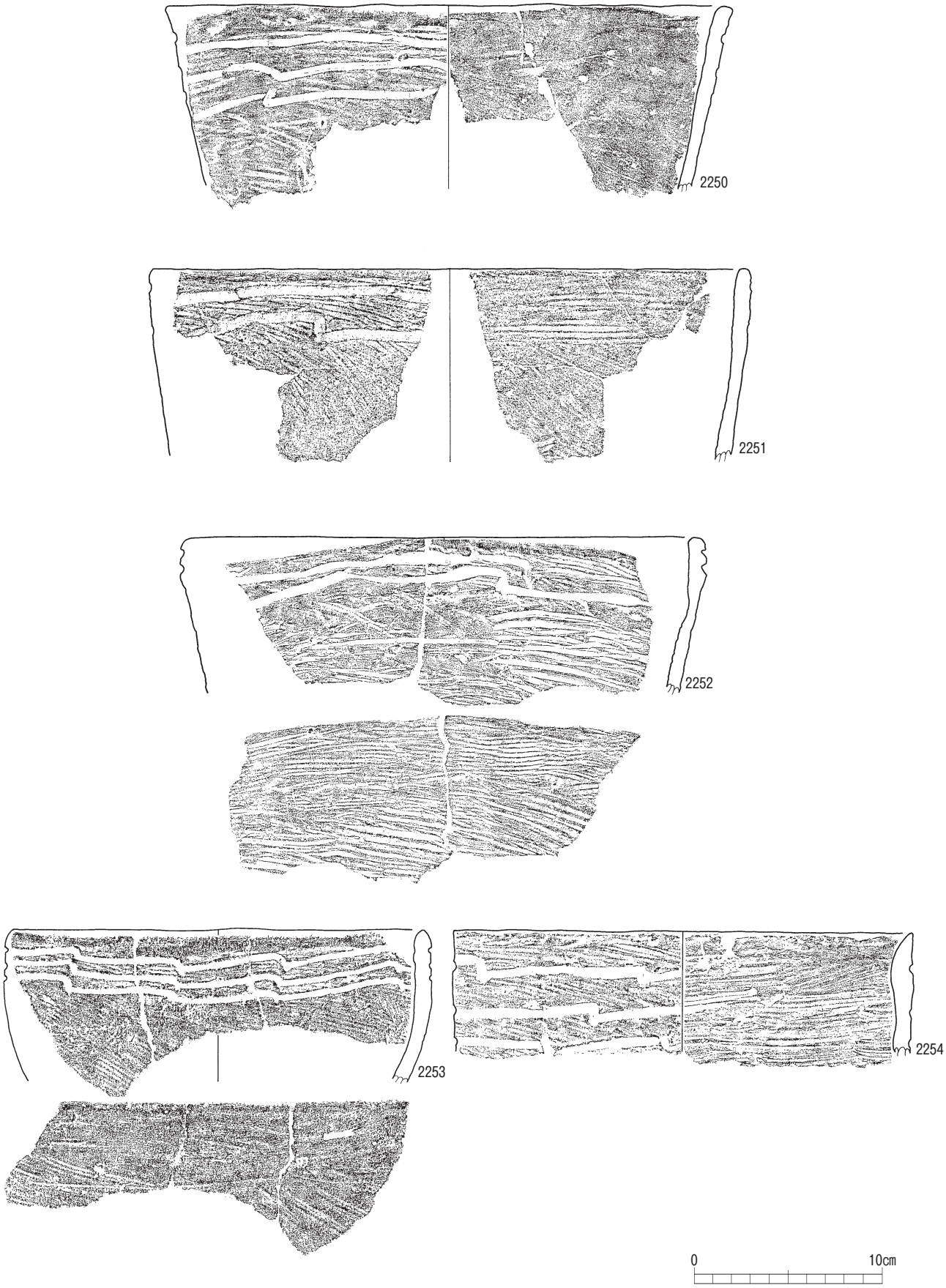
2237～2304は，口縁部が胴部から開きながら立ち上がるものや直行するものである。

2237～2254は，平口縁のものである。2237～2241は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本あるいは２本巡らしている。2238・2240のように鉤状部分の折れがやや丸みを帯びているものや，2241のように鉤状部分の折れが角ばっているものがある。2242～2244は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2242は，口縁部の横位の沈線とその下位に鉤状の文様のある横位の沈線をつなぐように，３本の斜位の短沈線が施されている。内外面ともに，貝殻条痕による器面調整がなされている痕がはっきりうかがえるものである。2245・2246は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2245は，器壁が薄く仕上げられており，口縁端部は平らに仕上げられている。2246は，端部がやや張る底部からくびれ，開きながら口縁部にいたるものである。2247～2254は，口縁部がやや

第348図　指宿式土器（192）Ⅲｃ類①



第349図　指宿式土器（193）Ⅲｃ類②

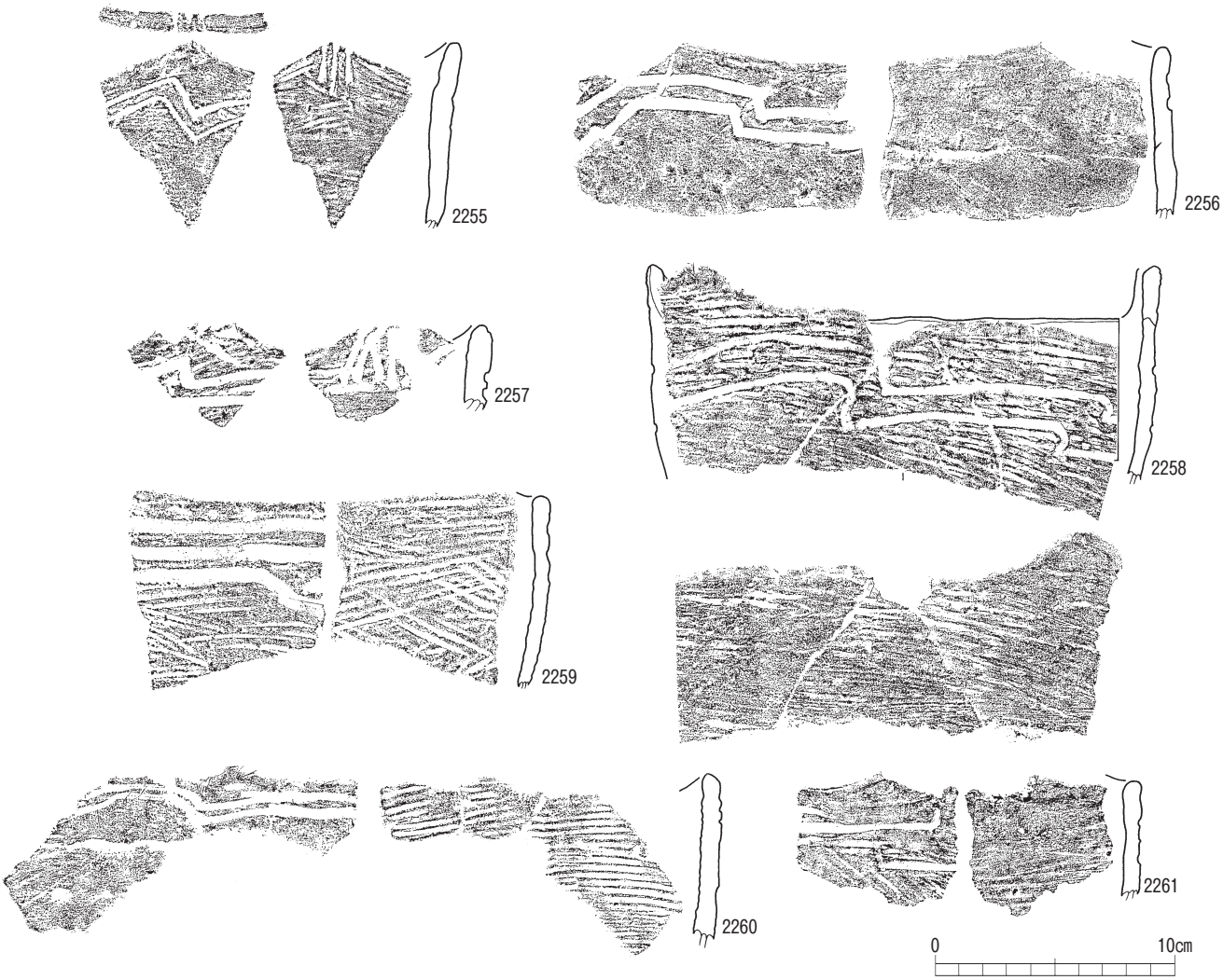


第350図　指宿式土器（194）Ⅲｃ類③

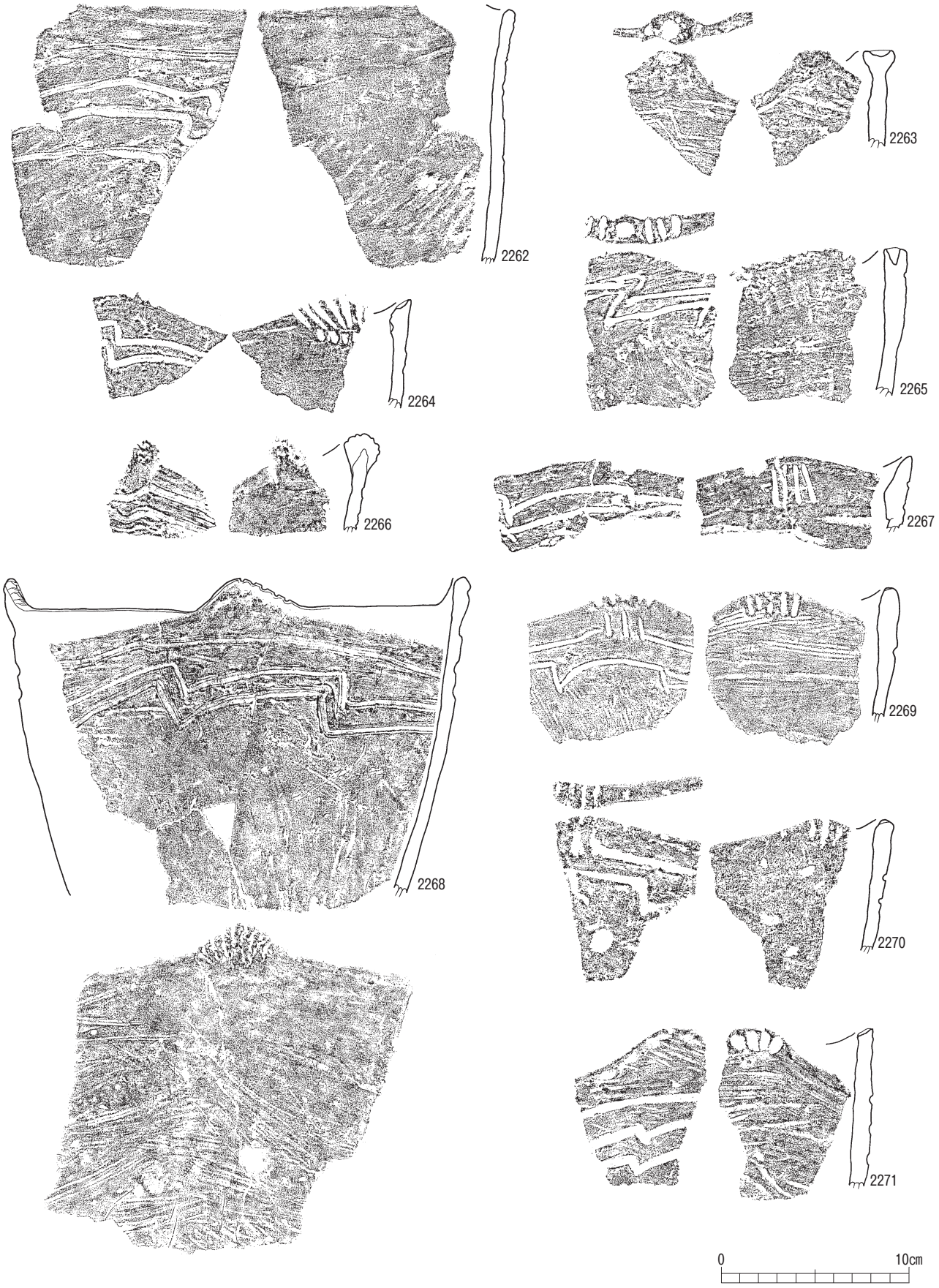
肥厚するものである。2247～2250は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2251・2252は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。2253・2254は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2253は，鉤状部分が折れるというより，曲がるというように丸みを帯びている。2254は，口縁部を肥厚させているものであるが，口縁端部を尖ったように薄く仕上げている。2247・2249・2252～2254は，内外面ともに，貝殻条痕による器面調整がなされている痕がはっきりうかがえるものである。

2255～2275は，波状口縁のものである。2255～2258は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしているものである。2258は，鉤状の折れの部分が丸みを帯び波状のようにも見える。2259は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。2260は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしているものであり，鉤状の折れの部分が丸みを帯びている。2262は，器壁が薄く仕上げられ，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。

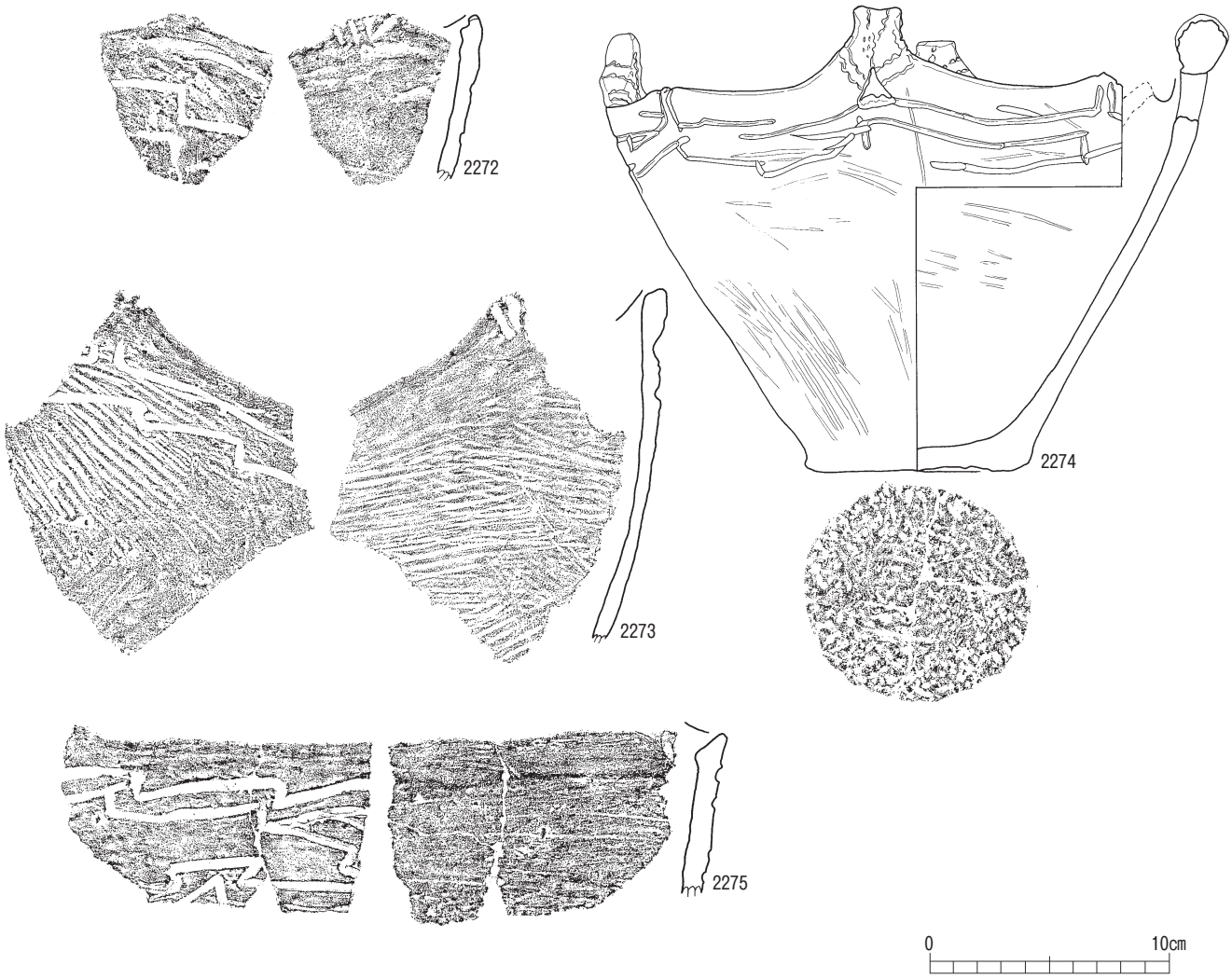
2263～2275は，口縁部が肥厚するものである。2263～2268は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしているものである。2263は，凹みのある波頂部を有するものである。凹みの周りには，巻貝殻頂部による刺突文が施されている。2264は，突起部上面から内面に沈線が施されている。この沈線の終わりには，刺突文が施されている。2265は，凹みのある突起を有するものである。凹みの左右には，ヘラ状工具による刻みが施されている。2266・2267は，口縁端部が尖っているものである。2266は，尖っている口縁端部に粘土紐を外面から内面へ貼り付け突起部を作出している。2267は，突起部内面に，縦位の短沈線が４本施されている。2268は，突起を４か所に有するものである。突起部上面から内面に，貝殻腹縁部による刺突文が施されている。2269は，刻みのある突起を有するものである。突起部外面には３本の縦位の短沈線が施されている。口縁部には，この短沈線につな



第351図　指宿式土器（195）Ⅲｃ類④



第352図　指宿式土器（196）Ⅲｃ類⑤



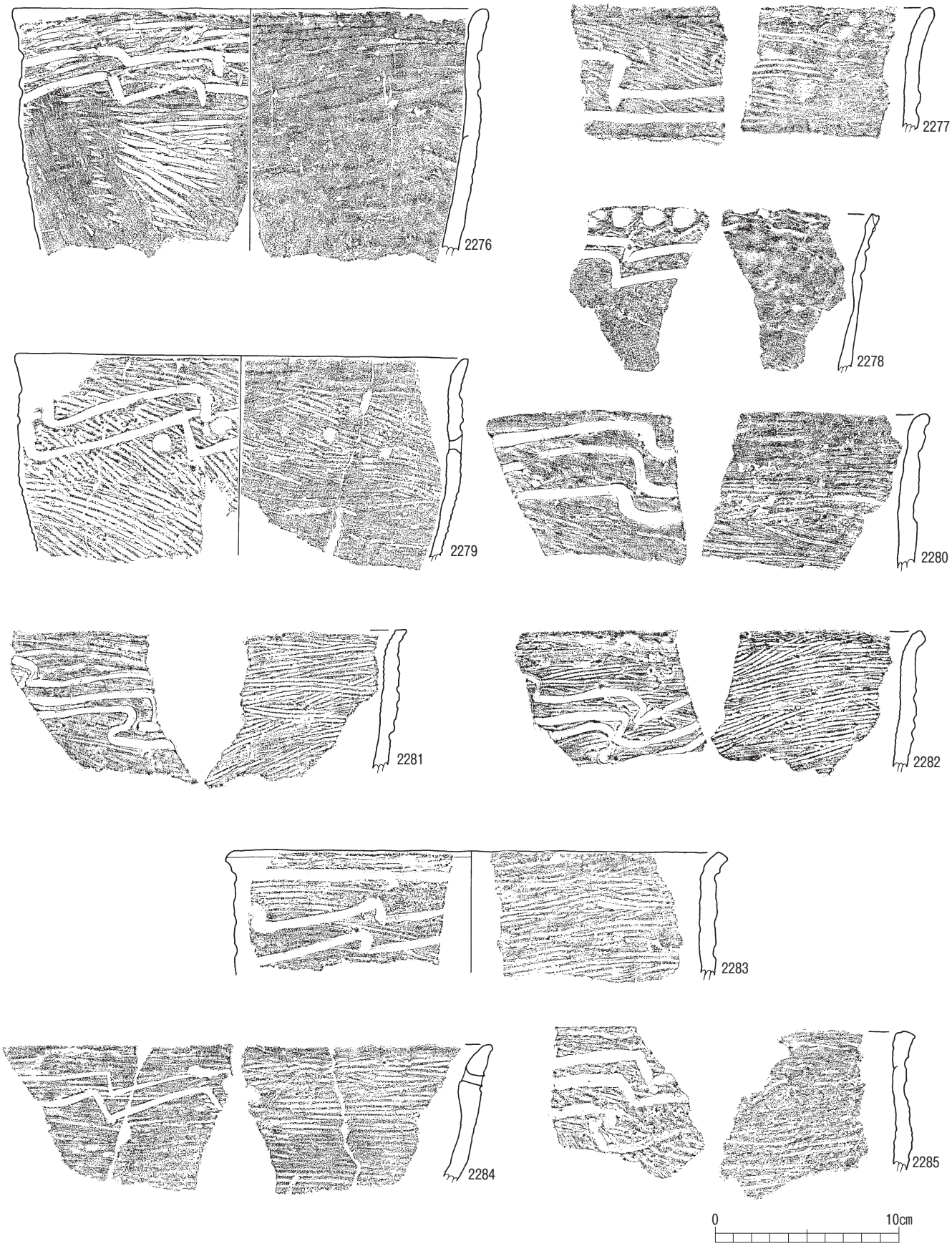
第353図　指宿式土器（197）Ⅲｃ類⑥

がるように横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。2271は，口縁端部を内側に傾くように仕上げ，そこに刺突文を施している。2271・2272は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2273は，突起部下位から始まる横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。2274は，台形状の突起を４か所に有するものである。突起部下位には，三角形状の透かしがある。突起部内外面には，貝殻腹縁部による刺突文が施されている。口縁部には，横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。底部は鯨底である。2275は，口縁部の上下に，鉤状の文様のある横位の沈線を２本ずつ巡らしている。

2276～2304は，口縁部が外反するものである。

2276～2292は，平口縁のものである。2276～2279は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2277は，鉤状部分の折れが角ばっているが，他のものは鉤状部分の折れが丸みを帯びている。2278は，器壁が大変薄く仕上げられている。口縁端部は，内外面からの指頭押圧により内外面への波状を呈している。2279は，補修孔と思われる孔が穿たれている。2280～2282は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2283は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。

2284～2304は，口縁部が肥厚するものである。2284は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。口縁部を肥厚させ，端部を薄くし尖ったように仕上げている。2285は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らし，その下位に入組文のある横位の沈線を巡らしている。2286～2291は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らしているものである。2286～2289は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2290は，口縁部に横位の沈線と鉤状の文様のある横位の沈線を交互に巡らしている。2291は，

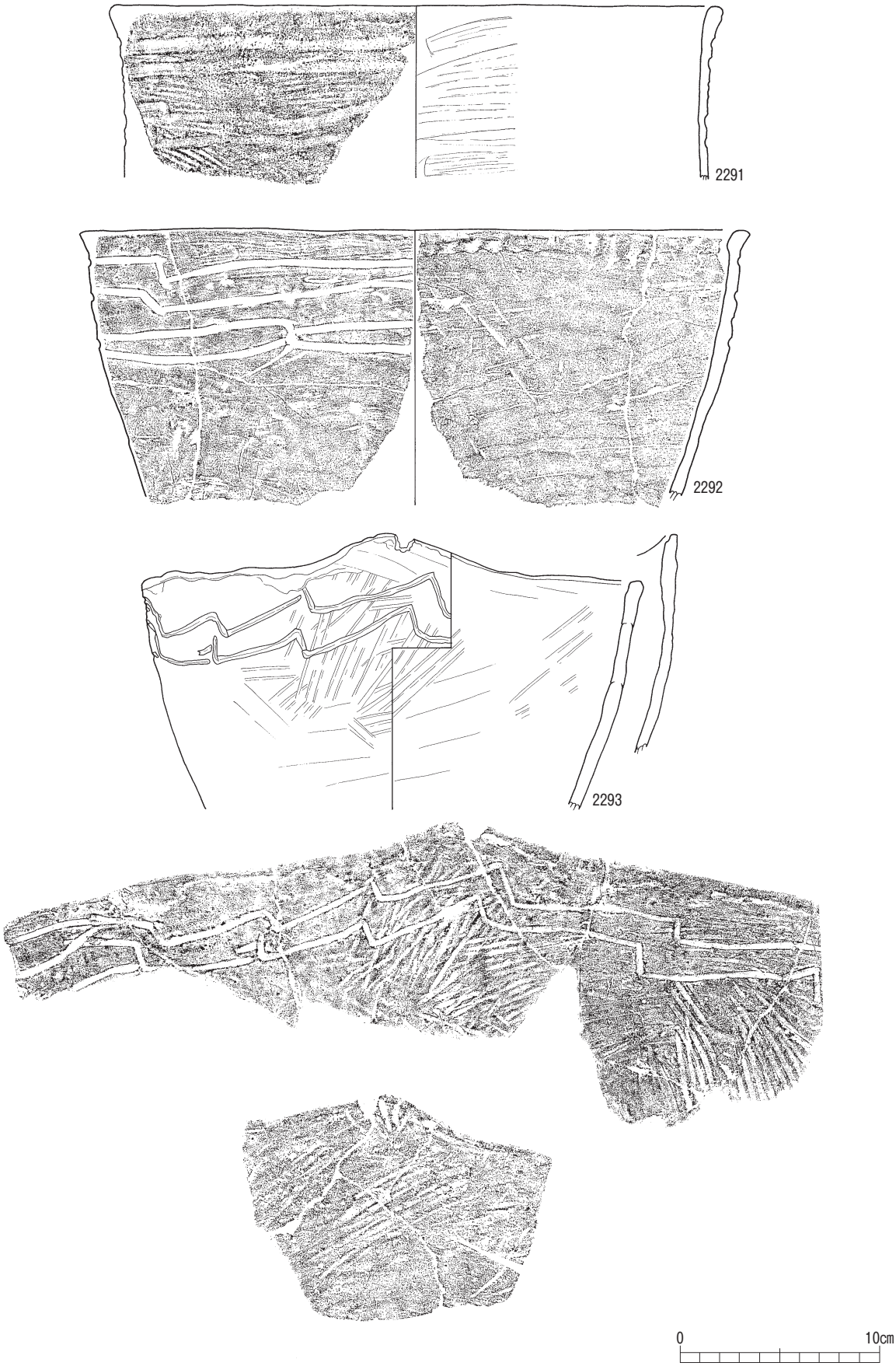


第354図　指宿式土器（198）Ⅲｃ類⑦

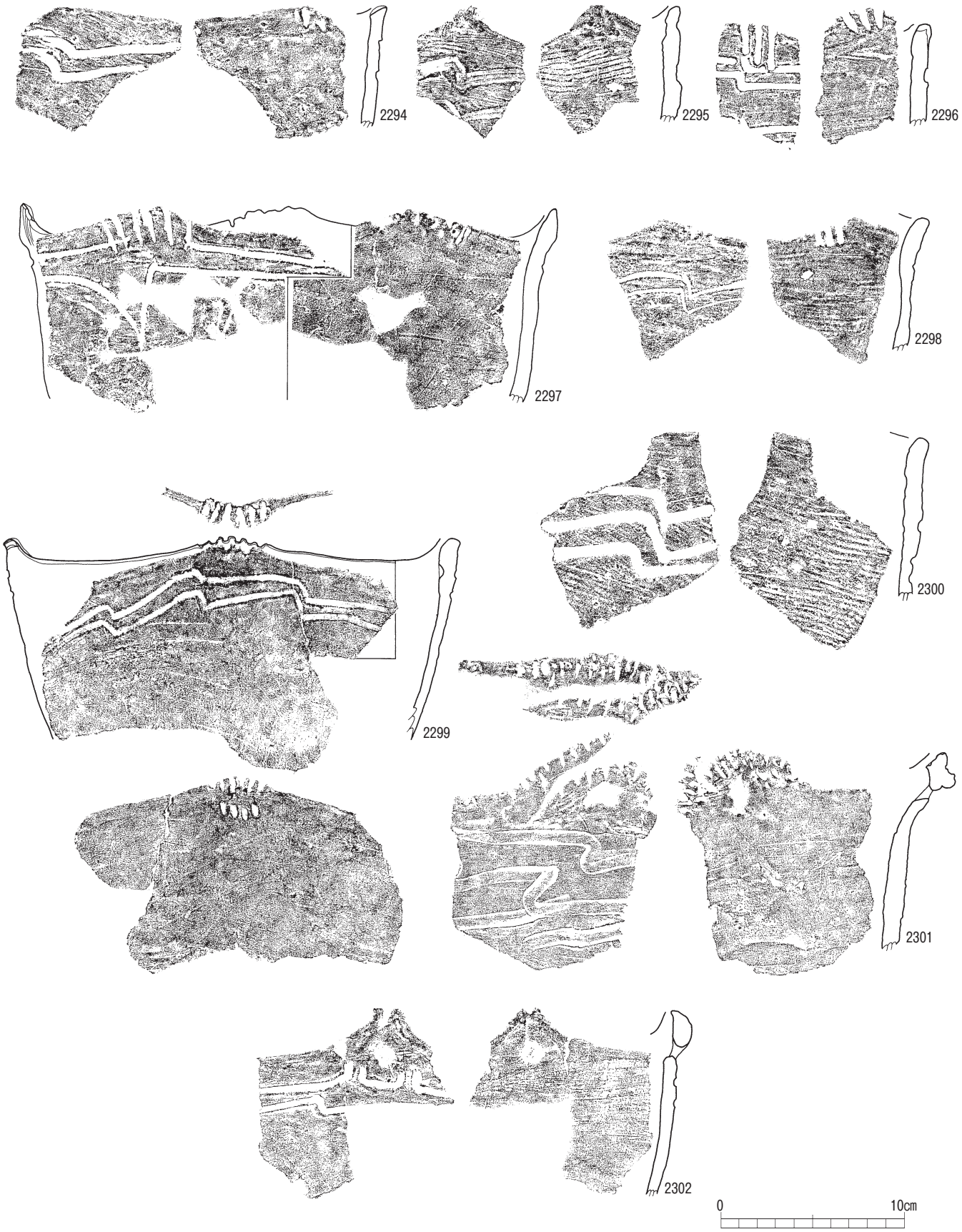
第355図　指宿式土器（199）Ⅲｃ類⑧

口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2292は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らし，その下位に楕円状の文様が施されている。

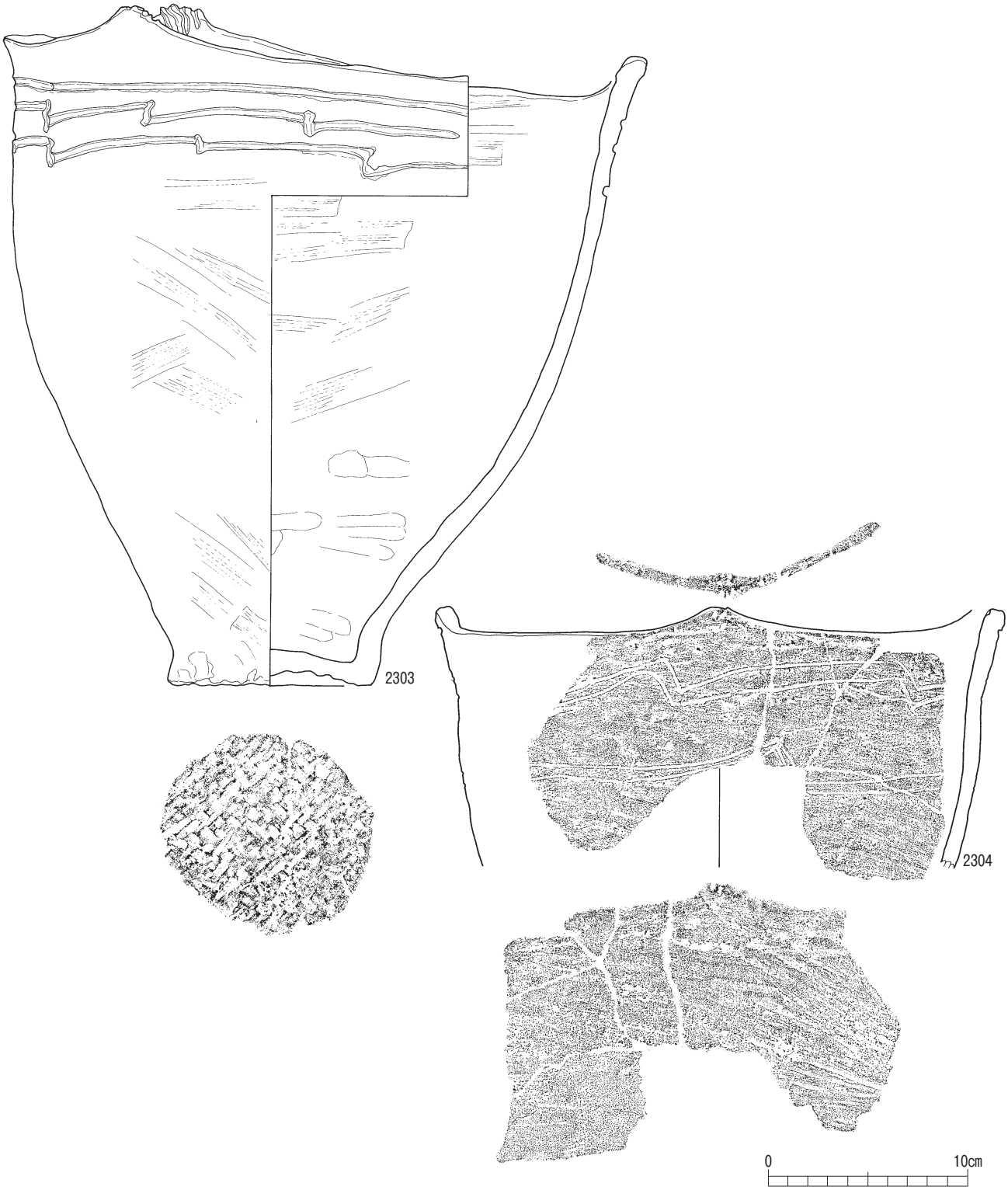
2293～2304は，波状口縁のものである。2293は，突起を２か所に有するものである。口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2294・2295は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2296は，突起部内面から外面へ３本の縦位の沈線を施し，口縁部には鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らして



第356図　指宿式土器（200）Ⅲｃ類⑨



第357図　指宿式土器（201）Ⅲｃ類⑩



第358図　指宿式土器（202）Ⅲｃ類⑪

いる。2297は，刻みのある突起を４か所に有するものである。突起部外面には縦位の短沈線が６本施されている。口縁部に横位の沈線を突起部外面の短沈線とつながるように巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。この鉤状の文様のある横位の沈線の鉤状部分の折れは一部弧状のようになっている。

2298～2304は，口縁部が肥厚するものである。2300は，台形状の突起を有するものである。口縁部には，鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2301は，粘土紐２本を窓ができるように橋状に貼り付けた突起を有するものである。突起の内外面には，貝殻腹縁部による刺突文が施されている。2302は，頂部を押圧により２つ

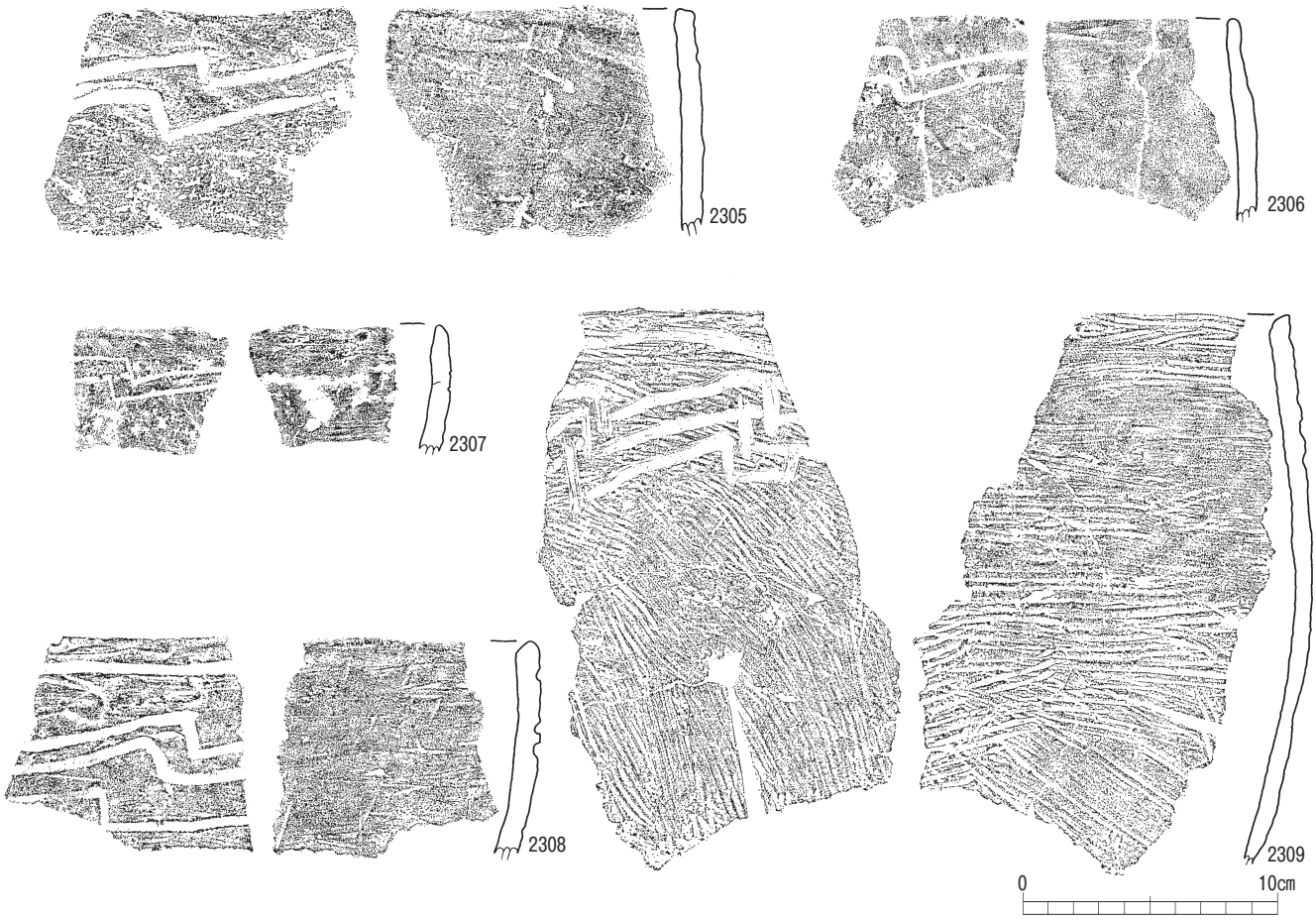
にした突起のつくものである。突起部下位には，透孔が施されている。孔の下位には，U字状の文様が施されている。口縁部には，突起部から始まる横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。2303は，端部が張りくびれのある底部から口縁部へ開きながら立ち上がるものである。底部は，上げ底状を呈している。口縁部には横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2304は，低い突起を４か所に有するものである。口縁部には上下に鉤状の文様のある横位の沈線を２本ずつ巡らしている。

2305～2359は，膨らむ胴部から口縁部が内傾・内弯するものである。

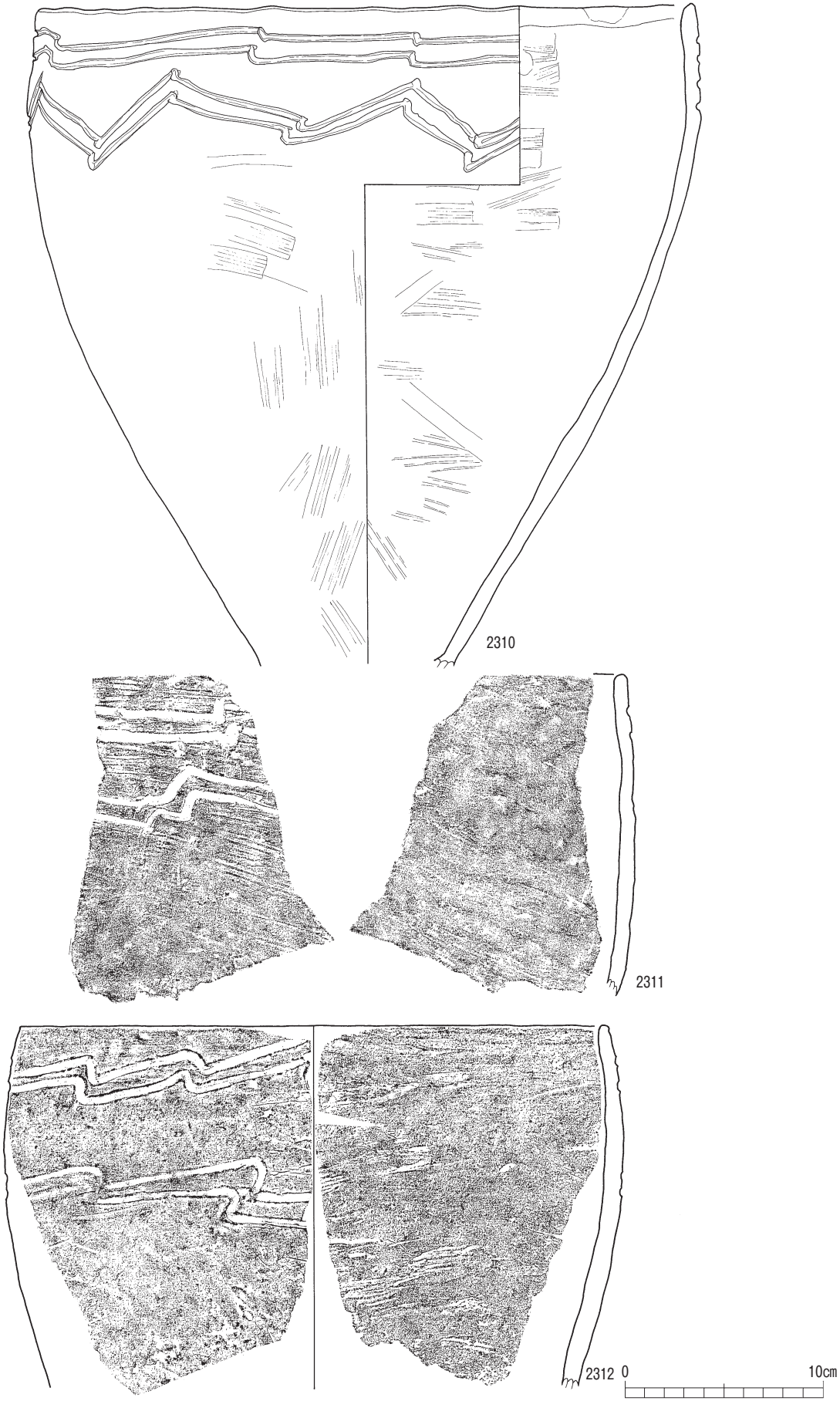
2305～2318は，平口縁のものである。2305～2307は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしたものである。2308・2309は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2309は，内外面ともに，貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり確認できる。2310～2312は，口縁部の上下に鉤状の文様のある横位の沈線を２本１組にして巡らしている。2310は，下の鉤状の文様のある沈線は，山形に施されている。2312の鉤状の文様のある沈線は，鉤部分の折れが丸みを帯びており，波状に近くなっている。2313～2317は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2313～2315は，内面に稜がある。2318は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らしているが，つながらない横位の沈線もある。

2319～2329は，波状口縁や突起を有するものである。2319～2321は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしているものである。2321は，刻みのある波頂部を４か所に有するものである。波頂部上面から内面に縦位の短沈線が施され，沈線の終わりには刺突文が施されている。

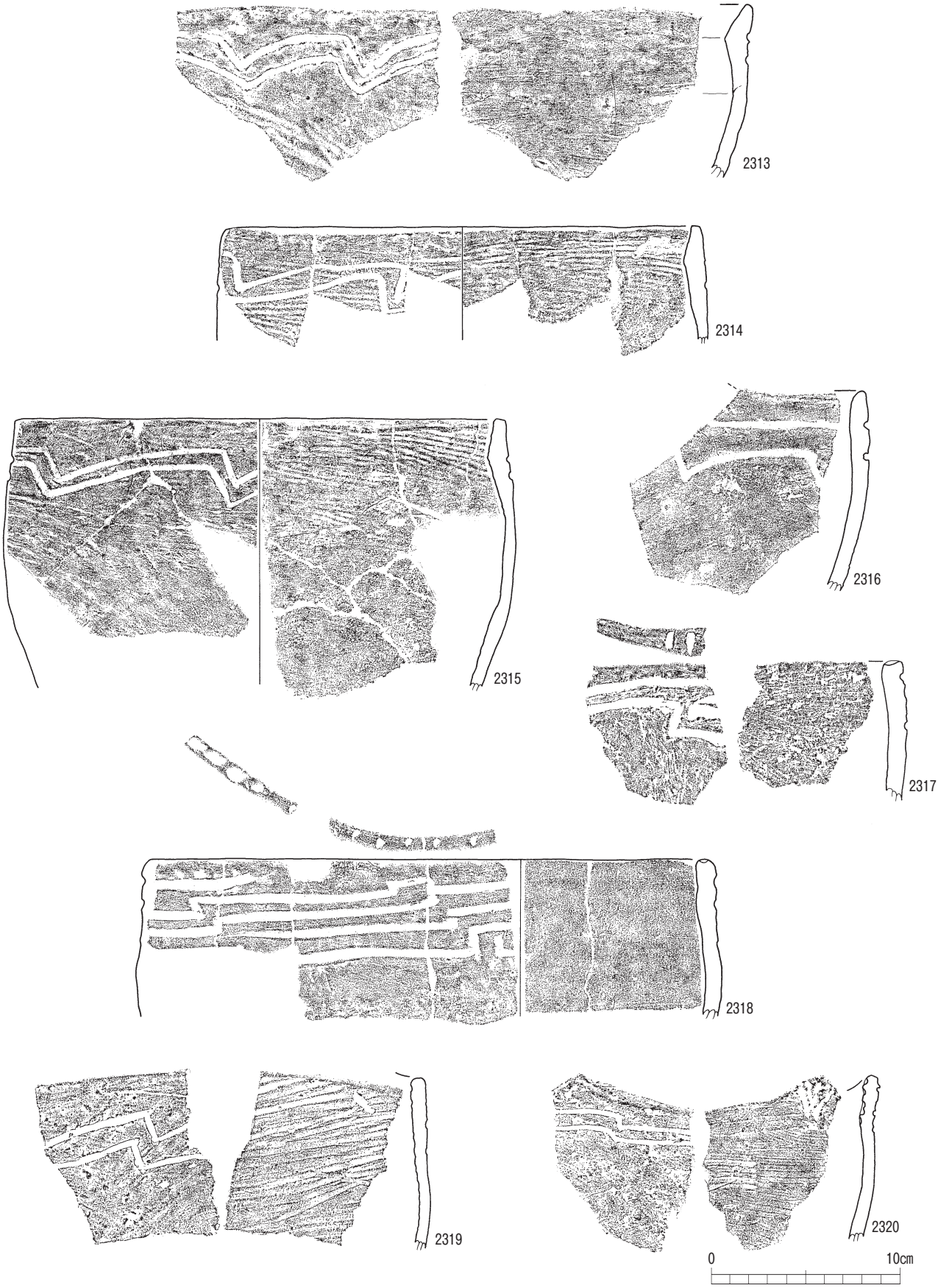
2322～2328は，口縁部が肥厚するものである。2322・2323は，粘土紐を橋状に貼り付け突起としている。2322は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2324は，低い突起を有するものである。口縁部には，斜位の刺突文が横位に連続して施され，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2325は，突起を４か



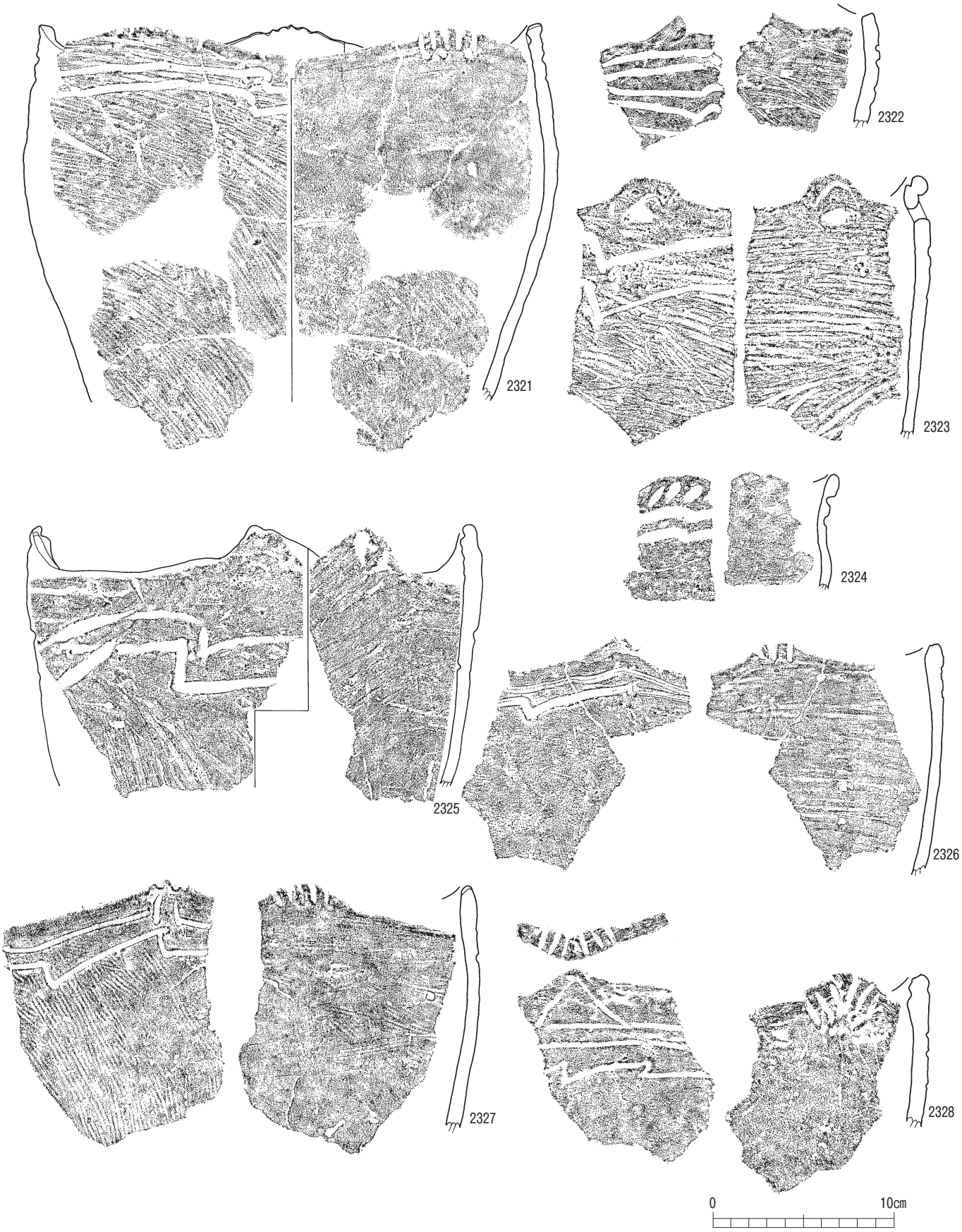
第359図　指宿式土器（203）Ⅲｃ類⑫



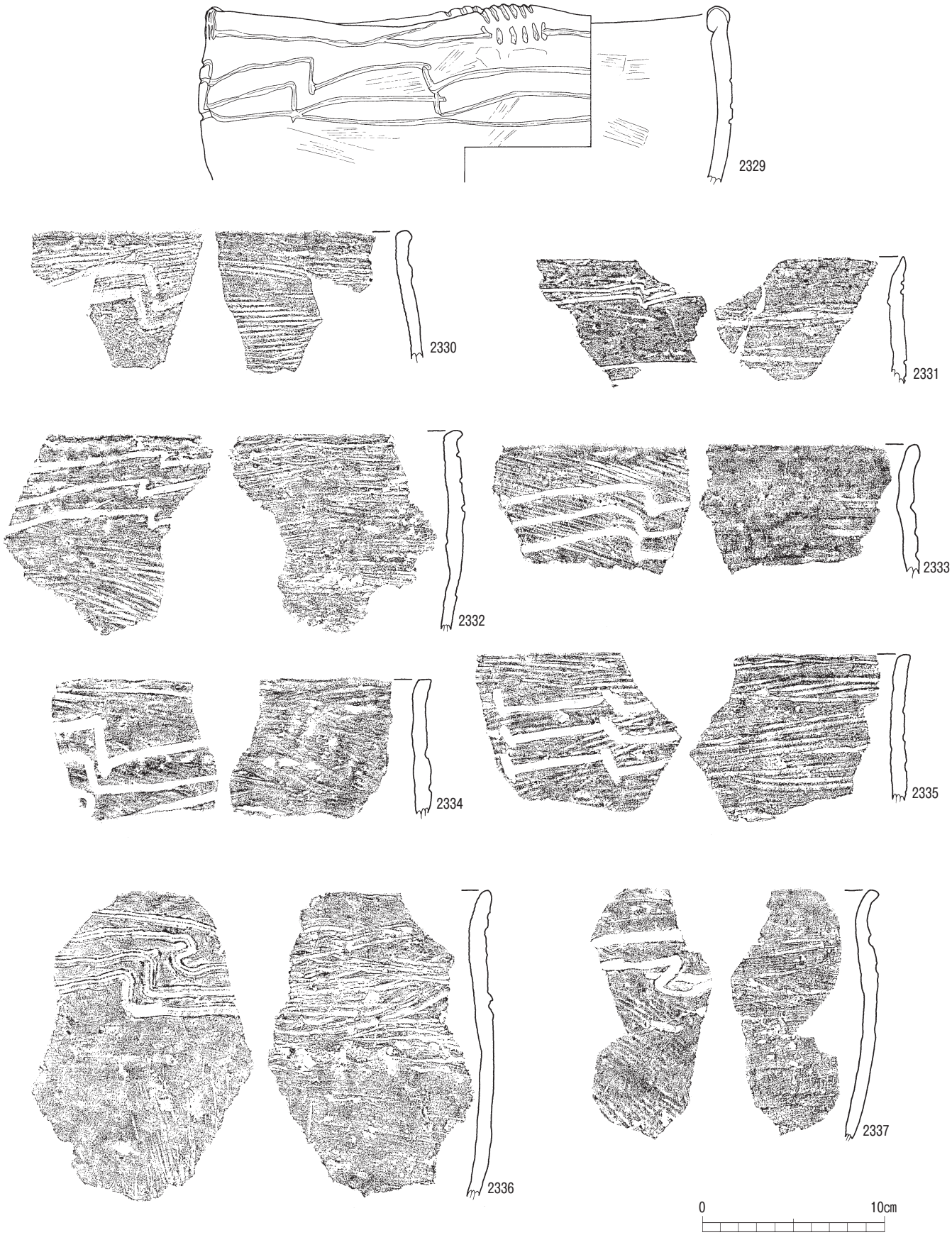
第360図　指宿式土器（204）Ⅲｃ類⑬



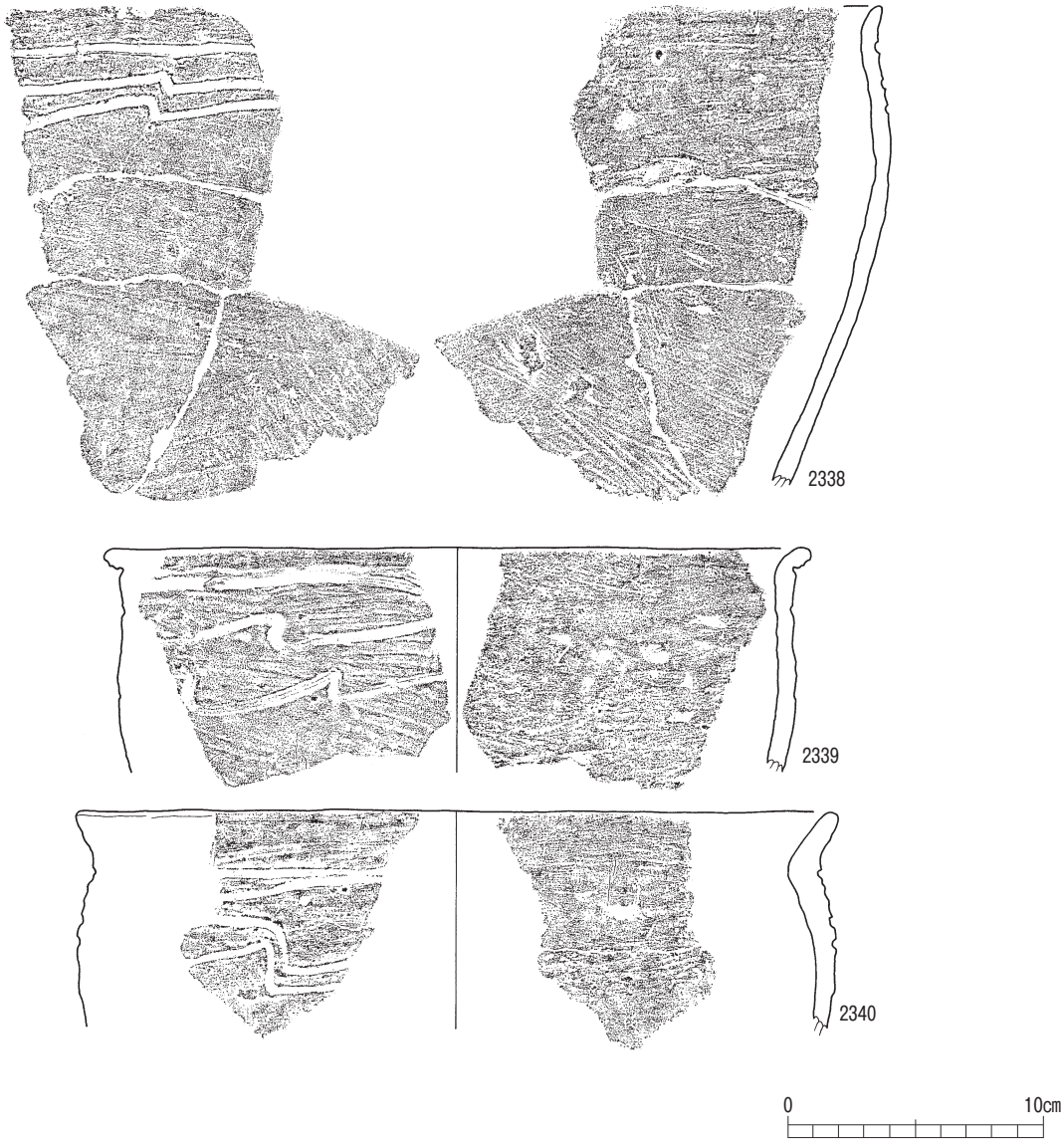
第361図　指宿式土器（205）Ⅲｃ類⑭



第362図　指宿式土器（206）Ⅲｃ類⑮



第363図　指宿式土器（207）Ⅲｃ類⑯



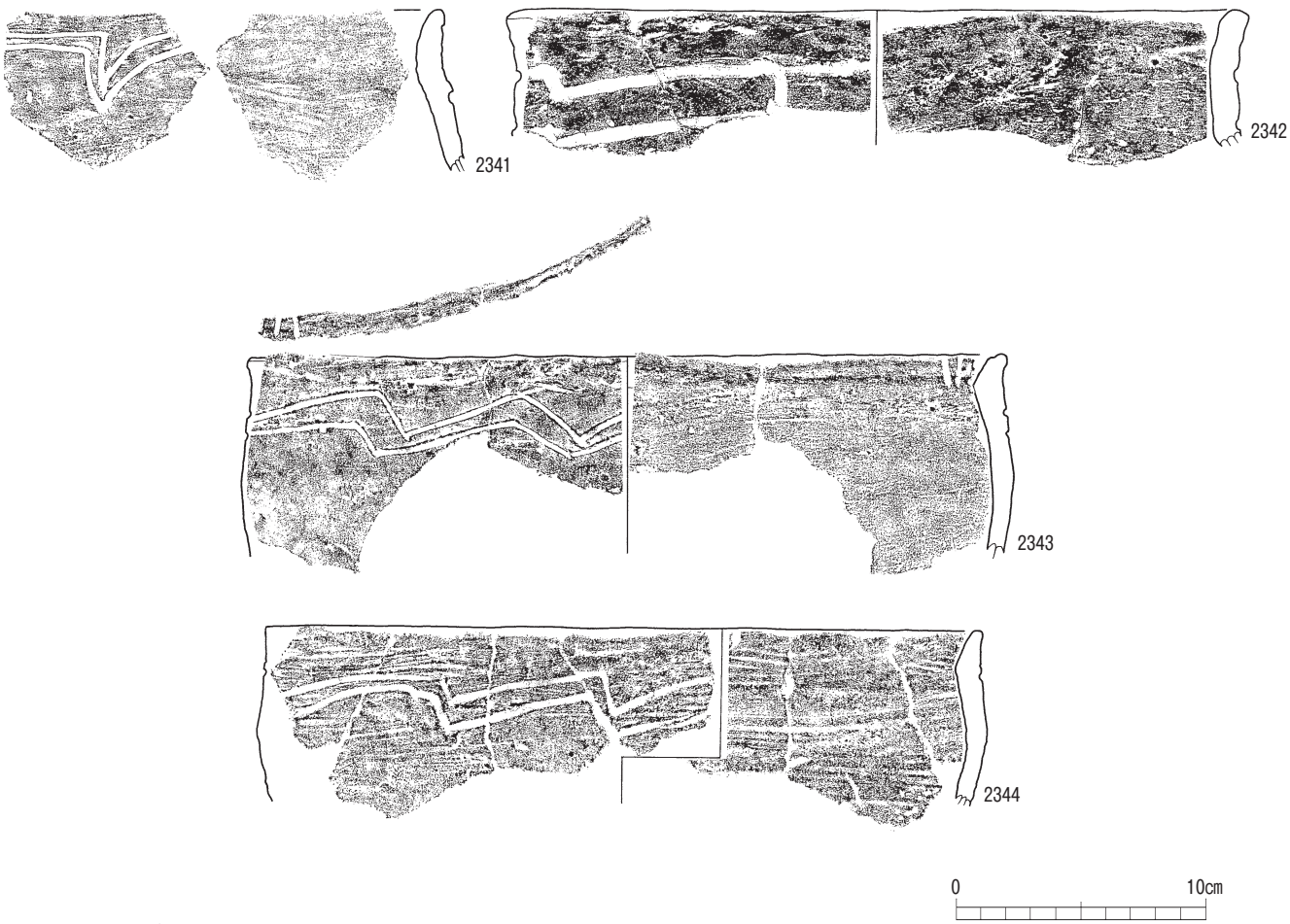
第364図　指宿式土器（208）Ⅲｃ類⑰

所に有するものである。2328は，突起部上面にヘラ状工具による刻みが施されている。内面には，斜位の短沈線が６本施されている。口縁部には，横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。突起部の外面には，横位の沈線とつながり三角形状になる斜位の沈線が施されている。2329は，低い突起を４か所に有するものである。

2330～2359は，口縁部が外反するものである。

2330～2351は，平口縁のものである。2330・2331は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2333～2335は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2236～2339は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らしている。2336は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2337は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らしている。2338・2339は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2340は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2339・2340の鉤状の折れ方が，丸みを帯びている部分が多く観察される。2341～2344は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2341・2343・2344は，鉤状の折れ方が，角ばっている部分が多く観察される。

2345～2351は，口縁部が肥厚するものである。2345～2347は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2345は，口縁部に粘土を貼り付け，その上に棒状工具の押圧による刻みを施した低い突起状の部分を４か所に有するものである。鉤状の文様のある横位の沈線は，鉤状の折れ方が丸みを帯びており波状の文様に近いものである。2348

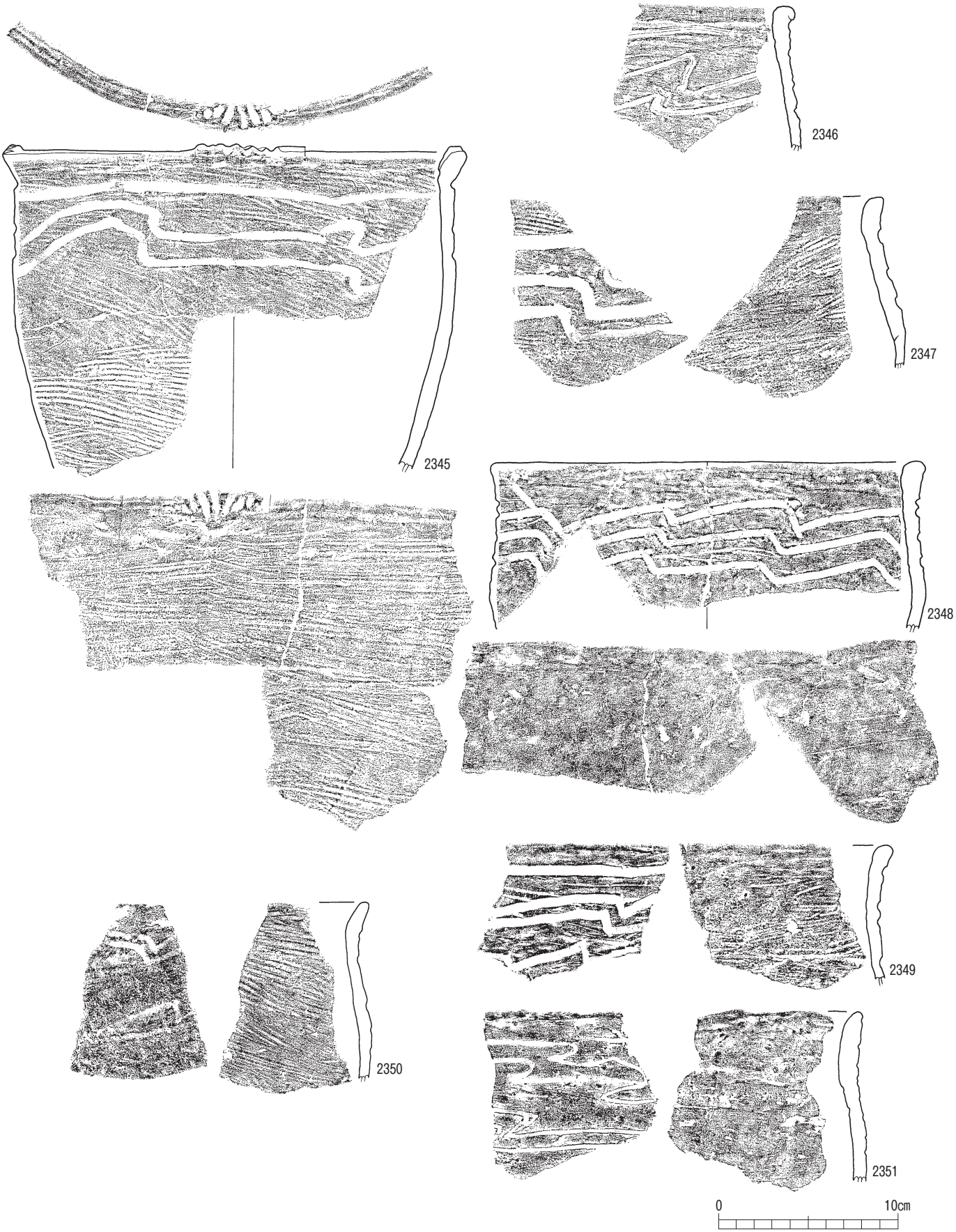


第365図　指宿式土器（209）Ⅲｃ類⑱

は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2349は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を３本巡らしている。2350・2351は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本１組として，上下に巡らしている。2351の鉤状の折れ方は丸みを帯びている。

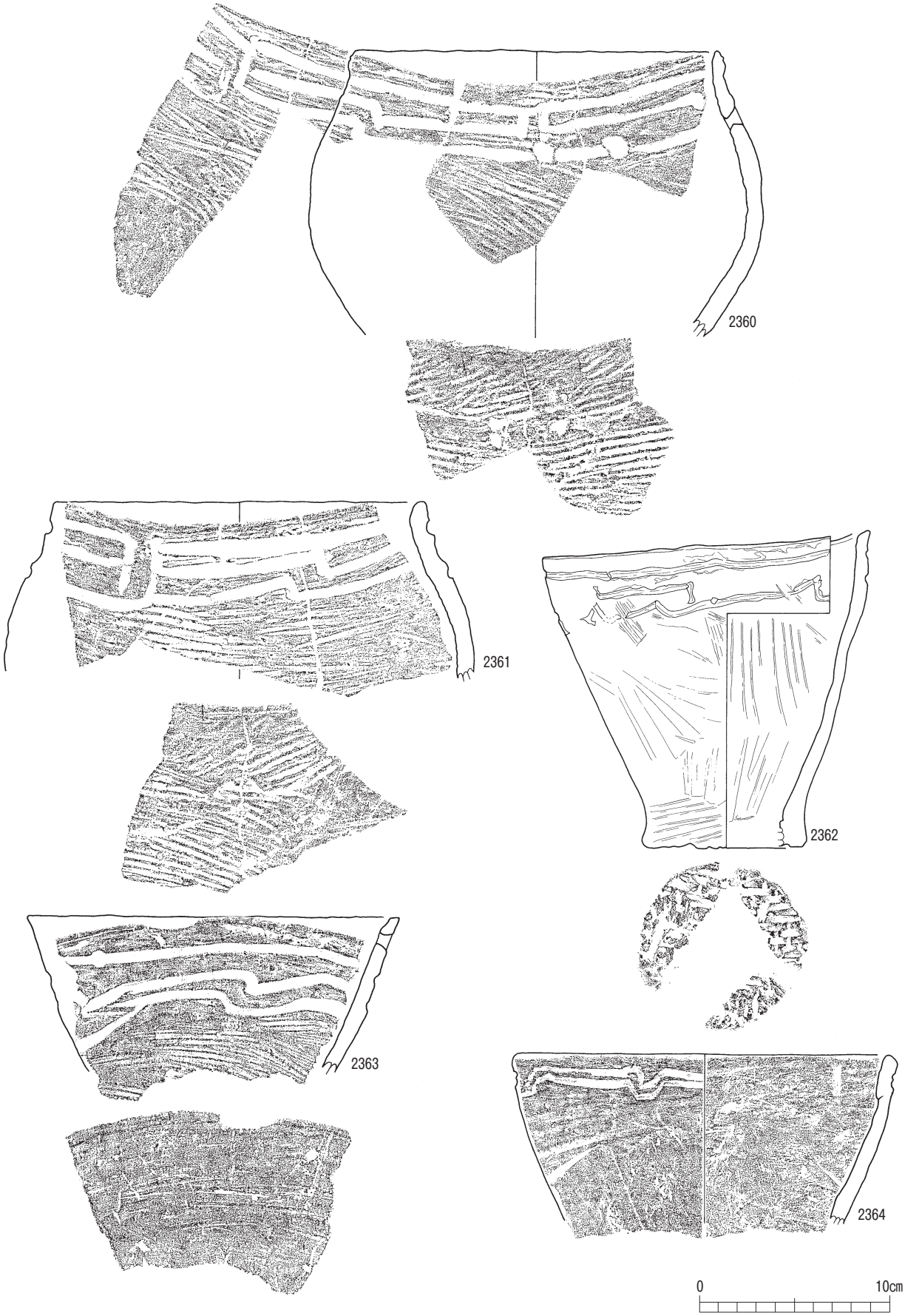
2352～2359は，波状口縁のものや突起を有するものである。2352・2353は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしているものである。どちらも突起部内面に，斜位の短沈線が施されている。2352は，突起を４か所に有するものである。2354は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本あるいは３本巡らしているものであると思われる。2355は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。その上には，山形の沈線文が施されている。2356は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らし，その下位に横位の沈線を２本巡らしている。2357は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らし，その下位に斜位の沈線が施されている。2358は，突起を４か所に有するものである。口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。2358・2359はどちらも，内外面ともに，貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり観察できる。

2360～2366は，鉢である。2360・2361は，口縁部に大きな段差のある鉤状の文様のある横位の沈線を巡らし，さらにこの沈線に鉤状の文様のある横位の沈線をつないだりして文様を描いているものである。どちらも，内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり観察できる。2362は，端部がやや張る底部からややくびれて，開きながら口縁部にいたるものである。口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を１本巡らしている。部分的に２本になっているところもある。底部には，網代編みの圧痕が観察できる。2363は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。この沈線の鉤状の折れ部分は丸みを帯びている。2364は，口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。ここでは，鉤状の文様としたが，Ｕ字状でもある。2365は，刻みのある突起を４か所に有するもの

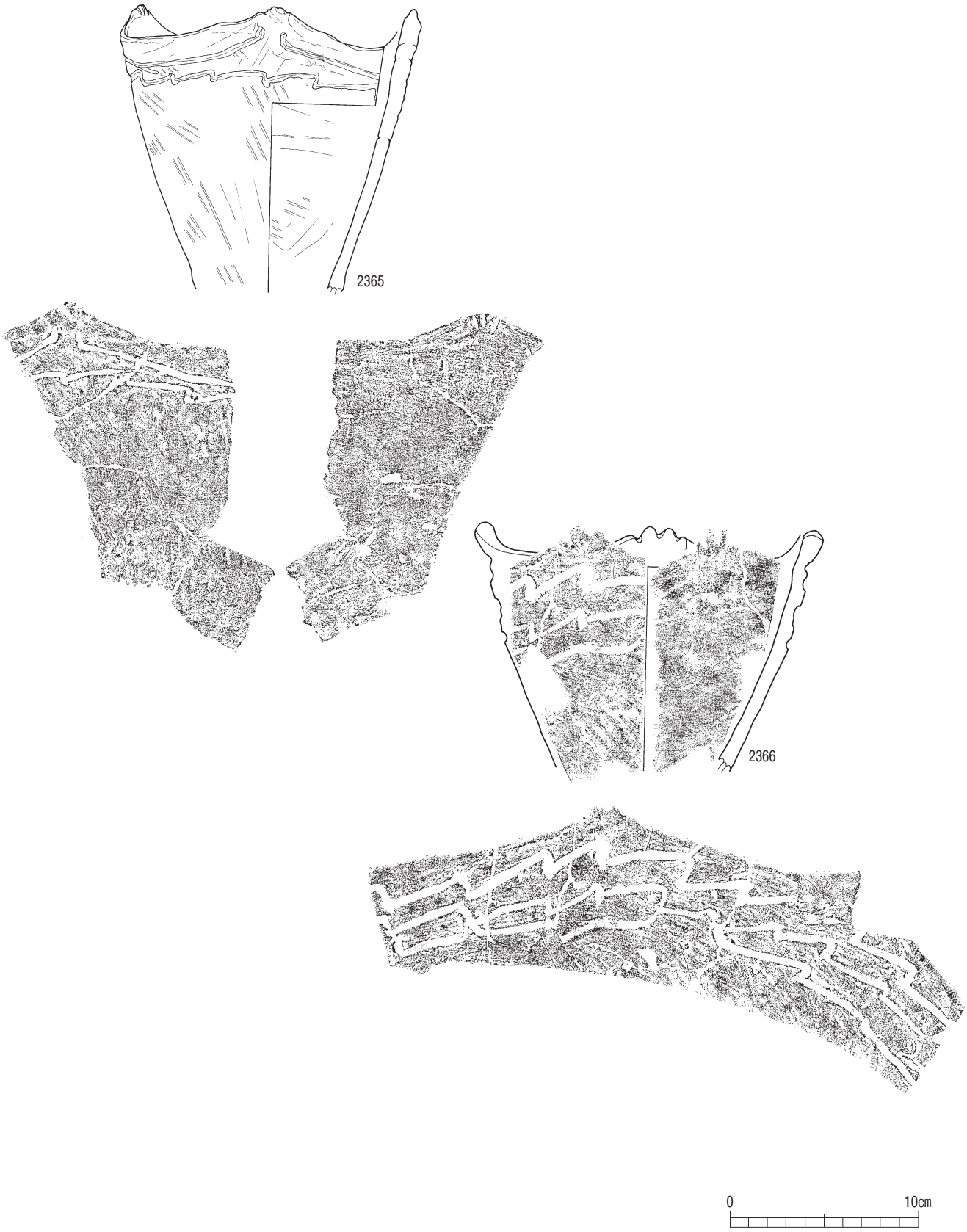


第366図　指宿式土器（210）Ⅲｃ類⑲

第367図　指宿式土器（211）Ⅲｃ類⑳



第368図　指宿式土器（212）Ⅲｃ類㉑



第369図　指宿式土器（213）Ⅲｃ類㉒

である。口縁部に突起部から終始する横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らしている。2366は，棒状工具による刻みのある突起を４か所に有するものである。口縁部に鉤状の文様のある横位の沈線を巡らし，その下位に鉤状の文様のある横位の沈線を２本巡らしている。下の横位の沈線は，一部で１本になっているところがある。

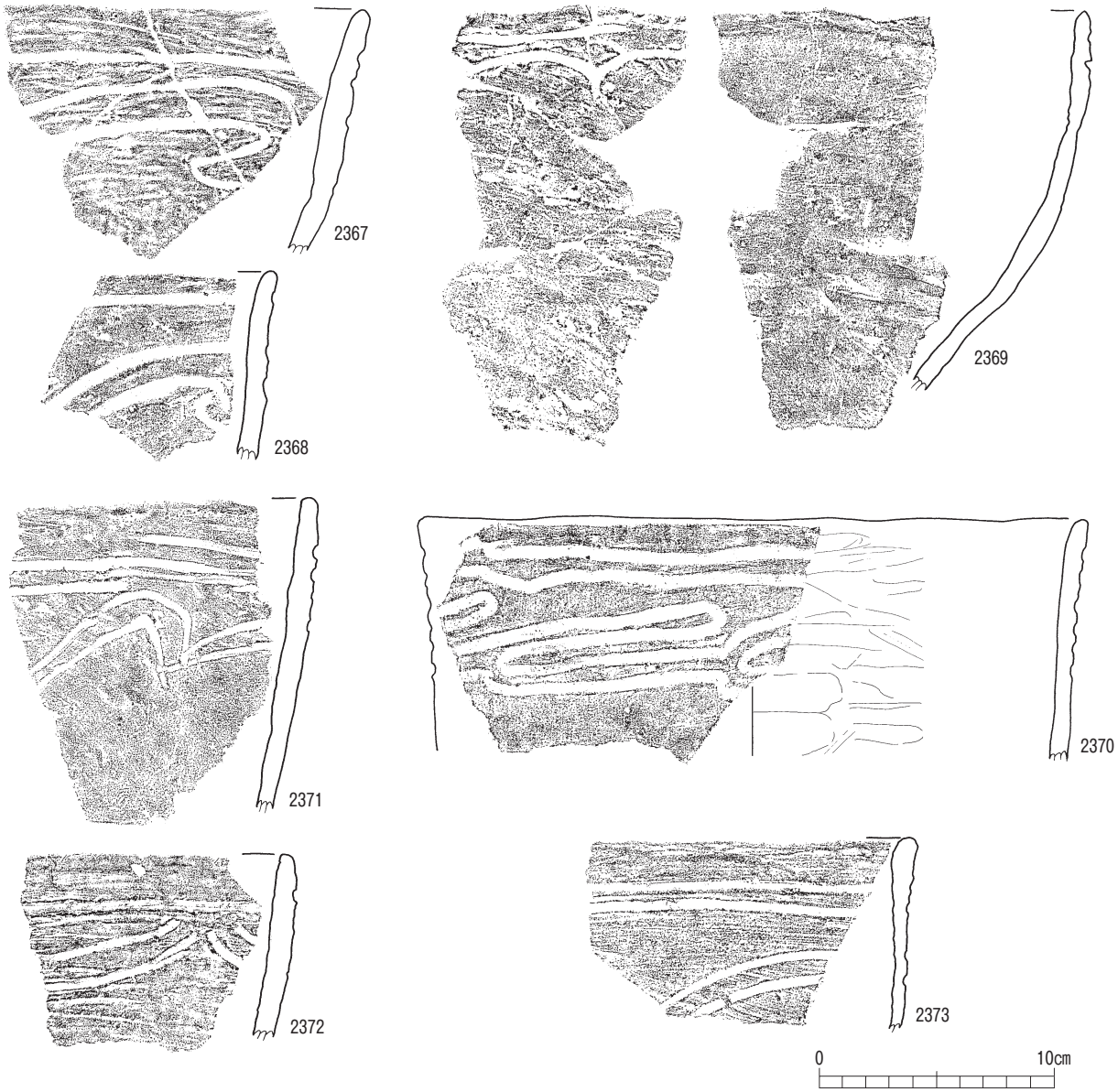
エ　Ⅲｄ類土器（第370図～第376図 2367～2409）

Ⅲｄ類土器は，口縁部付近に波状や弧状の文様のある横位の沈線を巡らしているものである。波状には，小さな波状のものや大きな波状のものがある。また，波状や弧状を描く沈線には，１本のものと２本のものがある。器面調整は，横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は，丸く収めるものがほとんどであるが，平らに仕上げるものもある。深鉢・鉢がある。

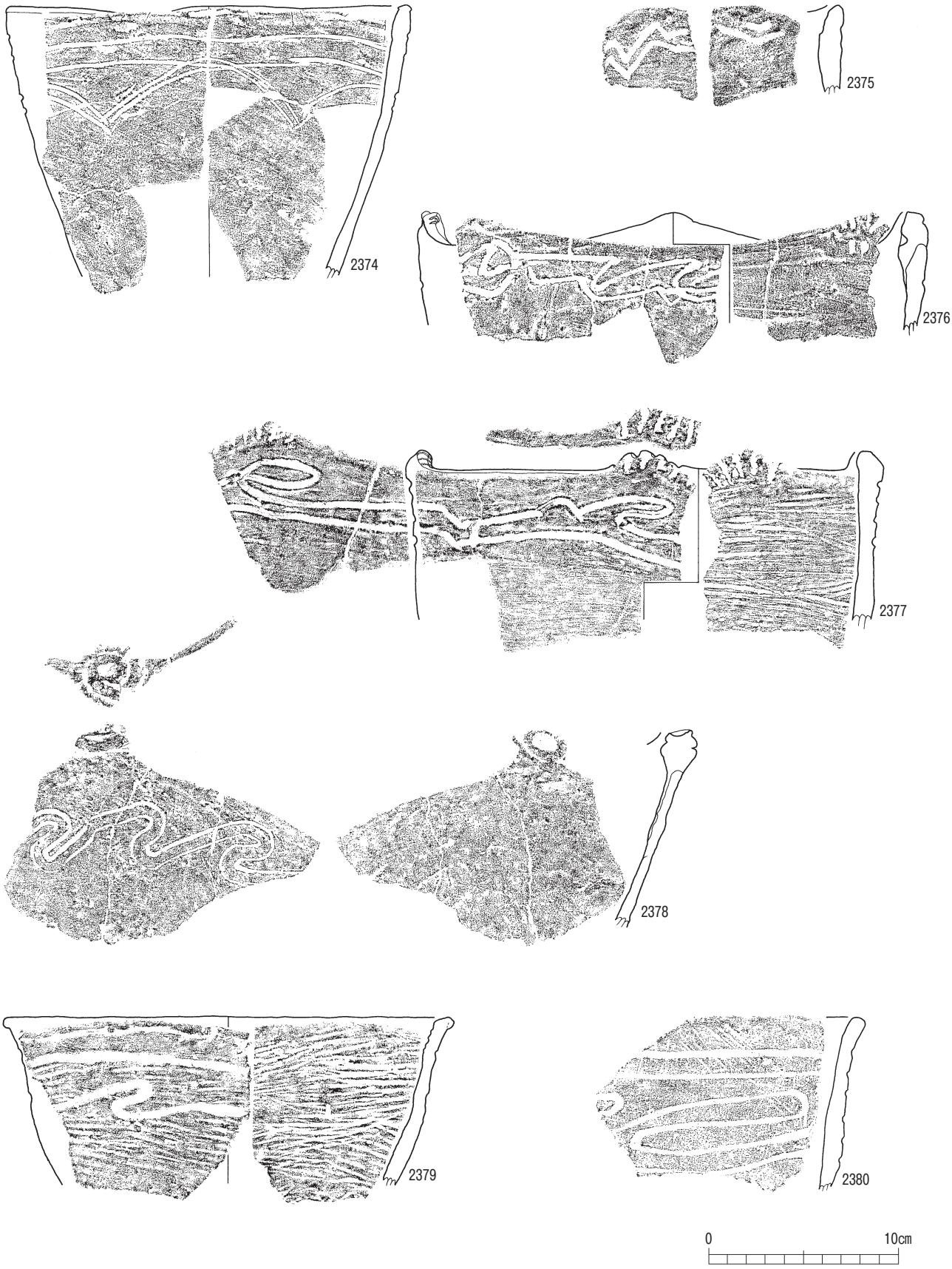
2367～2406は，深鉢である。

2367～2387は，口縁部が胴部から開きながら立ち上がるものや直行するものである。

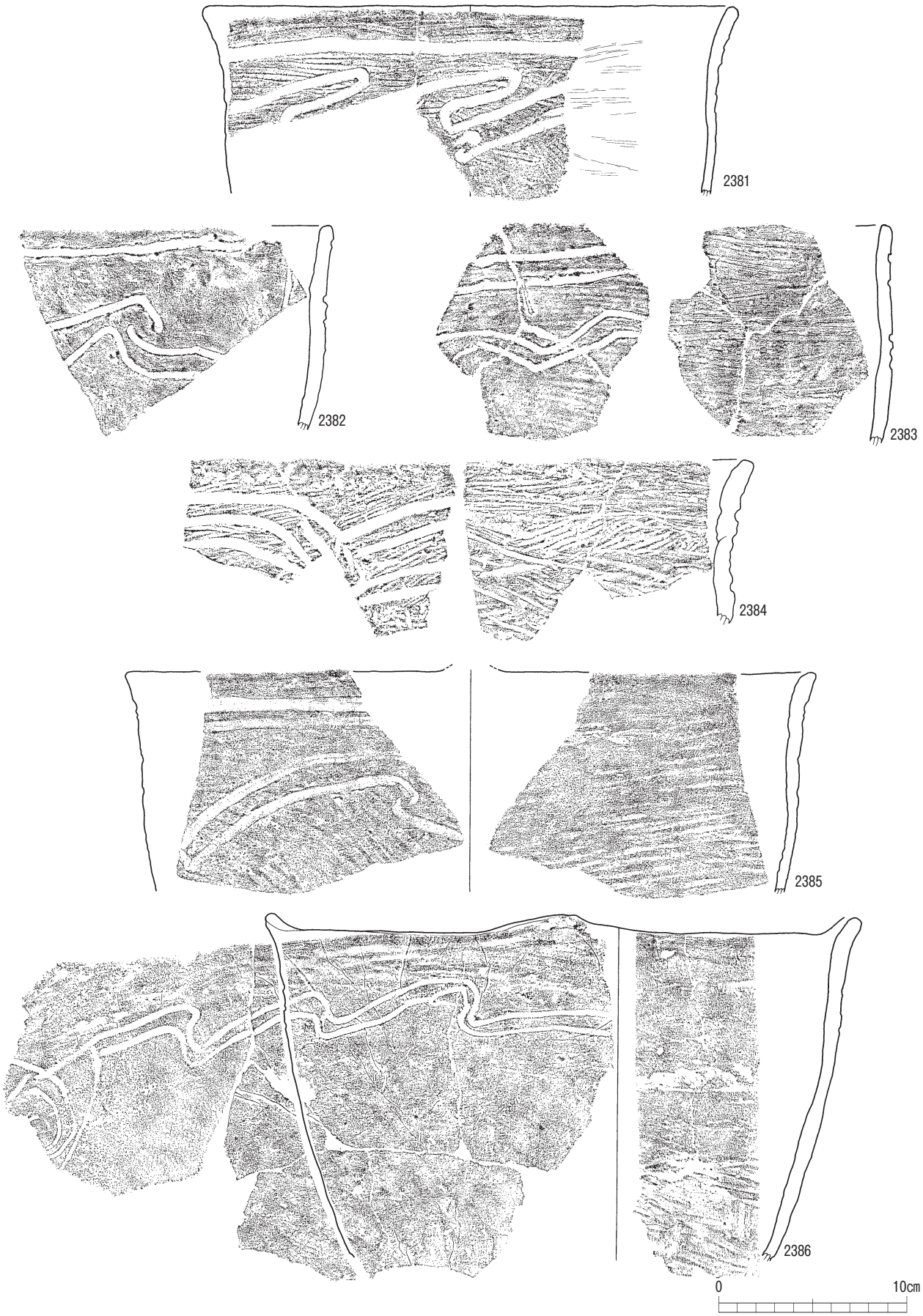
2367～2374は，平口縁のものである。2367～2369は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に横位の波状や弧状の沈線を巡らしているものである。2369は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に横位に弧状の沈線を巡らしている。2370～2374は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に横位の波状や弧状の沈線を巡らしているものである。2373・2374は，口縁部が肥厚するもので，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に２本１組の横位に弧状の沈線を巡らしている。



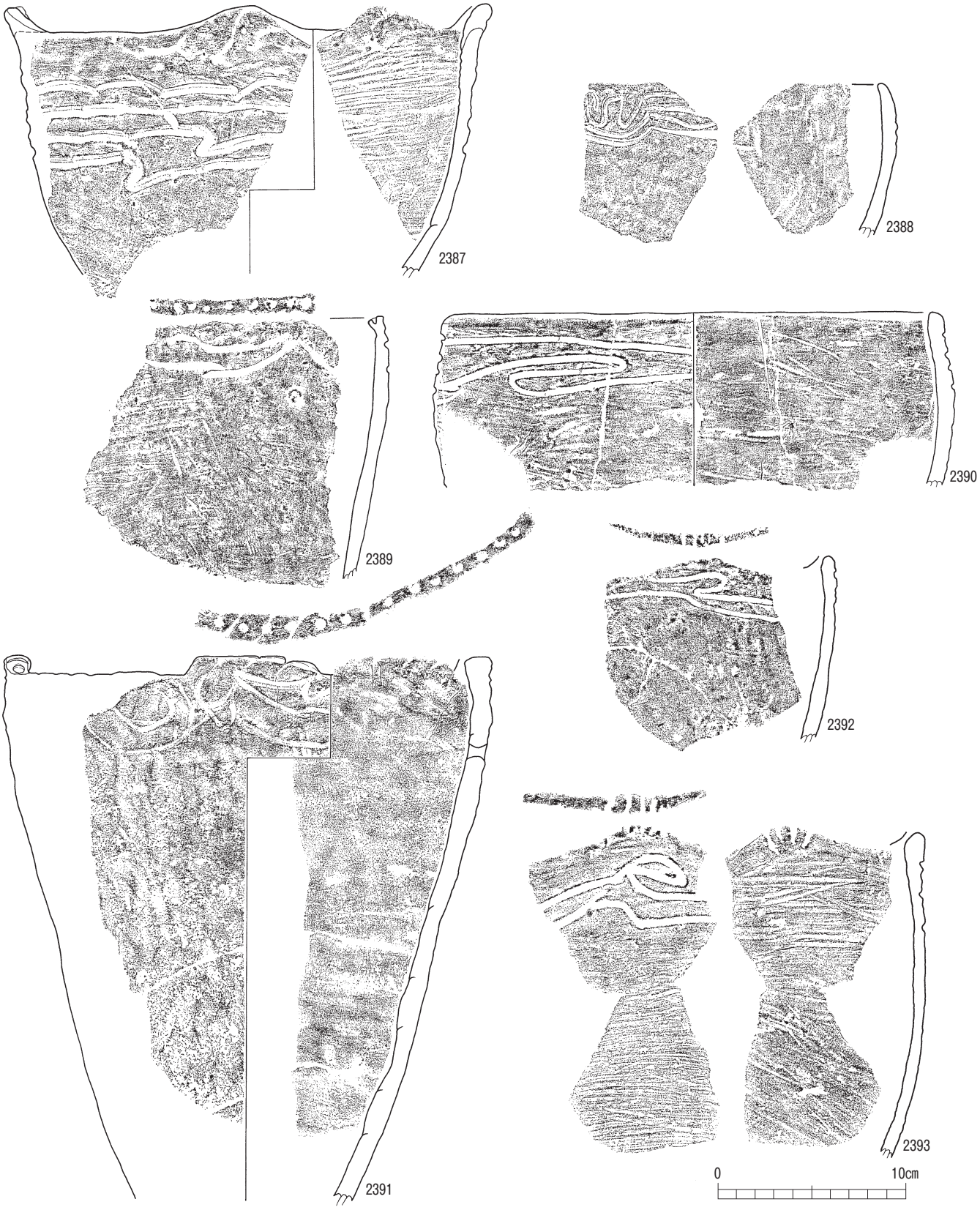
第370図　指宿式土器（214）Ⅲｄ類①



第371図　指宿式土器（215）Ⅲｄ類②



第372図　指宿式土器（216）Ⅲｄ類③



第373図　指宿式土器（217）Ⅲｄ類④

2375～2378は，波状口縁や突起を有するものである。2375は，口縁部に２本１組の波状の沈線を巡らしている。

2379～2387は，口縁部が外反するものである。

2379～2384は，平口縁のものである。口縁部に横位の沈線を１本あるいは２本巡らし，その下位に横位の波状や弧状の沈線を巡らしている。

2385～2387は，波状口縁のものである。2385は，口縁部に横位の沈線を２本巡らし，その下位に横位に弧状の沈線を巡らしている。2387は，口縁部に上から横位に弧状の沈線，横位の沈線，横位に波状の沈線２本を巡らしている。

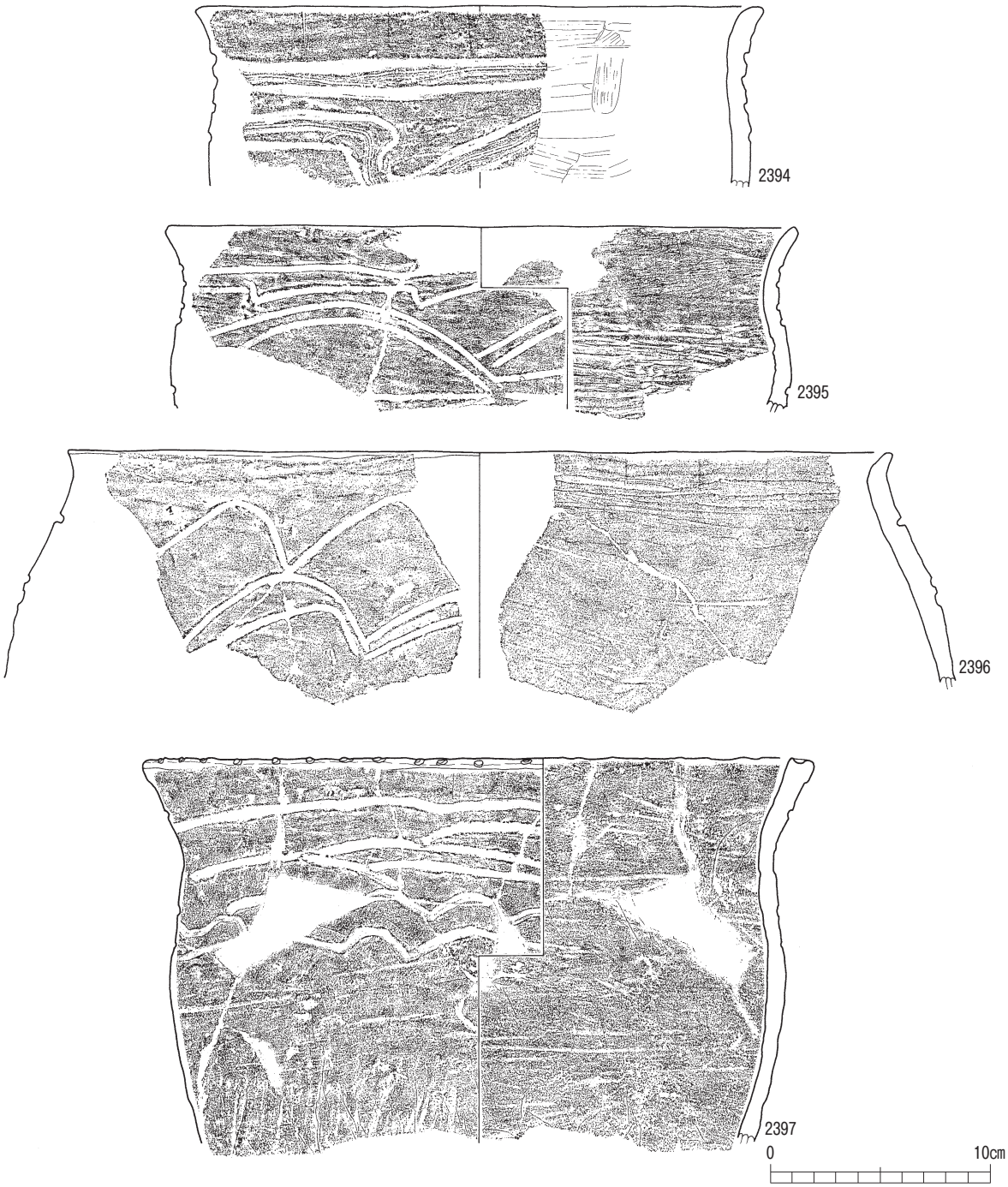
2388～2406は，膨らむ胴部から口縁部が内傾・内弯するものである。

2388～2390は，平口縁のものである。2390は，口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に横位に波状に沈線を巡らしている。

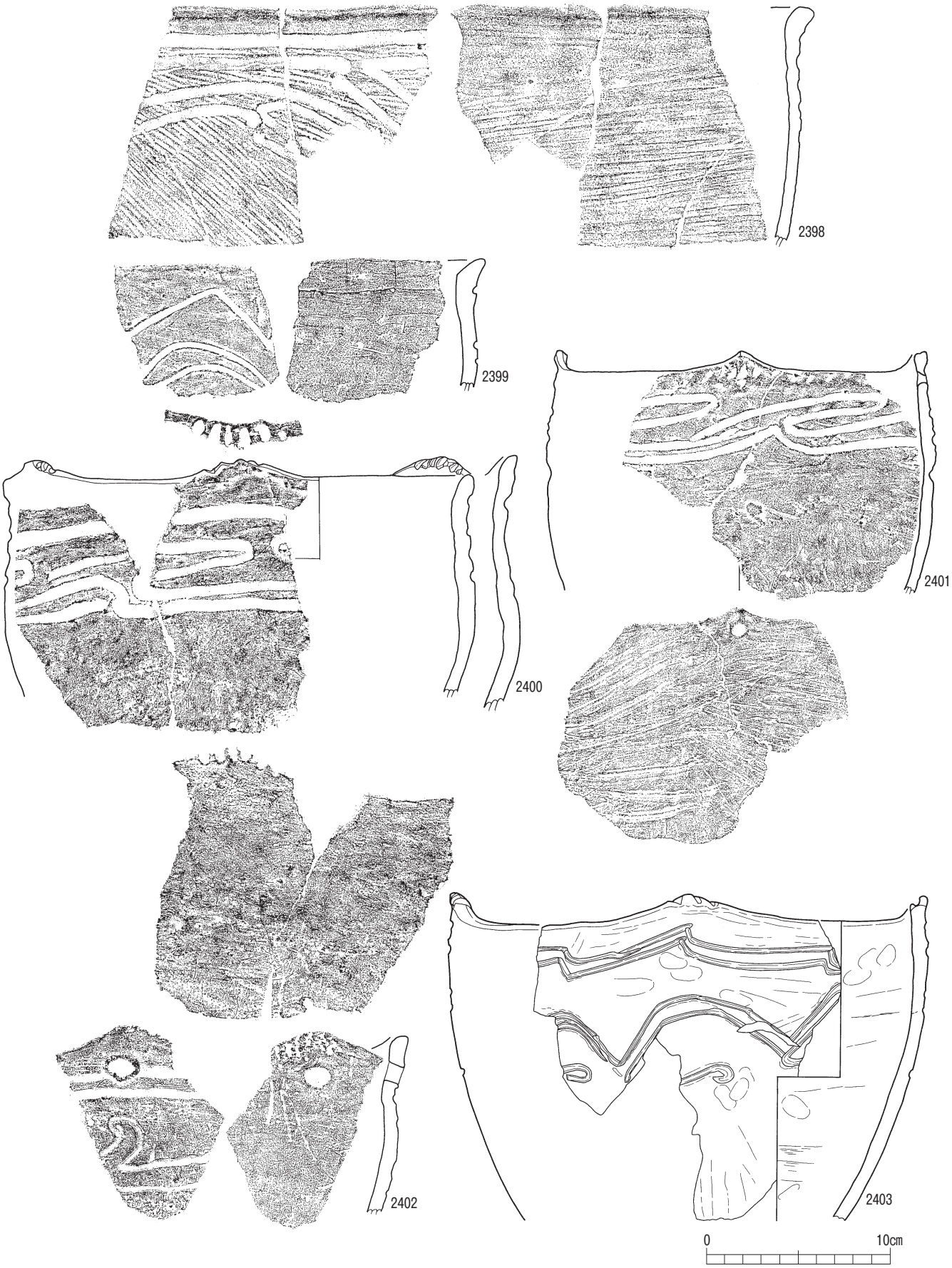
2391～2393は，波状口縁のものや突起を有するものである。口縁部に波状の沈線を巡らしている。2391は，口縁部にねじり紐状の粘土を貼り付け，突起としている。

2394～2406は，口縁部が外反するものである。2395は，口縁部に上から横位の沈線と横位の鉤状の文様のある沈線を２本１組として上下に巡らし，その間に２本１組の弧状の沈線を巡らしている。2396は，口縁部に横位に弧状の沈線を巡らし，その下位に２本１組の弧状の沈線を巡らしている。

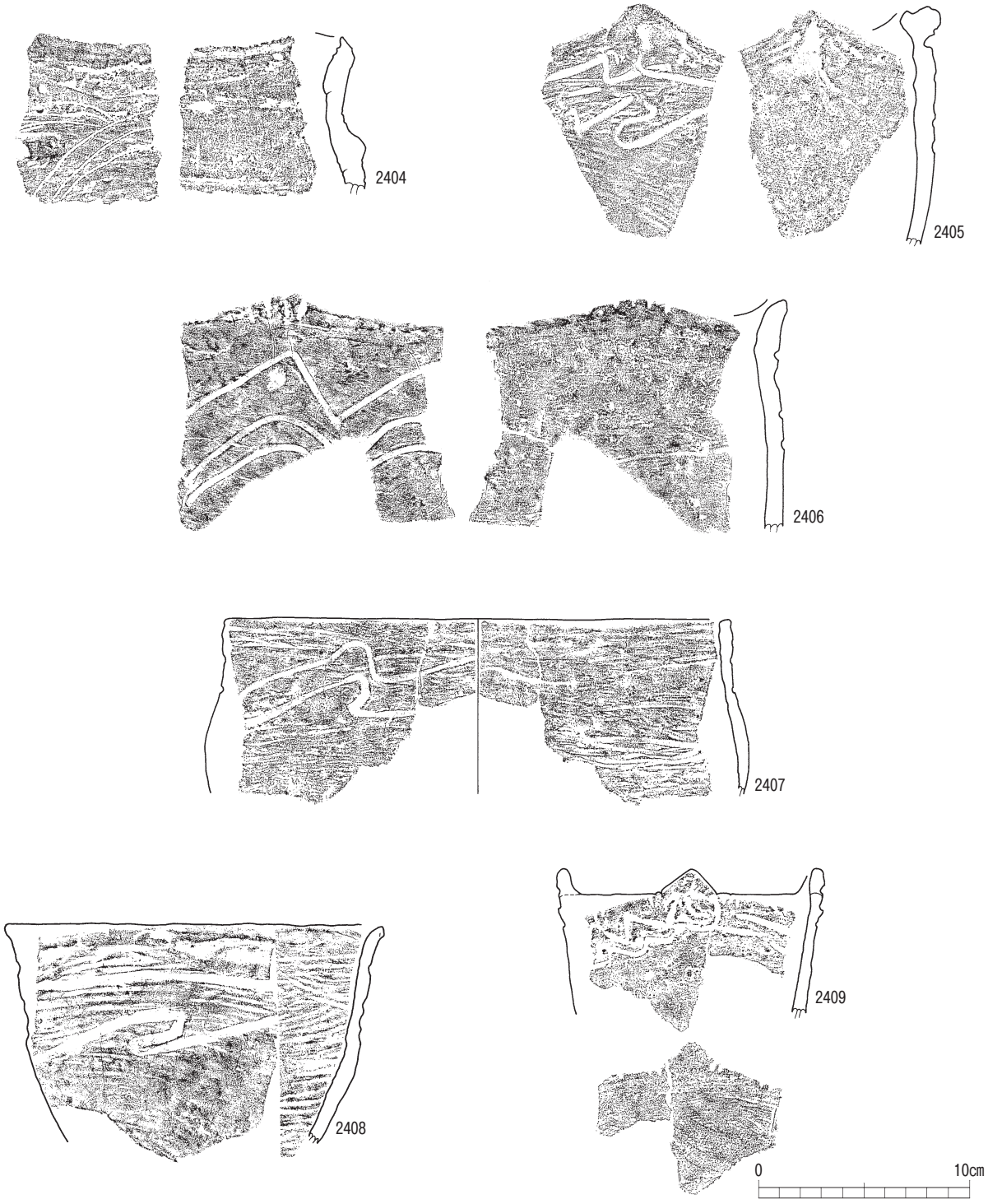
2397～2399は，口縁部が肥厚するものである。2397は，



第374図　指宿式土器（218）Ⅲｄ類⑤



第375図　指宿式土器（219）Ⅲｄ類⑥



第376図　指宿式土器（220）Ⅲｄ類⑦

口縁部に横位の沈線を巡らし，その下位に横位に弧状の沈線を２本巡らしている。口縁端部には，巻貝殻頂部による刺突文が施されている。

2400～2406は，波状口縁のものである。2400は，棒状工具の押圧による刻みの施された突起を３か所に有するものである。口縁部には，横位の沈線を巡らし，その下位に横位に波状の沈線を２本巡らしている。2406は，口縁部に山形の沈線を横位に巡らし，その下位に２本１組の弧状の沈線を横位に巡らしている。

2407～2409は，鉢である。2407は，口縁部に横位に波状の沈線２本を巡らしている。2408は，口縁端部が外反するもので，口縁部に横位の沈線を巡らしその下位に横位に波状の沈線を巡らしている。2409は，山形の突起を４か所に有するものである。突起部外面には渦状の沈線文が施され，口縁部にはこの渦状の沈線文につながるように横位に波状の沈線２本を巡らしている。

（4）Ⅳ類土器（第377図～第420図）

Ⅳ類土器は，ヘラあるいは巻貝殻頂部を用いた沈線文と，二枚貝腹縁や巻貝殻頂部による刺突文等を組み合わせた文様を呈する深鉢や鉢・小型土器・壺・台付鉢・注口土器などである。沈線文は並行する２本の沈線を基本とし，横あるいは縦・斜め方向などに引いて，菱形・三角形・矩形・楕円形などを呈している。この２本沈線の間に二枚貝腹縁や巻貝殻頂などによる刺突文や転圧文などを連続して施している。また，口縁端や山形の頂部，頂部内面などに縦方向のヘラや貝殻などによる押圧文や刺突文を施すものもある。

ア　深鉢（第377図～第403図 3001～3184）

3001～3008は三角状・山形状・台形状となる突起部をもつ口縁部で，直口する器形である。

3001は６か所に三角状に尖がる突起のあるもので，内外面とも貝殻条痕で仕上げている。口径は17cmと小型であり，口縁端には縦方向に押された二枚貝の刺突連点文がある。その下に口縁端と並行する２本沈線が巡っている。その下には突起部近くで入組文状に曲がる２本沈線がある。

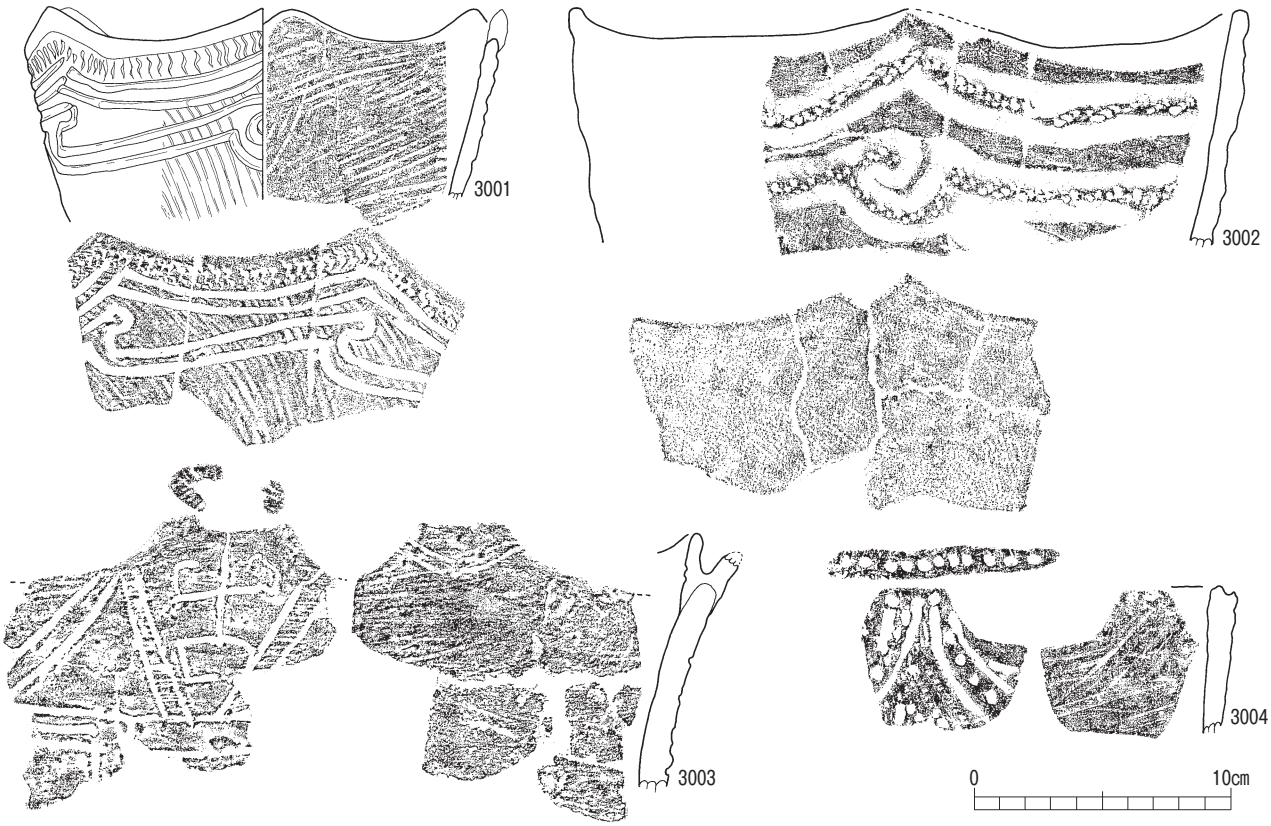
3002は４か所に低い三角状の尖がった突起のあるもので，口径は26.6cmである。貝殻条痕で調整しているが，そのあとをヘラでナデており，特に外面は丁寧である。外面は間に巻貝殻頂による小さな刺突文のある太い２本沈線が２段巡っている。２段とも，口縁と並行しているが，下のほうは突起部で渦巻状の文様を呈している。

3003は突起部が台形状を呈するもので，頂部は深い窪みがあり，窪みの周辺にはヘラ刻みが巡っている。突起部の内面には２本沈線がある。外面に細い２本沈線がある。上に鋸歯状文様があり，突起部の下にはＪ字文と十字文・矩形などで「古」のような文様を構成している。その下にはさらに，横線や矩形が見られる。２本沈線間に地文の貝殻条痕が残って，ヘラ刻みのように見える。

3004も台形状の山形突起で，突起の頂部に向かって左右から中央に巻貝刺突文のある２本沈線が立ち上がる。この間にはヘナタリの転圧文や巻貝殻頂による押圧文が見られる。口唇部には巻貝殻頂の刺突文が連続している。

3005は４か所に台形状をした突起のあるもので，口径は35cmと大型である。口唇部には沈線が巡り，突起の口唇部には３つあるいは６つのヘラ状刺突文がある。外面の２本沈線間にはヘラ押圧文がある。突起部の下で交わるＸ字文で，端部はＪ字や矩形で閉じられている。乳茶褐色を呈し，外面にはススが付着している。

3006も3005と同じような器形をしており，口径は41.5cmある。突起の頂部には楕円形の穴がある。突起部から２本沈線が下がり，横へ続いているが，端はＪ字状に外へ屈折している。この線の上方では口縁と並行して

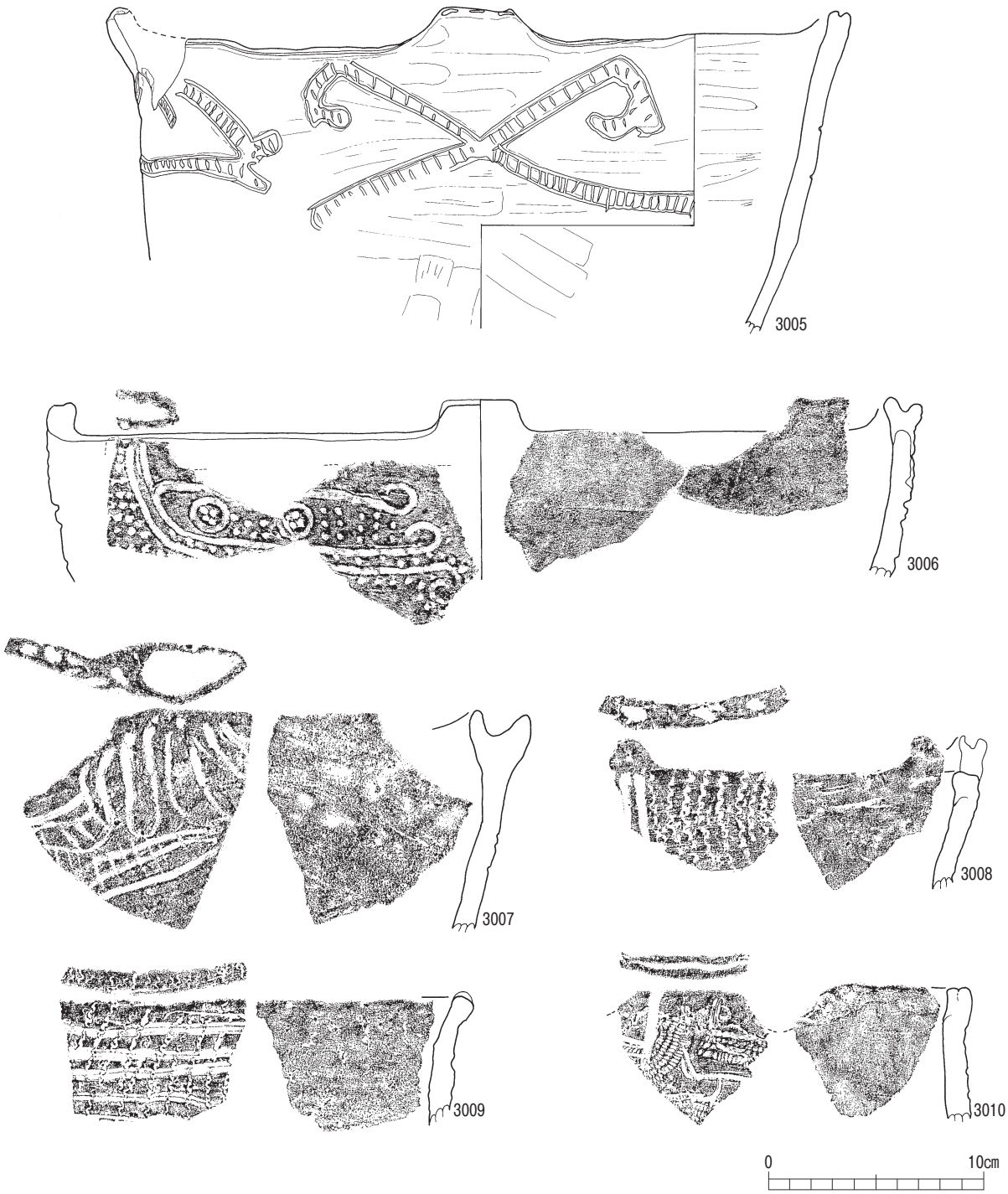


第377図　指宿式土器（221）Ⅳ類①

横線が引かれるが，端は上へＪ字状に巻いている。中央にある線とは楕円状につないでいるが，この中に円文が２個並んでいる。沈線の中や外には巻貝殻頂の刺突文が規則正しく施されている。

3007も台形状の突起で，口唇部には巻貝刺突文があり，突起の部分では深い穴が掘られている。外面は突起部に長いＵ字文があり，その下や横には中央に横線のある楕円形がある。この楕円形にはヘラ刻みが施される。石英・白雲母・長石などにまざって黄白色や白色・灰色などをした５㎜ほどの細礫を多く含む粗い土を使用している。

3008は小さい台形状の突起をもつ口縁部で，口唇部には巻貝殻頂による刺突文がある。外面は口縁部に二枚貝腹縁による押し引き状押圧文があり，その下には横方向の沈線がある。突起部では縦方向の短い沈線が施されている。



第378図　指宿式土器（222）Ⅳ類②

3009はやや外反ぎみの口縁部で，口唇部には二枚貝腹縁による刺突文がある。外面には５本の浅くて粗い沈線の上に左下がりの二枚貝腹縁による刺突文が見られる。

3010は台形状を呈する突起の破片である。口唇部には沈線があり，沈線の外側から外面にかけて，ヘナタリの転圧文が見られる。外面には沈線による矩形が描かれるが，突起部では上へ垂直に立ち上がっている。

3011～3016は貝殻条痕で調整しているが，そのまま残しているものと，ヘラで丁寧にナデ消しているものとがある。

3011は４か所に山形突起のあるもので，口径は29㎝ある。突起部先端が欠けているため，詳細は不明だが，内外面とも無文である。外面は中央に巻貝刺突文のある２本沈線で文様が構成されている。上下に横方向の沈線があり，その間に斜方向，逆時計回りの渦巻文，つづら折り文などの文様が描かれている。

3012はねじり紐で突起部を作っている破片で，間に巻貝殻頂の刺突文のある２本沈線が斜方向などに施され，菱形などを描いている。内外面とも口縁端に左下がりのヘラ押圧文がある。茶色・黄白色・灰色などの細礫を含んだ粗い土を用いているが,中には８㎜大のものもある。

3013は低い山形突起を有する口縁部で，間に刺突文のある２本沈線が右下がり，あるいは左下がりに施されており，三角形あるいは菱形状を呈する。

3014～3016は同一個体と思われるものである。低い山形突起をもち，口縁下には口縁端近くに並行して２本沈線が引かれ，沈線間には巻貝殻頂の刺突文がある。突起部では上の２本沈線が立ち上がって山形に屈曲し，その下にはハの字状に末広がりとなる２本沈線が引かれ，ハの字の中間に巻貝刺突文が２列縦方向に押されている。突起部外では鋸歯状の２本沈線がある。内外面とも貝殻条痕で調整しているが，外面は口縁付近だけに条痕を残しているものの，その下は文様を施したあと，ヘラミガキを施している。

3017は頂部が一部欠けているが，台形状突起を有する破片で，頂部には二枚貝腹縁の押圧文がある。外面は短い横沈線が５本引かれ,沈線と沈線との間には口縁端から３列の巻貝殻頂による竹管状刺突文が縦方向に押されている。突起部の下には横方向の巻貝刺突文が３段に施されている。内面には指圧痕が多く見られるが，そのあと横方向のヘラナデが見られる。

3018は三角状突起をもつ口縁部で，突起の下には内面から外面へ向けて穿たれた円孔がある。外面はＬ字あるいは矩形となる直線文があり，直線の間には貝殻条痕の痕が残っている。

3019は浅い２本沈線のある口縁部破片で，沈線間やその上に巻貝殻頂による刺突文が施されている。補修孔とみられる円孔が１個ある。

3020は口縁部を欠いているが，間に二枚貝刺突文のある２本沈線が曲線気味のＸ字文や楕円文などを表現している。

3021～3023はやや内反ぎみとなる口縁部である。

3021は４か所に低い山形突起のある口縁部で，口径は27.8㎝である。口縁端との間に無文帯があり，その下には浅いヘラ凹線があって，中には二枚貝刺突文が施されている。その下は蛇行する浅い２本沈線が巡っている。

3022は内外面とも貝殻条痕で調整したあと，ヘラで丁寧にナデている。間に巻貝刺突文のある２本沈線で山形・Ｊ字文などが描かれている。

3023は細い２本沈線で矩形やＬ字文・楕円文を描いており，沈線間にはヘラ押圧文が見られる。

3024は４か所に低い山形突起があり，山形突起部分にはヘラ押圧文がある。口径は21.2㎝である。外面には鉤状に屈曲する２本沈線があり，沈線間や，その上には横方向の二枚貝腹縁の刺突文がある。

3025・3026は口縁近くの内面でくの字状に外へ屈曲するものである。

3025は口唇部に巻貝殻頂の刺突文があり，外面には沈線間に巻貝刺突文のある２本沈線で文様が描かれる。口縁近くには右下がり，その下に横方向の沈線がある。

3026は山形突起のある口縁部で，この突起部には縦線や三角文・菱形文で人形が描かれ，沈線間や縦線の両脇には巻貝押圧文がある。その下には２本沈線で横線が引かれ，この横線の下には鋸歯文がある。

3027は貝殻条痕で仕上げているが,外面はそのあとをヘラで横方向にナデている。外面には矩形の沈線があり，その中にはヘラによる縦や横方向の短沈線が引かれている。

3028～3030は山形突起を有する口縁部である。

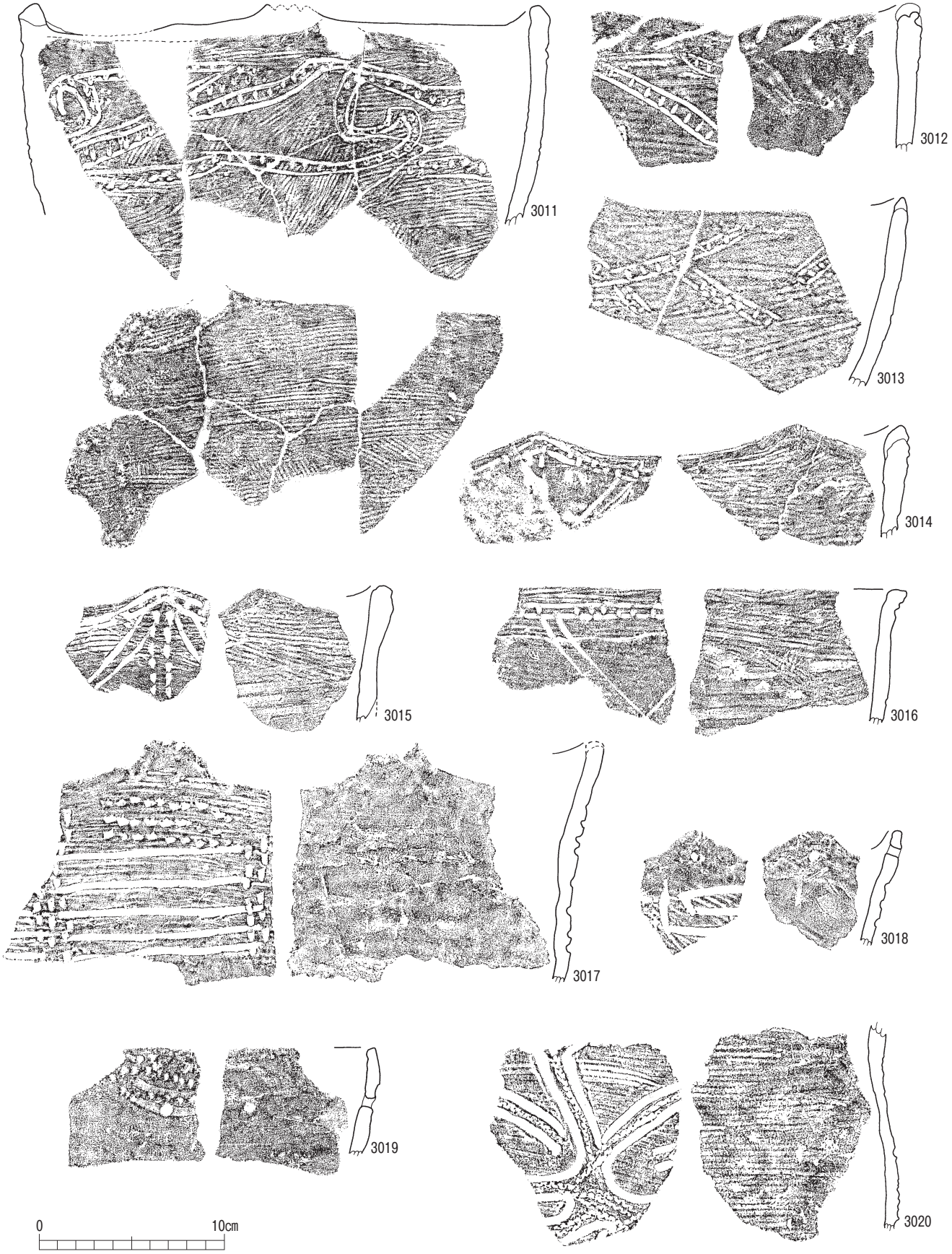
3028の突起頂部には中に８本の縦沈線のある横沈線が一周している。外面は沈線間に縦方向のヘラ刻みがある長楕円文が３段にわたって描かれている。

3029の外面には細い沈線で縦・横・斜め方向などに雑然とした文様が描かれている。

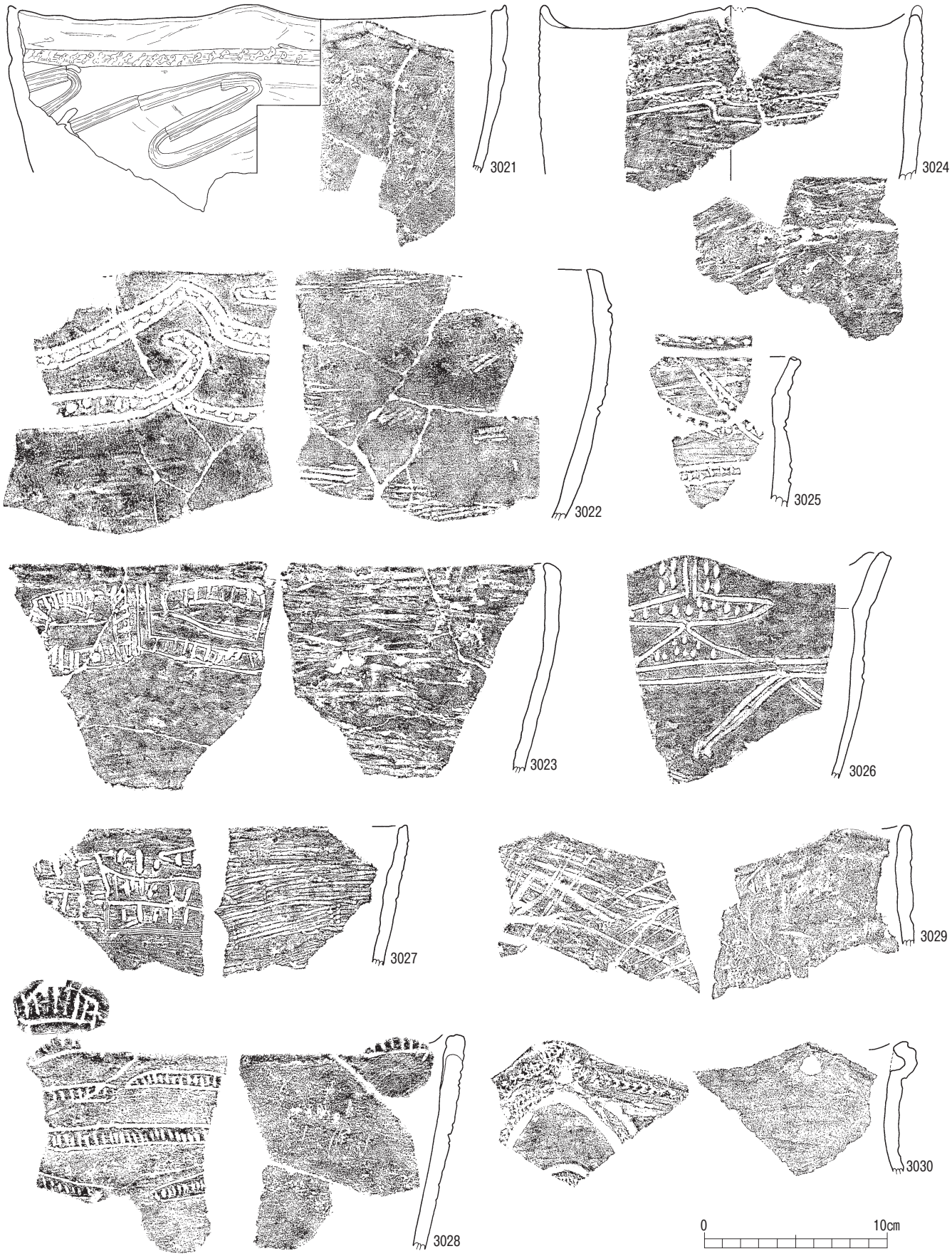
3030は外面に山形を呈する２本沈線が描かれ，沈線間と口縁端には二枚貝腹縁による押引押圧文が付されている。突起部内面には円形の窪みが掘られている。金雲母が多い。

3031は口縁部が内側に膨らむもので，間に横線を挟んで，上下に三角文が見られる。いずれも２本沈線で，三角形内に巻貝殻頂による刺突文を押す所もある。

3032・3033は同一個体と思われる。外面は沈線と巻貝殻頂の刺突文で文様を構成しているが，２本沈線になる部分とならない部分があり，刺突文との整合性もはっきりしない。沈線のあと，刺突文を描いており，楕円・矩形・三角形などの文様がある。



第379図　指宿式土器（223）Ⅳ類③



第380図　指宿式土器（224）Ⅳ類④

3034も同じような文様だが，下のほうは無文となる。

3035は突起部分で，分厚く作っている。突起部でU字状となるが,ここから矩形へと続く。２本沈線の間にはヘナタリの転圧文が見られる。外面は貝殻条痕で調整したあと，丁寧にヘラでナデている。

3036・3037は２本沈線の間にヘラ押圧文の見られる曲線文様で，3036は楕円形となる。3036は細線，3037は太線である。3036は三角突起部分で，口唇部にはヘラ刺突文がある。3037には補修孔が見られる。

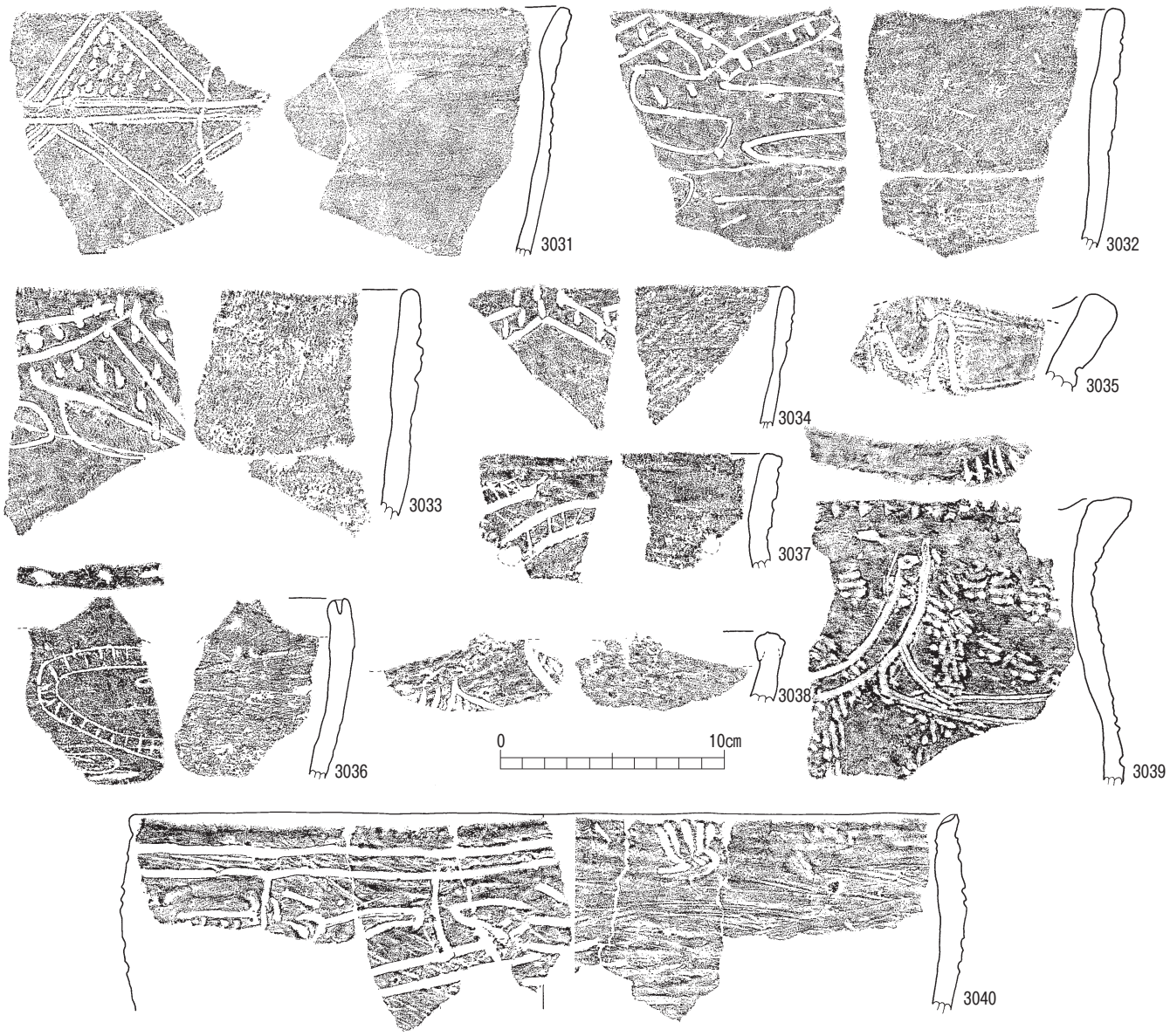
3038は２段突起となる部分で，内外面に粘土を貼り付けて分厚くしている。外面には曲線となる２本沈線があり，沈線間には二枚貝刺突文が施されている。

3039は口縁がやや外反する器形で，波状となる突起部の破片である。突起部の頂部には右から左へ５か所のヘラ刻みが見られ，口縁端には巻貝刺突文が巡らされる。外面は巻貝殻頂によって縦方向あるいは弧状に規則性のある３段刺突文が施されたあと，弧状の２本沈線が引かれている。外面に木の実と思われる圧痕がある。

3040は口径が37.5cmある大型のもので平口縁だが，内面４か所にヘラによる押圧文がある。縦方向に５本あり，そのうち２本はさらに下へ逆くの字状となって下がる。外面は口縁下に２本沈線があり，さらにその下に矩形や靴形の沈線が施され，多様な文様となる。２本沈線間に巻貝刺突文のある所もある。

3041～3044は口縁下に突帯が貼り付けられているものである。

3041～3043は文様や色調等からして同一個体と思われるものである。４か所に波状突起があり，口唇部にはヘ



第381図　指宿式土器（225）Ⅳ類⑤

第382図　指宿式土器（226）Ⅳ類⑥

ナタリの転圧文が見られる。突起部は三角状に尖り，１か所ではここに三角形状の沈線が，あと１か所では上へ立ちあがる短い縦沈線が描かれ，沈線間と，その外側に巻貝刺突文がある。突帯上にも巻貝刺突文がある。突帯より上の口縁側には長い矩形状沈線が引かれ，その間には巻貝刺突文がある。下の方には横線・楕円・三角形などの文様があり，間には巻貝刺突文や転圧文が見られる。

3044は外反する口縁で，直径が21.2cmである。頸部に断面三角形の突帯が貼り付けてあり，突帯の下には横方向の２本沈線，突帯の上には２本の横沈線と，そこから上へ立ち上がるくの字状の曲沈線がある。口縁内面には２本の横向き二枚貝腹縁の刺突文がある。

3045は把手の付く口縁部である。把手は下半部が欠けているが，筒状を呈し，外面には２列に巻貝刺突文が見られる。外面には浅い矩形沈線がある。

3046～3049はくの字状に外反する口縁部である。

3046は板状粘土紐で鼓状の輪を作って突起部としたもので，突起部内外面や口縁端には斜方向のヘラ押圧文があるが，内面の一部は綾形状を呈している。突起部下には間にヘラ押圧文のある三角形の２本沈線がある。

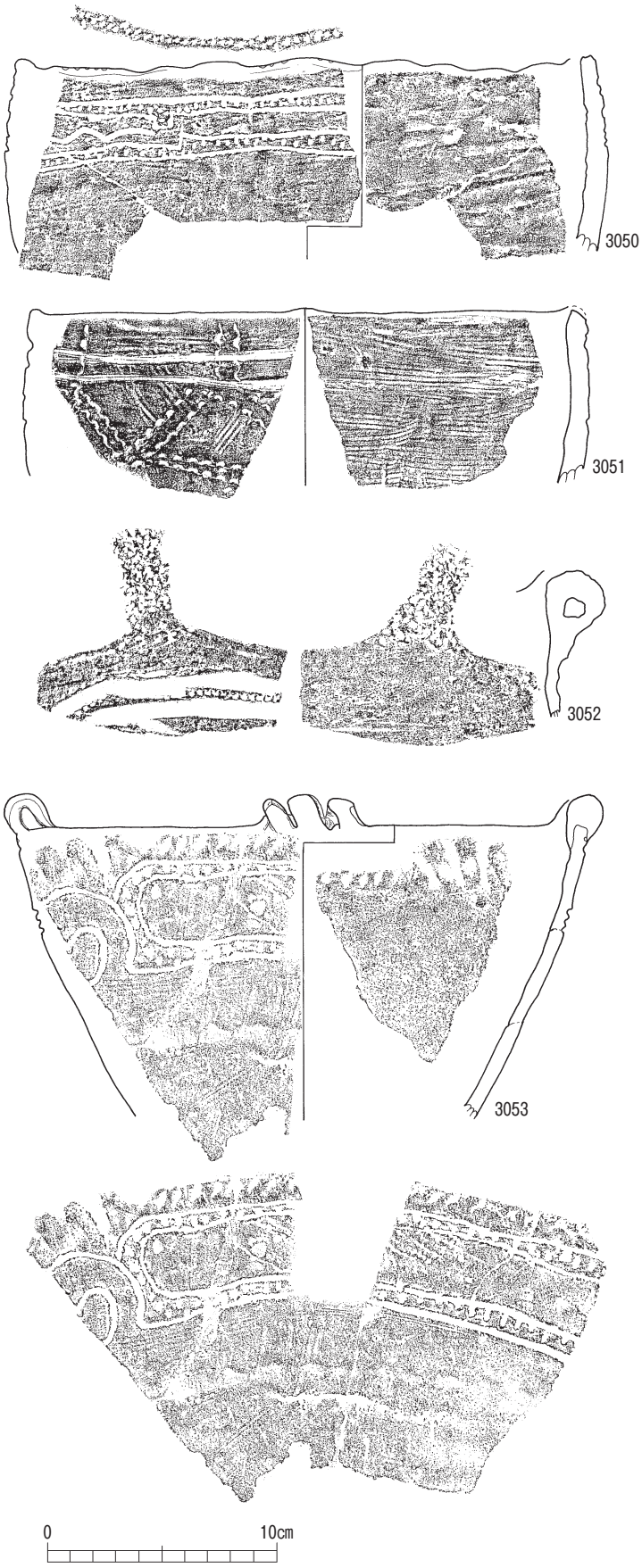
3047と3048は同一個体と思われる破片で，口縁端にはヘラ刻みがある。外面は無文帯の下に間隔の離れた横方向の沈線があり，その間に長楕円形・渦巻文・弧状の２本沈線などがある。２本沈線の間や下の沈線の上側などにはヘラ刻みが見られる。

3049は3046と同じように板状の粘土紐で輪を作って突起にしたもので，突起の外面にはヘラ押圧文がある。外面は上に１本の横沈線があり，その下には間にヘラ押圧文のある三角形，Ｕ字形などの２本沈線がある。

3050・3051は口縁部がやや内反する器形をしている。

3050は口縁部上面が大きく波立っているもので，口径は25.6cmある。口唇部には巻貝刺突文があり，外面には間に巻貝刺突文のある幅の狭い２本沈線が２段に施されている。この２本沈線は中央付近で，鉤状・コの字形に屈曲しており，その左側には波状沈線が施されている。

3051は貝殻条痕で調整されており，一部に低い山形突出部がある。口径は24cmである。外面に２本沈線が引かれたあと，２列の二枚貝腹縁の刺突文が斜方向に押され，鋸歯状を描いている。三角



第383図　指宿式土器（227）Ⅳ類⑦

形の角から口縁端に向かって短い縦方向刺突文もある。

3052は外反する器形で，帯状粘土紐で把手状突起が作られる。突起には外面から内面にかけて巻貝刺突文が施されている。外面には横方向に太めの２本沈線が引かれ，間には二枚貝刺突文が施されている。

3053～3059は外へまっすぐ開く器形をしている。

3053は４か所に３本の粘土紐を貼り付けた突起があり，口径は24.6cmである。外面は間に巻貝刺突文のある２本沈線で矩形が描かれ,矩形内には巻貝刺突文がある。突起の下には渦巻文があり，口唇部には広く巻貝刺突文が施されている。

3054は大型の深鉢で，４か所以上に穿孔のある突起がある。突起の上には４個の巻貝刺突文がある。外面には中央に２本の横線がある矩形の浅いヘラ沈線があり，間に二枚貝腹縁による刺突文がある。そのあとヘラでナデている。

3055は低い山形突起のある口縁部である。外面は口縁部の間に巻貝刺突文のある２本沈線があり，その下には波状沈線とＵ字沈線で小楕円形の連結文を描き，この楕円形内には２個の竹管状巻貝刺突文がある。突起部内面には４本のヘラ押圧文がある。内外面とも貝殻条痕による調整だが，内面はそのあとを，ヘラでナデている。

3056は口縁端が内面に屈曲して突き出す形状をしており，屈曲部外面にはヘラによる押圧文がある。その下には間に二枚貝腹縁の刺突文のある沈線があるが，下の線は下へ屈曲し，その内側は無文であることから，２本沈線内に矩形のある文様かもしれない。

3057は口唇部が幅広の矩形を呈している。外面は４本の斜方向沈線でハの字を呈し，その中には６本の横沈線があり，中央に９個の竹管状巻貝刺突文が横方向に施されている。この右にも横沈線があることから，この文様が上下交互にくり返されているのかもしれない。

3058は雑な沈線が逆Ｌ字形に３本あり，中央と右の線の外には巻貝刺突文がある。

3059は口縁端がでこぼこした器形で，幅狭の２本沈線の間にヘラ押圧文が施されている。

3060は４か所に山形突起のある器形で，口径は35cmである。突起部には４つのヘラ押圧文がある。外面は沈線と二枚貝刺突文で，横線や入組状文，波状文などが描かれ，突起部では上へ立ち上がり，その下に時計回りの渦巻文が描かれている。

3061は４か所に山形突起のある口径35.8cmの大型の深鉢である。外面は上に間に二枚貝刺突文のある２本沈線が波状を呈し，下には入組文を繰り返す横長の２本横線が連なっている。内面の口縁端から口唇部にかけては二枚貝刺突文による鋸歯文がある。突起部は口唇部から内外口縁部にかけて，８本の二枚貝押圧文が施されている。

3062～3064は外面の文様に横線の区切りがない類である。

3062は口径が29.8cmあり，内反しながら口縁近くでゆるやかに外反する器形である。端が入組文となる曲線を主体とする２本の沈線間には巻貝殻頂による刺突文が見られるが，右端にある三日月形沈線間の刺突文は他に比べて細かい刺突文である。平口縁だが，内面の１か所には逆三角形となる巻貝殻頂の刺突文がある。

3063は口縁近くの内面にくの字の稜ができて，ゆるやかに外反する器形で，口径は31.8cmである。外面に同心円状の沈線があり，その間に左下がりや横方向のヘラ沈線が見られる。

3064は開きながらまっすぐ口縁へ立ち上がる器形をしており，低い波状口縁となる。外面は２本の細沈線による楕円文が２段描かれ，楕円内には縦方向のヘラ沈線のある所とすり消してある所とがある。雑ではあるが，磨消縄文土器の模倣をしているものと思われる。口唇部にはヘラによる刺突文がある。

3065も開きながらまっすぐ口縁へ立ち上がる器形をしており，口径は19.4cmである。外面は２本沈線により，上に鋸歯文が，下には横線がある。横線の間には縦方向のヘラによる短沈線がある。

3066～3069は外へ開きながら，まっすぐ立ち上がる器形をしている。

3066は口縁部がでこぼこしており,口径は24.5cmある。内外面ともヘラによる粗い横方向のナデ調整である。外面には横方向の沈線が３本あり，その上にそれぞれ二枚貝腹縁の刺突文があるが，上段と中段は横方向と左下がり，下段は横方向だけである。

3067も口縁部はでこぼこしており，外面文様は中の矩形を楕円が囲んでいる。楕円内・矩形内には細かい巻貝殻頂部による刺突文がある。口唇部にも巻貝殻頂部による刺突文がある。

3068は３本の横沈線と，その間に文様がある。上段と下段は右側が二枚貝腹縁の押引文，左側がヘラ刻み，中段はヘラミガキである。

3069は１本の沈線と口縁端の間に巻貝による刺突文が並んでいる。

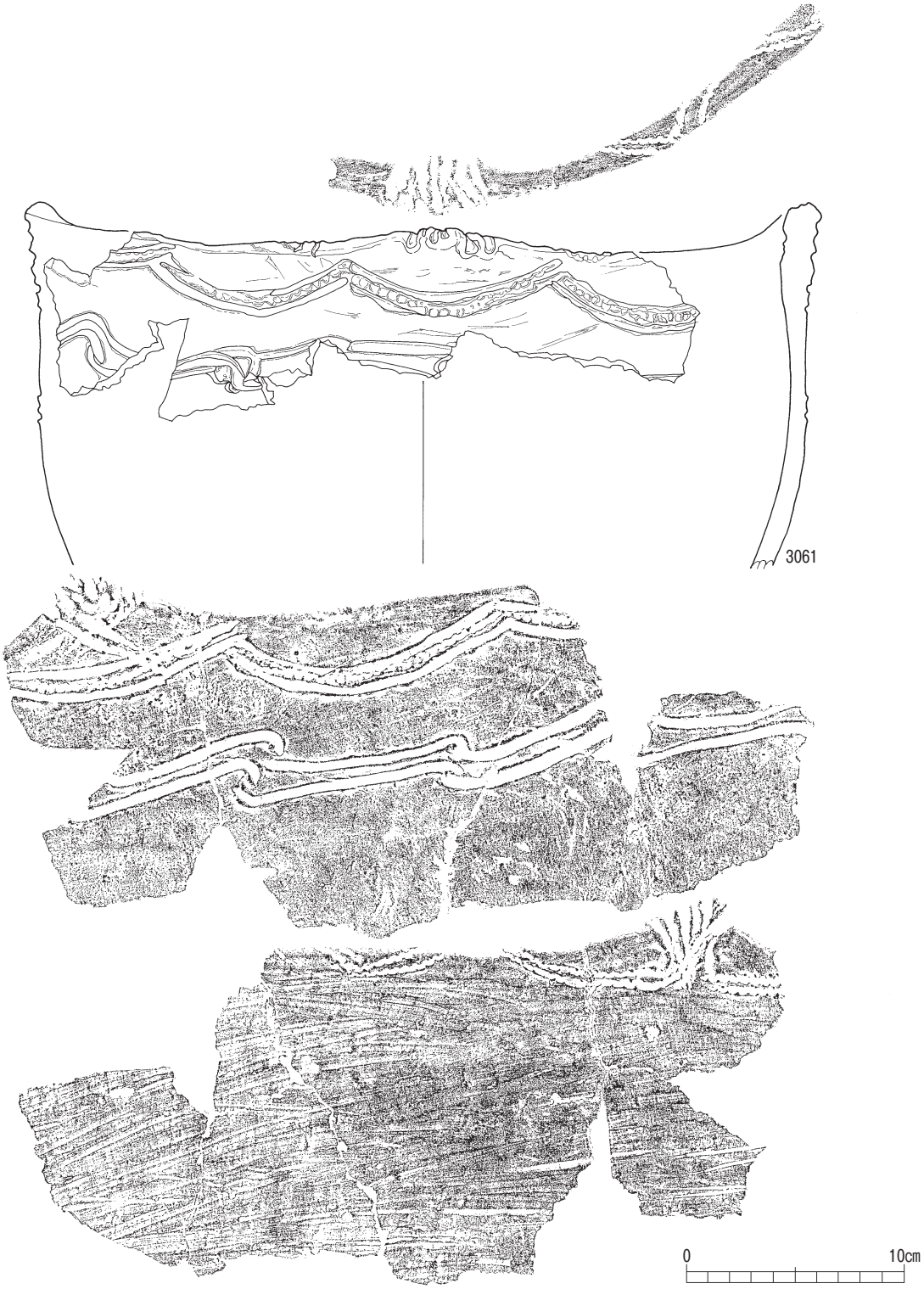
3070～3072は外反する器形で，口縁端にヘラあるいは二枚貝腹縁の押圧が施されている。

3070は口縁端に左下がりのヘラ刻みが施されており，横・縦・斜め方向の２本沈線間にもヘラ刻みがある。

3071は口縁端に薄い貼付突帯があり，そこに左下がりのヘラ刻みが施されている。口縁下部には幅広の２本凹線が２段あり，下の２本凹線間には二枚貝腹縁の刺突文が施されている。

3072は波状となる口縁部で，口縁端に左下がりの二枚貝腹縁の押圧文がある。その下には横方向の２本沈線があるが，これは沈線のみである。その下には間に二枚貝

第384図　指宿式土器（228）Ⅳ類⑧



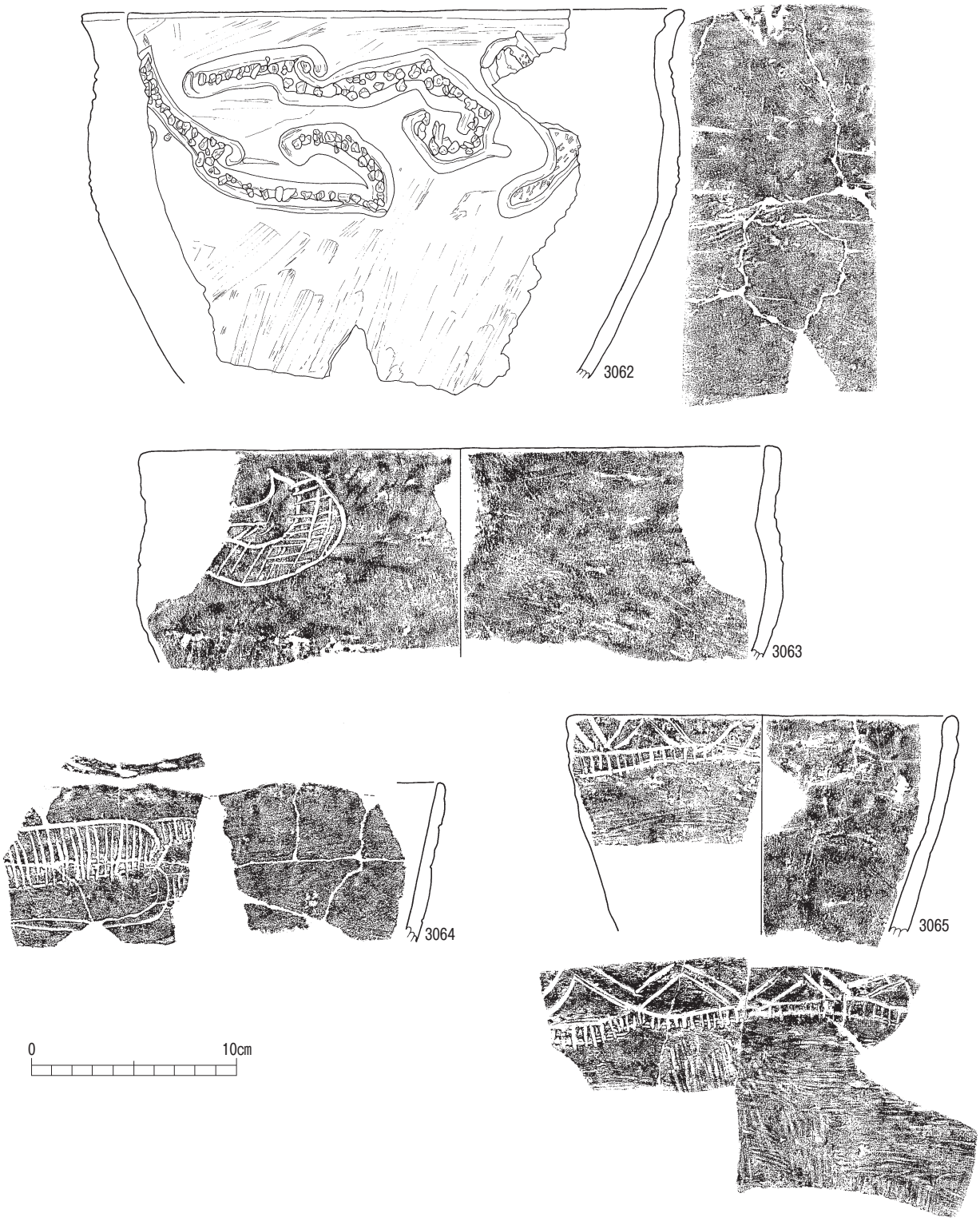
第385図　指宿式土器（229）Ⅳ類⑨

腹縁の押圧文がある２本沈線の曲線文様が描かれ，入組文などがあり，左側に補修孔がある。

3073は開きながらまっすぐ伸びる器形で，口縁端は断面が矩形となり，二枚貝腹縁の刺突文がある。外面には横・斜めなどの２本沈線で文様を描いており，沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。指宿地方産である。

3074と3075は外反する口縁である。

3074はやや外反する口縁で，口縁端には下から二枚貝腹縁を突き上げて刺突し，その下は丁寧な横方向のヘラナデからなる無文帯がある。その下に３本の幅広凹線が



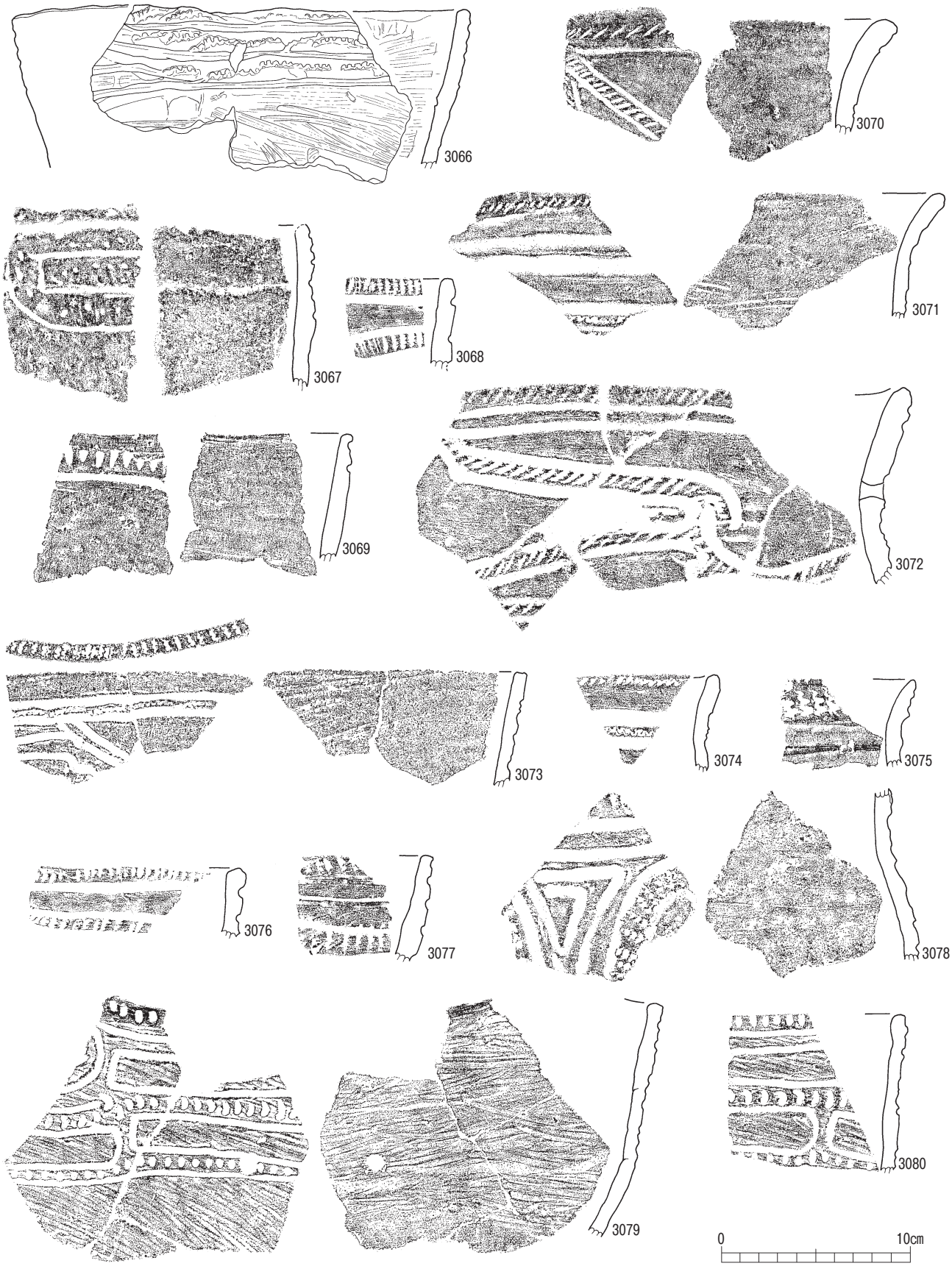
第386図　指宿式土器（230）Ⅳ類⑩

あり，上の凹線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3075も口縁端に二枚貝腹縁による刺突文があり，その下には幅広凹線が２本ある。口唇部にヘラ刻みがある。

3076は口縁端に巻貝の押引文があり，その下には３本の沈線がある。１段目の沈線間はヘラミガキが施され，その下の沈線間は巻貝の押引文が施されている。

3077は４本の細い横方向沈線が引かれ，口縁端には巻貝刺突文が並んでいる。沈線間は上の２段がヘラによる丁寧な横ナデで，下段は二枚貝腹縁の刺突文が縦方向に施されている。

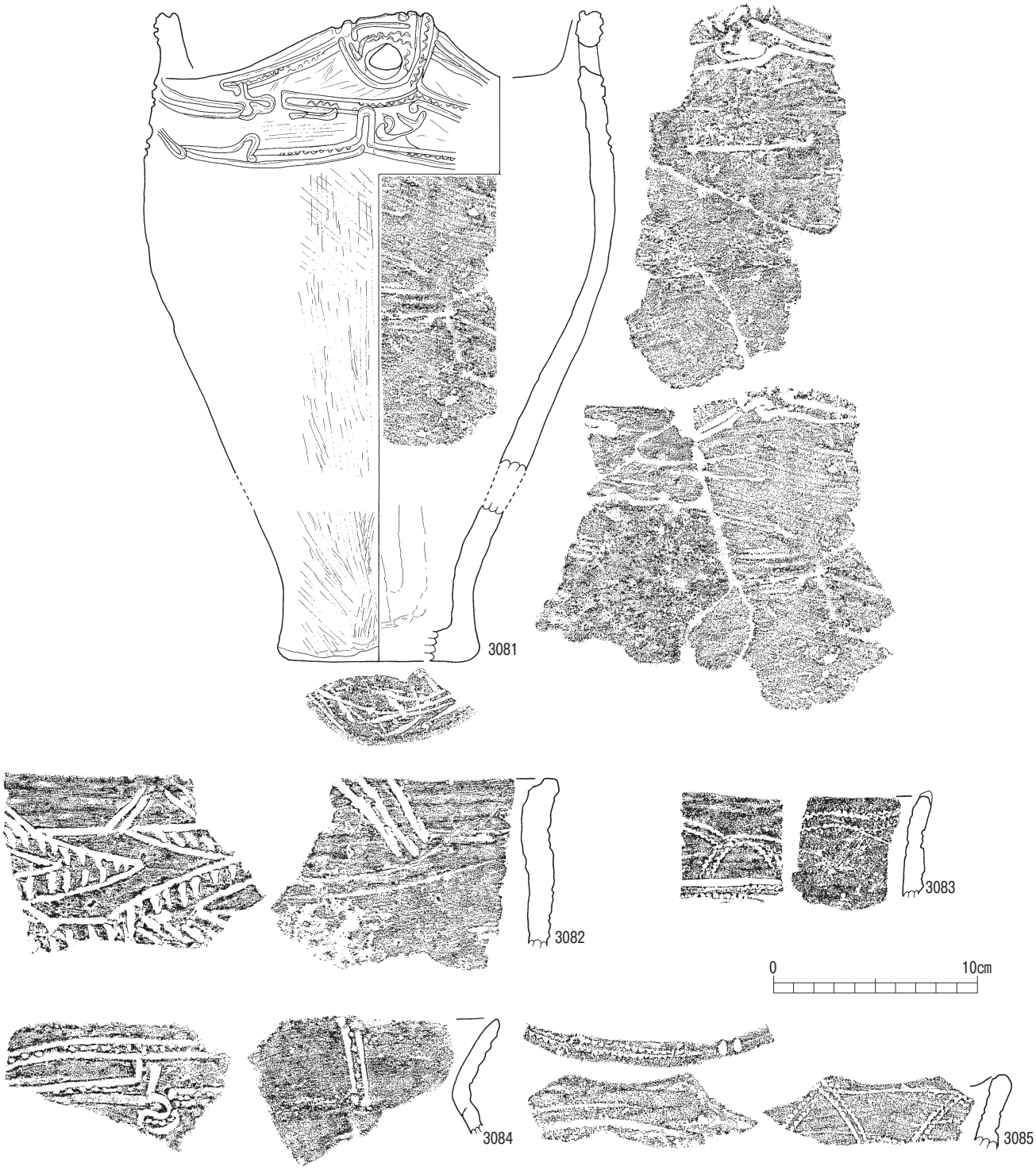


第387図　指宿式土器（231）Ⅳ類⑪

3078は頸部から肩部にかけての破片で，横方向や三角形・楕円形の沈線と，その間に二枚貝腹縁の刺突文が施されている。沈線間にはヘラで丁寧にナデて無文とした部分もある。

3079・3080は同一個体と思われる山形突起のある口縁部で，横方向・縦方向・曲線などの沈線で矩形・渦巻文などが描かれている。口縁近くと下に横線があり，その中に２段の矩形が描かれているが，突起部の下には渦巻文がある。口縁端や上下の矩形間，下の矩形と下の横線間には巻貝殻頂の刺突文が施されている。補修孔と思われる円孔が１か所に見られる。

3081は底部が接合できないが，同一個体である。４か



第388図　指宿式土器（232）Ⅳ類⑫

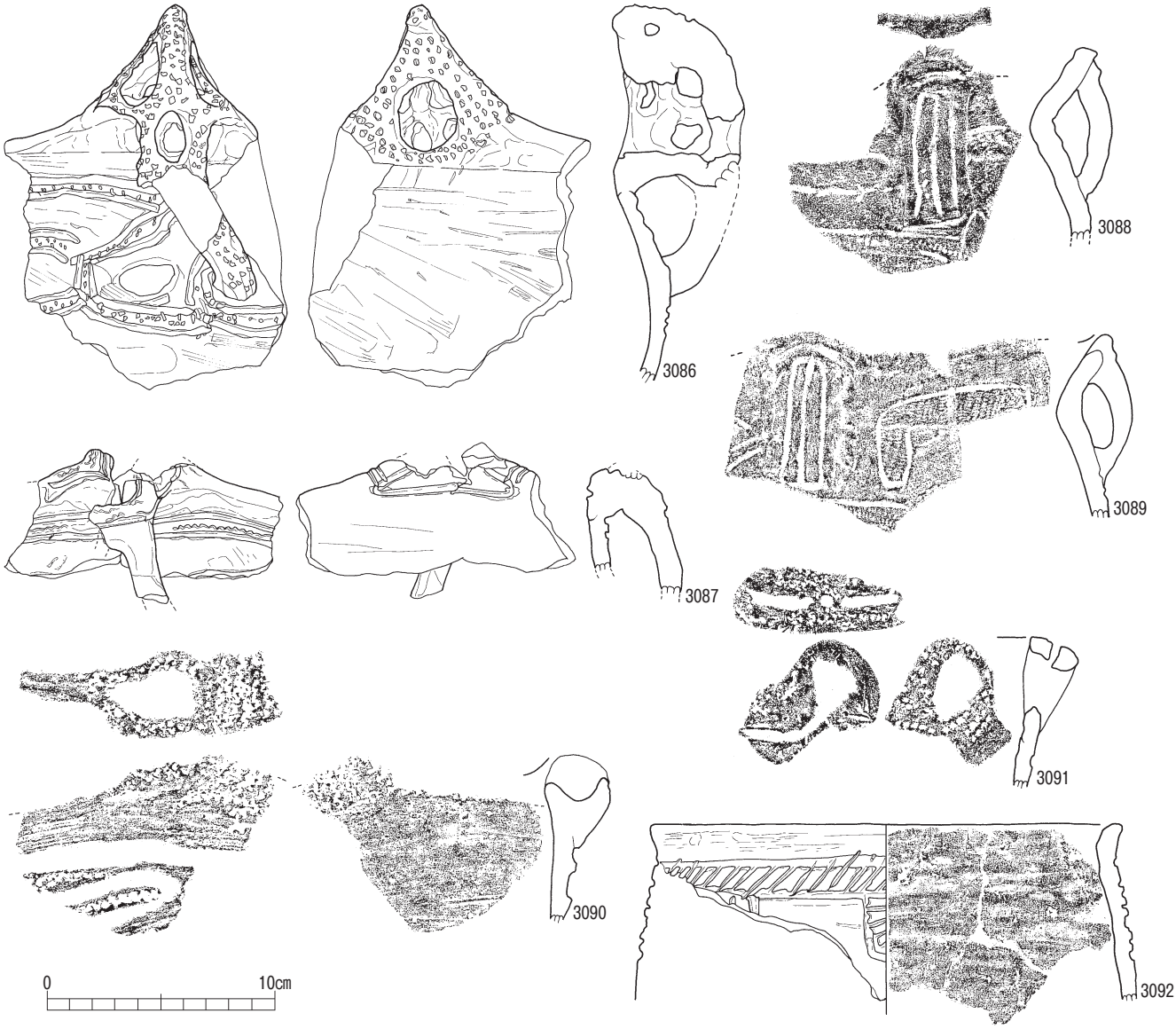
所に高い山形突起のある深鉢で，口径が22cm，底径が8.7cm，高さが32cmある。安定した平底から外へゆるやかに広がり，胴上半部からやや内反ぎみに立ち上がり，頸部から外反する器形をしている。外面は２本沈線で横や縦方向，Ｊ字状，Ｕ字状などの線が引かれ，２本沈線間には二枚貝腹縁の刺突文のある部分もある。入組文も多く見られ，矩形状を呈する部分もある。突起部は孔のある所とない所が向かいあわせに２か所ずつある。突起部は上にヘラ押圧文と沈線があり，透孔を巡るように沈線と二枚貝腹縁の刺突文が施されている。内面は口縁端近くに２本沈線がある。底部にはヘラ描き風のものが見られ，白粉が付いている。

3082・3083は口縁端近くが短く屈曲するものである。3082は外面に横や斜方向の２本直線で，三角形を主とした文様を描き，２本沈線の中には巻貝による刺突文がある。内面には右下がりの斜方向沈線があることから，ハの字状となるものと思われる。

3083の外面には，横方向沈線とその上下に二枚貝腹縁による半円・横線刺突文が見られる。内面にも２本の二枚貝押圧文が見られる。

3084は頸部で強く外反する長胴形の深鉢である。外面には口縁近くとその下に幅狭の横方向２本沈線があり，中央では渦巻文が下に下がっている。沈線内には小さな巻貝殻頂による刺突文がある。内面にも間に巻貝殻頂による小さな刺突状のある縦方向２本沈線がある。平口縁だが，４か所に同じような文様が施されているものと思われる。ピンクがかった色調や胎土などから指宿地方産のものと思われる。

3085は２か所に山形突起がある突起部で，口唇部には二枚貝腹縁と巻貝による刺突文がある。外面には摩滅し



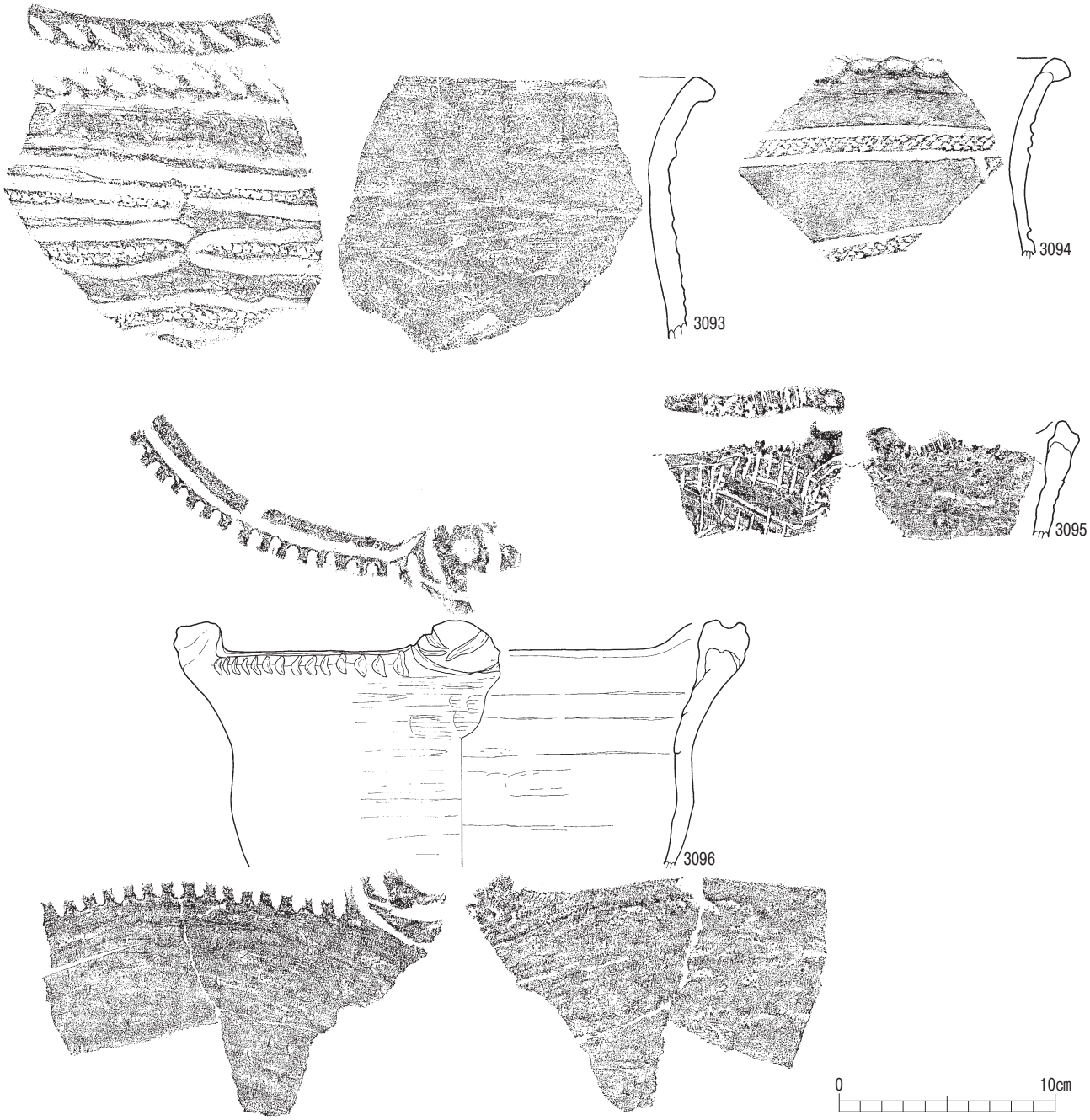
第389図　指宿式土器（233）Ⅳ類⑬

てはっきりしないが，横方向沈線と横方向に長い二枚貝腹縁による刺突文がある。内面には二枚貝腹縁刺突によって，上下に横方向，その間に三角形と逆台形が描かれている。

3086～3089は把手の付く突起部である。3086・3087は色調から指宿地方産と思われる。

3086は三角状に鋭く突出している突起部で，突起頂部から肩部にかけて棒状把手がかかっている。外面には間に巻貝刺突文のある２本沈線で楕円形が描かれ，その中央にも横方向の２本沈線がある。把手が付く２か所では２本沈線が把手を取り囲んでいる。把手は獣形を呈し，突起部から縦にくるが，口縁で両方に分かれ，肩部へは二叉となって分かれる。口縁へ分かれた部分の下へは透孔が設けられている。突起部にも１か所大きな円孔が穿たれており，把手の端近くにも直行して小さな透孔が設けられている。突起の内面から把手外面にかけては巻貝刺突文が密に施されている。

3087は突起頂部が欠けているが，棒状把手が突起部から肩部にかかっている。外面には間に二枚貝腹縁刺突のある２本沈線がある。把手は口縁部から肩部へかかって



第390図　指宿式土器（234）Ⅳ類⑭

いるが，肩部へは二叉となって分かれている。突起部は棒状の粘土紐でリング状となる。突起外面は沈線の両側に縦方向の二枚貝刺突文が２列あり，把手上側には，２本沈線間に二枚貝腹縁刺突文がある。突起部内面には三角形状の沈線と，その両脇に２本の縦沈線がある。

3088・3089は突起部に板上の把手が付くもので，同一個体である。把手外面には矩形沈線の中に縦沈線のある文様が描かれ，この中の一部には巻貝殻頂による刺突文もある。外面には２本沈線の楕円形，Ｌ字形などが描かれており，中にはヘナタリの転圧文が見られる。突起の口唇部にはヘラ刻みも見られる。

3090は粘土を貼り付けて分厚くした突起部破片で，突起頂部には窪みがあり，その内外面や周りには二枚貝刺突文が施されている。外面は太い横沈線と，楕円形沈線があり，沈線間には二枚貝刺突文がある。

3091は板状の粘土紐を貼り付けてリング状に作り突起部としたもので，突起頂部には中央に透孔とその両脇に横長透孔があり，周りや内面などに巻貝刺突文がある。外面には横方向沈線がある。ピンクがかった色調からして指宿地方産のものと思われる。

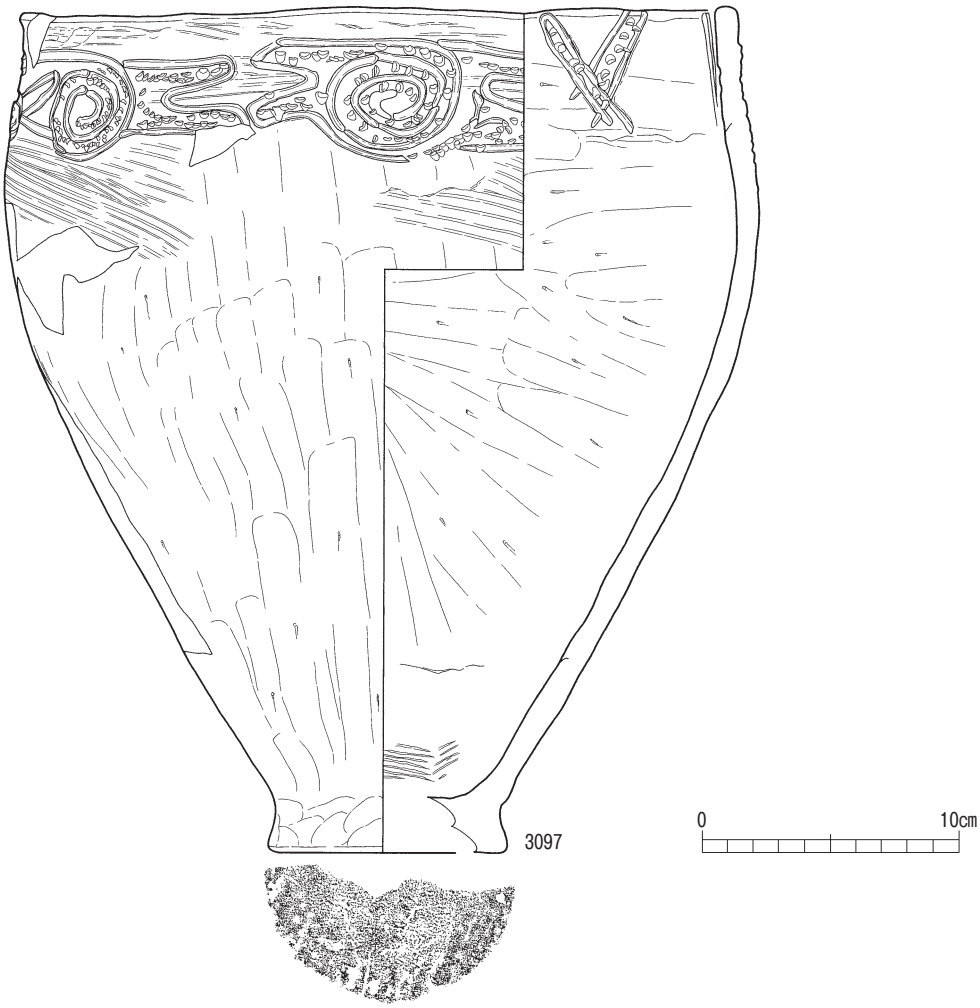
3092は口縁部が短く外反するもので，口径は21cmある。口縁端に無文帯があり，その下には幅広の２本沈線と，さらにそこから下へ長Ｌ字形に下がる沈線があり，中には斜方向のヘラ押圧文がある。

3093・3094は口縁端がＬ字状に曲がる外反する器形である。

3093は太めの沈線が横・楕円形・矩形に引かれ，２本沈線間には二枚貝殻頂による刺突文がある。口縁端にはヘラ押圧文が見られる。

3094は口縁下とさらにその下に横方向の２本沈線が引かれ，間には左下がりの二枚貝腹縁の刺突文がある。２本沈線間には間をおいて二枚貝腹縁刺突文が間にある斜方向の２本沈線がある。口縁端には突帯が貼り付けられ，その上に斜方向のヘラ押圧文が施されている。

3095は２段の突起のある口縁で，口唇部には細いヘラ刻みがある。外面には矩形の細沈線が２段，突起部で交差するように見られ，その間にはヘラによる縦や斜めの短沈線が施されている。



第391図　指宿式土器（235）Ⅳ類⑮

3096は４か所に団子状の突起がある口径26.6cmの深鉢である。口縁端にヘラ押圧文が刻まれ，口唇部には沈線が巡らされている。突起部は粘土貼り付けによって厚く作られ，頂部には浅い穴がある。周囲を２本沈線が巡っている。

3097は充実高台風の底から立ち上がり，胴部から内反しながら口縁へ至る平口縁の深鉢である。口径が26cm，底径が10cm，高さが33cmである。口縁近くに中央に時計回りの渦巻文を置き，両側がワニの口状となる文様が繰り返される。８つの繰り返しと思われる。内面には逆三角形が描かれている。いずれも２本沈線からなり，間に巻貝刺突文がある。

3098～3112は口縁下に無文帯があり，その下に横沈線のある文様である。

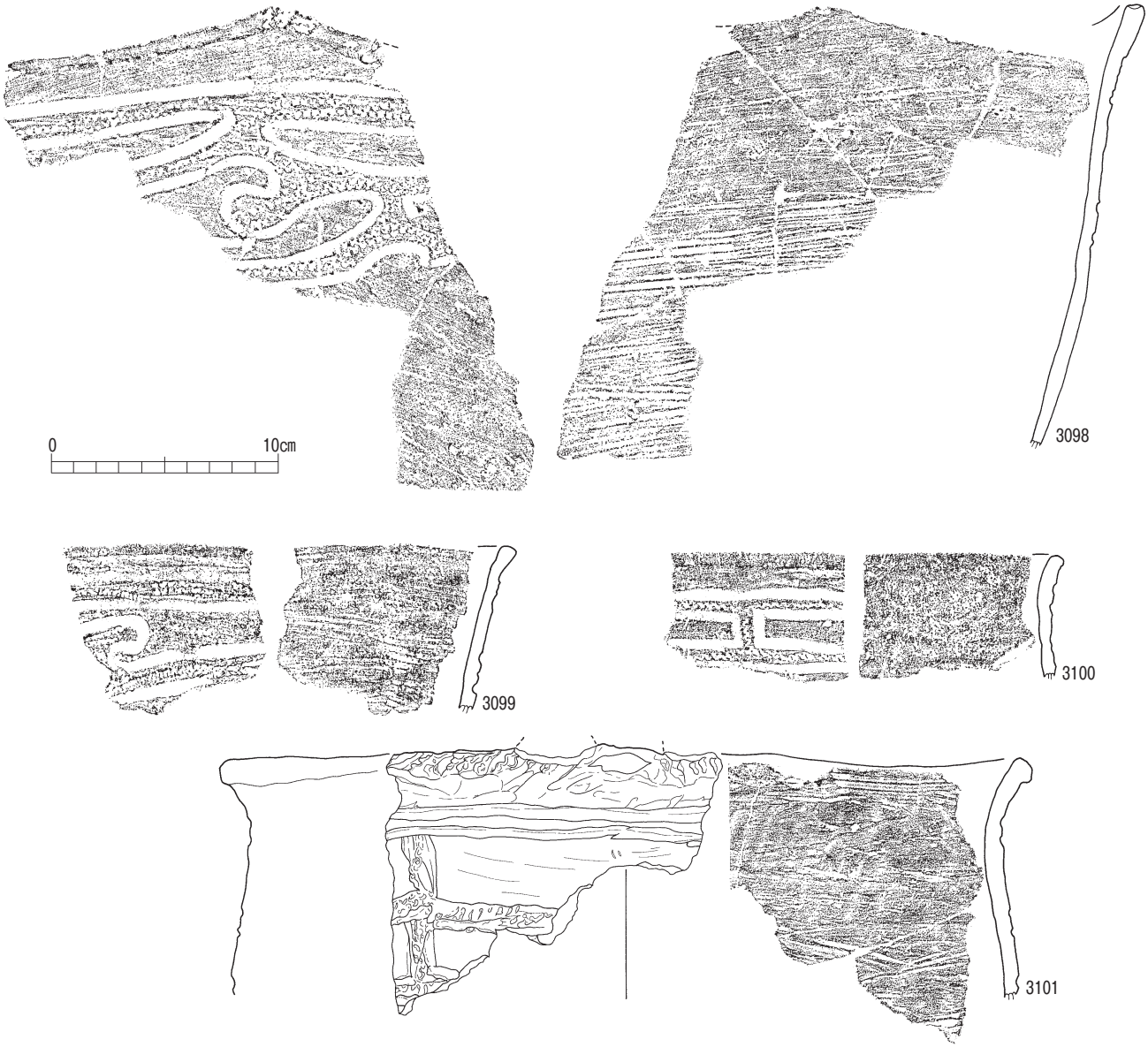
3098・3099は口縁へまっすぐ伸びる器形をし，薄い作りとなる。

3098は山形突起を有する口縁部で，突起部には３本の二枚貝腹縁の刺突文がある。外面の横線の下には楕円沈線があり，その下にはつづら折り状の曲線が描かれる。楕円と曲線文内はヘラナデで仕上げているが，その外の沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3099は上下の沈線間に長いＪ字文があり，端は入組文となる。その間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3100は上下に横沈線を引いたあと，中には矩形沈線が繰り返されている。矩形内はヘラナデで無文だが，沈線間は二枚貝腹縁の刺突文が施されている。

3101は低い突起部で，ここに３か所の把手剥脱痕のあることからリング状の突起が付くが，肩部へ延びる把手



第392図　指宿式土器（236）Ⅳ類⑯

があるものと思われる。口縁端は肥厚しており，ここに突起から左は左下がり，右は右下がりの二枚貝腹縁の刺突文が見られる。外面は２本沈線の下に２段の矩形沈線があり，矩形と矩形の間には二枚貝腹縁の刺突文が縦方向と横方向に見られる。

3102～3105はやや内反ぎみに立ち上がる器形をしている。

3102・3103は低い突起のある口径が26.8cmの深鉢である。細い２本沈線で上下に横線があり，間には沈線間に短いヘラ沈線のある直線で菱形が描かれている。同一個体と思われるが，3103の右下がり沈線は３本沈線になっている。

3104は太い２本沈線で，上と下に横線，中に縦方向の蛇行曲線が描かれ，上の２本沈線に比べ下の２本沈線は幅が広い。それぞれの沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3105は突起部と思われるが，突起部が剥離しており不明である。上下に２本沈線があり，間には縦方向の二枚貝刺突文が見られる。

3106～3109は外反する口縁である。

3106は横線の下に矩形が描かれ，間には二枚貝腹縁による縦方向刺突文がある。

3107は無文帯の下に浅い横方向の窪みがあり，その中に巻貝刺突文がある。その下には浅い楕円文が描かれている。

3108は突起部近くで，３本沈線があり，下の沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3109は波状となる口縁で，上下に横方向の２本沈線があるが，右端が下へ屈曲していることから，矩形を呈しているのかもしれない。沈線間には横方向の二枚貝腹縁の刺突文がある。

3110はまっすぐ開く器形で，沈線の下にはＺ字状・楕円状の沈線があり，間には左下がりや右下がりの二枚貝腹縁刺突文が見られる。

3111は細い沈線でＺ字・菱形・横線などが描かれ，沈線間には巻貝刺突文がある。口縁端は分厚く，でこぼこしている。

3112･3113は口縁端近くで外へくの字に屈曲している。

3112は口縁端に横方向の二枚貝腹縁の刺突文がある。その下は２本沈線の横方向,略三角形などの文様があり，入組文状の文様も見られる。２本沈線間には横方向の二枚貝腹縁の刺突文がある。

3113は中央に横線のある楕円文で，その間には巻貝刺突文がある。

3114は突起部近くの破片で，突起部の下には渦巻文があり，そこから横へ２本沈線が描かれる。沈線間には巻貝の刺突文がある。

3115は貝殻条痕で調整しているが，内面の屈曲部から外へは丁寧にナデている。上に横方向の３本沈線があり，その下も３本沈線で鋸歯状文様が描かれている。鋸歯状沈線の中は丁寧にナデている。沈線内にはヘラ刺突文がある。

3116はまっすぐ伸びる口縁で，２本沈線で文様が描かれている。口縁近くには幅狭の巻貝殻頂による２本横沈線があり，この間には左下がりの二枚貝刺突文がある。その下には幅狭の矩形と，二重の矩形が描かれている。

3117は突起部近くの破片で，外面には上に横沈線があり，その下には三角形や楕円形沈線があるが，その間には二枚貝腹縁の刺突文が複数見られる。内面には二枚貝腹縁による２本のＶ字刺突文がある。

3118～3122は外反する器形で，無文帯の下に横方向の２本沈線がある。

3118の口縁端はでこぼこしている。横線の下には時計回りの渦巻文がある。その下には細長い楕円状沈線が下から上がって，この２本沈線と上の横２本沈線の沈線間にはヘラ刺突文がある。

3119の横線内には竹管状の巻貝刺突文があり，その下には弧状の２本沈線がある。

3120は上の線が上へＬ字状に立ち上がり，その下には巻貝刺突文がある。その下には矩形沈線があるが，矩形の外横にはヘナタリの転圧文が見られる。

3121は横方向の２本沈線が２段にあり，この間には巻貝刺突文がある。

3122は横方向の２本沈線が３段あり，それぞれの間には竹管状の巻貝刺突文がある。

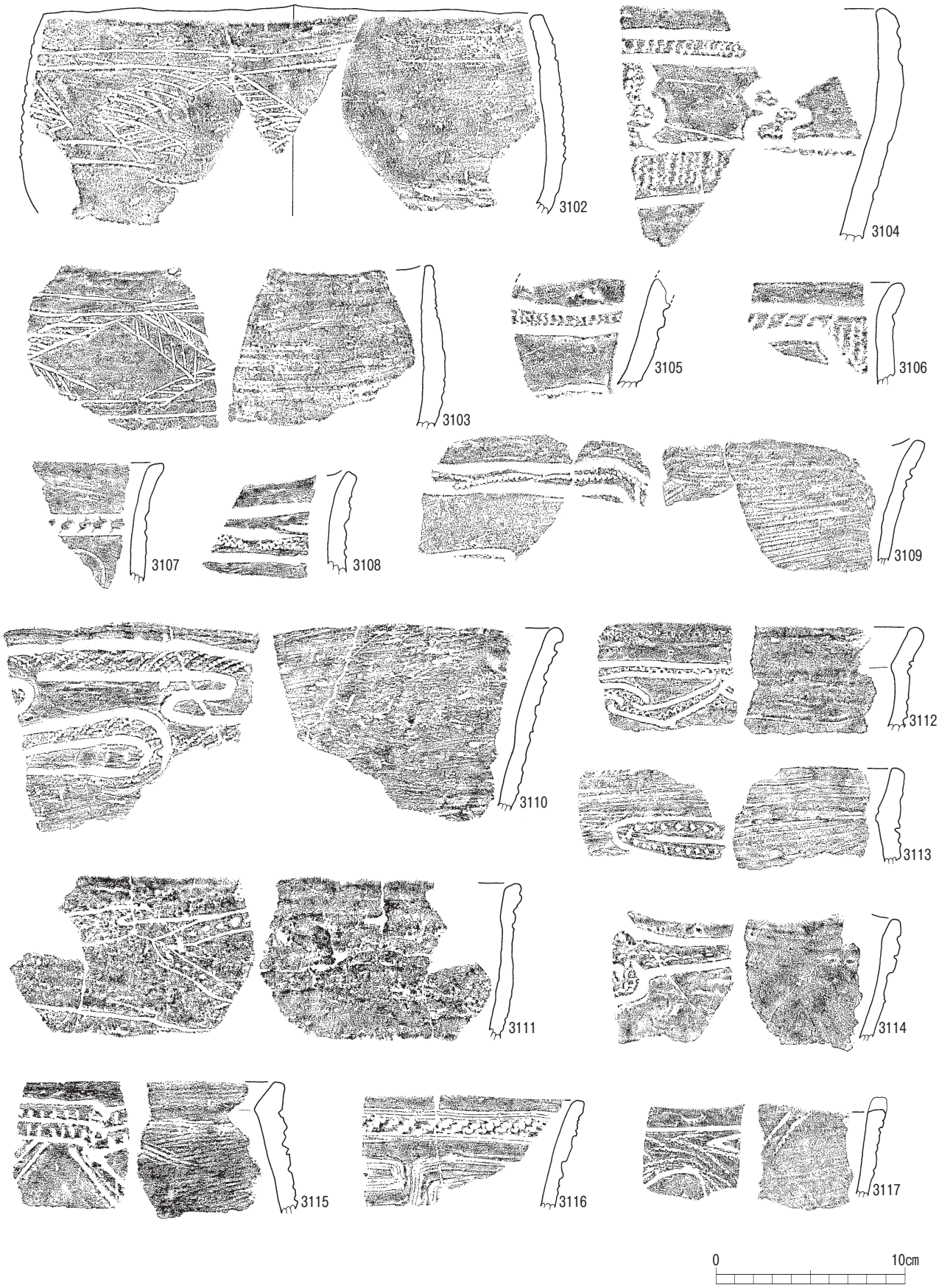
3123～3130はまっすぐ開きながら立ち上がる器形をしている。

3123は口縁部からハの字状に広がる２本沈線に左右からやや右下がりや左下がりとなる短い２本沈線がくっつき，下には横方向のＪ字文がくる三角形・菱形などの文様となるものである。２本沈線の間には巻貝殻頂の刺突文がある。

3124は無文帯の下に横方向の１本沈線があり，その下には逆三角形あるいは楕円状，さらにはＪ字状沈線があり，沈線間には二枚貝腹縁の刺突文が見られる。口唇部には巻貝刺突文が見られる。

3125～3129は無文帯の下に横方向の２本沈線があり，沈線間に巻貝殻頂による刺突文のあるものである。刺突文は3126・3128は１段で，他は２段である。3127は２本沈線の下にさらに１本の横方向沈線があり，3128は２本沈線が２段ある。3129は縦沈線も加わり，矩形を呈している。

3130の外面は間に巻貝刺突文のある斜方向の２本沈線を主体とする山形突起部である。外面は上に１本沈線と２段の２本沈線で逆三角形状を作り，その下には２本沈線がハの字状に広がり，菱形文を作っている。内面は３



第393図　指宿式土器（237）Ⅳ類⑰

第394図　指宿式土器（238）Ⅳ類⑱

本沈線が広いUの字となる。内面に粘土を貼り付け，分厚くしている。

3131～3139は外反する器形で，3131～3136は口縁端の下に無文帯を挟んで２本沈線がある。

3131は太い沈線で描かれる。２本沈線間には左下がりの二枚貝腹縁文があり，その下に４本の波状沈線が見られる。

3132は口径が25cmあり，口唇部は矩形となる。２本沈線の下は一筆描きで楕円状の矩形文ないしは靴形文を描いており，その下に途中で鉤状屈曲のある横沈線がある。２本沈線間には二枚貝腹縁による左下がりの刺突文がある。

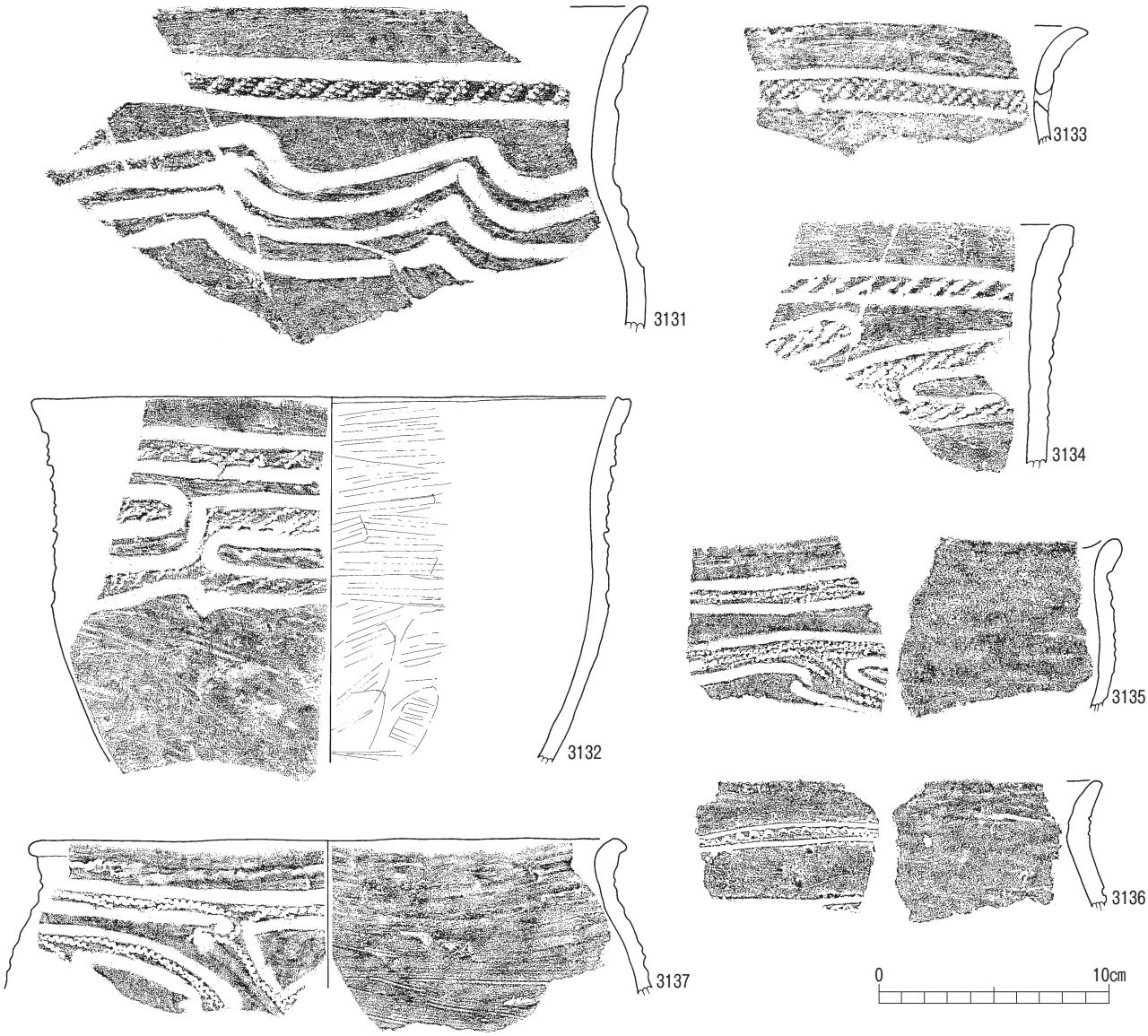
3133は右端近くで波状となるようで，分厚くなっている破片で，２本沈線の間に巻貝殻頂の転圧文がある。左側に外から内へ穿たれた補修孔がある。

3134は２本沈線間に二枚貝腹縁の刺突文があり，その下に左下がりの楕円文と２本沈線による楕円文とがある。２本沈線の楕円文の中央はヘラナデで仕上げたままの無文である。

3135は波状となる口縁部で，２本沈線の下にも幅広の２本沈線があるが，その間には楕円文や横線があり，沈線間には細かい二枚貝腹縁の刺突文がある。下の沈線は入組文となる。

3136は口縁端がでこぼこになるもので，２本沈線幅が狭く，間には二枚貝腹縁の刺突文がある。右端では横線が上下へ伸びており，下にも同じような２本沈線があることから，矩形になる可能性もある。

3137は端部がやや外へ広がるもので，口径は26.4cmある。間に二枚貝腹縁刺突文のあるもので，上の横線の下には三角文や弧状文などがあり，沈線端を押さえている。



第395図　指宿式土器（239）Ⅳ類⑲

3138はまっすぐ立ちあがっているが，口縁端近くでゆるやかに外反する器形で，口径は38cmである。間に二枚貝腹縁で横方向に刺突された２本沈線が，口縁近くで横方向に引かれ，その下では右巻き，左巻きの渦巻文として描かれている。地文は貝殻条痕である。

3139も口縁近くが外反する器形で，端部は矩形を呈している。口径は23cmあり，長楕円形やしっぽ状に伸びる２・３本沈線間に巻貝刺突文がある。

3140～3147はまっすぐ伸びる器形である。

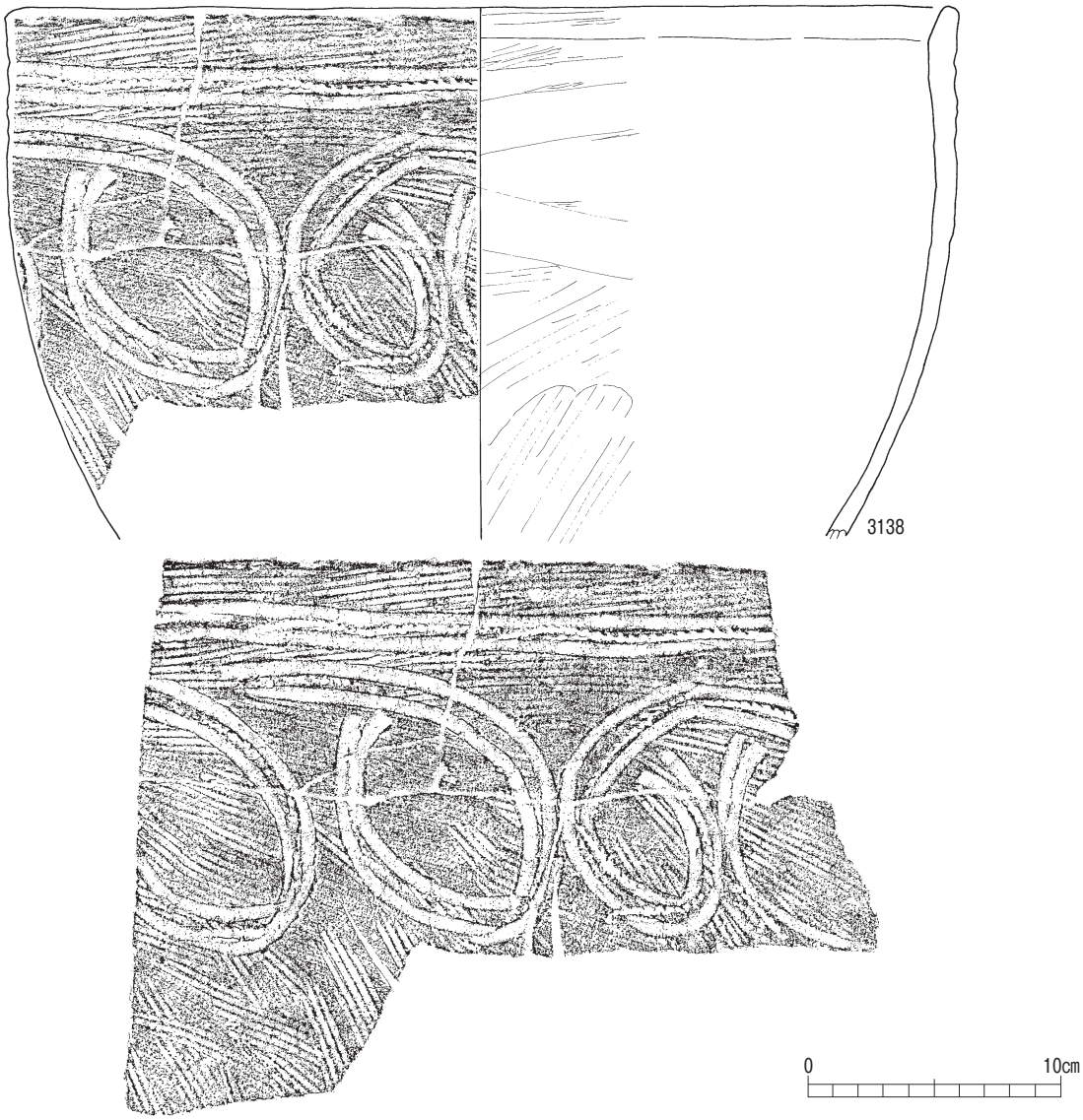
3140・3141は山形に立ち上がる三角突起が４か所にあり，突起内面には３つのヘラ押圧文が見られる。同一個体である。口径は20cmで，内外面とも貝殻条痕で調整されている。口縁端近くに，間に巻貝刺突文のある２本沈線がある。

3142は平口縁だが，やや分厚い，低い突起と思われる部分に３本のヘラ押圧文が見られる。横方向の３本沈線を引いたあと，二枚貝腹縁によって鋸歯状刺突文が施されている。突起部では無文帯にまで延びている。

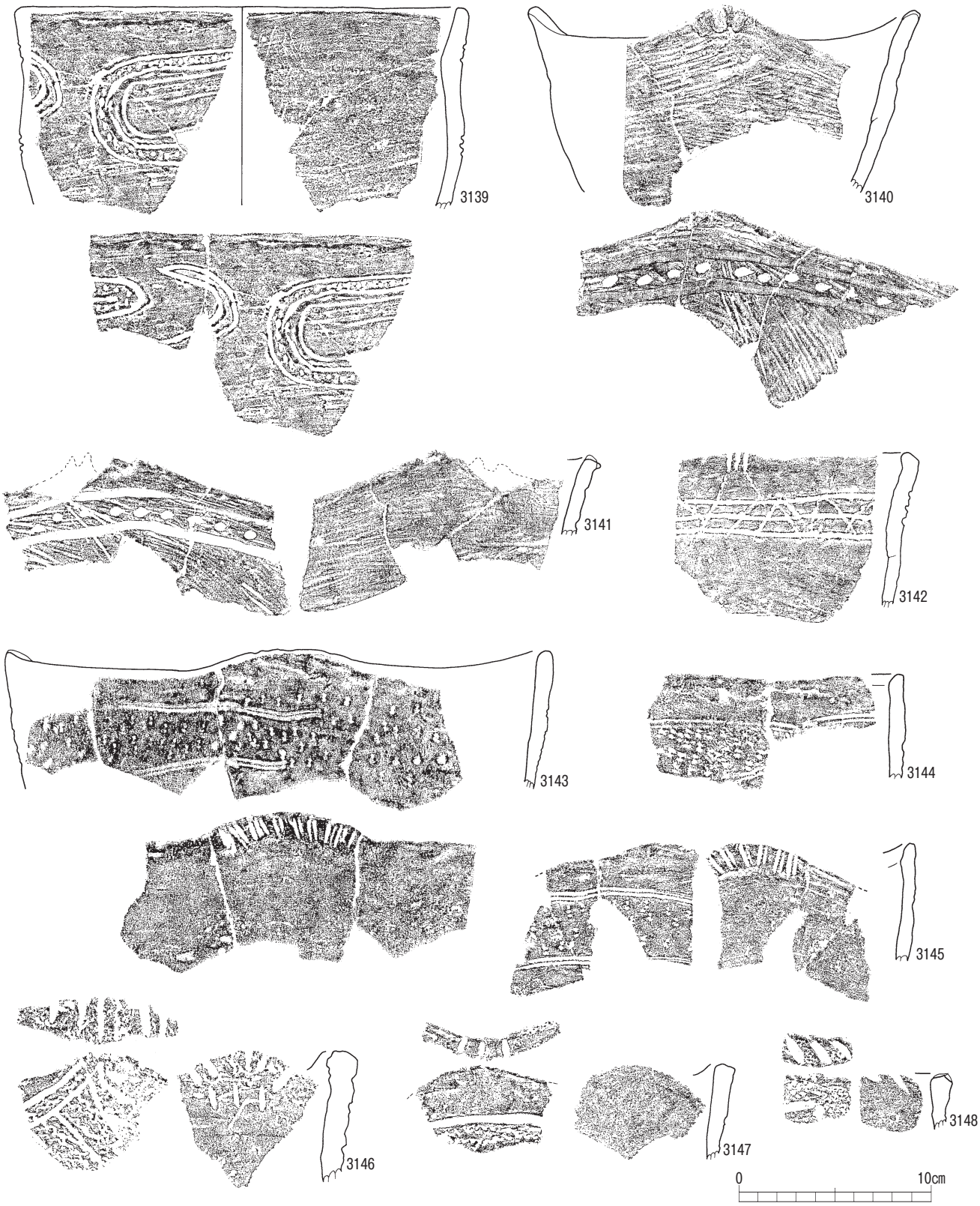
3143～3145は同一個体と思われる破片で，口径は28.8cmである。ゆるやかな山形突起が４か所にある軟質の深鉢で，２個一対となる小さな巻貝刺突文が口縁端近くに幅広く刺突されたあと，同じ施文具による２本沈線が引かれている。横線も２本に見える。突起内面には同じ施文具で縦の短沈線が引かれている。

3146は分厚くなった山形の突起部で，口唇部に６列以上の二枚貝腹縁の刺突文がある。外面には２本沈線で斜方向や口縁部と並行した横線が引かれ，その間には二枚貝腹縁の刺突文がある。内面には口唇部からの押圧文の下に，巻貝殻頂による３つの刺突文がある。

3147は波状となる口縁の突起部で，口唇部に３つのへ



第396図　指宿式土器（240）Ⅳ類⑳



第397図　指宿式土器（241）Ⅳ類㉑

ラ押圧文がある。口縁下部には間に二枚貝腹縁が横方向に刺突された２本沈線がある。

3148は外面から口唇部に二枚貝腹縁の刺突文がされたあと，口唇部にヘラ押圧文，外面に矩形沈線が見られる突起部である。

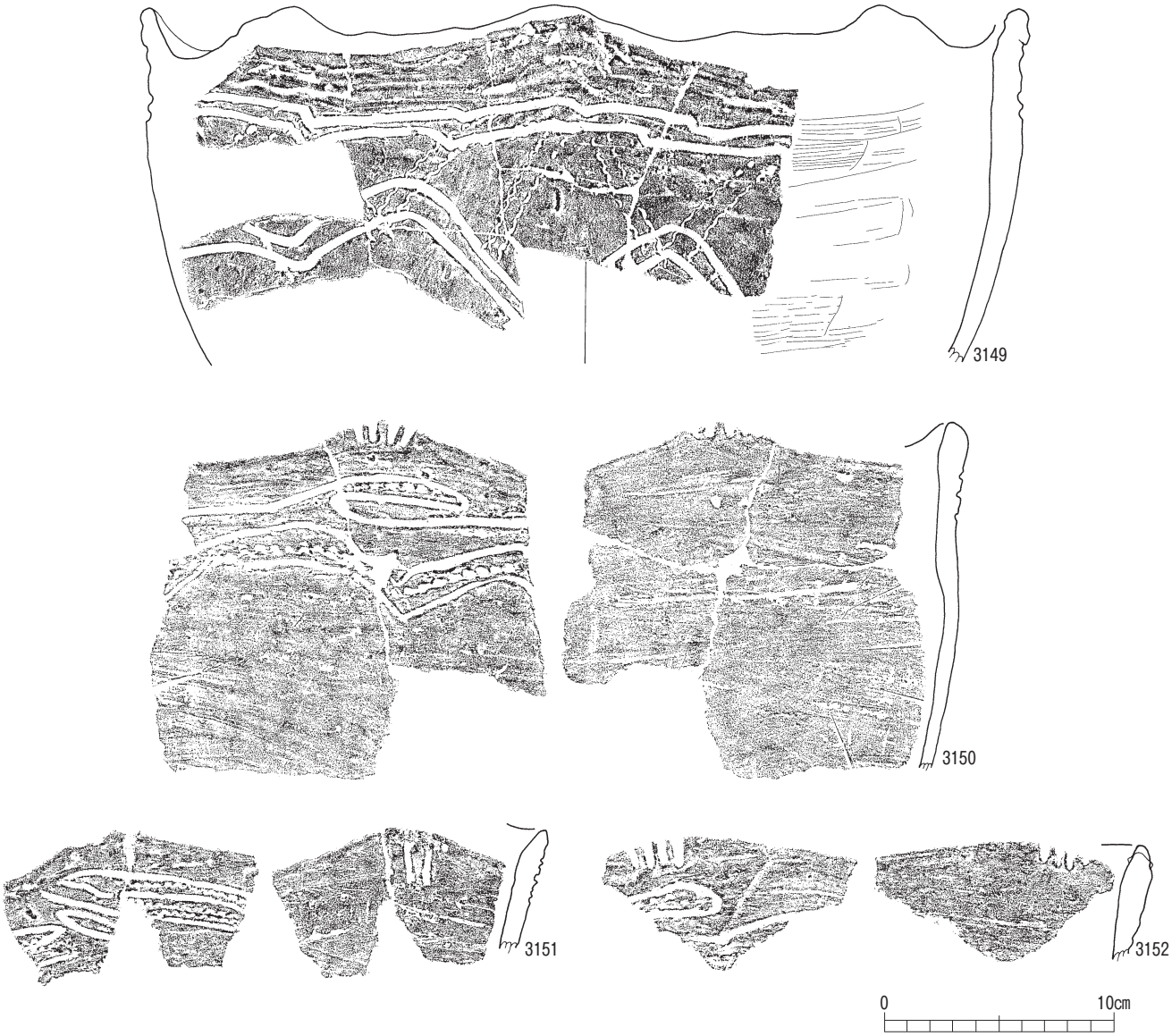
3149～3152は山形突起のある直立する口縁部で，突起部は分厚い作りとなっている。

3149は突起部が８か所にあり，口径が39cmの大型で，器面調整はヘラによってミガキに近い丁寧な横ナデで仕上げている。外面は二枚貝腹縁によって鋸歯状刺突文を施したあと，上方に途中で段をもつ２本沈線があり，その下に大振りの波状を呈する２本沈線がある。胎土に灰色や茶色を呈する８mm大の粗粒石が混ざっている。

3150は山形突起に４列のヘラ押圧文があるが，ここに赤色顔料らしきものが見える。外面の口縁近くにある横沈線は，突起部の下でＺ字状に曲がっている。この曲がっている部分には二枚貝腹縁による刺突文がある。その下には波状を呈する２本沈線があり，その間に二枚貝腹縁による刺突文がある。突起の下ではＶ字状に屈曲している。

3151は２本沈線の下に１本沈線のある文様で，２本沈線の端は楕円状に閉じられている。２本沈線の間や，下の１本沈線との間には二枚貝腹縁による刺突文が１・２本施されている。左側からも同じような文様が施されているが，突起の下で交差している下に楕円沈線がある。山形突起の内側には３本の縦方向短沈線がある。

3152は山形突起頂部に４本の外面から内面へ押される短沈線がある。外面には突起部下で屈曲するつづら折り状の２本沈線が引かれ，沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。



第398図　指宿式土器（242）Ⅳ類㉒

3153～3156は外反する器形である。

3153は突起のある口縁部で，口径が34cmある。突起部は粘土紐を３・４本貼り付けて山形としており，沈線文が施されている。口縁近くとその下に横方向の沈線があり，その間には短い沈線がある。口縁近くの横線は突起部で上へ立ち上がっている。最下の横線は途中で下へ入組文風に曲がっている。中央の横線は突起間で３本に分かれ，中央の１本はやや斜方向となった直線だが，突起部近くでは屈曲して内屈ぎみに曲がる。反対側の突起部近くはＺ字状となっている。突起部の下ではつづら折りに曲がって複雑な文様を呈する。沈線間には縦や横・斜めに二枚貝腹縁の刺突文が施されている。

3154は端がわずかに外反する器形で，口径は22.5cmである。突起部では３列のヘラ押圧文が頂部にあり，内面には三角状に二枚貝腹縁の刺突文がある。外面は鉤状に屈曲する２本沈線があり，間には二枚貝腹縁の刺突文があるが，沈線の外にはみ出すものもある。頂部近くでは縦方向の二枚貝刺突文が数列ある。

3155～3159はいずれも山形を呈する突起部である。

3155は頂部にヘラ押圧文があり，外面の口縁部には長楕円文があり，その中にはヘラ押圧文が施されている。

3156は突起部内面に２本の逆三角形沈線があり，その間に巻貝殻頂による刺突文が施される。外面には巻貝による横方向の沈線が施され，端部は刺突がされている。

3157は突起部内面に５か所の二枚貝腹縁による刺突文がある。外面の口縁端は無文帯で，その下に突起部へ向かって立ち上がる２本沈線があり，間やその下には二枚貝刺突文がある。さらに，その下に横方向の沈線がある。

3158の突起口唇部には巻貝押圧文が，その下に巻貝の３本沈線があり，下の沈線間には二枚貝刺突文がある。

3159は突起頂部に二枚貝腹縁の刺突文がある。外面は１本の横線の下に，２本沈線による蛇行曲線や横長の長楕円形があり，沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3160～3166は山形突起や橋状突起である。

3160は４か所に山形突起があり，口径が21.2cmと小型で，薄い作りである。口縁端は低い肥厚帯となる。外面は横方向や斜方向の沈線が施され，菱形・三角形を呈しているが，２本沈線の幅狭部分は丁寧にナデて，地文の貝殻条痕をすり消している。突起部に大きな孔と小さな円孔を，さらに上から３つの小円孔を穿っている。突起の周りには二枚貝腹縁の刺突文もある。

3161は棒状の粘土紐を貼り付けて突起を作っている。把手の周りには二枚貝腹縁の刺突文がある。外面には横方向の沈線がある。

3162は三角状の突起で，突起基部に大きな孔が，その上に２個（欠損部にもあと１個が想定できる）の小さな円孔がある。外面から内面まで巻貝殻頂による刺突文がある。外面には巻貝殻頂による２本沈線があり，その間に二枚貝腹縁の刺突文が２段ある。

3163の突起部は幅が厚く，台形状を呈している。中央に大きな透孔がある。突起頂部から外面にかけて沈線があり，その両側に巻貝殻頂による刺突文がある。外面は１本の横沈線があり，その下には矩形沈線もある。沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3164も台形状の分厚い突起で，頂部には浅い窪みがあり，その周りには巻貝殻頂による刺突文がある。突起外面には三角形状の透孔があり，その周りには２本の二枚貝腹縁による刺突文がある。この下には矩形沈線があり，その間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3165は低い山形の突起で，円形の透孔が設けられており，外面には二枚貝刺突文がある。突起の下には２本の横方向沈線がある。

3166は板状の橋状突起がある。頂部には同心円の２本沈線が，その下には２本の縦沈線が楕円形沈線の間にある。摩滅が目立って沈線以外の文様は不明である。

3167は２つの山形突起があり，突起の周りには二枚貝腹縁による刺突文がある。外面には上に二枚貝腹縁による左下がり刺突文を施したあと，横方向やつづら折り状の沈線が施されている。沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

3168～3174はまっすぐ伸びるか，やや内反する器形を呈している。

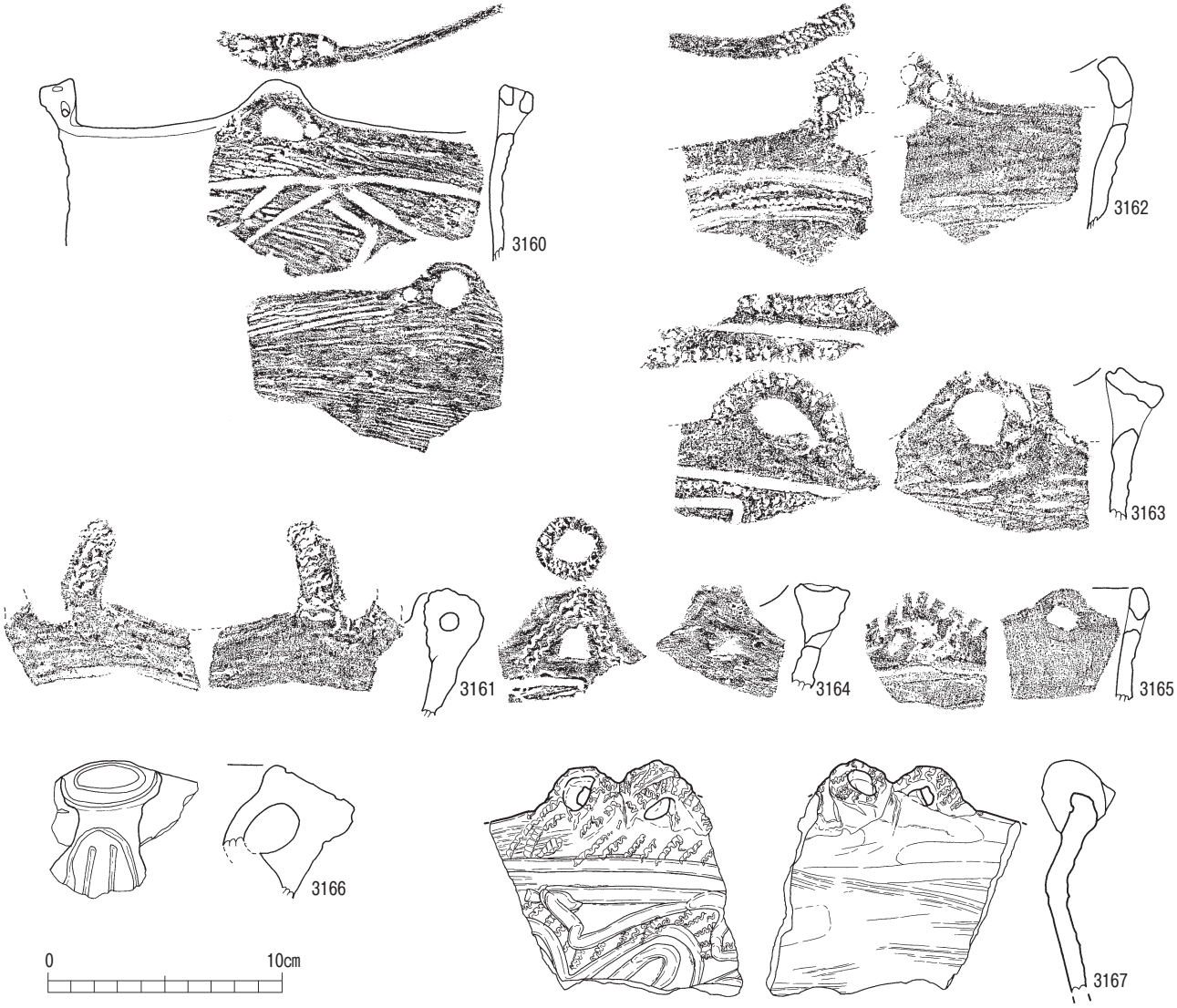
3168は４か所に山形突起があり，突起の内面には二枚貝腹縁による刺突文が逆三角形に８本ほど施されている。口径は21.2cm，底径は６cm，高さは23.3cmである。口縁部の外面には上に入組文で短い横やＪ字状沈線をつなぐ２本沈線があり，下に２本沈線がある。その間には右下がりの３本沈線があり，菱形文を作っている。沈線間には二枚貝刺突文が横や縦方向に施される。底部は７か所の穿孔がある脚台で，底は丁寧なヘラナデで仕上げている。

3169は２本の粘土紐をねじり貼り付けた山形突起で，外面には曲線状のＺ字沈線があり，その下には二枚貝腹縁の弧状となる刺突文がある。内面には突起部に縦３本，その脇に斜状の二枚貝腹縁刺突文が２本施されている。

3170は３か所に山形突起のあるもので，口径は23.6cmある。突起部は三角形の透孔があり，外面は二枚貝腹縁の２本刺突文が三角形に施され，その外には端が入組文となる沈線がある。内面にも同じような三角形がある。外面は上に結合部が入組文となる並行２本沈線があり，その下には二枚貝腹縁による２本の鋸歯文がある。内面の口縁近くには二枚貝刺突文が横方向に２本施されている。

3171は3170とよく似た文様をしており，同一個体の可能性もある。

第399図　指宿式土器（243）Ⅳ類㉓



第400図　指宿式土器（244）Ⅳ類㉔

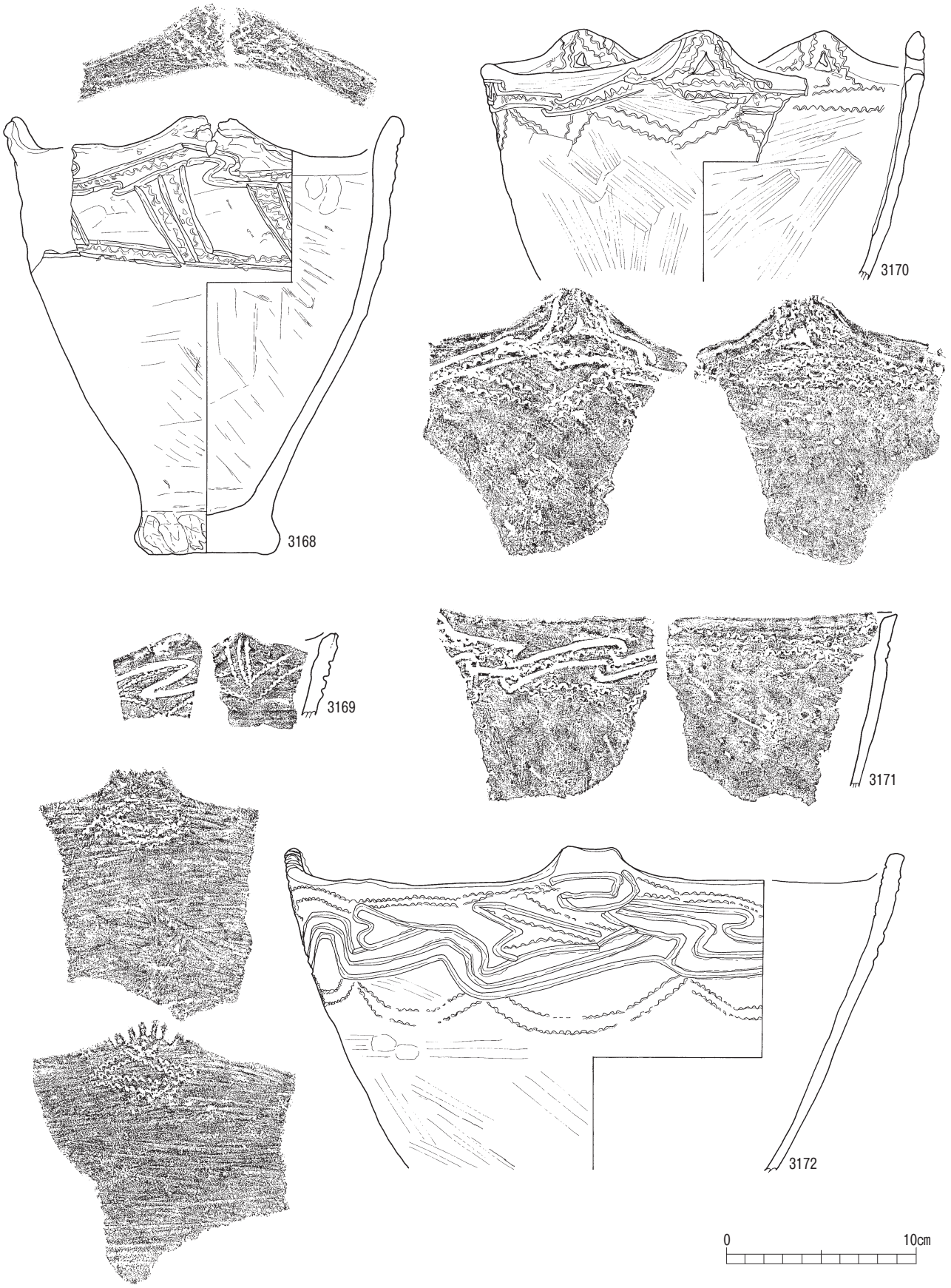
3172は山形突起が４か所にあり，口径は33cmある。突起部は向かいあう２か所ずつで文様が異なる。一組は頂部に７列あるいは８列のヘラ刻みがあり，外は２本半円沈線がある。他の一組は上に穴のある火口形を呈し，下には己字の沈線がある。内面はともに２本の二枚貝腹縁による菱形刺突文である。外面は二枚貝腹縁と沈線で弧状・波状・ハート形など複雑な文様を描いている。

3173は口径が40cmある大型で，両端が高くなる台形状の突起が４か所にある。外面文様は口縁部に集約している。横方向の２本沈線の間に巻貝殻頂の刺突文があり，突起部付近では逆三角形の沈線が下に突き出る。三角形の中にはＪ字文や横Ｖ字文も見られる。突起によってはＸ印の施される所もある。刺突文には大きなものと小さなものとがある。口唇部にはヘラ刻みが施される。

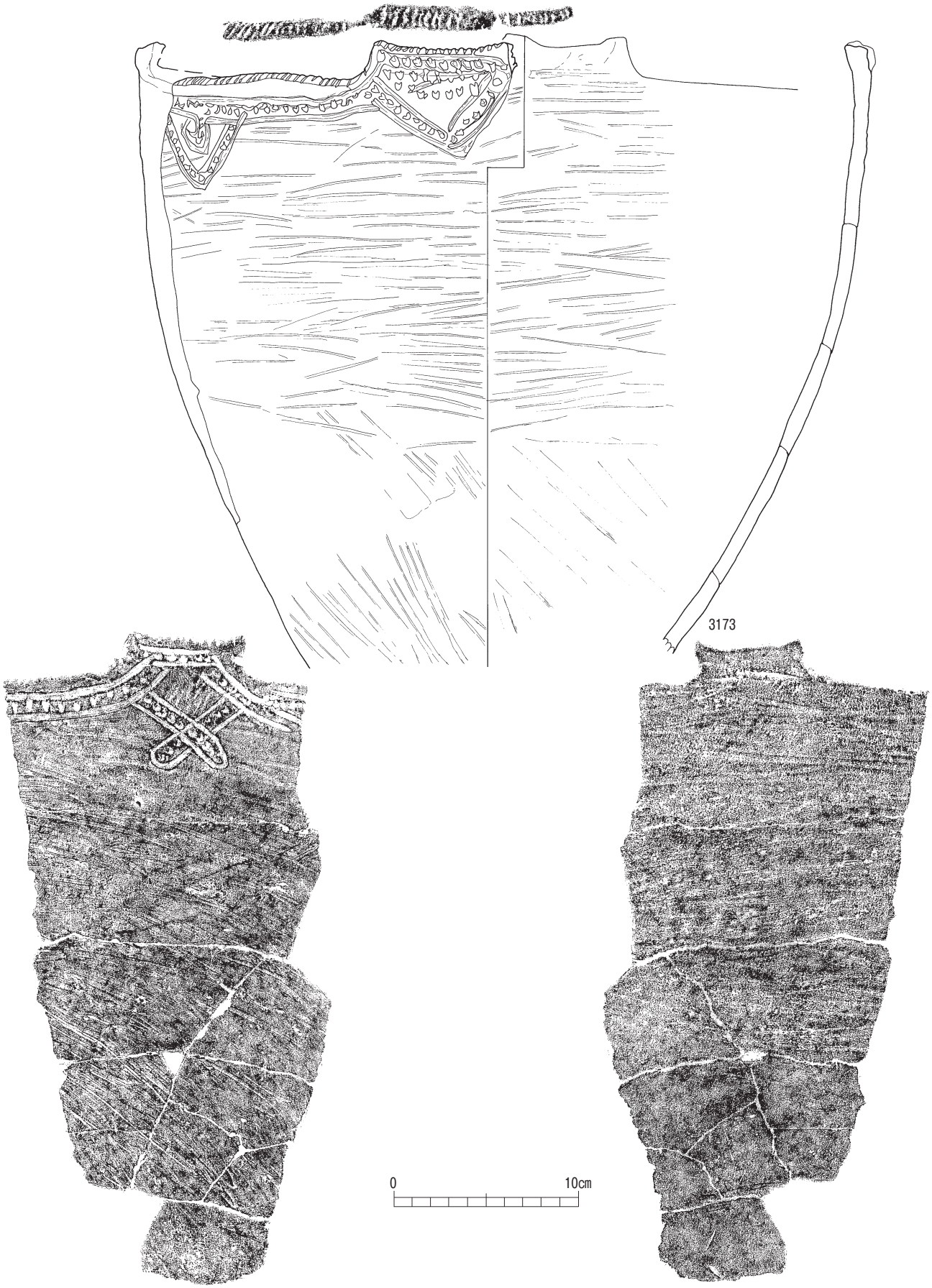
3174は口径が20.2cmあり，口縁端の一部が欠けているため詳細は不明だが，２か所に突起があるものと思われる。間に二枚貝腹縁刺突文のある２本沈線で文様が構成されている。上に横線があり，その下に縦・斜め・横・曲線などで三角形・楕円形などの文様が描かれている。

3175・3176はゆるやかに外反する薄手のもので，3175はやや幅広の直･曲線間に二枚貝腹縁の押圧文が施され，つづら折り状の文様となる。3176は間に２段以上の巻貝刺突文がある横方向の２本沈線が２段にある。

3177は口縁端近くが分厚く，やや外反する口縁で，外



第401図　指宿式土器（245）Ⅳ類㉕



第402図　指宿式土器（246）Ⅳ類㉖

面は沈線間に巻貝殻頂の刺突文がある２本沈線が横方向と斜方向に施され，横線に挟まれた鋸歯文を描いている。

3178は口縁部を欠いているが，横線の下に間に巻貝刺突文のある２本沈線からなる渦巻文などの沈線が描かれている。

3179・3180は２本沈線の下が三角形に下ってダイヤ形を呈する文様で，沈線間には二枚貝腹縁の刺突文がある。

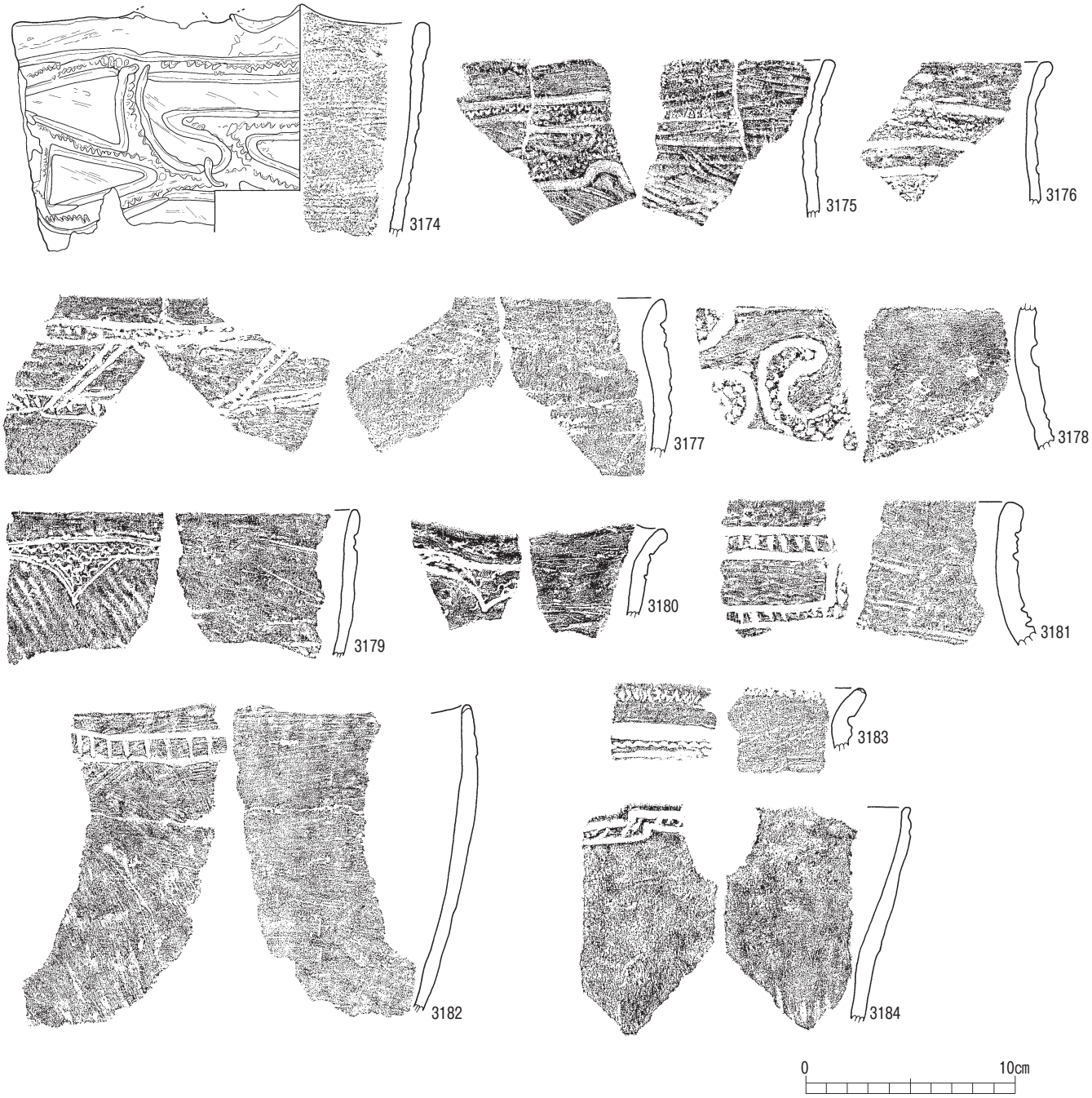
3181･3182は間に巻貝刺突文のある２本沈線からなる。

3181は外反する器形で，山形突起のつけ根の可能性がある。外面は巻貝刺突文のある２本沈線で矩形を呈する。

3182は内反する波状口縁で，内面はヘラによる丁寧な横ナデだが，外面は斜め方向の繊維状ハケナデで調整している。外面の上部には間にヘラ刺突文のある横方向の２本沈線のある単純な文様である。

3183は強く外反する分厚い口縁部で，口唇部に竹管状の巻貝刺突文があり，幅広の横方向凹線間には横方向に二枚貝腹縁の刺突文がある。

3184は口縁端が矩形に立ちあがった突起部で，ここで幅狭の２本沈線は鉤手状に上へ立ち上がっている。胴部に比べて，口縁部が細くなっている。



第403図　指宿式土器（247）Ⅳ類㉗

イ　鉢（第404図～第417図 3185～3265）

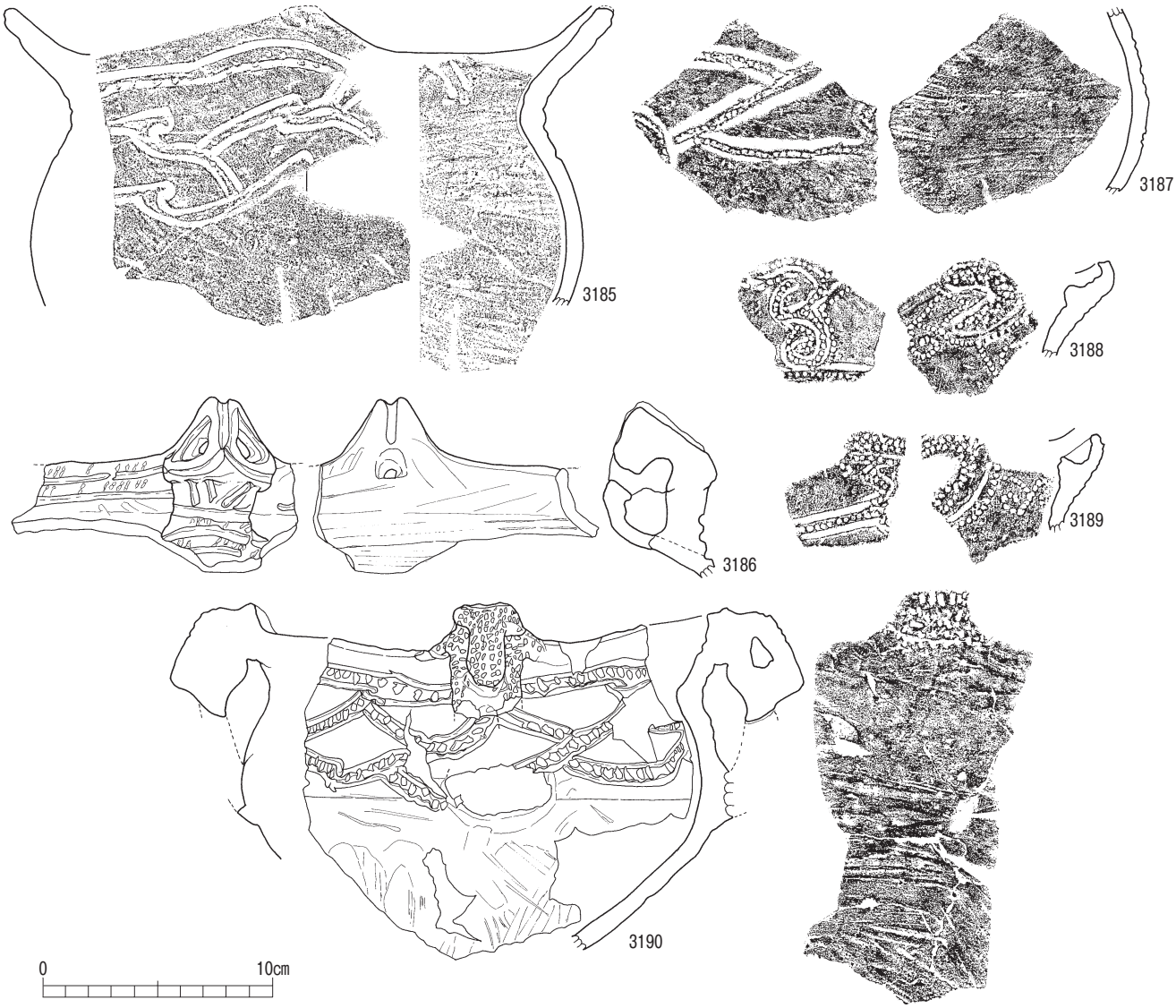
口縁部が外反するもの，まっすぐ伸びるもの，内反ぎみに至るものなど多様である。

3185はくびれた頸部から強く外反する器形をし，４か所に山形の突起がある。突起の先端は欠けているが，突起部での口径は27cmある。ヘラによる粗い横ナデ調整で仕上げている。外面には２本沈線を主体とした波状の曲線が引かれ，沈線間には巻貝の刺突文がある。沈線の交わり部分はＪ字文によって入組文が描かれている。口縁近くの沈線は下の沈線内にも一部に巻貝刺突がある。色調・胎土などから指宿地方産と思われる。

3186は胴部から内反しながら，口縁端近くで外反する器形で，口縁端は三角形状を呈している。外面には口縁と並行する２本沈線があり，２本沈線間と，口縁端の間にヘナタリによって転圧文が施されている。頂部には口縁部と肩部をつなぐ両眼を表現するような板状の把手が貼り付けられている。把手の下半部は逆ハの字状の２本ずつの短沈線があり，その下に３本沈線と，沈線間にヘナタリの転圧文が見られる。把手上部から内面にかけて沈線があり，その下には直径１cmほどの孔が穿たれている。

3187は胴部で，内面は貝殻条痕のあと横方向のヘラナデが施されている。外面には２本沈線によって直線・曲線が引かれ，２本沈線間には巻貝による細かい刺突文がある。２本沈線によって三角形あるいは菱形，渦巻文あるいは楕円文が描かれている。下方にはススが付着している。

3188・3189は同一個体の可能性がある突起部の破片である。外へ反る器形をしており，貼付突帯で内面に肥厚した半楕円形の突起部となる。内外面ともヘラ横ナデ調



第404図　指宿式土器（248）Ⅳ類㉘

整だが，外面はヘラミガキに近い。

3188の外面は巻貝殻頂による２本沈線によって端がＪ字状となる渦巻文を呈し，Ｓ字文のようにも見える。沈線の外にも巻貝刺突文がある。内面は巻貝刺突文によって菱形・渦巻文・三角文などが描かれている。

3189の外面は斜方向の２本沈線で菱形が描かれ，沈線間には巻貝刺突文がある。この上には巻貝刺突文が口縁を巻くように施されている。内面は穴をまわるように刺突文が楕円状に施され，その外側に沈線と巻貝刺突文が囲んでいる。この脇は鋸歯状に刺突文が施されている。

3190は４か所に橋状突起のある口径が18cmほどの鉢だが，突起部では口径が28cmにもなる。内外面とも丁寧にヘラミガキが施されており，２本沈線とその間の巻貝刺突文で文様が構成されている。口縁部と並行して横線があり，その下に２段の鋸歯文がある。これによって逆三角形と菱形となる。把手は下半部が欠けているが，上部にはさらに橋状把手が二重となり，外面には巻貝刺突文が一面に施されている。この刺突文は突起内面にまで及んでいる。

3191は肩が張って外反する器形をし，２か所に橋状把手のあるものである。外面は２本沈線と，その間に巻貝刺突のある文様で構成される。把手間は中央に三角形と円文があり，その両脇は時計回りと逆時計回りの向かい合わせの渦巻文からなる。把手を挟んでは外向きとなる。口縁端にも巻貝刺突文が巡っており，把手の周りにも刺突文が施されている。把手は上に深い穴のある筒状のものがあり，さらに右側にも棒状の剥離痕があるが，肩部に剥離痕のないことから棒状突起は途中で止まっているものと思われる。

3192・3193も板状の橋状把手のある破片である。

3192は外反する器形を呈し，内外面ともヘラによる横ナデ調整だが，内面の一部はケズリに近い。外面は巻貝刺突文が中に見られる細い２本沈線で菱形文を描いている。把手の部分は細沈線で，上に矩形，下に円形を描き，矩形の周りと頂部には巻貝刺突文が施される。把手の内面には細沈線による２本の楕円文が描かれ，沈線間には巻貝刺突文が，楕円の中央には深い不整楕円の窪みが穿たれている。焼成度は良好だが，外面は部分的に剥脱が見られる。

3193は内反しながら口縁端近くで強く外反する器形をしており，内外面ともヘラによる横ナデで調整されている。外面は沈線間に巻貝刺突のある２本沈線による２段の三角形・逆三角形が繰り返されている。把手は２段となり，上半は２段の把手となり，下半には矩形の透しがある。上端部は浅い凹みになっている。把手外面から口縁よりとび出した部分の内面にかけて巻貝殻頂による刺突文が規則正しく並んでいる。

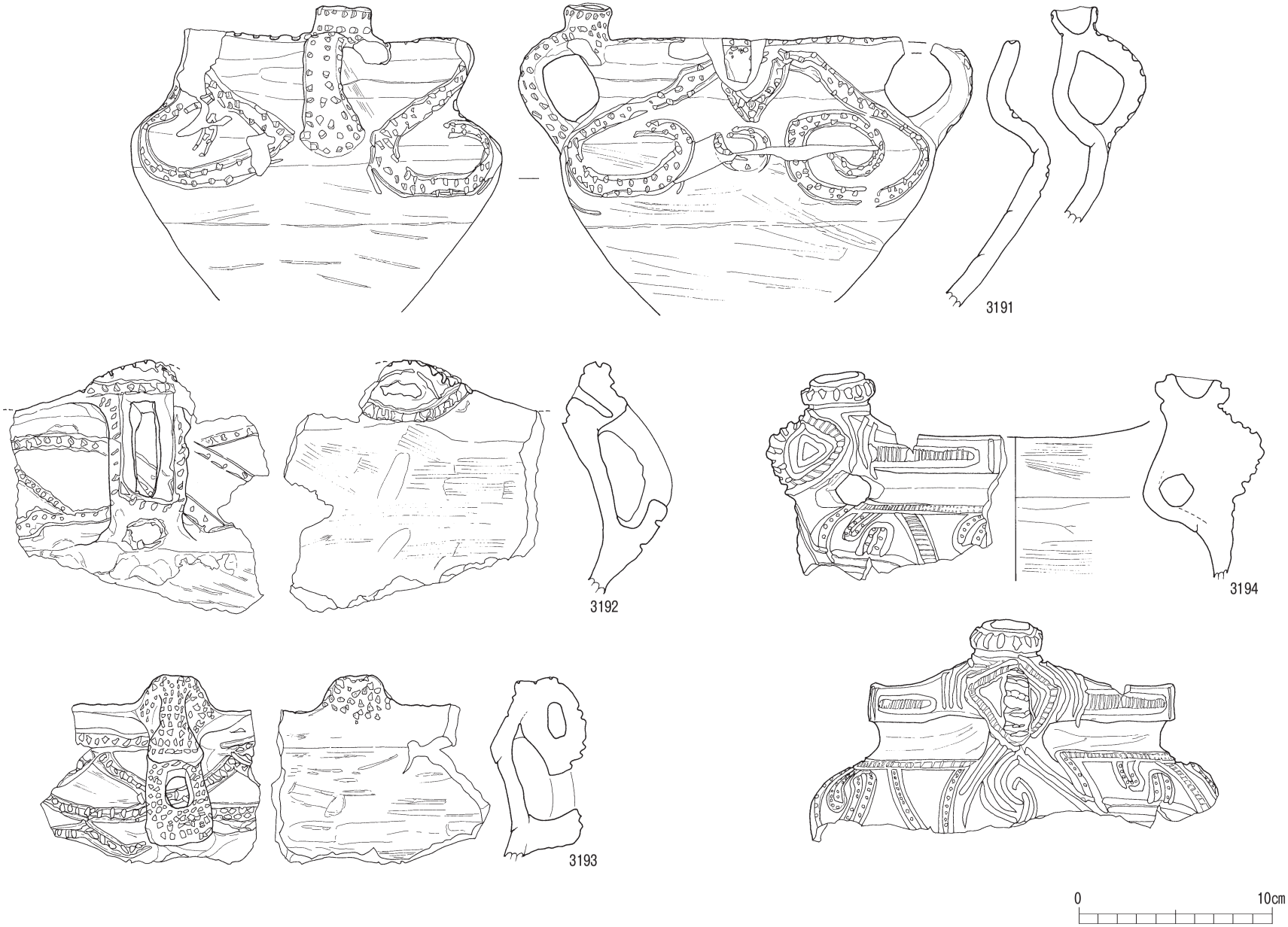
3194は口径が15.8cmで，口縁部の外反する器形を呈し，２か所に把手突起のあるものである。内外面とも横方向のヘラナデで調整している。外面の肩部には中央に巻貝殻頂による刺突文や刻みのある２本沈線や，沈線だけで渦巻文・入組文・三角文などが描かれている。口縁部はやや肥厚して縁帯文状となっており，把手と把手の間は長楕円状沈線で，中はヘラによる刻み文がある。この中間部では楕円形が途切れ，縦方向の数本の短絡線が引かれている。把手部分は上半に菱形の中にヘラ押圧文のある２本沈線があり，その中央に縦方向に，ヘラ刻みのある矩形の突帯がある。両側に中央を囲む三日月形の沈線が３本ずつある。その下部にはヘラ沈線だけのハの字形が渦巻文を囲んでいる。その上には中央が深く窪んだ王冠状の突起があり，周りを２本の沈線が巡り，その間には巻貝押圧文がある。角閃石や白雲母・長石・石英とともに白色・黄白色・茶色をした石を含んだ土を用いており，中には６㎜大の大きなものもある。

3195は４か所に山形突起のあるもので，２か所の突起は突起の上をヘラで押して平たくしているが，あとの２か所は欠損しており，はっきりしない。外面は３本沈線を主とした文様がある。沈線間にはヘナタリの回転押圧文が施されている。横・縦・円・Ｊ字などの沈線で横長の矩形を主とした文様が描かれている。突起のやや右下には円形と，下に垂れる半楕円形の文様が描かれ，ここでは，両側の３本沈線が途切れている。あと１か所の突起部のやや右下では渦巻文となっている。貝殻条痕で調整しており，内面は広い範囲に条痕がそのままに残っているが，外面，特に上半部はヘラで丁寧にナデている。底部はヘラナデ調整だが，でこぼこしている。口径が23.7cm，底径が10.6cm，高さは21.8cmである。５㎜大の茶色・白色・灰色などの細礫を多く含む砂質土を用いている。

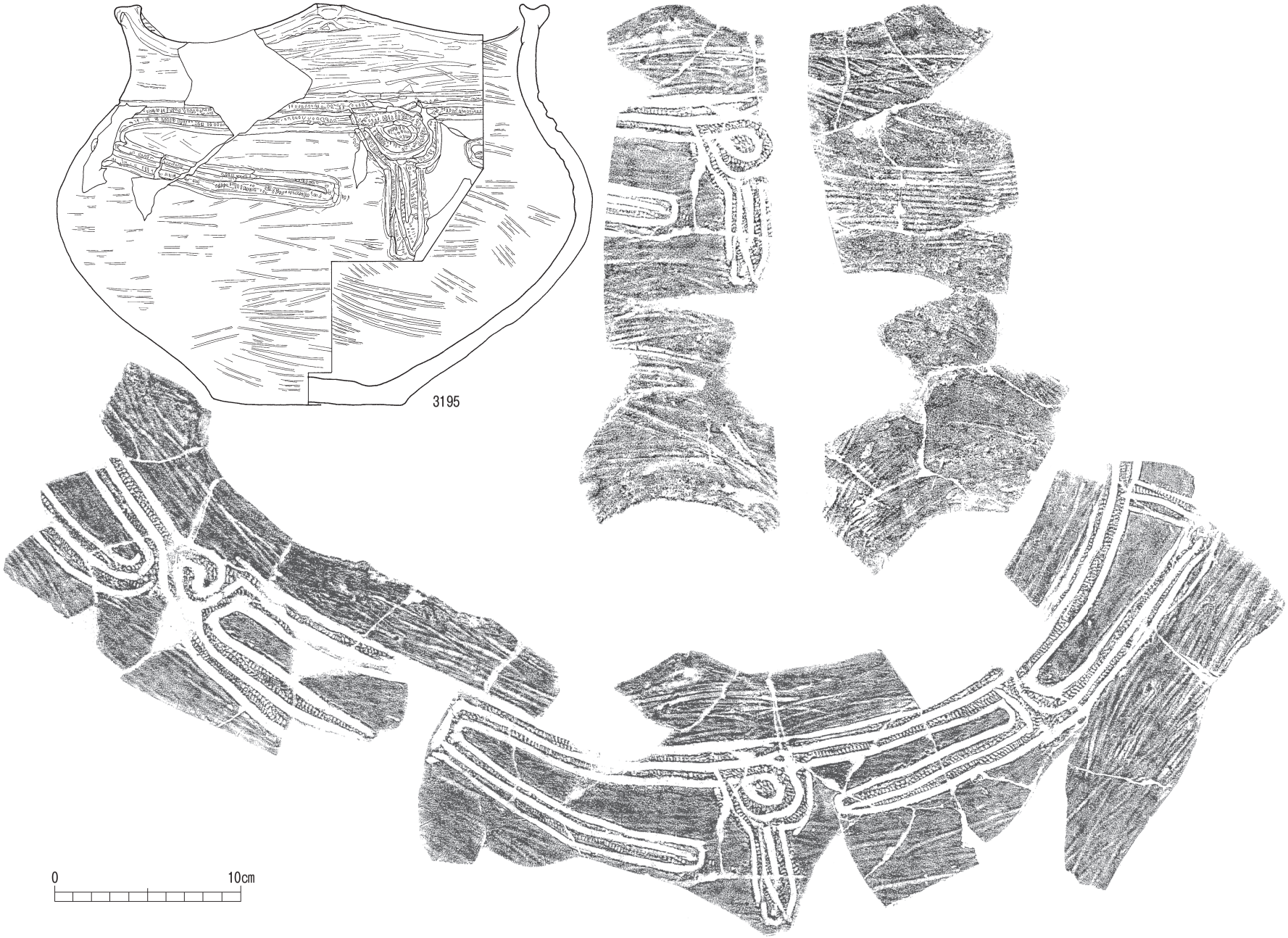
3196は内傾しながら立ち上がり，口縁端がわずかに立ち上がる器形をした口径22.8cmのものである。３段に２本沈線の文様があり，沈線間には二枚貝腹縁の押圧文が施される。上段は横沈線で，途中に入組文が見られる。中段はブーメラン形の文様が繰り返されている。下段は両端がワニの口状となる文様が繰り返されている。内外面ともヘラによる粗い横ナデだが，外面は丁寧である。胎土には茶色や灰色の８㎜ほどもある大粒の石を含んでいる。

3197～3200は把手の付く口縁部である。突起部が三角形状のものと台形状のものとがある。

3197は三角形状に尖る突起部で，ここに剥離しているが，棒状の把手が付くものである。外面は横と斜め方向の２本沈線があり，沈線間には巻貝刺突文が見られる。三角形あるいは菱形を呈し，斜め方向にはＪ字文が組まれて入組文となる。口縁部が外反する器形で，口縁下部に３か所と肩部に剥離痕があることから，ここに棒状把



第405図　指宿式土器（249）Ⅳ類㉙

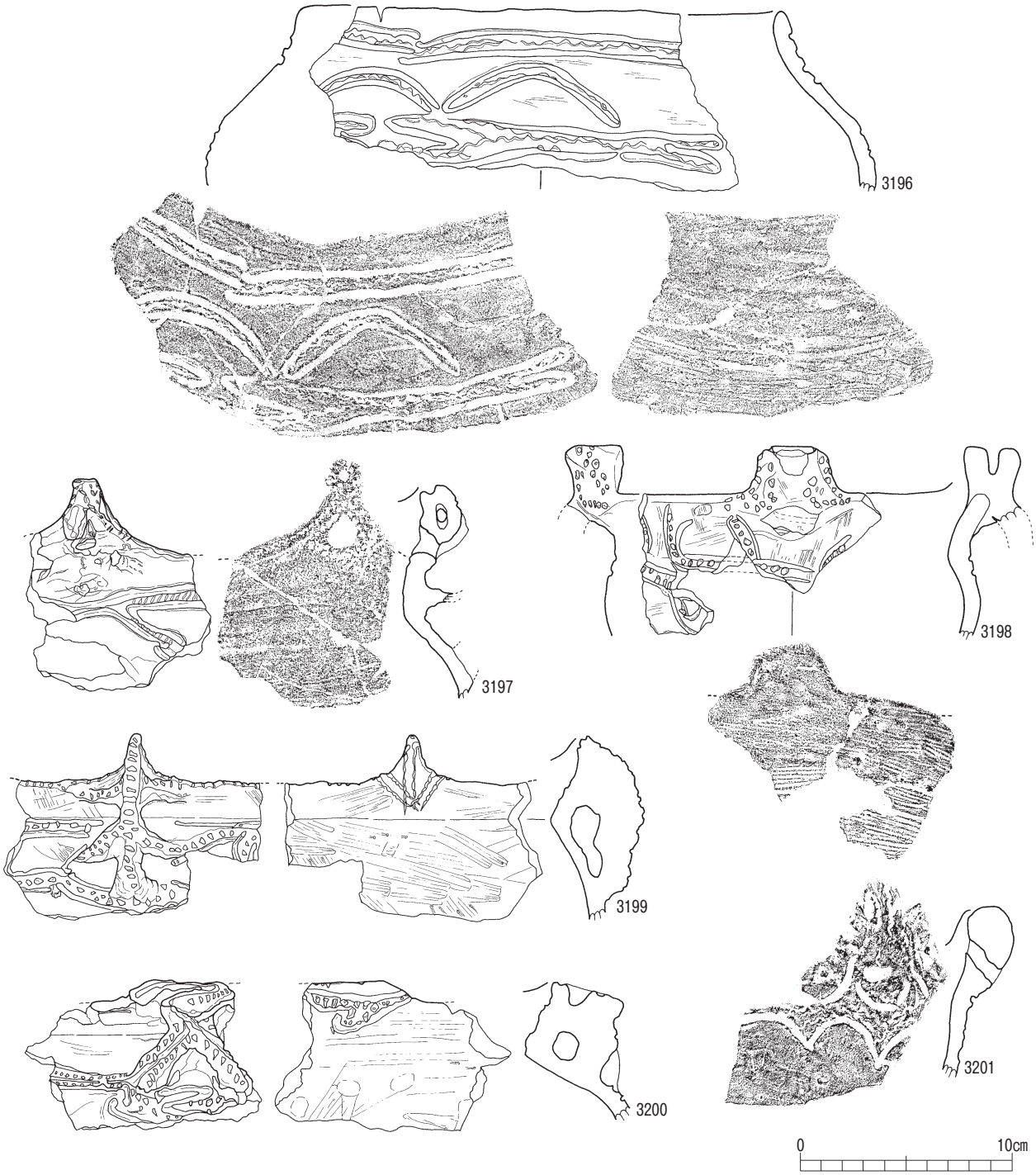


第406図　指宿式土器（250）Ⅳ類㉚

手が付くものと思われる。突起部には横方向に突き抜ける孔があり，その下には外面と内面に抜ける孔も穿たれている。突起部内面には二枚貝押圧文が口縁部と並行，あるいは穿孔の周りに見られる。

3198は台形状突起が４か所にある口径18cmのもので，把手間の口径は21cmある。外反する器形である。外面には沈線間に巻貝殻頂による刺突文のある２本沈線が直線・半円・楕円状に引かれ，渦巻文などを描いている。突起部外面には巻貝殻頂刺突文が見られる。突起部上には深い楕円状の穴がえぐられ，突起下に肩部へつながると思われる把手の痕跡が見える。胎土には白色・黄白色・茶色などをした７㎜大の細礫が含まれている。

3199は三角形に尖る突起のあるもので，その下に複雑な棒状把手が見られる。縦方向に厚く，肩部まで達し，口縁部・頸部・肩部で両側に枝が延び，獣脚状となる。その外側には巻貝押圧文が施される。巻貝押圧文は口縁



第407図　指宿式土器（251）Ⅳ類㉛

端にも施され，口縁端から延びた突起部内面には二枚貝腹縁による２本の逆三角形と,その中に縦線の押圧文が見られる。外面は中央に巻貝押圧文のある２本沈線が縦・横・斜めの直線や三日月形に引かれ，菱形や楕円文などを描いている。内面調整はケズリに近い粗いヘラナデである。

3200は内傾して頸部から強く外反する器形で，外面は肩部に２本沈線の斜方向あるいはＪ字状の直線があり，入組文やＳ字状文が描かれている。沈線間に巻貝殻頂の押圧文がある。把手状突起は紐状のものがＸ字状に貼り付けられ，外面には沈線が並行して描かれ，外には巻貝殻頂の押圧文がある。突起内面には２本沈線があり，入組文も見られる。内面はヘラによる横ナデ，外面はヘラミガキ調整である。

3201は三角形状に尖った突起部で，外面には波状沈線と二枚貝腹縁の押圧文がある。突起部には縦方向の二枚貝押圧文があり，その下に不整円形の透孔がある。その下には半円形の沈線がある。

3202・3203は口縁部が内弯するものである。

3202は口径が23cmあり，４か所に山形突起がある。突起部は粘土貼り付けによって肥厚させており，内面には２段の巻貝刺突文が見られる。外面の口縁端近くも３段の巻貝刺突文があり，その下には細い２本沈線により，横線と逆三角形が描かれるが，突起の下には時計回りの渦巻文が見られる。下の方に突帯のはがれた痕跡が横に長くある。

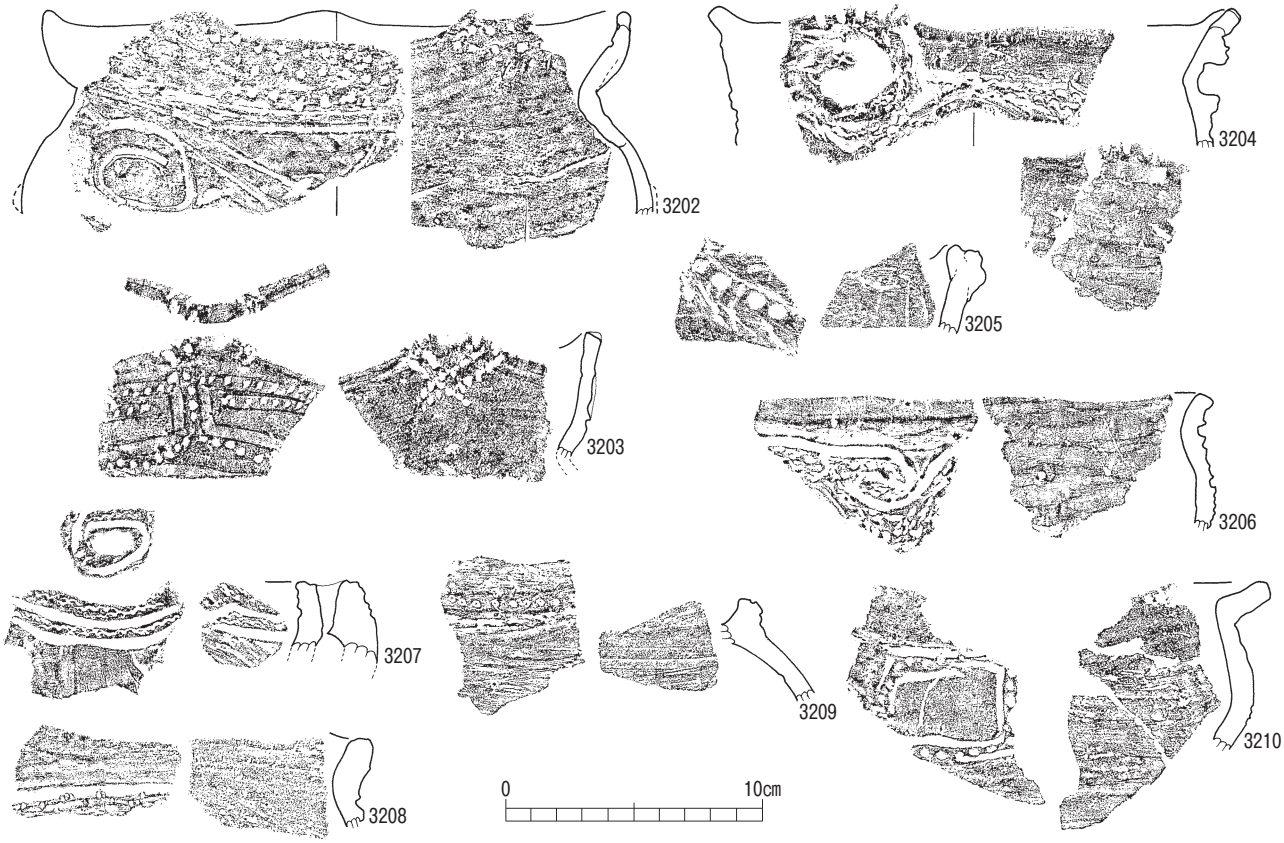
3203は山形突起の頂部で，この頂部を挟んで外面から内面へ巻貝殻頂の押圧文で，Ｘ字状の文様が描かれる。外面は幅広沈線で矩形が描かれ，矩形内には１本の横線がある。その下には横線が引かれる。沈線間や沈線内には巻貝殻頂による押圧文が施されている。

3204は粘土紐を渦巻状に貼り付けて4か所に突起を作るもので，突起部で口径が21cmある。突起部の外面には二枚貝腹縁の押圧文があり，頂部には６本のヘラ押圧文が見られる。外面の２本沈線間にも二枚貝腹縁による押圧文が見られる。

3205もねじり紐で貼り付けて突起部を作ったもので，外面の貼付突帯上に巻貝押圧文がある。

3206はゆるやかに外反する口縁部で，内面から外面の口縁端付近はミガキに近いヘラによる横ナデで調整している。外面には横線から入組文風に曲がる曲線が引かれ，その下に巻貝殻頂の押圧文が施されている。

3207は筒状を呈する把手の突起部である。頂部には深い穴が穿たれて，この穴は底が一部抜けている。１本の渦巻状沈線があり，その周りに二枚貝腹縁の押圧文がある。外面の上部には２本沈線があり，その上と沈線間に



第408図　指宿式土器（252）Ⅳ類㉜

も二枚貝腹縁の押圧文がある。

3208はゆるやかに外反する口縁部の山形突起付近の破片で，ややふくらんでいる。横方向の沈線と，その下に巻貝殻頂の小さい刺突文が見られる。

3209は内反する口縁をもつものの肩部で，断面形が矩形を呈する突帯が貼り付けてある。突帯の上に小さい巻貝殻頂の刺突文がある。

3210は頸部から強く外へ反っている口縁部で，胴部は丸く短い。外面には矩形を呈する細い２本沈線があり，沈線間には巻貝の刺突文がある。剥離痕のあることから，把手のある突起部付近かと思われる。

3211は４か所に台形状の突起のある外反する鉢で，口径が18㎝，底径が7.8㎝，高さが15.9㎝ある。内外ともヘラによる粗い横ナデ調整だが,外面と，内面の底部近くはミガキに近い。外面は２本沈線による波状文が描かれるが，突起部では上の方の沈線が切れて，そこに二重円形が描かれ，円形内の上端近くに透孔がある。突起の口唇部には浅い巻貝の押圧文が見られる。底は網代圧痕をヘラでナデ消している。部分的に網代痕が残っており，白粉の痕跡もみえる。黄白色や茶色をした６㎜大ほどの大きな礫も含まれ，外面にススも見られる。

3212は口径が22.6㎝で，４か所に山形突起のある口縁部が外反する器形である。上下２段に２本の端がＪ字状となる横方向短絡沈線があり，突起部間では斜方向に上下を結ぶ二枚貝腹縁の押圧文が見られる。短絡線の端は入組文となる。２本沈線の間と，上段と口縁端の間にも二枚貝腹縁の押圧文が見られる。山形突起の上はヘラ押圧文によってへこみ，その周りから口唇部には小さい巻貝殻頂の刺突文が見られる。突起の内側にも刺突文がある。

3213は板状を呈する橋状把手のある突起部である。外面は間に巻貝刺突文のある２本沈線を主とした文様である。把手の下を円形に囲み，そこから両脇へ斜めに開いている。把手の下には１本の横線が引かれている。把手の外側には縦に５列，巻貝による刺突文があり，頂部は内側に剥離痕があるが，外面から内面へ向かって，巻貝の刺突文が巡っている。

3214は山形突起部分で，外面には２本と思われる山状沈線が，内面には竹管状巻貝刺突文がある。口唇部は両側に沈線が伸び，突起部には３か所，巻貝殻頂の竹管状刺突文がある。内外面ともミガキに近い丁寧なヘラナデで調整している。

3215は丸い胴部から短い口縁が外へ開く器形をし，４か所には粘土を貼り付けて矩形突起が見られる。外面は細い沈線で横や縦・斜直線や曲線，Ｊ字文で矩形・楕円・三角形などが描かれている。口縁端は縁帯部分を作り，その上部は上下に巻貝刺突文があり，中央に横線が引かれている。突起部分近くで横線はＪ字に下へ曲がり，その中央には縦方向の短沈線，それを囲んでコの字状に巻貝刺突文がある。内面の口縁近くには細長い矩形が描かれ，中央の突起下には人形が見られる。赤みがかった色調や白色石，黄白色石など４㎜大の細礫を多く含む砂質の胎土からして，指宿地方産のものと思われる。

3216・3217は頸部から直に近く口縁部が立ち上がり，胴部がそろばん玉状になる器形である。

3216は口径が16.5㎝，胴最大径が22㎝あり，口唇部は丸みをもっている。口縁端近くに剥脱痕があることから把手があったものと思われる。頸部と胴最大部付近に横方向の２本沈線があり，沈線間には二枚貝腹縁押圧が１・２段ある。頸部にある沈線のうち上の線は剥脱痕近くでＪ字文が入組文となっている。この上下の沈線間は縦方向に２本沈線の鋸歯文があるが，沈線間には二枚貝押圧文のあるものと，ないものがある。内面の口縁近くには横方向に２段の二枚貝腹縁の押圧文が見られる。外面にはススが付着している。

3217は口径が17.8㎝で，外面の肩部に幅広の２本沈線が横方向にあり，その間には二枚貝腹縁の押圧文が４・５段ほど施されている。下の方には入組文として，さらに幅広の所がある。

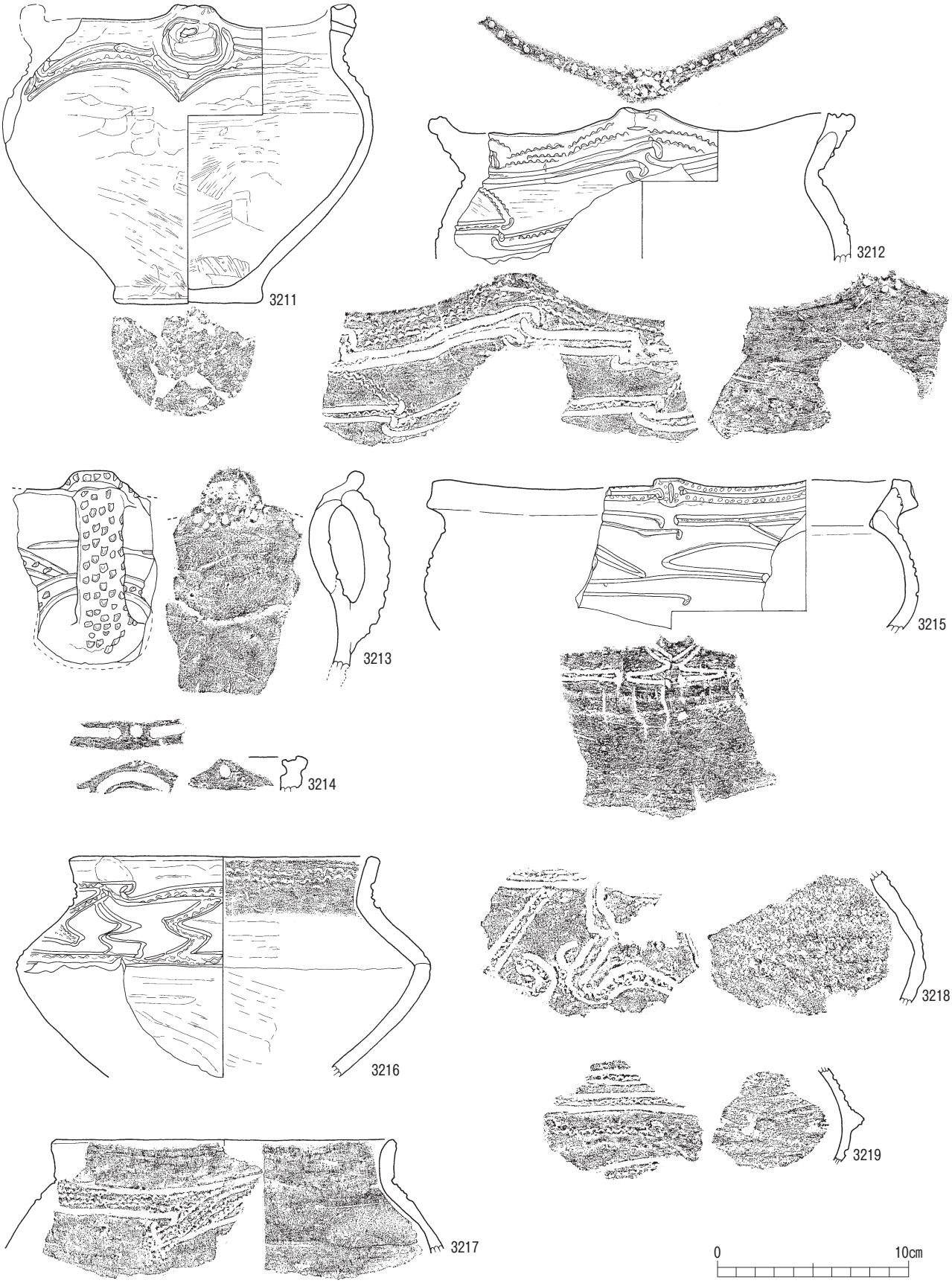
3218・3219は胴部破片である。

3218は頸部近くに横方向の２本沈線，その下に斜方向の直線と曲線が描かれている。下の方は台形状に区切って，その中に反時計回りの渦巻文や蛇文風の曲線が描かれる。沈線間には巻貝押圧文が見られる。剥離痕があることから，口縁へ向かって把手が付く可能性がある。内面はピンク色がかった色調をしていることから指宿地方産と思われる。

3219は薄い作りとなる。最大径の部分に断面が三角形状を呈する突帯が貼り付けられ，その上には２段に横方向の２本沈線が，下にも横方向の２本沈線がある。２本沈線の間と突帯上には二枚貝腹縁の押圧文が施されている。

3220は口縁部が外へ開きながらまっすぐ伸び，そろばん玉状の胴部となる器形をしている。口径は21.2㎝，胴部最大径は26.6㎝ある。肩の部分に間にヘラ押圧文のある横方向の３本沈線がある。４か所ではこの横線から下に時計回りの渦巻状文様が描かれているが，この中には細長いものもある。

3221は３か所に橋状把手をもつ突起のある鉢で，口縁部は頸部からまっすぐ立ち上がっている。外面は口縁部に２本沈線があり，突起部を中心としてここから下へ横長三角形状の２本沈線が引かれている。この２本沈線間にはヘナタリによる転圧文がある。突起と突起の中間部分には口縁部の沈線から下へコの字形の２本沈線文様が描かれる。把手は口縁端から肩部へ貼り付けられる二叉となる棒状のもので，外面４段に横方向沈線が施されて



第409図　指宿式土器（253）Ⅳ類㉝

いる。突起の頂部には１本沈線の同心円文が描かれている。

3222・3223は２か所に板状の把手があるものである。

3222の口径は18cmだが，板状把手部分では24cm，胴の最大径は25cmある。口縁部へ向かってゆるやかに外反する器形で，４か所に突起がある。２か所にある橋状把手の部分は外面２か所と，これに直交する側面２か所に透孔がある。把手外面と側面には二枚貝腹縁の押圧文が見られる。橋状把手のない２か所の突起部は低い山形となり，４か所に幅広のヘラ押圧文が見られる。外面は頸部の下に短い縦長のＳ字状や横線・三日月形沈線が２本引かれ，その間には１～３段に二枚貝腹縁による押圧文が見られる。短沈線のつなぎ部分は入組文を呈する。突起部の下には渦巻文が見られる。肩部では二枚貝腹縁が２本１組で２段にわたって横方向に押されている。内面は口縁近くに２本の二枚貝腹縁押圧文が見られ，橋状突起部分は同じ施文具で円形状にまわっている。

3223も似た器形をしているが，口縁部が極単に短く，直口形に立ち上がっている。口径が17cm，底径が6.5cm，高さが13.3cmだが，突起部では口径が21cm近くある。外面は頸部に横沈線が引かれ，その下の肩部には人形の沈線が引かれ，中には２本ずつ二枚貝腹縁の押圧文が見られる。把手の外面には縦沈線があり，その脇には二枚貝腹縁押圧文が施されている。把手の上方は矩形に飛び出しており，付け根付近を二枚貝押圧文，その上を沈線が巡っている。内面付け根付近は２本の二枚貝腹縁押圧文が逆三角形状に施されている。底部は網代底である。

3224はどんぶり形の鉢で，口縁端が逆Ｌ字状に広がっており，口径は33.3cmある。欠けているためはっきりしないが，４か所にねじった粘土紐を貼り付けた突起部がある。三角状の透かしがあるようである。巻貝による沈線によって２段に横長の矩形あるいは楕円形が描かれ，上は間に巻貝殻頂による刺突文がある。一部には上段と下段の間にも刺突文がある。内外面ともヘラによるナデ仕上げであるが，内面には粘土の積み上げ痕が残り，摩滅が目立つ。

3225～3232は胴部破片である。

3225は胴部が丸みをおびる器形で，最大径は23.2cmである。肩部に３本沈線があり，最下段の沈線は途中で下へ直角に落ちる。その下には矩形文様が描かれるが，最下段の矩形内と縦方向沈線間にはヘナタリによる転圧文が施される。内外面とも貝殻条痕のあとヘラによる横方向のナデで調整されているが，外面は丁寧である。角閃石・白雲母・長石・石英などとともに，茶色・白色・黄白色を呈する５㎜大ほどの粗粒を多く含む砂質土を用いている。

3226は胴下半部で，上部に横沈線があり，頂部と思われる部分に渦巻文らしき２本沈線がある。沈線間にヘナタリの転圧文がある。

3227は肩部で，粘土紐が貼り付けられ，突帯となっている。突帯上に巻貝殻頂の刺突文がある。黄白色・茶色石など石粒を多く含む粗い胎土である。

3228は最大径が15cmほどの小さい鉢の胴下半部である。上の方で間に巻貝殻頂の刺突文がある２本沈線が横方向に引かれ，その下に楕円状の沈線が並んでおり，中は左下がり斜方向のヘラ描き沈線が付されている。外面は貝殻条痕のあとヘラによる横方向のナデ，内面はヘラによる粗い横方向ナデで調整している。

3229～3231は沈線間にヘナタリの転圧文のあるものである。

3229は丸みをおびた胴部から頸部でくびれて，口縁端へまっすぐ開く器形をしている。外面は口縁部から頸部にかけて，波状沈線の交差部分から下へ矩形に延びる沈線が引かれている。肩部は上下に横沈線があり，その中に長方形が描かれ，転圧文は横沈線内全体に施されている。内外面ともヘラによる粗い斜めナデで調整しているが，外面上半は丁寧にナデられている。

3230は肩部で，外面に２本横沈線に挟まれた楕円文があり，横沈線間全体に転圧文が見られる。

3231は最大径の部分に２本の矩形あるいは楕円文が引かれ，その中全体に転圧文が見られる。

3232は胴下半部で，最大径が8.5cmほどの小型である。上のほうに２本の曲線文があり，間には二枚貝押圧文が施されている。

3233～3252は長胴形を呈する壺形の鉢である。

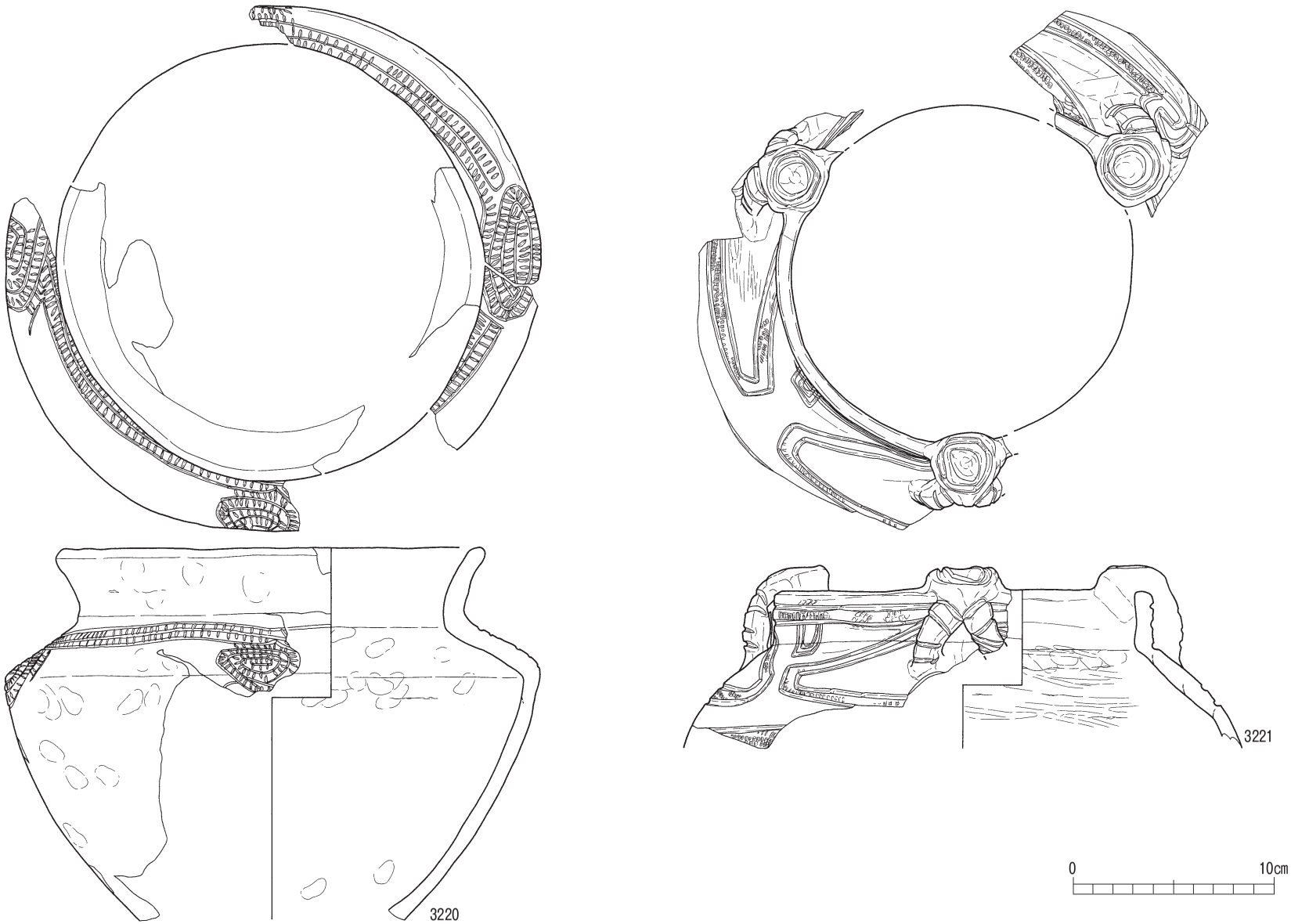
3233は口縁部の短い外反する器形で，口径が19.6cmある。外面は矩形内にヘナタリの転圧文がある文様が段違いに３段施されている。内外面ともヘラによる粗い横方向のナデ調整である。胎土には黄白色・茶色・白色など７㎜大までの礫も含まれている。

3234は強く外反する口縁で，口径は22.2cmである。頸部に横方向の沈線が2本以上あり，沈線内には巻貝の刺突文が施されている。

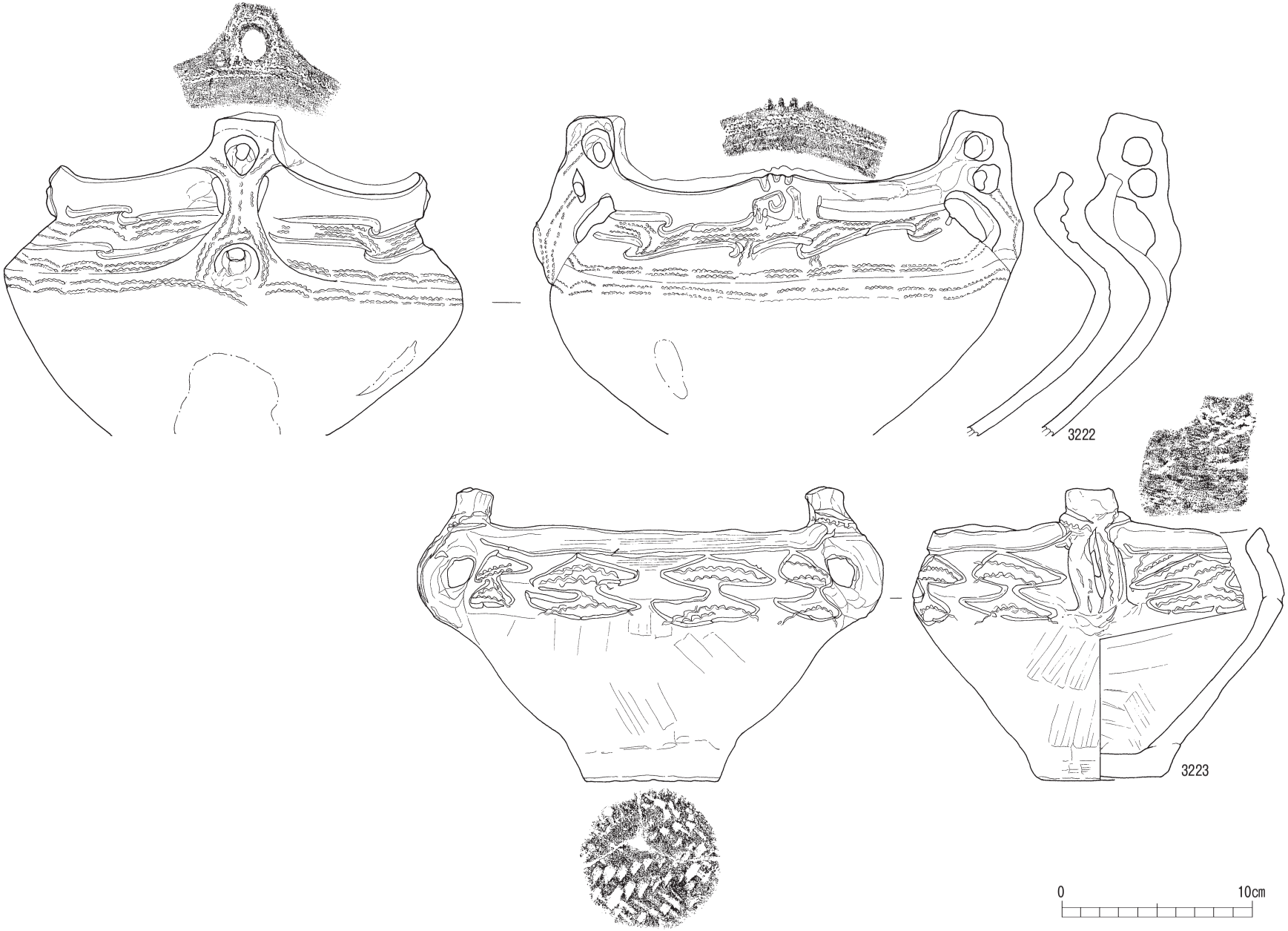
3235は口縁部が幅広く，中央に沈線があり，外側には二枚貝腹縁の左下がり押圧文が見られる。頸部から肩部にかけて幅広の２本沈線があり，その中に矩形が描かれている。矩形内は無文だが，その外側の２本沈線間には，二枚貝腹縁による左下がりの押圧文がある。

3236の口縁端部はやや幅広く，二枚貝腹縁で押圧されたあと，中央に沈線がある。

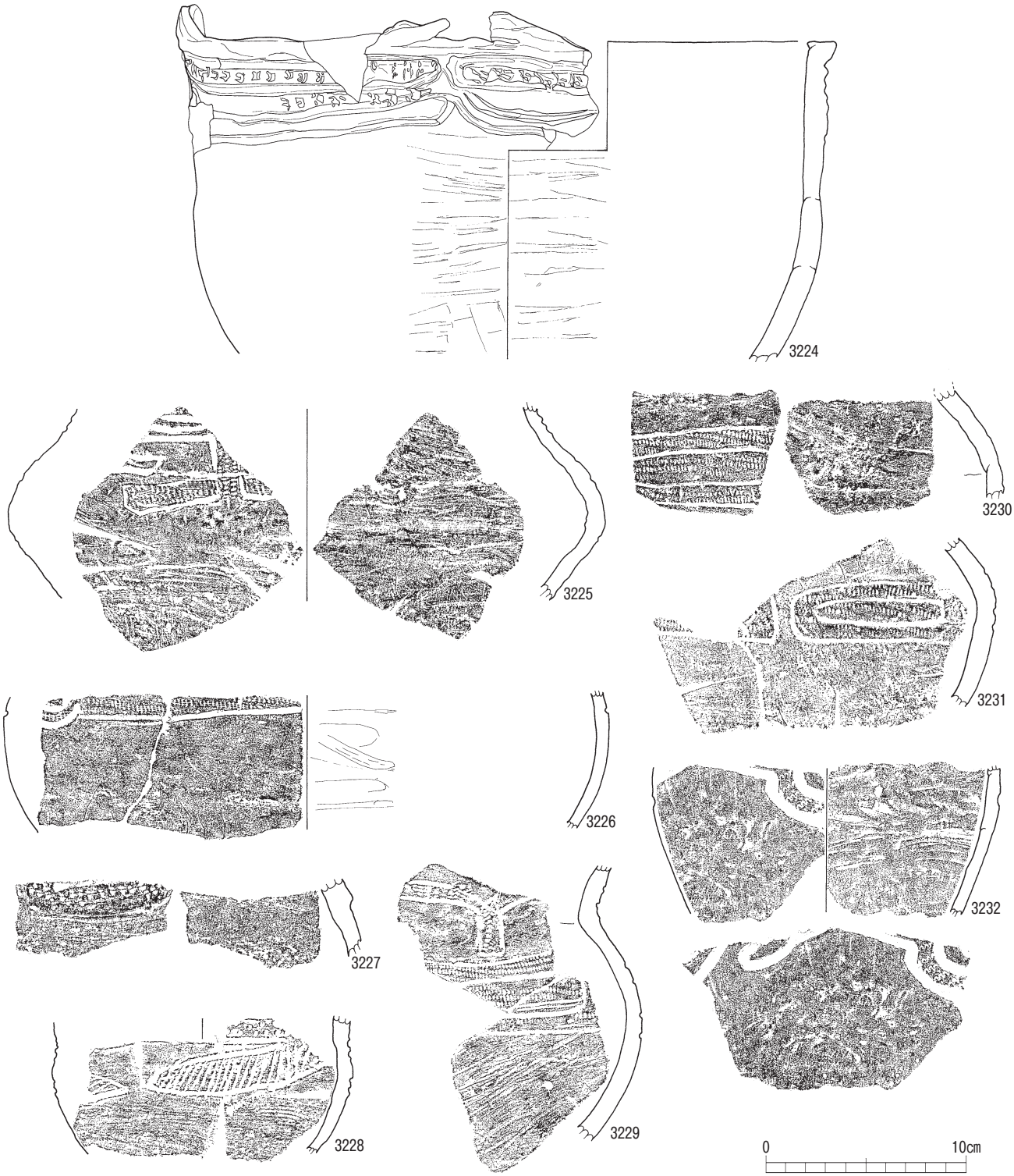
3237は台形をした口縁突起部の破片で，口縁端部には巻貝殻頂による刺突文があり，突起部は深い穴が掘られ，その周りに丸く刺突文が施される。外面は細い２本沈線が３段に見られ，沈線間にはヘラ刻みがある。最上の２本沈線は突起に向かって上がり，三角形を呈する。内面はくの字状に外反する。



第410図　指宿式土器（254）Ⅳ類㉞



第411図　指宿式土器（255）Ⅳ類㉟



第412図　指宿式土器（256）Ⅳ類㊱

3238は頸部から肩部にかけての破片で，内面は横方向ヘラケズリ，外面はヘラによる丁寧な横ナデである。外面は２本沈線により，上に横線があり，そこから下に垂れて，逆Ｊ字文が向きあう形となる。沈線間にはヘナタリの転圧文が見られる。

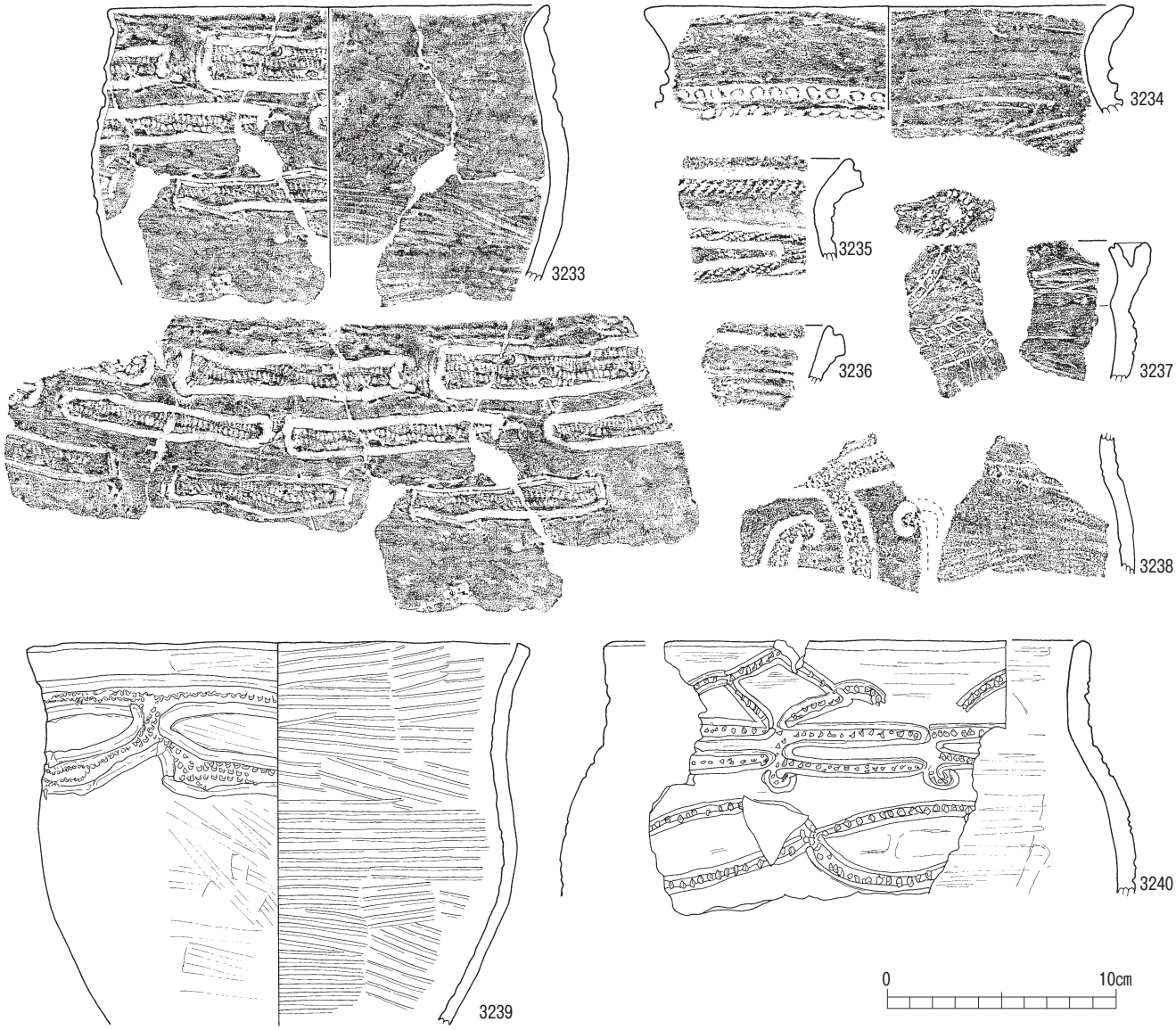
3239は口径が22.2cmの外反する器形で，薄い作りである。頸部に，幅広の２本沈線があり，その間に楕円文がある。下の線は上へ三角状に立ち上がっている。２本沈線間は楕円文を除き，巻貝刺突文が見られる。内面は貝殻条痕，外面はヘラナデで仕上げられている。

3240は頸部からやや外反しているが，ほぼまっすぐに立ち上がる器形をし，口径は21.6cmである。口縁部から肩部にかけて３段の異なる文様がある。上段は２本沈線により菱形とその両脇に羽根状沈線のあるものである。中段は細長い楕円文が２段にあり，そのつなぎ目の下には半円形沈線があって入組文となる。下段は楕円文が横につながっている。２本沈線間にはいずれも巻貝殻頂の刺突文が見られる。内外面ともヘラによる横方向のヘラナデだが，外面は丁寧である。

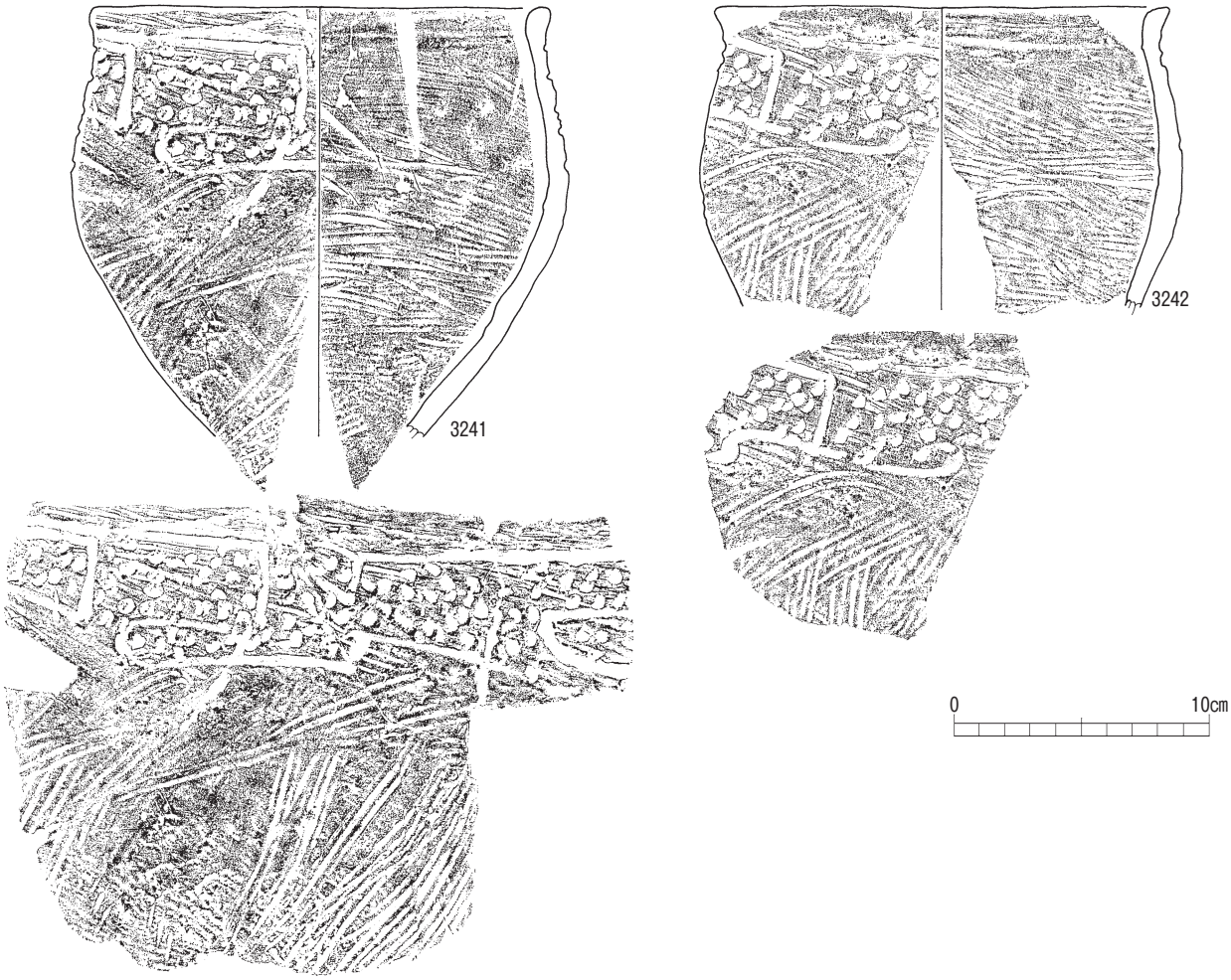
3241・3242は同一個体と思われる破片である。頸部から短い口縁へ外反する器形で，口径は18cmである。内外面とも貝殻条痕で調整しており，外面はそのあとヘラで粗くナデている。頸部から肩部にかけて幅広く上下に横方向の沈線があるが，途中で矩形や楕円文・靴形・入組文などの文様があり，その中に巻貝の刺突文が見られる。

3243は４か所に板状の橋状把手があるゆるやかに外反する器形の鉢である。口径は15.5cmある。外面は２本沈線が横方向と斜方向・Ｊ字状に引かれ，入組文・菱形文を描いている。沈線間には二枚貝腹縁の押圧文が見られる。把手にも二枚貝腹縁の押圧文が横方向や縦方向に施され，２か所に穿孔がある。把手の上には台形状を呈した山形突起があり，その頂部は深い穴状窪みが掘られている。把手との境には筋状の透孔が設けられている。口縁端には横方向の二枚貝腹縁による押圧文が見られる。突起部の内面にはＶ字状に２列の二枚貝腹縁による押圧文がある。ヘラによる横方向のナデ整形があるが，内面の口縁付近と外面は丁寧である。

3244はくの字状に強く外反する口縁部で，内外ともヘ



第413図　指宿式土器（257）Ⅳ類㊲



第414図　指宿式土器（258）Ⅳ類㊳

ラによる丁寧なナデ調整である。外面の口縁下に人形らしい沈線があり，端はＪ字状を呈する。その下は横方向に２本沈線があり，間に巻貝の小さな刺突文がある。

3245は４か所に山形突起のある外反する器形で，口径は23.2㎝である。突起部分は分厚く作り，くの字状に屈折しているが，その他の部分は逆Ｌ字形に屈折して，上の方はいくらかへこんでいる。外面には横方向の２本沈線と，突起部下とさらに左には時計回りの渦巻文があり，その間には巻貝殻頂の刺突文がある。内面の口縁端と頸部には巻貝殻頂の刺突文があり，突起部内面では刺突文が円形に回っている。内面調整は貝殻条痕のあとヘラによる横方向のナデ，外面調整はヘラによる縦ナデだが，口縁付近は横ナデとなる。外面色調が赤みがかった淡茶褐色であることから指宿地方産のものと思われる。

3246はゆるやかに外反する器形で，肩部に横方向の２本沈線があり，その間には巻貝殻頂による刺突文がある。口唇部にも同じ施文具の刺突文がある。

3247はくの字口縁の突起部で，口縁部の長さが長い。外面は口縁部が矩形沈線と巻貝刺突文，肩部が横・鋸歯状・波状の２本沈線で，その間には巻貝刺突文が見られる。突起部内面には巻貝刺突文により２本の×印が描かれている。

3248はくの字状に外反する短い口縁で，３か所に低い山形突起があるようである。口径は23.8㎝で，口縁外面は無文帯となり，肩部に文様がある。沈線で，横・Ｓ字・逆Ｓ字・時計回りの渦巻文などがある。沈線間に一部分，二枚貝腹縁の押圧文がある。内面の口縁部には２段の二枚貝腹縁の押圧文がある。口唇部にはヘラ刻みが施されているが，突起部近くでは途切れている。内外とも黄みがかった淡茶褐色を呈しており，胎土・焼成度からして指宿地方産と思われる。

3249～3252は口縁部のない頸部から肩部の破片である。

3249は外へ強く反る器形をしており，頸部から肩部にかけて２本沈線と巻貝刺突文で文様が描かれる。頸部に横線があり，そこから下へ曲線が引かれ，入組文・楕円文・菱形文などが表現されている。外面はヘラによる横ナデ調整，内面はミガキに近いヘラによる横方向の丁寧

なナデ調整である。

3250は肩部の破片である。外面には中央に巻貝刺突文のある２本沈線で，横線・斜線・楕円などが引かれ，三角形・菱形などが描かれている。内面の口縁下部には横方向に巻貝刺突文が施されている。

3251はやや直口ぎみの口縁をもつ頸部付近の破片である。２本沈線と二枚貝腹縁押圧文が組み合わさった文様である。斜方向・Ｊ字状，あるいは端が３あるいは逆３の字となる線で，入組文・楕円文など複雑な文様が描かれている。石英・長石などとともに茶色や黄白色の７㎜大のものも含む砂質土を用いている。

3252は最大径が27㎝ほどとなる胴部で，肩部に２本沈線によって楕円形が引かれ，２本沈線間には巻貝殻頂の竹管状刺突文がある。楕円内には斜め沈線やＪ字文・楕円形沈線があり，この楕円形内にも刺突文がある。楕円形内にはヘナタリ転圧文が見られる。胎土には石英・白雲母・長石などの他にも黄白色や茶色をした６㎜大までの細礫も含まれている。

3253～3259は口縁部が無文帯となるものである。

3253・3254はゆるやかに外反する器形で，頸部に横方向の中央に巻貝刺突文のある２本沈線がある。

3253は口径が24.4㎝あり，口唇部には小さな貝殻刺突文がある。頸部の横線下には横線に垂れ下がるようにして端がＪ字文となる渦巻文・Ｓ字文などで楕円文・入組文などが描かれている。内外面ともヘラによる横方向の丁寧なナデ調整である。

3254は口径が26㎝，胴の最大径が29.5㎝ある。口縁部は短く，分厚くなっている。内外面とも丁寧なヘラナデ調整である。外面は肩部の中央に同心円文を置き，周辺に横長のＳ字文が２段に連なっている。Ｓ字文のつながり部分は入組文となる。

3255は外反する器形で，頸部には２本沈線間に二枚貝押圧文のある横線がある。

3256は４か所に貼り付けによる山形突起のあるもので，口径が24㎝ある。口縁端には巻貝刺突文がある。外面には横方向・斜方向・Ｊ字などとなる沈線で，矩形・三角形などが描かれ，沈線間には巻貝刺突文がある。突起部の内面には渦巻沈線があり，その周りには巻貝刺突文があるが，これには小さいものと大きいものとがある。

3257は口径が22.2㎝のもので，口縁部は内弯ぎみである。外面の頸部に２本沈線があり，そこから下へ十字架状の文様が垂れ下がっている。沈線間には小さな巻貝刺突文がある。

3258は内傾しながら立ち上り，口縁端近くでゆるやかに外反する器形である。外面には端が丸みをおびたり開いたりする矩形が２段にあり，矩形内には二枚貝腹縁の押圧文がある。内面は貝殻条痕を残しているが，内面の口縁部付近と外面はヘラによって丁寧に横方向にナデている。外面は文様を施したあとナデている。

3259・3260は口縁部の短い器形で，色調・胎土などから指宿地方産と思われ，3260は重さも軽い。

3259は口唇部に巻貝の押圧文があり，外面の頸部に横沈線が，その下に斜方向の矩形沈線がある。矩形沈線の中には二枚貝押圧文がある。

3260は口径が19㎝あり，口縁端に巻貝刺突文がある。外面肩部には矩形沈線があるが，右側が二重の矩形で，中の矩形内に二枚貝押圧文があるのに対して，左側は２段に矩形があり，矩形間に二枚貝押圧文がある。左右の矩形間には縦方向の二枚貝押圧文が見られる。頸部には不整沈線がある。内外面とも貝殻条痕の調整であるが，そのあとヘラでナデている。

3261は４か所に山形突起のあるもので，口径は19.6㎝である。突起部は内面に粘土紐を渦巻状に貼り付けており，内面から外面にかけて時計回りの渦巻文を二重沈線で描き，その間には小型の巻貝刺突文が見られる。突起外面の頂部近くにも巻貝刺突文がある。外面は頸部下に矩形２本沈線があり，沈線間には巻貝刺突文がある。この矩形と突起部とを巻貝刺突で縦長のコの字形に結んでいる。

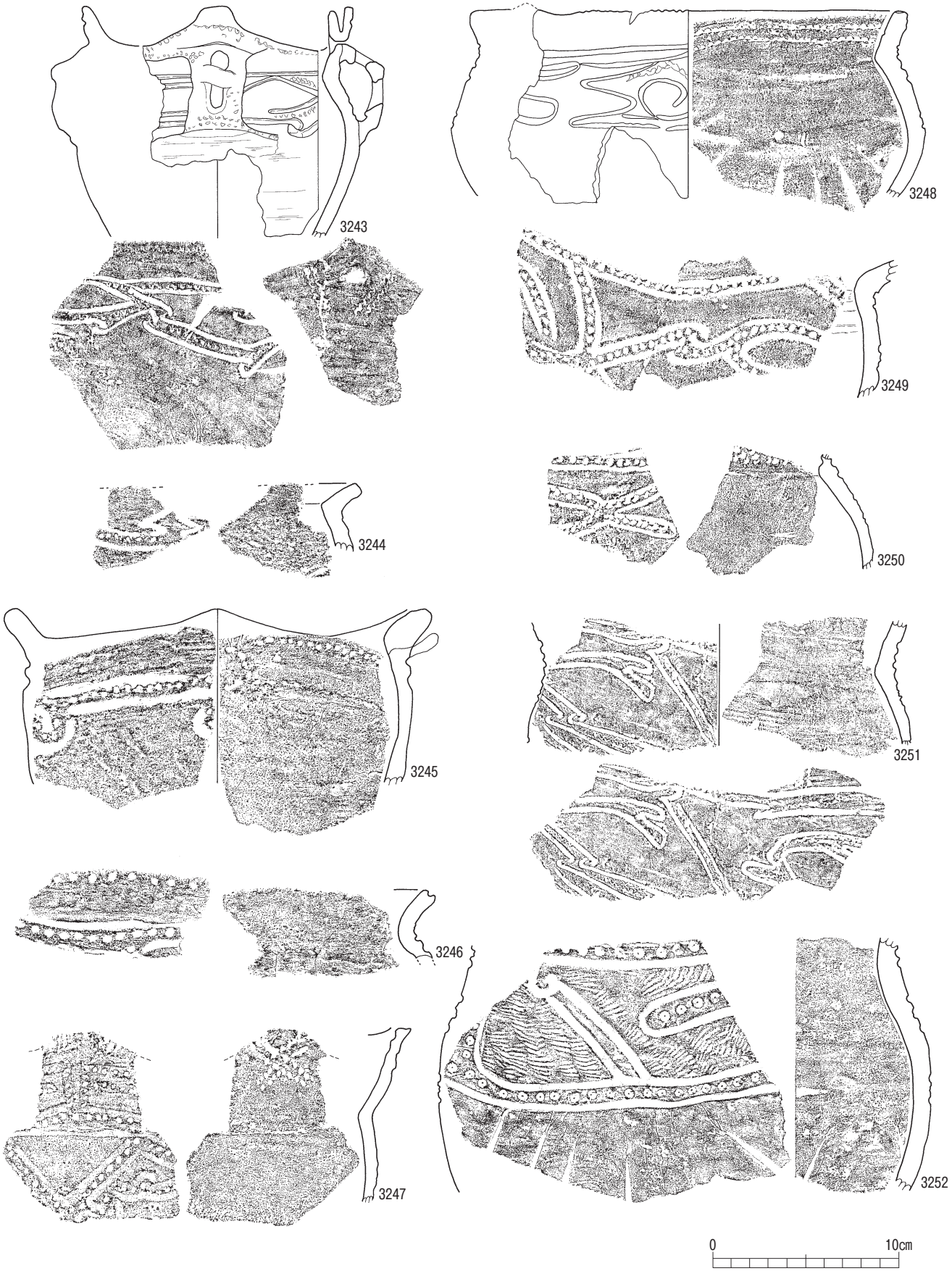
3262は口径が23.2㎝ある。間に巻貝殻頂による刺突文のある２本沈線によって，口縁部に文様が施されている。上に横線が引かれ，そこから下へ逆Ｌ字形沈線が繰り返されているが，逆Ｌ字形と逆Ｌ字形との間には円文が描かれている。円文では沈線内にも巻貝刺突文が見られる。口縁部内面にも縦方向に２本沈線があり，その間に巻貝刺突文が施されているが，これは５か所にあるかと思われる。赤みがかった明茶褐色を呈しており，指宿地方産かと思われる。

3263は口径が21.2㎝ある丸みをおびた器形をしている。外面は２本沈線間に巻貝刺突文のある文様を主体とする。頸部に沈線が横方向に引かれ，そこから下にＪ字状を主とした沈線が交差したり，接したりしながら複雑に引かれている。

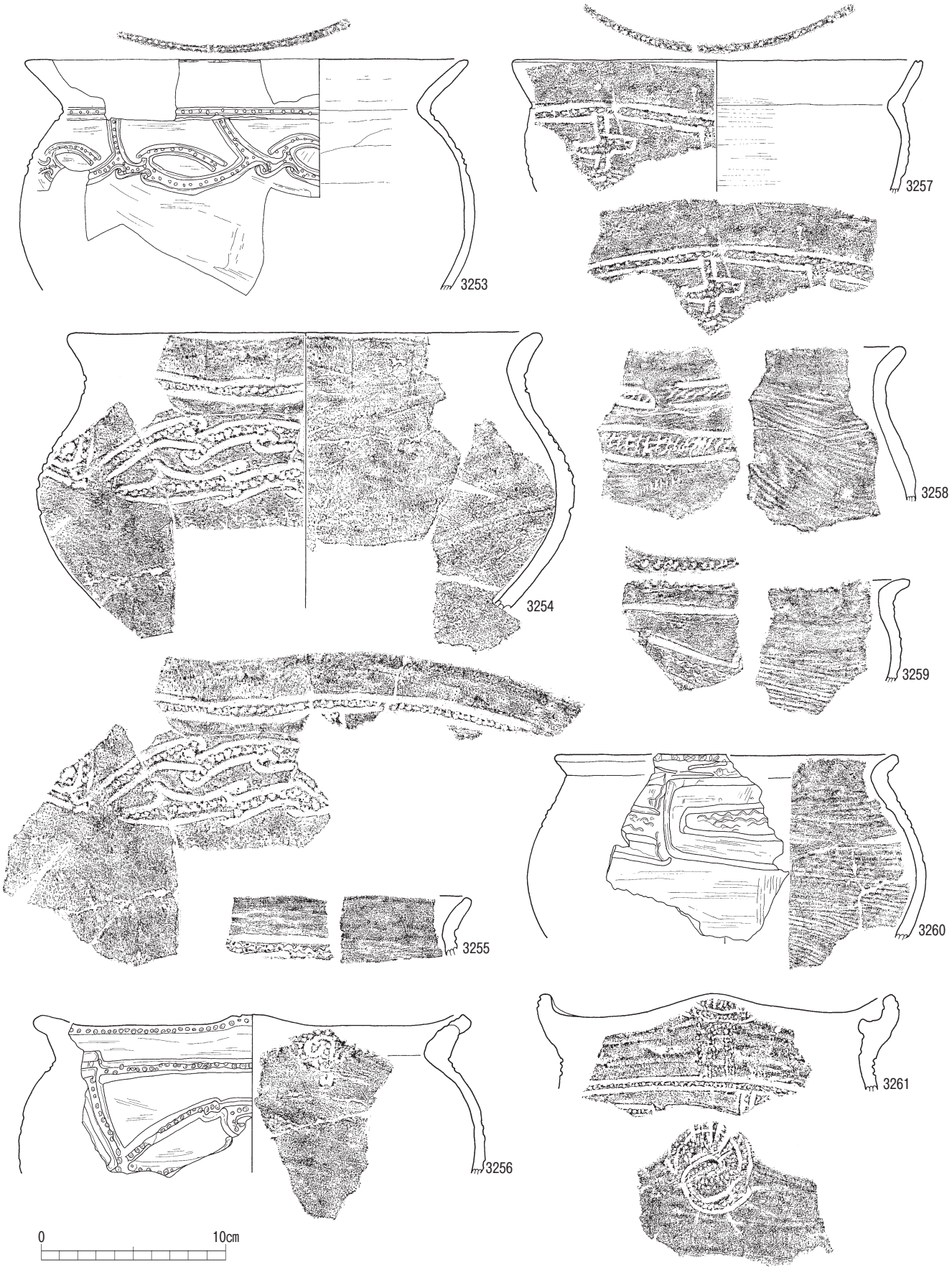
3264・3265は口縁部が内反する器形である。

3264は内面がヘラによる横ナデ・外面がヘラミガキで仕上げている。外面は中央に縦線の引かれた縦方向に長い矩形があり，間には二枚貝刺突文が見られる。

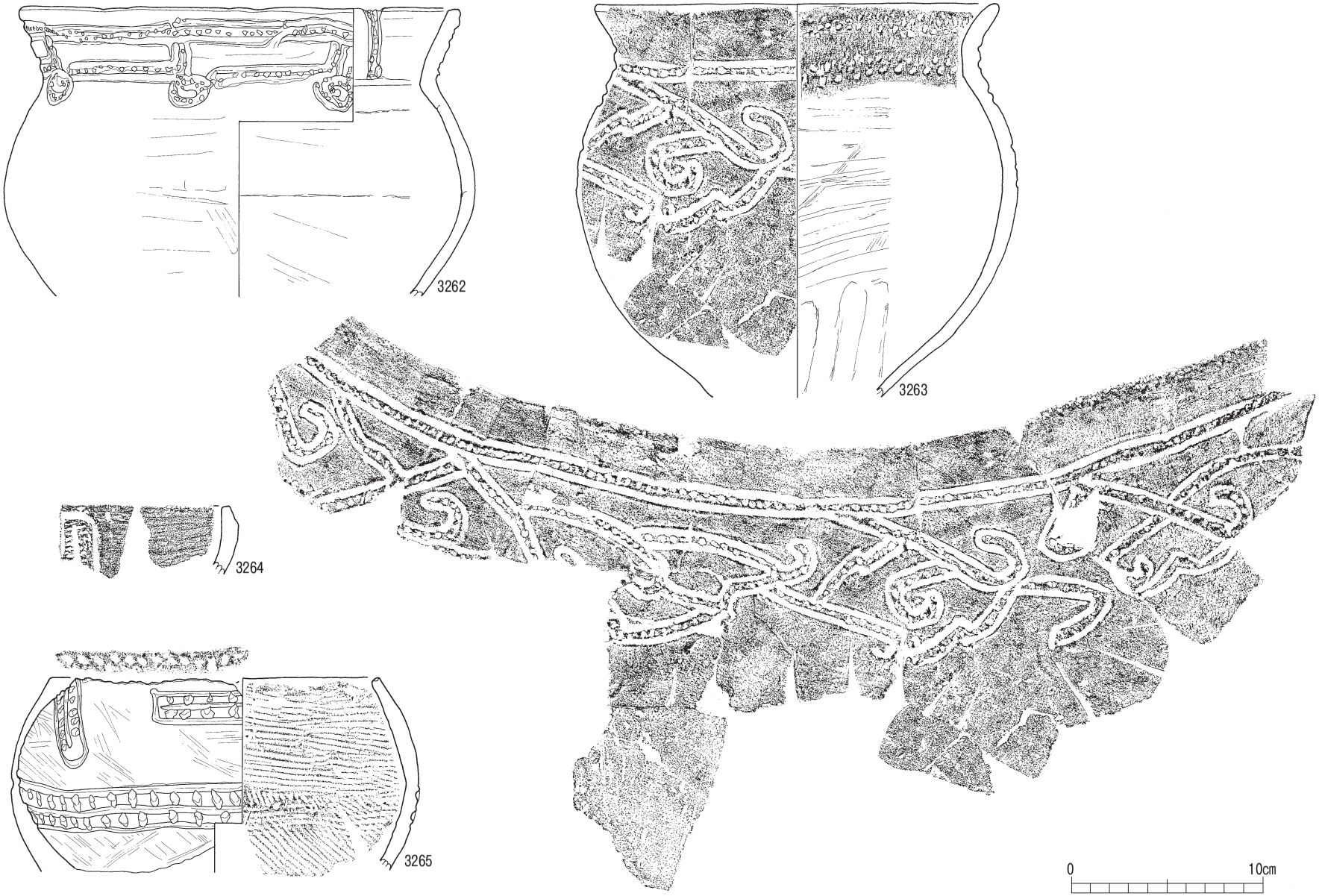
3265は口径が17.4㎝，最大径が21.6㎝ある。内外面とも貝殻条痕で調整しているが，外面はそのあと一部をヘラでナデている。口唇部には巻貝刺突文がある。口縁近くには中央に横線のある横長矩形と，斜方向の中央に直線のある楕円形とがあり，沈線間には巻貝刺突文がある。胴部には３本沈線が横方向に引かれ，沈線間には巻貝刺突文がある。



第415図　指宿式土器（259）Ⅳ類㊴



第416図　指宿式土器（260）Ⅳ類㊵



第417図　指宿式土器（261）Ⅳ類㊶

ウ　小型土器（第418図・第419図 3266～3285）

一般の深鉢に比べ，やや小型で，概して口径が20cmに満たず，深さも浅いものである。

3266～3272は口縁がまっすぐ立ち上がるか，やや内反するものである。

3266は，口縁部に粘土紐を貼り付けて突帯としている。２か所で粘土紐を上に立ち上げて突起にしており，口径が15.8cm，底径が9.6cm，高さが14cmある。突帯上には巻貝の転圧文があり，その下に巻貝刺突文が２段にある。巻貝刺突のあと，胴部には細いヘラ沈線の斜格子文が施されるが，左下がりのあと右下がりが底部近くまで施される。底部は鯨骨らしき痕跡も一部に残っているが，ヘラでナデて，白粉が付着している。胎土に金雲母もある。

3267は４か所に山形突起があり，口径は18cmで，脚台が欠けている。外面は２本沈線で，三角形を主体とした文様を描き，他に楕円・矩形・入組文などもある。三角形の中には巻貝刺突文があり，突起の口唇部から内面には５本のヘラ刻みがある。

3268は口径が16cmで，横方向の２本沈線間には巻貝刺突文がある。

3269は口径が12cmで，指圧痕も多く見られる雑な作りである。外面は上下に横沈線があり，その間には巻貝刺突文が密に押された鋸歯状沈線がある。

3270は山形突起で，突起部を欠いている。貝殻条痕で調整しているが，外面の一部はのちにヘラでナデている。間に巻貝刺突文のある横方向の２本沈線がある。

3271は低い山形突起で，外面に広くヘナタリの転圧文が施されている。そのあと口縁近くに小さな矩形沈線が連続して施され，中には数個のヘナタリによる刺突文がある。口唇部にもヘナタリの刺突文がある。

3272と3274は，幅１～1.5cmの突帯が口縁端から曲線状に下へ向かって貼り付けられている。3272は右下がりであるが，同一個体と思われる破片（下の拓本）は左下がりとなっており，これらが２か所以上にある可能性がある。突帯上にはヘナタリ転圧文のあと，同じ施文具の刺突文を両脇に施し，突帯は突起となる。その頂部に穴を掘っているが，この周りにも刺突文がある。外面には楕円形沈線があり，周りには刺突文もある。拓本の破片も同様の文様だが，楕円でなく矩形になっている。

3273は広幅の２本沈線で，その間に整然と竹管状の巻貝刺突文が縦方向に６つ以上押されている。

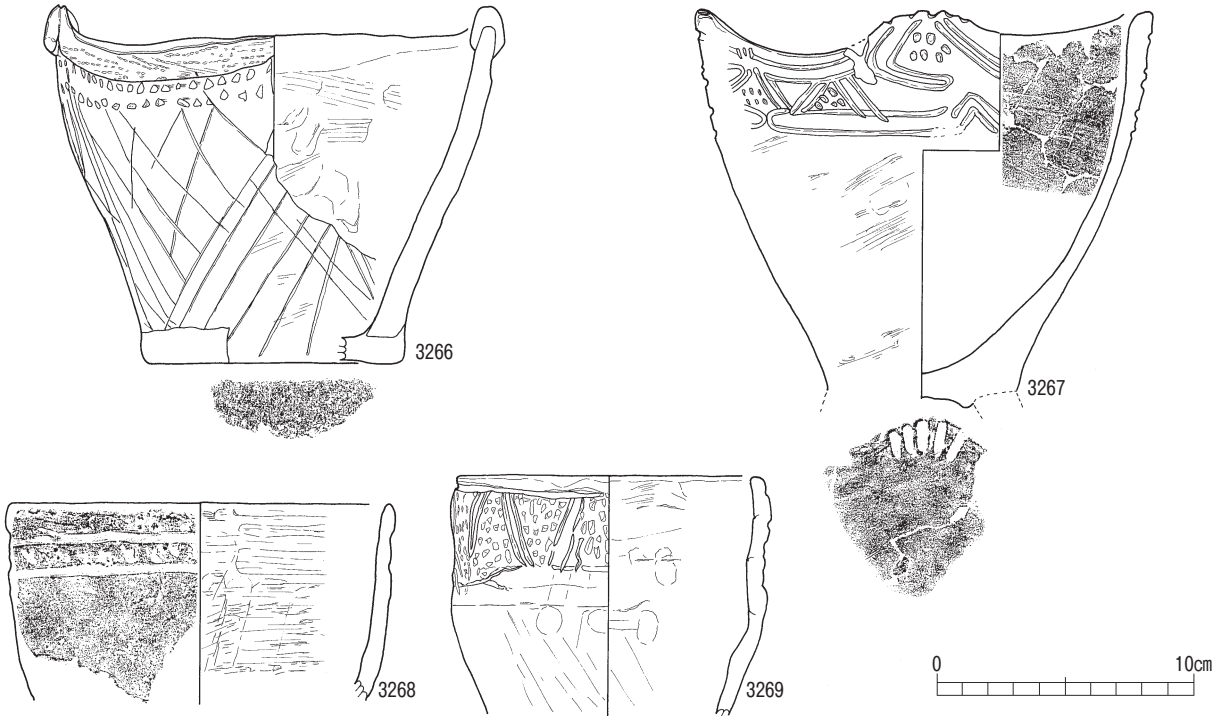
3274は突帯上に内面にまで達する巻貝刺突文が施され，内面の突帯上にはヘラ沈線が見られる。

3275～3277は内反する器形だが，3285は端でやや外へ反っている。

3275・3276は２本沈線間に巻貝刺突文が２段に施されている。3275の口径は16.4cmである。

3277は浅い横方向の３本沈線が引かれ，その間には巻貝刺突文が施されている。口縁部はでこぼこしており，口唇部には巻貝刺突文がある。

3278はねじり紐貼付の突起があり，内面に逆三角形の２本沈線がある。外面は間にヘラ押圧文のある２本沈線



第418図　指宿式土器（262）Ⅳ類㊷

があり，三角形を主体としているが，突起の下は渦巻文様の曲線がある。

3279・3280は強く外反する器形である。3279は突起部近くの破片で，鉤状に屈曲する２本横線間に二枚貝刺突文がある。3280は低い山形突起に透孔があり，内面にはヘラ押圧文が２列ずつある。外面は間に巻貝刺突文のある２本沈線が横・縦・斜方向にあり，菱形をしている。

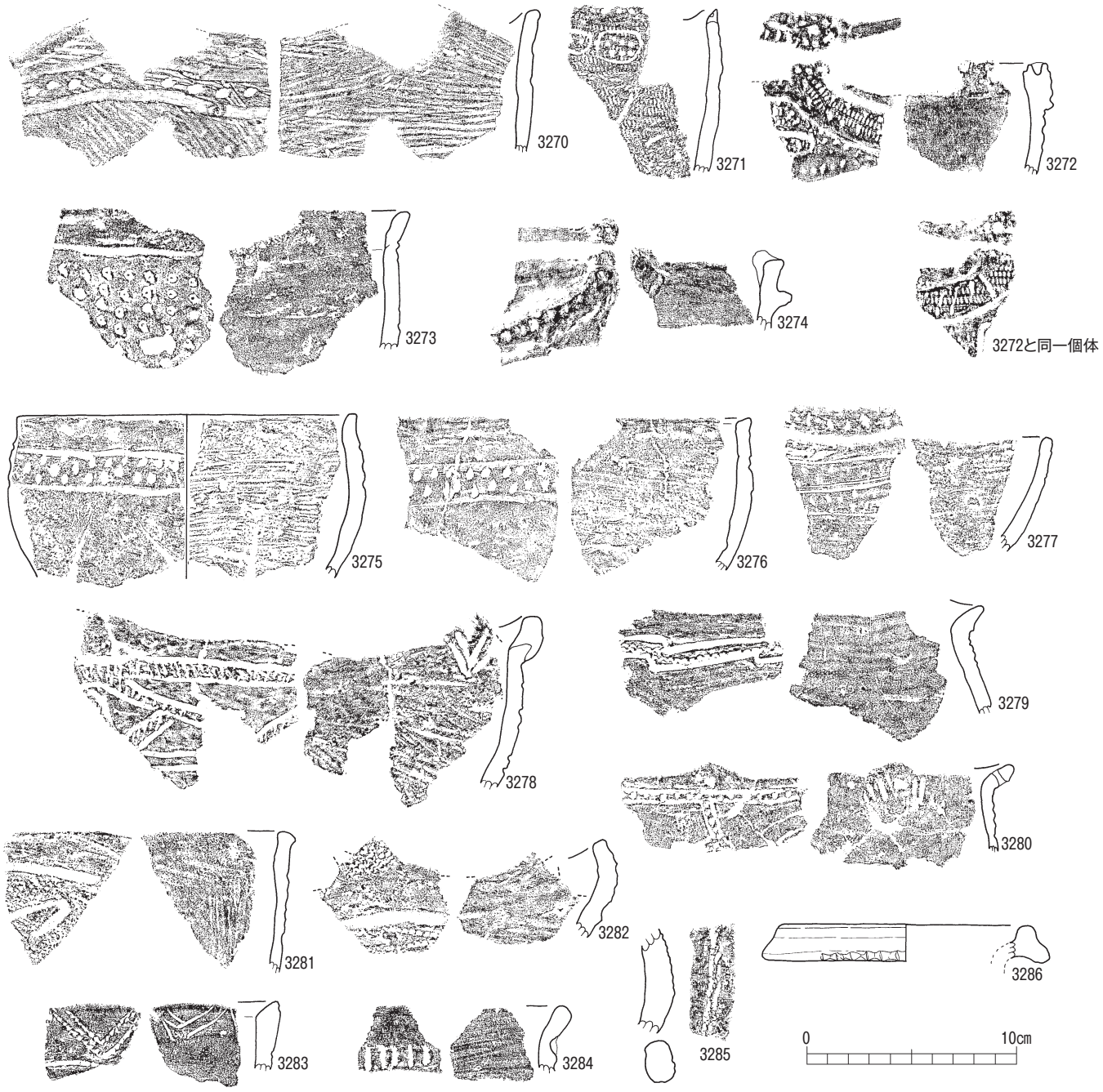
3281はまっすぐ立ち上がる器形で，ヘナタリの転圧文を施したあと，横方向と下から斜めに立ち上がる矩形沈線がある。

3282は山形突起がある内反ぎみの器形で，突起の口唇部にはヘラ押圧文が，外面には二枚貝刺突文がある。外面には間に二枚貝刺突文のある２本の横沈線がある。

3283は口縁端内面が直に屈曲する。外面は中に巻貝刺突文のある沈線で口縁端に鋸歯文が，その下には横線がある。内面には細い２本沈線の鋸歯文がある。

3284は外反する口縁で，口縁端近くに縦方向のヘラ刺突文が，その下には横方向沈線がある。

3285は棒状把手の破片で，外面には縦方向の二枚貝刺突文が２本施されている。



第419図　指宿式土器（263）Ⅳ類㊸

エ　壺（第419図 3286）

口径が10.8cmあり，口縁端が下へ広がり，やや窪んでいる。頸部はくびれ，口縁端下部にヘラ刻みがある。

オ　台付鉢（第420図 3287～3290）

3287は２か所に突起のあるもので，口径が14.2cm，高台直径が7.8cm，高さが6.5cm（突起部は7.8cm）ある。鉢部外面は口縁部に巻貝によって２本の横沈線が，口唇部には同じ施文具で斜格子刻みが施されている。高台は高さが２cmほどで，外面に鋸歯状の２本沈線があり，沈線間と高台端に巻貝による刺突文が施されている。

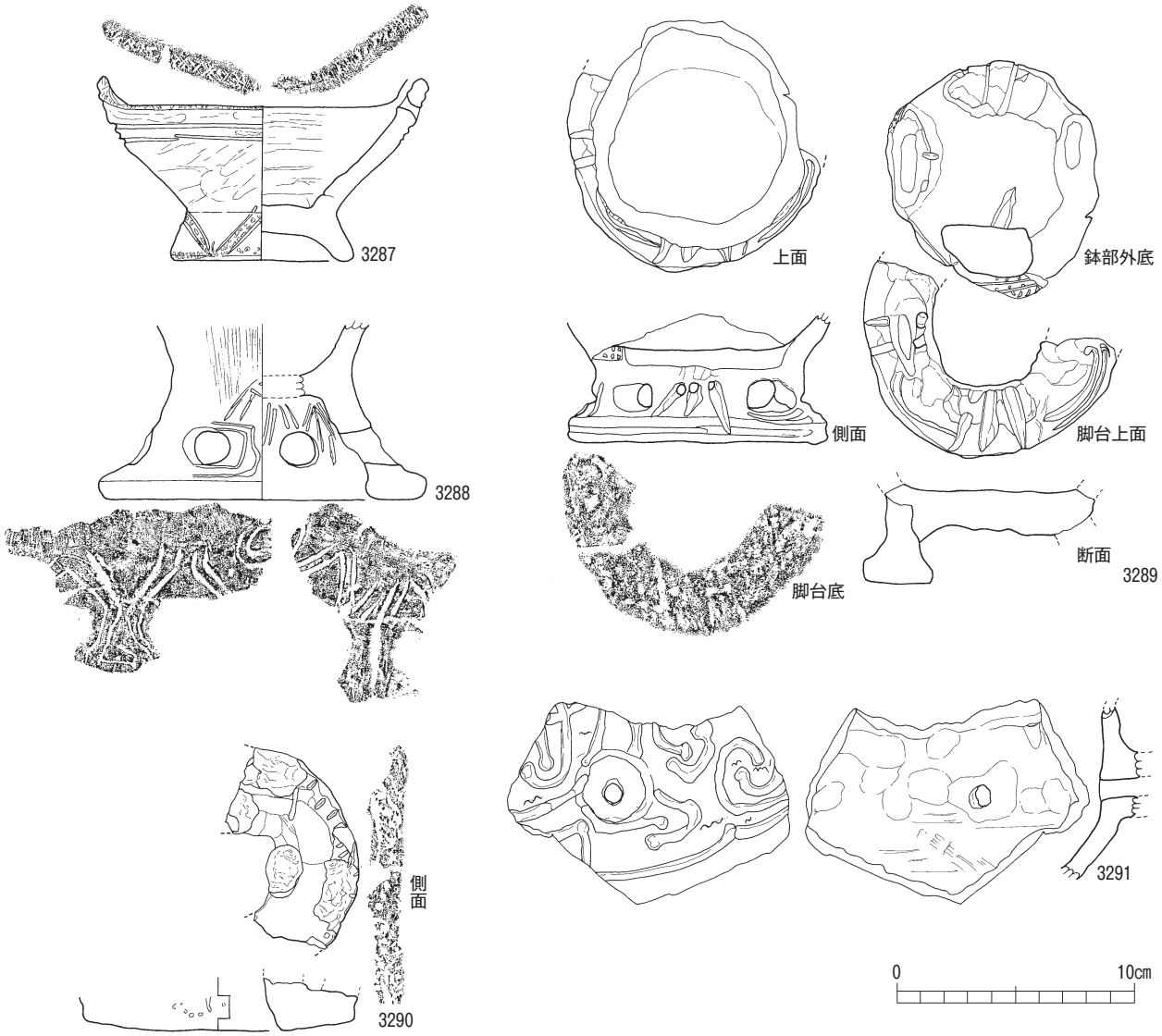
3288は鉢部の上部を欠いており，高台の端部は外へ広がっている。高台端部の口径は14cmで，６か所に透孔が設けられている。外面は円孔を囲んで矩形あるいは楕円形の２本沈線があり，その上には三角形の２本沈線もある。内面にも２本鋸歯沈線文がある。

3289は高台部と鉢の底部である。高台端は幅広く広がり，底には綱代状圧痕がある。周囲に４か所の透孔が，そのつなぎ部には外から内へ２・３か所の小さな透孔が設けられている。高台端近くは浅い沈線がまわり，円孔の下には２本沈線がある。高台と鉢の付け根に矩形となる細沈線と，間に巻貝刺突文がある。

3290は高台端近くの破片で，鉢とは棒状のものでつないでいる。高台端外面には沈線と深い巻貝刺突文がある。

カ　注口土器（第420図 3291）

注口付近の破片で，口径約８㎜の注ぎ口がある。肩部内面には指頭圧痕が多く残っている。外面は三角やＪ字状を呈する入組文が複雑に施され，摩滅のためはっきりしないが，２本沈線間などに二枚貝腹縁の刺突文がある。



第420図　指宿式土器（264）Ⅳ類㊹

（５）Ｖ類土器（第421図～第426図）

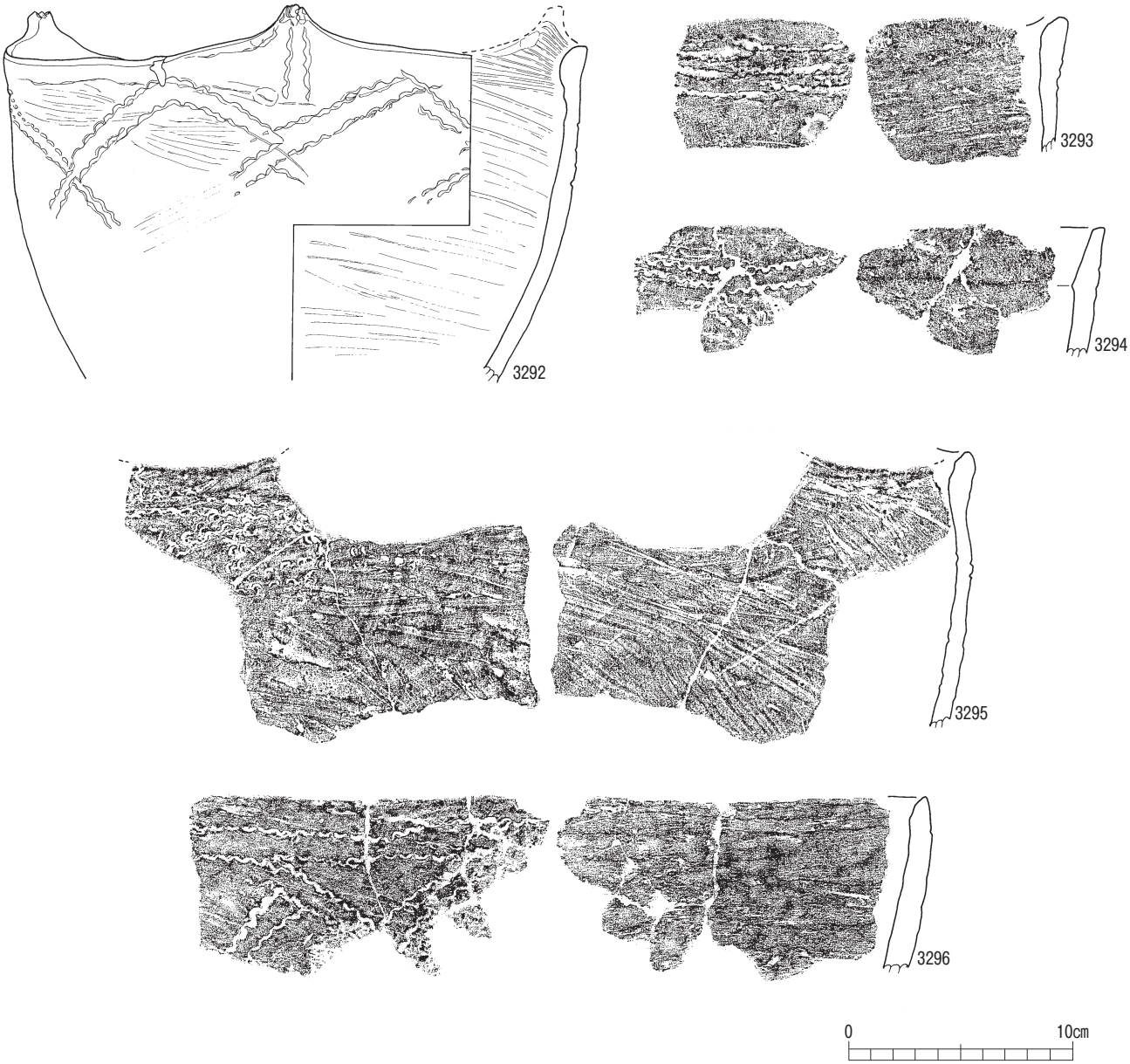
Ｖ類土器は，指宿式土器のなかで，外面の文様施文具の一部に沈線があるものの，二枚貝・巻貝などの貝類を主体として用いているものである。使用されている二枚貝はハイガイと思われ，大きなものが多い。その腹縁部を縦・横・斜め方向などに押し付けて文様としている。磨消縄文土器や他の指宿式土器と同じく主として２本押圧文になっている。巻貝を用いた文様には殻頂部を連続して突き刺したものと，殻頂部付近を転がして筋状にしたものとがある。

器種には深鉢と鉢があり，概して焼成度が良好で堅い。胎土には角閃石や石英・長石・白雲母などとともに，黄白色・白色・茶色・灰色をした細礫も含まれ，中には礫の多い粗いものもある。

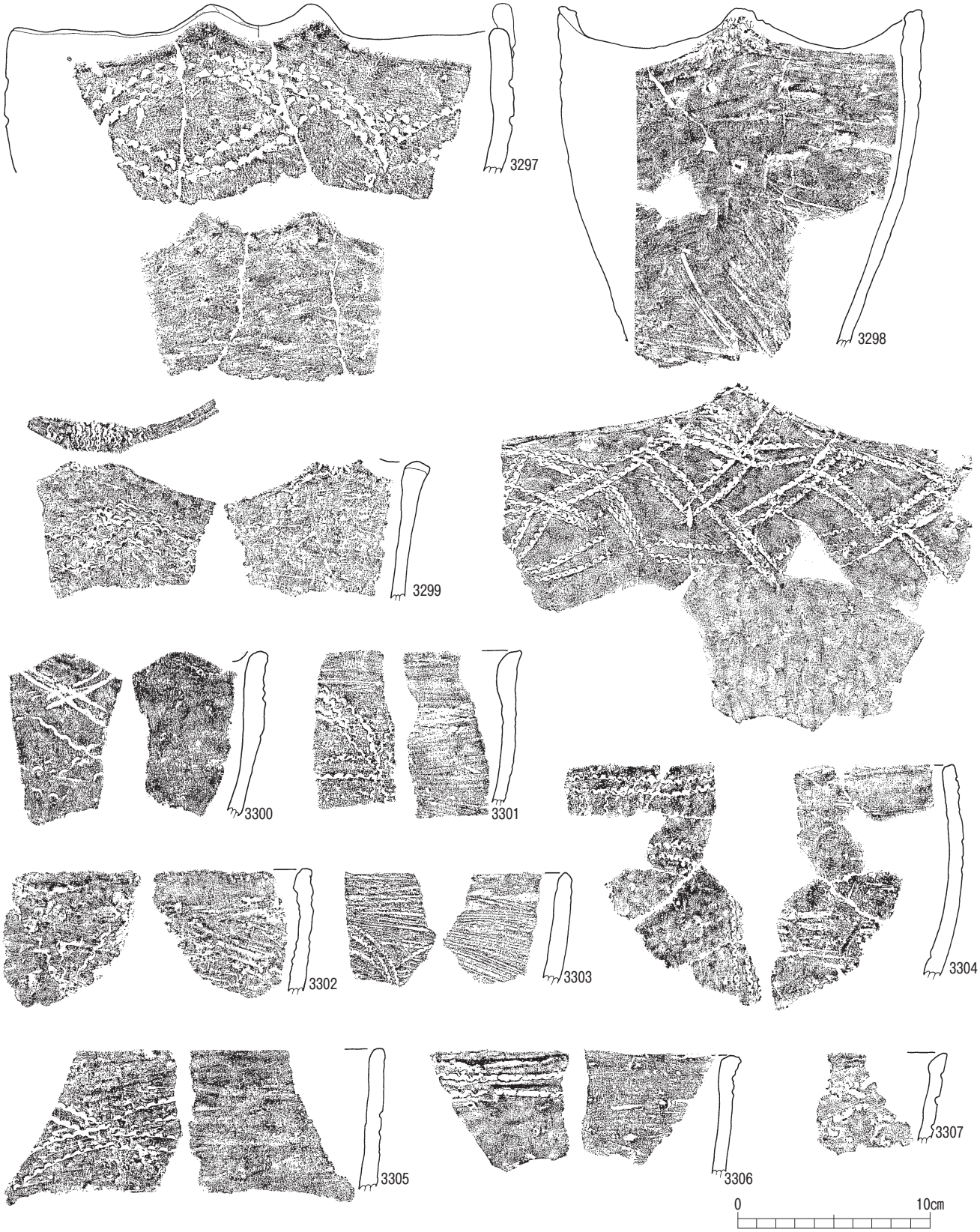
ア　深鉢（第421図～第425図 3292～3325）

器形は外へ開きながらまっすぐ伸びるものと，端部近くでくの字状に外反するものとがある。これらの多くは口縁部の３・４か所が山形の突起状となっているが，三角状に鋭く立ち上がるものが多い。この突起部内面は無文のものと，貝殻刺突文のものとがある。

3292は口縁部が３分の２ほど残っている大きな破片で，口径が13.2cmある。やや内反ぎみにまっすぐ立ちあがり，端部近くで短く外反する器形で，３か所に鋭い三角形状の突起がある。口縁部は概して分厚いが，突起部はさらにやや分厚くなっており，外面及び頂部に短い二枚貝腹縁の刺突文が見られる，内面は無文である。外面



第421図　指宿式土器（265）Ｖ類①



第422図　指宿式土器（266）Ⅴ類②

は二枚貝腹縁によって，２本の鋸歯状の刺突文が繰り返し施されているが，三角形の端は交差している。施文原体の長さは５㎝ほどである。突起部の下は三角形の交差部となり，突起部からこの交差部へ縦方向の同一原体による刺突文が２本施されている。内面調整は貝殻条痕であるが，胴部はヘラケズリ風にナデている。外面はヘラによる横ナデ調整となっている。

3293は波状となる口縁の波頂部破片で，頂部はやや分厚い。内外面ともヘラによる横ナデで仕上げ，外面には二枚貝腹縁による刺突文が３本あるが，下の２本は菱形のようにも見える。外面右下にドングリの殻の痕跡ではないかと思われるへこみがある。

3294は直口ぎみの器形で，口縁近くの内面が外側へくの字状に屈曲している。内外面とも丁寧なヘラナデで調整している。外面は二枚貝腹縁により，それぞれ２本の横方向とその下に鋸歯状の刺突文が見える。

3295は胴部から口縁へ向かってまっすぐ伸びながら，端部近くで内反して，また外反しながら端部へ至る。波状口縁で，頂部を欠いている。内外面とも条痕のあとヘラによる粗い横あるいは斜方向のナデ調整で，口縁近くの外面では貝殻刺突文をナデ消しているところもある。外面は２本となる二枚貝刺突文で横・斜め，矩形などの文様を作っており，頂部では上へ縦方向刺突文がある。

3296は外へ開きながらまっすぐ伸びる器形をし，端部は尖りぎみに細くなっておわる。内外面ともヘラによる横ナデ調整である。外面には２本の二枚貝腹縁で，口縁下に横方向，その下に鋸歯状の刺突文がある。

3297は開きながらまっすぐ伸び，口縁近くでやや内反ぎみとなる器形で，２か所に２段の山形突起が見られる。口径は36.8㎝で，内外面とも貝殻条痕のあと，ヘラで丁寧にナデている。突起部は内外とも無文で，外面口縁近くに２本の大きな二枚貝腹縁で，弧状・直線に刺突し，菱形状になっている。胎土に金雲母が含まれている。

3298は口径が19.2㎝となるやや細長い器形をしており，４か所に尖った突起がある。突起部内面から頂部にかけて二枚貝腹縁の刺突文が見られる。内外面ともヘラナデ調整だが，上部は横方向，下半は縦方向で，外面は丁寧にナデている。外面には２列の二枚貝刺突文が右下がり，左下がり，横方向に付され，菱形や三角形となる。

3299・3300は山形突起部である。

3299は肥厚した突起の頂部に数本の二枚貝の刺突文があり，ややへこんでいる。内外面とも粗い横方向のヘラナデで仕上げ，外面には斜方向に２本の二枚貝腹縁刺突文が２段に付され，鋸歯状を呈している。内外面ともススが付着している。

3300は丁寧な横方向のヘラナデで調整し，外面には突起部に向かって２本沈線が逆三角形に交差し，菱形文のように見せている。その下には２本となる二枚貝腹縁の刺突文が菱形に押されている。刺突文のあとをナデているため文様はうすい。

3301はほぼ直口状に立ち上がっており，端部は尖り気味に分厚くなっている。内面は貝殻条痕文が残り，外面は横方向のヘラナデで仕上げている。外面に二枚貝腹縁による刺突文が２本付され，上に鋸歯状の文様，その下に横方向の刺突文があり，さらに下へ縦方向の刺突文がある。

3302は平口縁だが，でこぼこしている。内外面とも粗いヘラナデ調整である。外面に二枚貝腹縁による２本の刺突文があり，鋸歯状を呈する。胎土は６㎜大ほどの小石も含む粗い土である。

3303は内外面ともヘラによる横ナデ調整で，外面には２本の二枚貝腹縁の刺突文が重弧文状に付されている。

3304はやや内反気味に立ち上がる器形を呈し，波状口縁となる。いずれも２本の二枚貝刺突文がセットとなり，縦方向と横方向に付され，矩形を呈している。突起部と思われる部分では縦方向に胴部の下へ長く刺突文が伸びている。

3305はまっすぐ立ち上がる器形を呈し，内外面ともヘラによる横方向のナデ調整である。外面には２本の二枚貝腹縁による刺突文が斜方向に施され，幅の狭い菱形状を呈する。

3306はまっすぐ立ち上がる器形をしているが，口唇部外側をヘラで押さえており，外面はかぶったようになっている部分もある。内外面ともヘラによる横ナデ調整だが，外面は丁寧にナデている。外面に二枚貝腹縁の刺突文が２本施されている。

3307もまっすぐ立ち上がる器形だが，端部の内面を押さえて尖り気味にしている。内外面ともヘラによる横ナデで，外面に巻貝殻頂による刺突文が菱形風に施されている。

3308～3311はまっすぐ立ち上がり，口縁端が尖り気味となるもので，外面に２本の二枚貝腹縁刺突文があり，波状口縁の突起部内面にも２本の二枚貝腹縁の刺突文がある。

3308は口径16.4㎝とやや小型で，４か所で三角形状に鋭い突起部が見られる。内外面とも貝殻条痕のあと，丁寧なヘラナデで調整しており，外面には細かい二枚貝腹縁で幅が狭く横長の菱形文らしき文様が描かれる。突起部内面には逆三角形が施されている。

3309は内外面ともヘラによる丁寧な横ナデで，外面には横方向と鋸歯状の貝殻刺突文があり，その下に横方向のヘラ沈線がある。内面にも左下がりと横方向の貝殻刺突文がある。

3310・3311は同一個体と思われる。内外面とも深い貝殻条痕のあとヘラによる横ナデで調整している。

3311は口径が19.6㎝で，口縁部は低い山形突起が４か

所にある。突起部は内側を膨らませ，ここに縦方向の５本のヘラ刻みがある。外面は３本の重弧文あるいは鋸歯文が描かれている。

3312～3317は山形となる突起部で，3312を除いてこぶ状を呈しており，突起の内面には５・６本の逆三角形となる二枚貝腹縁の刺突文がある。刺突文はいずれも２本の二枚貝刺突文からなる。調整はヘラによる横ナデが多いが，3315・3316は丁寧で，3317の内面は貝殻条痕である。

3312の突起部は三角形を呈し，内面には逆三角形の中央に縦線のある刺突文がある。外面文様は菱形あるいは三角形を意図している。胎土には茶色・黄白色などの小石を多く含んでいる。

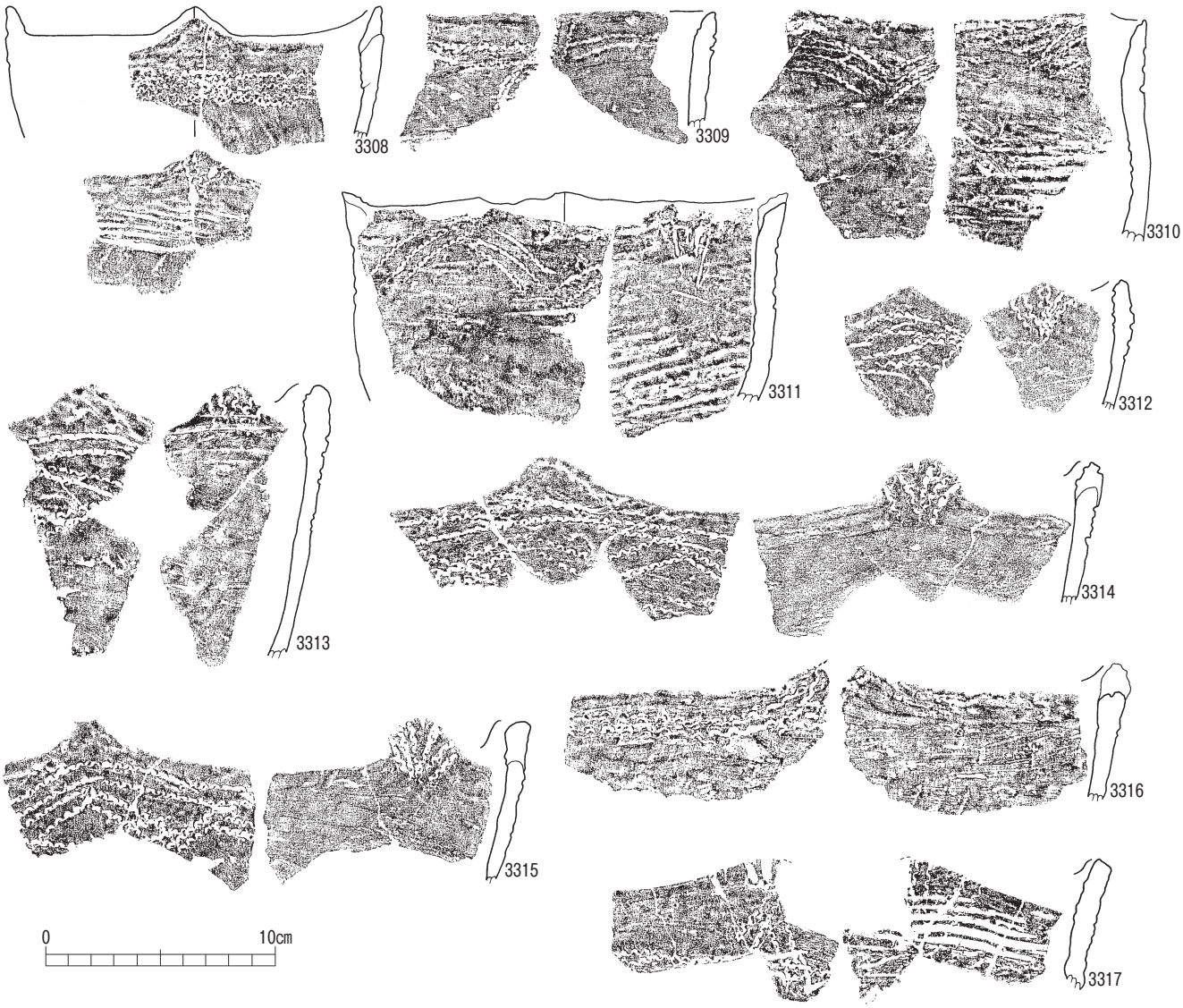
3313は内面をヘラケズリしているために薄い作りだが，突起部は分厚い。突起部の内面には逆三角形の貝殻刺突文とその中央縦方向に１本の貝殻刺突文がある。外面文様は三角形，あるいは菱形を呈している。

3314・3315は同一個体と思われ，こぶ状の突起がある。突起内面には右下がり２本，左下がり３本の貝殻刺突文がある。外面文様は上下に横方向の刺突文があり，その間に鋸歯文が施されている。

3316も同じような突起部をもち，外面は口縁近くに横方向の貝殻刺突文があるが，突起部では上へゆるやかに上昇し，その下にも横方向の文様がある。茶色石を多く含んでいる。

3317の突起部は他のものに比べ，ゆるやかな山形である。内面の条痕は粗い。突起部は外面が３本以上のヘラ押圧文，内面が３本以上の浅い二枚貝腹縁の刺突文である。その右手にも浅い左下がりの二枚貝刺突文がある。外面は横方向の二枚貝腹縁の刺突文があるが，突起部ではその上へ三角形状に立ち上がる。

3318は胴部下半が異状にすぼまり，胴部上半から口縁



第423図　指宿式土器（267）Ⅴ類③

部にかけてもいびつにゆがんだ器形をしている。口径は最大29.4cmあり，山形突起が４か所ある。突起の形状は２種類あり，１組は２つ山からなる高い突起，１組は低い山形突起である。いずれも口唇部から内側にかけて，６～８本の二枚貝腹縁による縦方向刺突文が見られる。調整は内面が貝殻条痕のあとヘラナデ，外面の上半がヘラによる横ナデ，下半がヘラによる粗い斜方向ナデである。外面の口縁部近くに二枚貝腹縁の刺突文が横方向に３段施されている。

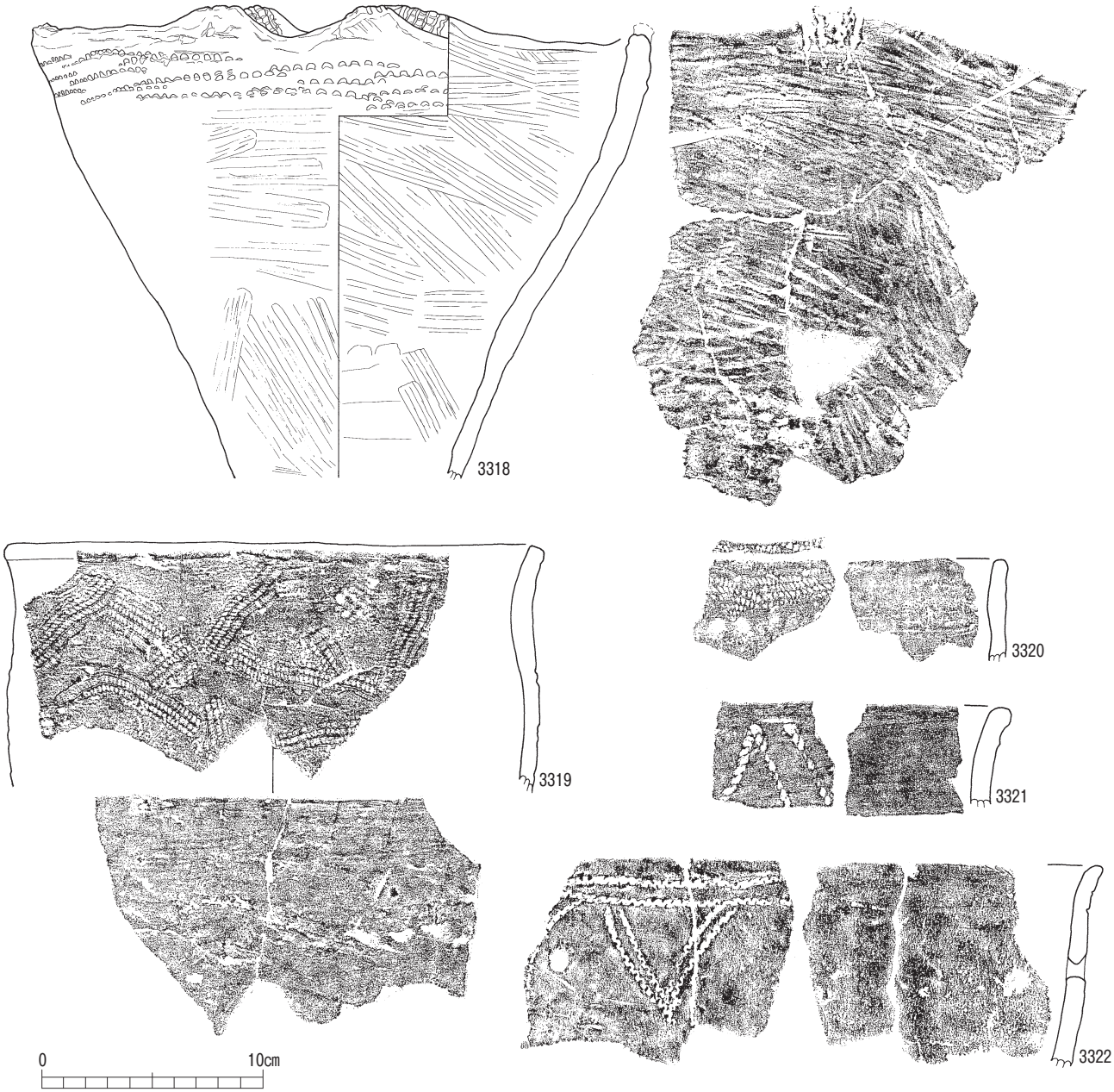
3319はゆるやかに外反する器形をし，口径は24cmある。内外面とも巻貝（ヘナタリ）の殻頂部を３本くっつけて転圧しており，三角形あるいは菱形を呈している。内面はヘラによる横ナデ調整である。

3320は直口する器形で，口端部近くにヘナタリの殻頂部を横方向に４本転圧している。口唇部には巻貝殻頂を横方向に刺突している。

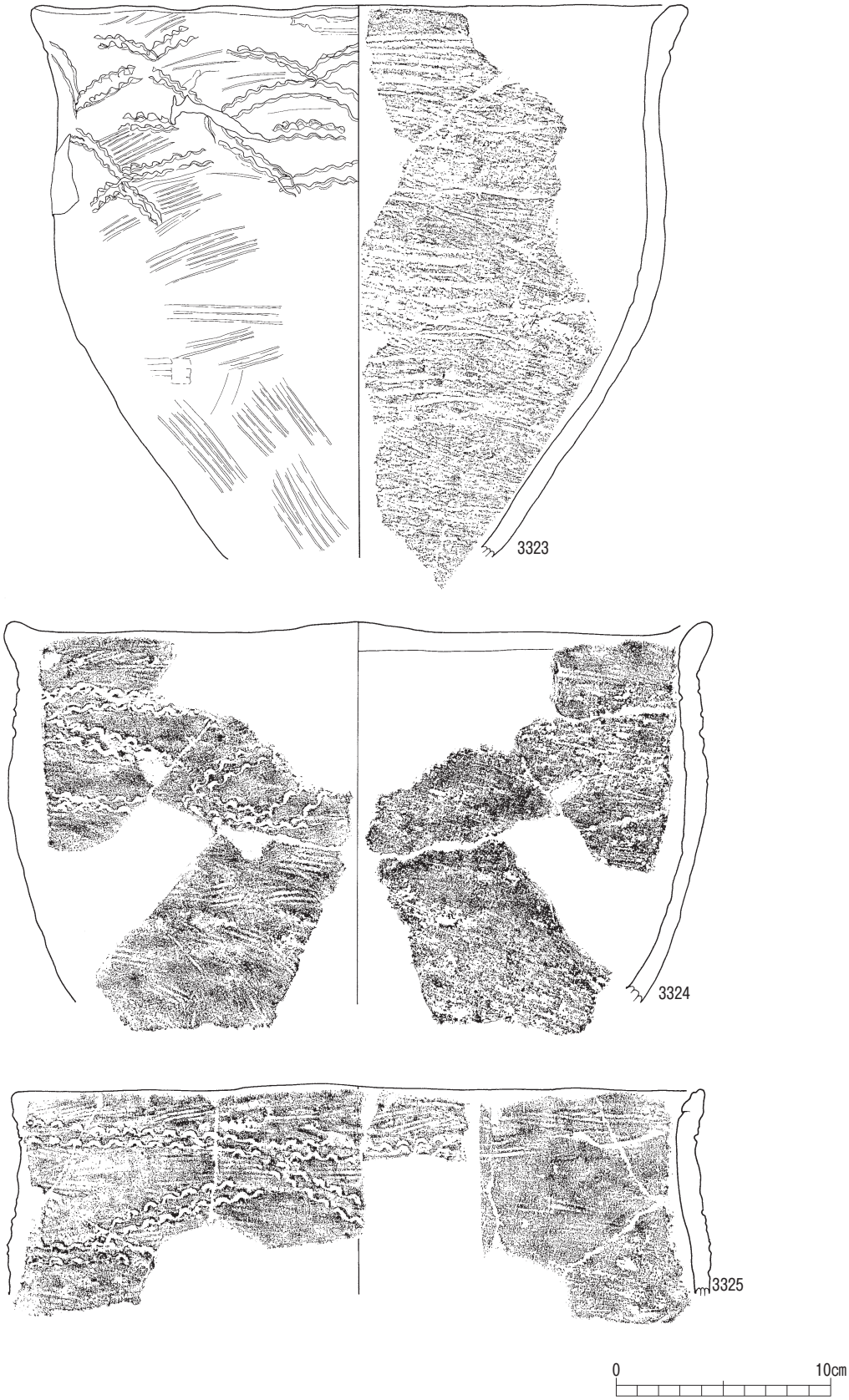
3321・3322は口縁端近くで外反する器形である。

3321の内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。外面に巻貝の刺突文が見られる。２本刺突で三角形を呈しているが，２本の幅は他のものに比べて広い。

3322もヘラによるナデ調整だが，内面は横方向，外面は縦方向である。外面には二枚貝腹縁による２本の刺突文が見られる。口縁近くで横方向に押し，その下に逆三角形が描かれている。胴部に補修孔が見られる。



第424図　指宿式土器（268）Ⅴ類④



第425図　指宿式土器（269）Ⅴ類⑤

3323～3325は外反する器形をしており，直口するものと比較すればやや大型である。山形突起は見られない。

3323は口径が31cmあり，平口縁だが，でこぼこした作りである。内面は横方向の貝殻条痕，外面は貝殻条痕のあとヘラナデで調整している。外面は口縁近くに二枚貝腹縁による斜方向の直線や弧状の刺突文が見られ，菱形状を呈している。菱形の中に横方向の刺突文も見られ，それぞれの交差部分から外へ長くはみ出しているため，２段以上の菱形文のようにも見える。胎土に白色・茶色・黄白色・灰色などの細礫が含まれており，中には６㎜大のものもある。

3324と3325は同一個体と思われる。４か所に低い波状突起が見え，口径は32.5～33.5cmある。口縁端は細く尖ったようになっているが，突起部は分厚く作っている。内外面とも貝殻条痕のあと，横方向のヘラナデで調整している。外面には２本の横方向や斜方向の二枚貝刺突文があり，菱形や逆三角形を呈してる。

イ　鉢（第426図 3326～3329）

頸部がくびれる壺形のものと，口縁端へ内反するものとがある。

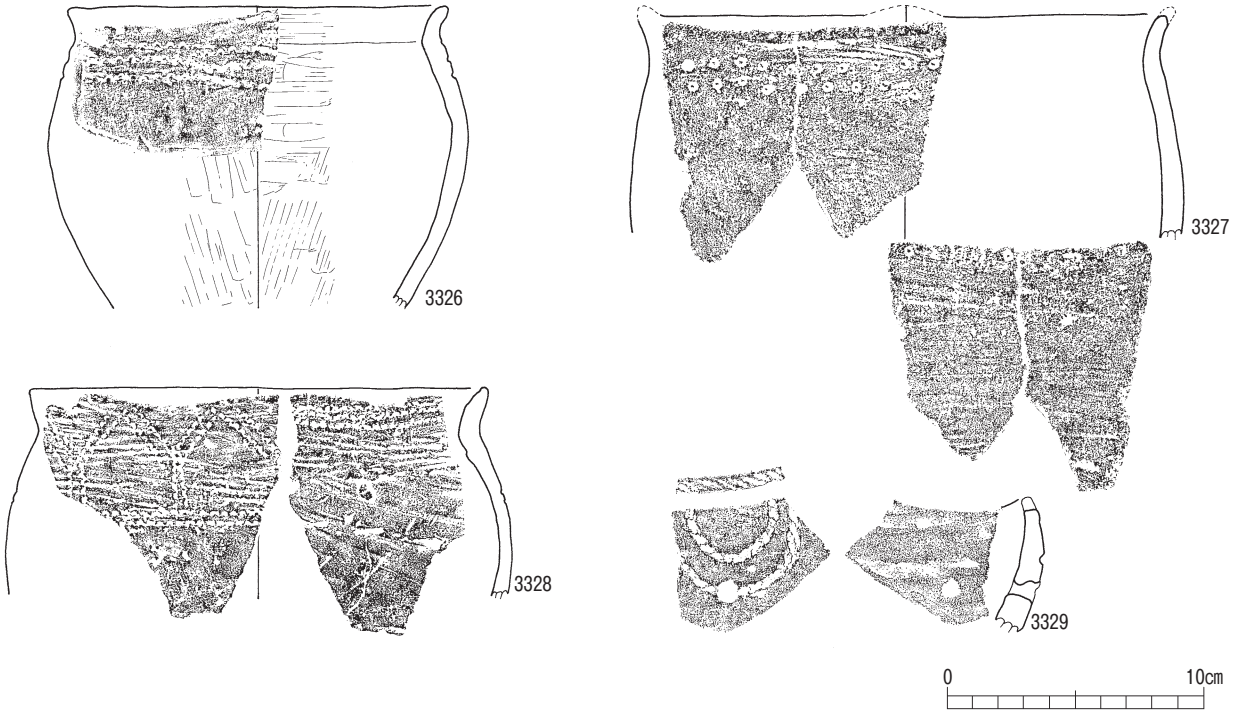
3326～3328は頸部でくびれて，短い外反する口縁へとなるものである。

3326は波状とはいえないが，口縁端がでこぼこし，６か所ほどで突起部様にやや高くなる。口径は15cmと小型である。作りが雑で，器面はでこぼこしているが，表面はヘラによって横方向に丁寧にナデている。頸部から肩部にかけて二枚貝刺突文が横方向に３段押されているが，波状突起部では４段になり，斜方向のものもある。

3327は口径が20.6cmあり，頸部の屈曲がややゆるやかである。４か所にゆるやかな低い山形突起が見られる。外面には巻貝殻頂の竹管様刺突文が２段に付されている。内面にも口縁端近くに同様の竹管様刺突文が１列付されている。内外面ともナデ調整で，外面は摩滅している。ピンクがかった淡茶褐色を呈しており，指宿地方産のものと思われる。

3328は口径が18cmあり，内外面とも条痕のあとヘラナデ調整である。文様は２本の二枚貝刺突文で作られている。外面には上に鋸歯文，下に横線を描いており，その間を縦線でつないでいる。内面にも口縁端近くに２・３本の横方向刺突文が施されている。

3329は内反し，波状口縁となる器形をし，内外面とも横方向の丁寧なヘラナデで仕上げている。外面には連続する巻貝による刺突文で弧状文を２段に描いている。口唇部にも巻貝転圧文が見られる。補修孔が見られる。



第426図　指宿式土器（270）Ⅴ類⑥

（6）Ⅵ類土器（第427図～第430図 3330～3359）

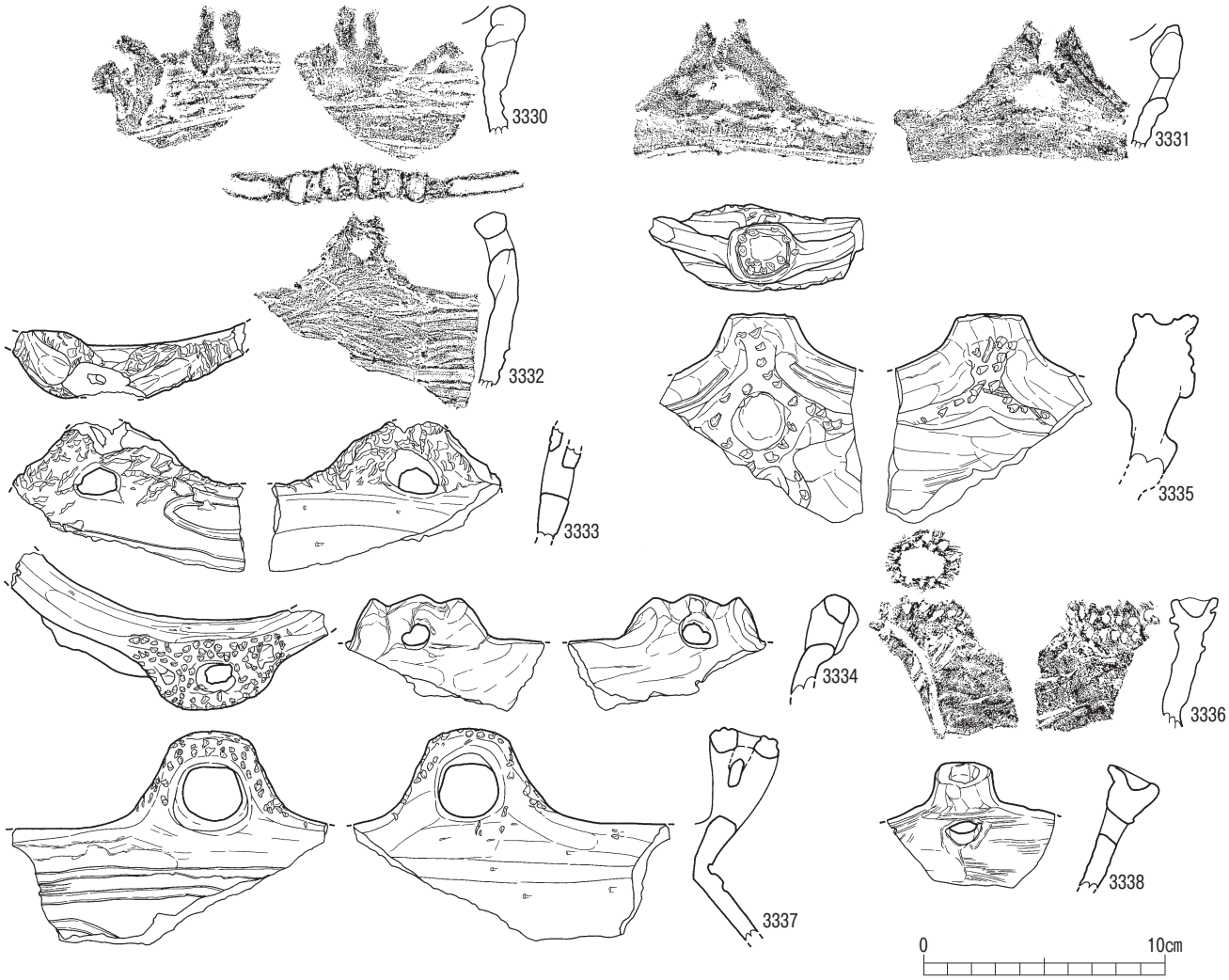
Ⅵ類土器は，口縁部に付けられている立体的な飾りをもつ突起や把手である。突起には，口縁部に飾りをつけた立体的なもの，突起部を平面的に伸ばして透孔を施すもの，突起部に凹みのある円筒状のものをつけるものなどがある。把手には，橋状部が１本のもの，橋状部が１本から枝分かれするもの，橋状部が２本のものなどがある。突起部や把手部には，貝殻腹縁部による刺突文が施されているものがある。

3330～3338は，突起部である。

3330は，口縁部に粘土紐を内面から外面へ折り曲げ突起としている。3331は，口縁部に粘土紐を橋状に貼り付け突起としている。橋状にすることにより三角形状の窓がつく。3332は，山形の粘土を口縁部に貼り付け突起としているものである。山形の突起部には透孔が施されている。突起には，上面・側面に棒状工具の押圧により刻みが施されている。3333は，口縁部にねじった粘土紐を橋状に貼り付け突起としている。橋状にすることにより円形の透孔がつく。突起部には，貝殻腹縁部による刺突文が施されている。3335・3336は，口縁部に浅い凹みのある円筒状のものを貼り付け突起としている。3335・3336は，突起に巻貝殻頂部による刺突文が施されている。3335は，突起の外面にも粘土を貼り付け凹みを作出している。3337は，口縁部に粘土紐を橋状に貼り付け突起としている。橋状にすることにより，円形の窓がつく。突起頂部を幅広く仕上げるとともに，上面・両側面から穿孔している。突起部には巻貝殻頂部による刺突文が施されている。

3339～3359は，把手部である。

3339～3345は，橋状部が１本になっているものである。3339は，幅広の粘土紐を口縁部から胴部上部に橋状に貼り付け，把手としている。橋状部にはさらに細い粘土紐を溝を作出するかのように貼り付けている。また，橋状部の途中から口縁部に細い粘土紐を２本ずつ左右に貼り付けている。3340は，口縁部に粘土紐を貼り付け，その前面にさらに粘土紐を貼り付け立体的に仕上げ突起としている。上面・両側面・前面に透孔を設けている。この突起下部から横長や縦長の矩形の透かしのある橋状部が伸びている。3341は，口縁部を台形状に伸ばし，そこに上面に穿孔のある把手を橋状に貼り付けている。把手上



第427図　指宿式土器（271）Ⅵ類①

第428図　指宿式土器（272）Ⅵ類②

面や上部には，沈線や貝殻腹縁部による刺突文が施されている。3342は，口縁部を台形状に伸ばし，そこに凹みのある把手を橋状に貼り付けている。橋状部の上部上面に透孔を施し，その周りに沈線文や貝殻腹縁部による刺突文を施している。3343は，凹みのある厚い突起を作出し，この突起下部から橋状に把手を貼り付け，さらに突起上部から橋状把手へ把手を貼り付ける二重把手のものである。3344は，上面・両側面・前面・背面に透孔のある突起を作出し，この突起下部から橋状の把手を貼り付けている。突起部には，貝殻腹縁部による刺突文が施されている。3345は，口縁部に粘土紐を橋状に貼り付け突起としている。この突起下部から粘土紐２本を一つにして橋状に貼り付け把手としている。さらに，突起上部から下の把手へ粘土紐２本を１つとして貼り付け把手としている二重把手である。

3346～3348は，凹みのある円筒状の突起部を作出して

いる。3346は，口縁上部から太い粘土紐を貼り付け把手としている。3347は，口縁部に太い粘土紐を貼り付け把手としている。さらに，突起下部から下の把手へ粘土紐を橋状に貼り付け把手としている二重把手のものである。3348は，口縁部に太い粘土紐を貼り付け把手としている。さらに，突起下部から下の把手へ粘土紐を橋状に貼り付け把手としている二重把手のものである。3347・3348は，突起部・把手部に巻貝殻頂部による刺突文が施されている。

3349は，透孔のある円筒状の突起を付けたものである。この突起部から橋状の把手がつくものと思われる。突起部には，螺旋状に沈線文が施され，沈線間には貝殻腹縁部による刺突文が施されている。

3350は，口縁部に透孔のある板状の粘土を水平に貼り付け，これに粘土紐を２本ひろがるように貼り付け把手としている。把手には，巻貝殻頂部による沈線文が施されている。

3351は，２本の粘土紐を橋状にＸ字状に貼り付ける把手部である。把手上部には，細い粘土紐を４本貼り付けている。

3352は，口縁部にやや幅広の粘土紐を橋状にＸ字状に貼り付け把手としている。把手の中程に円形状に粘土を貼り付け，凹みを作出している。

3353は，浅い凹みのある平べったい円筒状の突起部を作出している。この突起下部から幅広い粘土紐を橋状に貼り付け把手としている。把手下部は，２本に分かれている。

3354は，口縁部に２本の粘土紐を橋状にＸ字状に貼り

第429図　指宿式土器（273）Ⅵ類③

第430図　指宿式土器（274）Ⅵ類④

付け把手としている。また，台形状の波頂部に粘土紐を橋状に貼り付けた二重把手のものである。

3355は，口縁部に２本の粘土紐を橋状にＸ字状に貼り付け把手としている。

3356・3357は，凹みのある円筒状の突起部を作出している。3356は，突起下部から粘土紐２本を広がるように橋状に貼り付け把手としている。3357は，口縁部に２本の粘土紐を貼り付け把手としている。さらに，突起上部から下の把手へ粘土紐を橋状に貼り付けた二重把手である。

3358は，口縁部に２本の粘土紐を橋状に貼り付け把手としている。把手の上部には，円筒状の突起を柱状の粘土紐４本で口縁部・把手とつないでいるものである。外面側２本の柱状粘土紐には，粘土を貼り付け凹みのあるボタン状の飾りをつけている。3359は，口縁部に２本の粘土紐を橋状に貼り付け把手としている。把手の上部には，さらに粘土紐を縦・横・橋状に貼り付け透かしのある立体的な飾りとしている。3358・3359はともに，把手部に巻貝殻頂部による刺突文が施されている。

（7）Ⅶ類土器（第431図～第453図）

Ⅶ類土器は，胴部に文様のない土器で，器種には深鉢・鉢・小型土器などがある。

ア　深鉢（第431図～第450図 3360～3472）

器種は内反するものと，直立するもの，外反するものなどがあるが，直立するものが多い。ただ，内反するものと直立するものは区別困難なものも多い。また，口縁部は平口縁のものが多いが，突起のあるものも少なくない。

3360～3395は突起を有するもので，４か所にあるものが多いが，他に３か所のもの，２か所のものがあり，１か所だけのものもある。

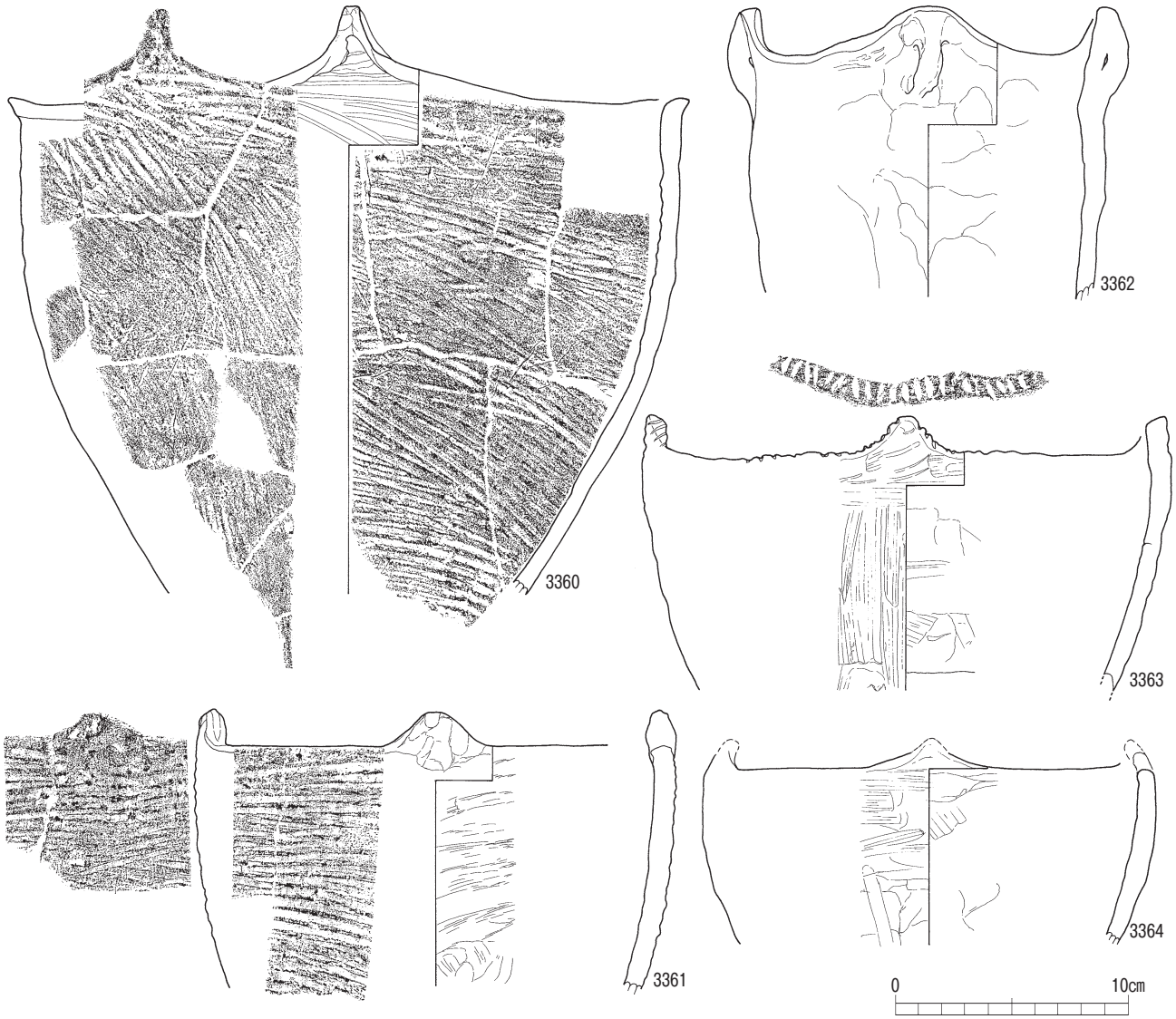
3360は１か所に高い突起があり，口径は29.5cmである。口縁端部はゆるく外反している。

3361～3364は４か所に小さな突起があり，口径は16.2～20.8cmと割と小さい。突起部は小さい三角状のものと，ゆるやかな山形を呈するものとがある。3362は口径が16.2cmと小さいもので，外面に象の鼻状の棒状把手が付いている。3363は三角状にとがった突起で，突起を中心として広く口唇部にヘラ刻みが見られる。3364は内弯する器形で，口径は18cmである。

3365は４か所に突起があるが，対面する２か所ずつが同じで，２種類の突起がある。１組は２つの高いこぶ状の突起が連なっており，あとひとつは台形状の突起となっている。口径は28.6cmである。

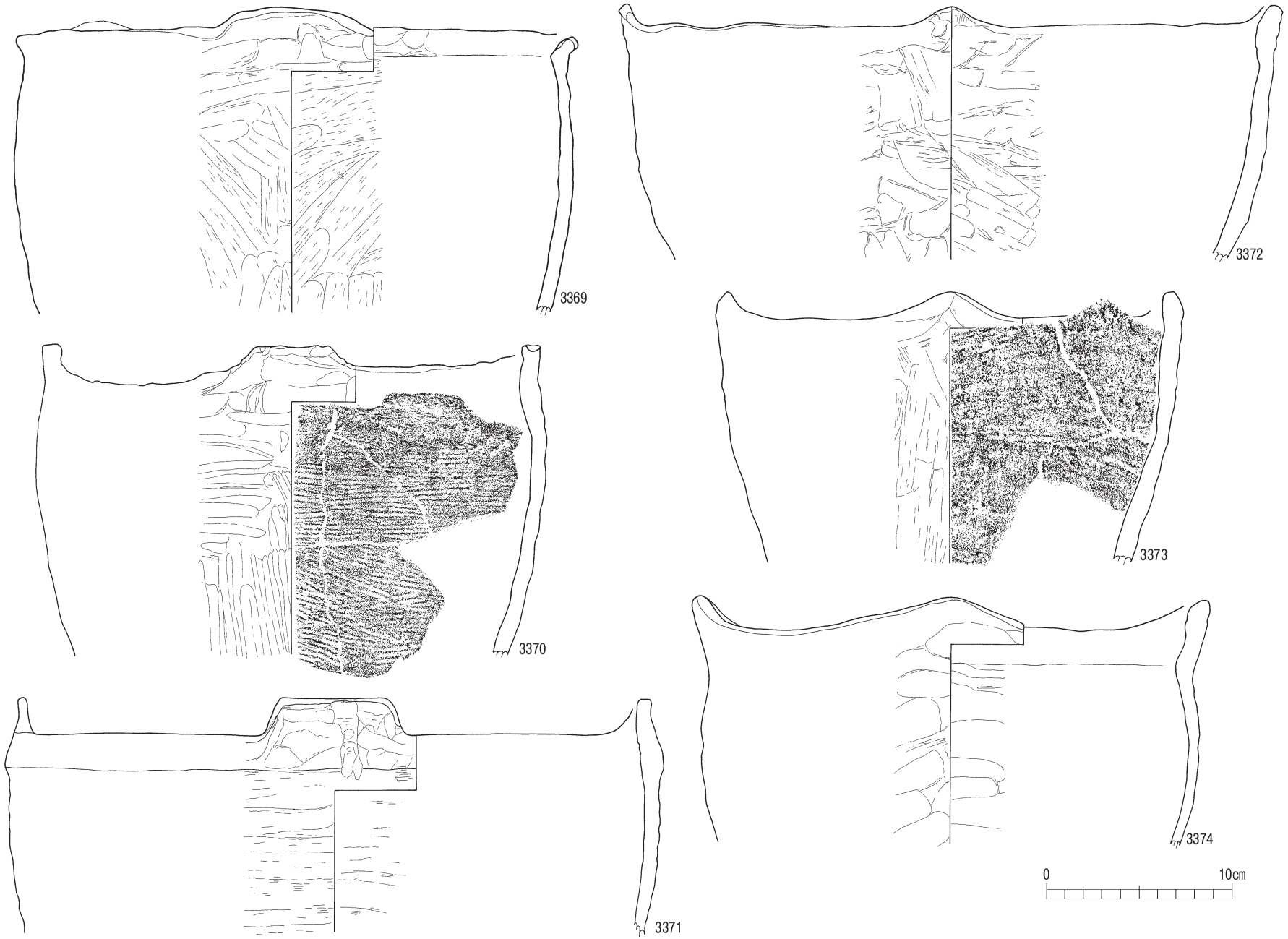
3366は口径が40.4cmと大きく，幅の広い山形突起が４か所にある。

3367と3368は口径が24.5cmと26.4cmのもので，ともにねじり紐を用いた突起であるが，3367が４か所にあるのに対し，3368は２か所だけにある。3368は２本の紐をねじって５つの稜を作っているが，両端だけが内面に貼り付けられ，中央の３つは口唇部にのせている。



第431図　指宿式土器（275）Ⅶ類①

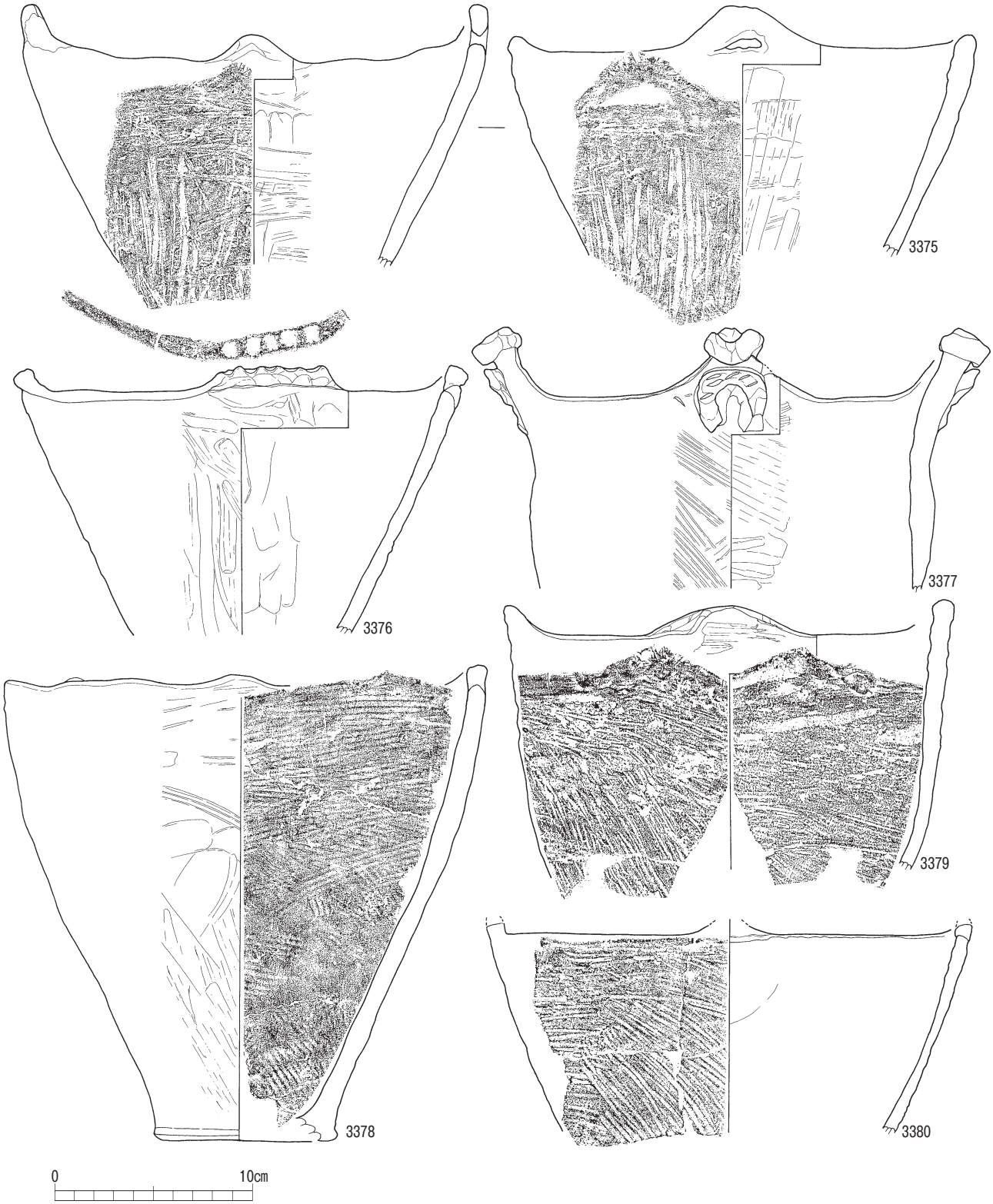
第432図　指宿式土器（276）Ⅶ類②



第433図　指宿式土器（277）Ⅶ類③

3369～3371は台形状の突起があるもので，3369が幅広のゆるい山形突起が２か所にあるのに対して，3370・3371は頂部が直となる台形状の突起が４か所にある。3369は口縁端が外へ強く屈曲する器形を呈しており，口径は29.8cmである。3370は突起頂部に楕円形の窪みがあり口径が27cmで，外面にふきこぼれ痕が残っている。3371は口径が36cmである。

3372～3374は山形突起が４か所にあるもので，口径は24.4～35.2cmある。3372のように小さな突起と，3374のようにゆるやかに広がるものとがある。



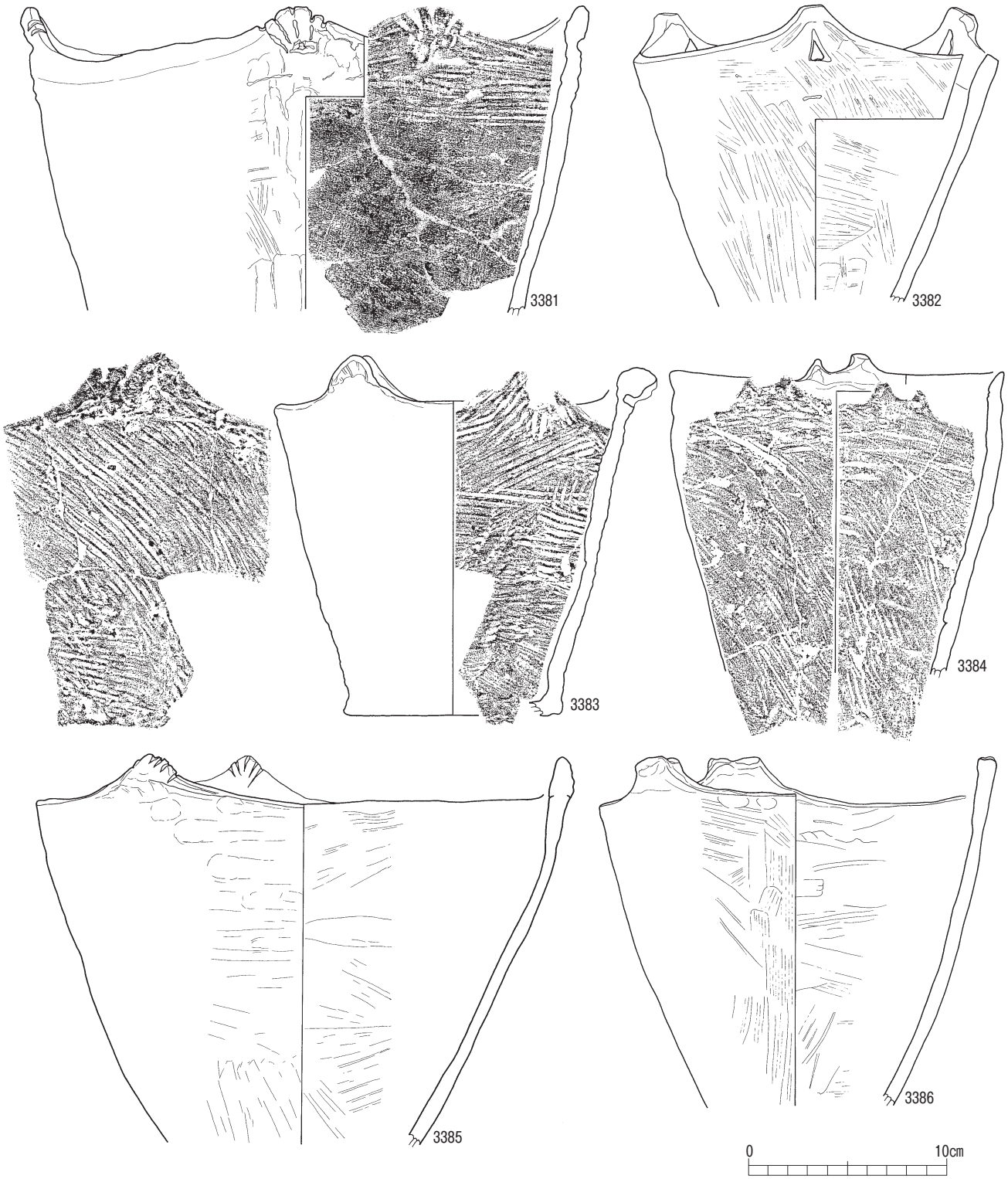
第434図　指宿式土器（278）Ⅶ類④

3375は口径が24cmで，４つの突起のうち対面する突起同士が同じで，２種の突起がある。１組は小さな三角突起で，あとの１組は1.5cmほど高い山形突起で，下に透しがある。

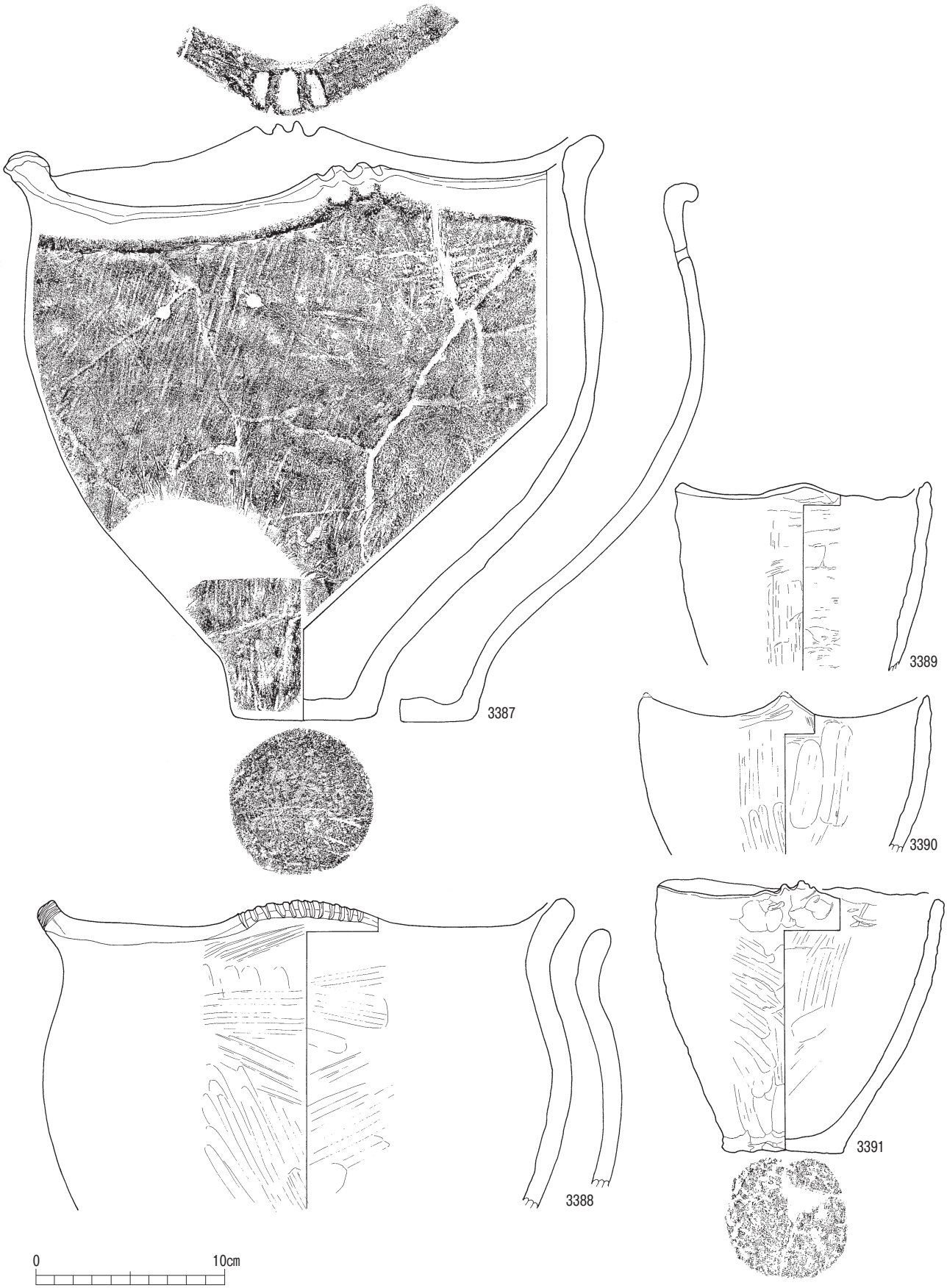
3376の突起頂部は粘土の貼り付けで作られ，５か所にヘラ押圧文がある。

3377は４か所に王冠状突起があり，口径は26.5cmである。突起の下外面には逆U字形の突起が貼り付けられている。

3378は口径23cm，底径8.5cm，高さ24.6cmで，３か所に



第435図　指宿式土器（279）Ⅶ類⑤



第436図　指宿式土器（280）Ⅶ類⑥

山形突起があるが，突起の場は均等でない。底部は網代底で，白粉が付いている。3379･3380は４か所に突起があるが，3379はゆるやかな山形，3380は小さな三角形である。

3381は口径が30.4cmで，４か所に突起がある。突起の内面から外面にかけて４つのヘラ押圧が見られる。

3382～3386（3384は除く）は３か所に突起がある。3382は高い三角突起で，下に二等辺三角形の透しがあり，口径は18.6cmである。3383は口径16.8cm，底径11cm，高さ18.4cmで，突起はねじり紐による。底は網代痕である。3385は突起内面に５つのヘラ刻みが，3386は突起中央がへこむもの，口唇部がへこむものなど突起の場所により頂部文様が異なる。

3384は２か所に２こぶの突起があり，口径は17cmである。

3387と3388は外反する口縁部で４か所に突起があり，突起口唇部には3387が３，3388が12のヘラ刻みがある。突起部は分厚く，3387の口縁は逆Ｌ字状を呈している。3387は口径32.2cm，底径８cm，高さ32cmで，底部は丸みをもって平底へ移っている。

3389は口径が13.2cmと小さい土器で，４か所に山形突起がある。

3390と3391は平底からまっすぐ立ち上がるもので，ともに三角突起である。口径は15cmと14cmあり，3391は口径が14cm，底径が6.5cm，高さが14.8cmである。3391は口唇部に４つのヘラ刻みがあり，3391の底は鯨骨痕のあとナデている。

3392と3393はまっすぐ立ち上がり，3392は４か所，3393は２か所に２こぶの突起がある。口径は27.8cmと20.3cmである。

3394と3395は20cm前後の鉢である。

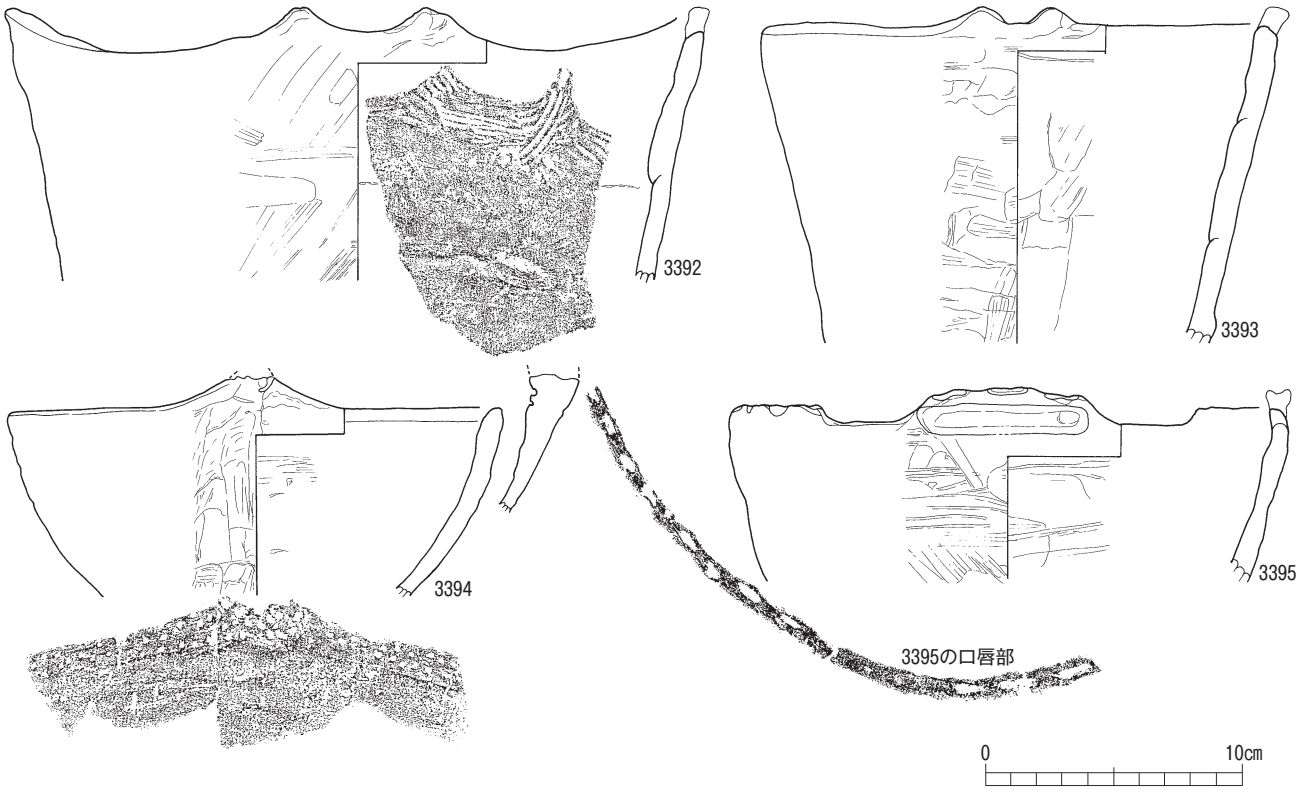
3394は突起先端が欠けているが，２か所に山形突起がある。内面の口縁端付近に２段と，突起部周辺に巻貝刺突文がある。

3395は台形状突起が２か所にあり，やや間をおいて，やや高い矩形突起がある。突起の口唇部には巻貝刺突文があり，台形突起外面には矩形状の窪みがある。

3396～3422はやや内傾ぎみとなる器形をするもので，まっすぐ伸びるものと，強くすぼまるものとがある。

3396～3400はややまっすぐ立ちあがるものだが，3397はやや内反ぎみとなる。口径は3399のように18cmしかないものから3396のように23.6cmあるものもある。

3401～3408は内反ぎみのものが多く，無文のものは概してヘラナデ仕上げが多いのに対して，3401や3404などは貝殻条痕を広く残している。3401は口径36cmと大型で，表面はでこぼこしている。3402は口縁端が尖っており，口縁下がやや窪んでいる。3403は口径が24.5cmである。内面の口縁端近くにヘラによる縦沈線が並んでおり，その下には横長矩形となる沈線も見られる。3405の内面はヘラナデ仕上げだが粗い。3406は口径が19.4cm



第437図　指宿式土器（281）Ⅶ類⑦

で，ヘラナデ調整をしているが，いびつな形状とともに調整も手ずくね風に雑に作っている。3407も口径が21.4cm×23.5cmといびつな形をしている。低い突起が３か所に見られ，口縁端近くに粘土を貼り付けて，突起を意図した痕跡がみられる。3408は口径が22.5cmあり，口縁部はでこぼこしている。内面は口縁近くで段をもっており，丸みをもった球形状をしている。

3409～3413も同じようにやや内反するものだが，3409のように口径が35cmあるものもある。作りはいずれも雑で，口縁部はでこぼこしている。3410は貝殻条痕仕上げだが，焼成度が良くないため内面は摩耗が目立つ。

3411は口縁端でやや内弯する器形で，口径は23cmである。作り，調整とも雑である。3412は口径が15.2cmと小型で，雑な作りとなっている。3413も雑な作りで，口径は27～30cmといびつになっている。

3414～3418は強く内弯する器形で，口径は27.6～35.6cmである。3415は内弯度の強い細長い器形で，口縁がでこぼこしており，幅も広がったり狭かったりしている。3417の口縁端は玉縁状となる。

3419も内弯度が強く２か所に突起があるが，ひとつの突起の近くには小さな突起も見られる。口径は21.8cm×22.7cmとひずんでいる。

3420もやや内反し，端部は太くなっている。

3421・3422は端部が矩形となって，まっすぐ伸びている。口径は22.4cm，22.8cmである。

3423は口縁端へ粘土を貼り付けて内側へ肥厚しており，細長い器形で，口径は30.3cmある。

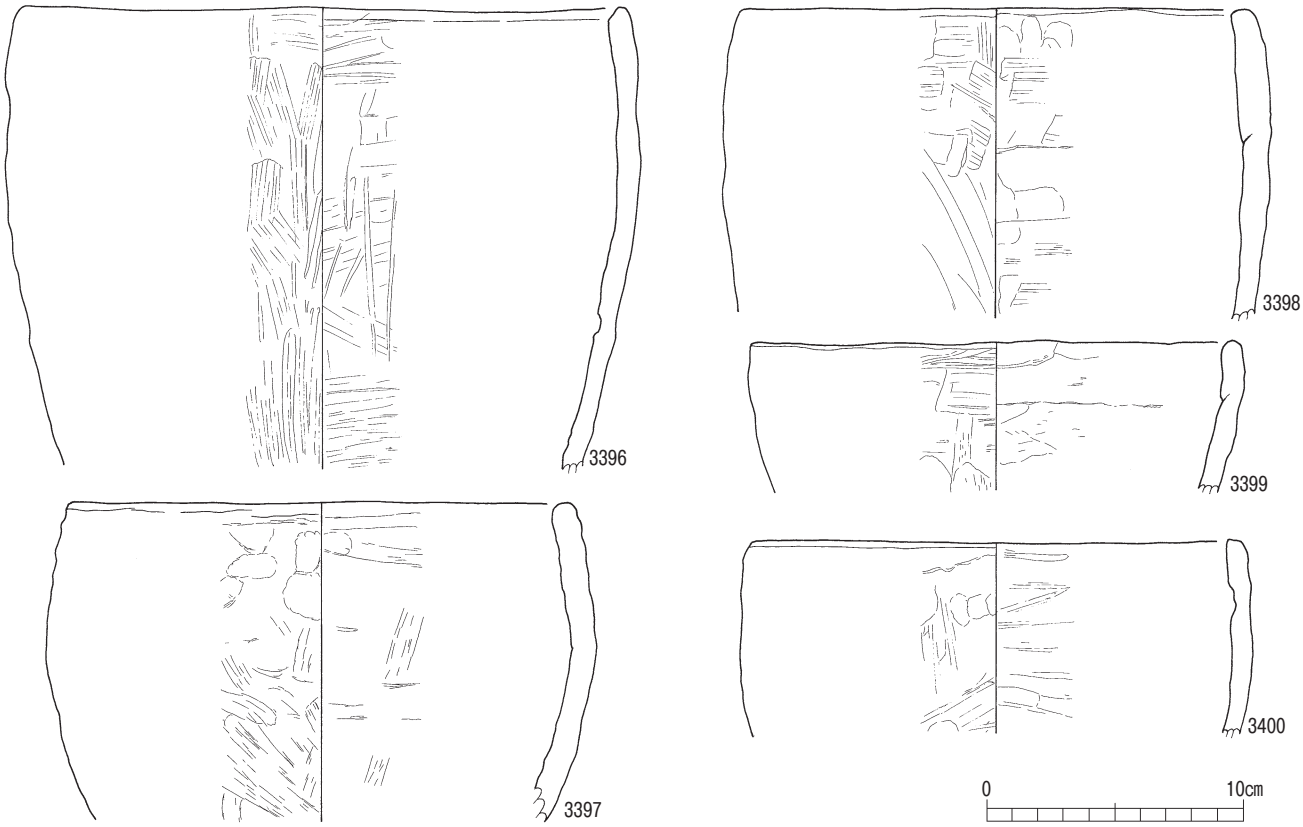
3424は口縁部が直に立ち，上部が肥厚している。口径は20cmである。

3425～3451もやや内傾するか，まっすぐ立ち上がる器形をしている。3425・3430・3437・3442には補修孔があるが，3442の補修孔は縦に２個並んでおり，片側にも２個あるものと思われる。

3425は口径24cm，底径９cm，高さ17cmで，底はヘラナデで仕上げ，白粉が付着している。3426は外面にふきこぼれ痕が，3434にはドングリの殻らしい痕跡が見られる。3446は口縁端に粘土を貼り付け，幅８cmの突起を作り，口唇部には８か所に刻みがある。3447はでこぼこした口縁だが，低い突起が４か所にある。

3452～3471は口縁部がゆるやかに外反する器形で，口径は15～39.5cmと大小ある。3453は口径が32.5cm，底径10.2cm，高さ35cmで，低い突起となり，底はヘラナデ調整である。3455は口縁端が矩形を呈し，口径は39.6cmと大きい。3457は口唇部の５か所に５つ～７つのヘラ刻みがある。

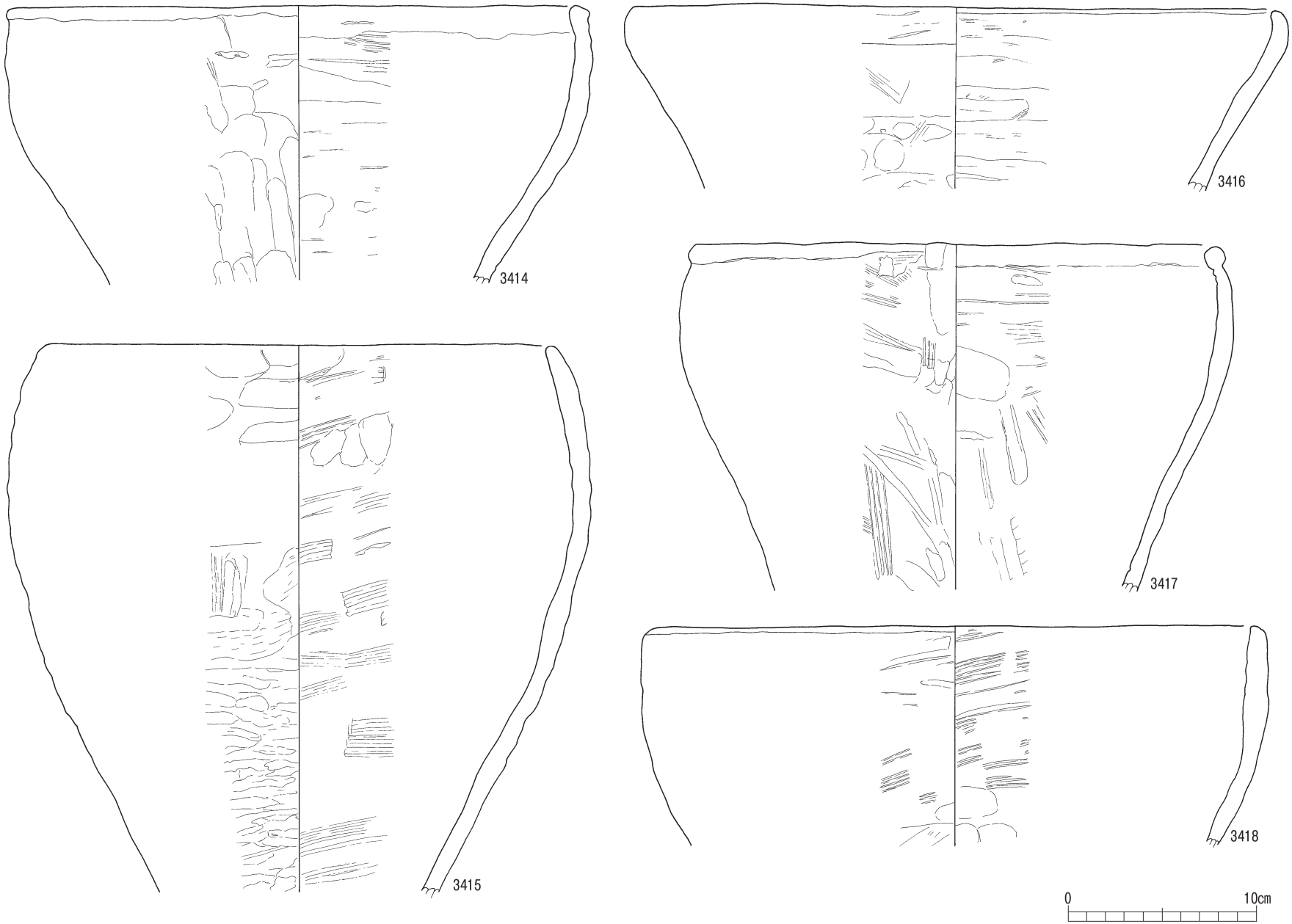
3460～3464や3470・3471は長胴形を呈している。3461は口径が26.8cmで，４か所に粘土紐を貼り付けて蛇状とした突起がある。



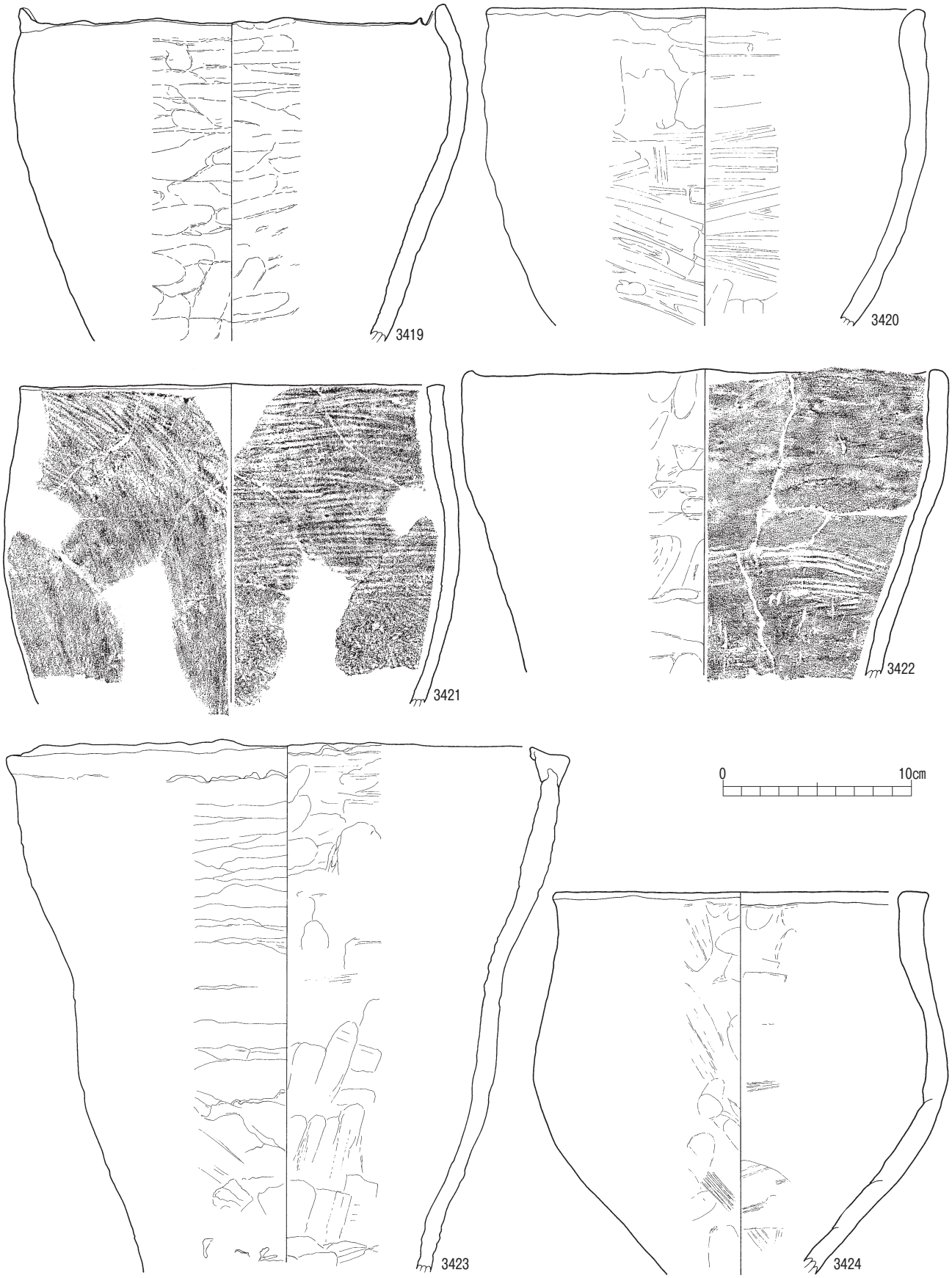
第438図　指宿式土器（282）Ⅶ類⑧

第439図　指宿式土器（283）Ⅶ類⑨

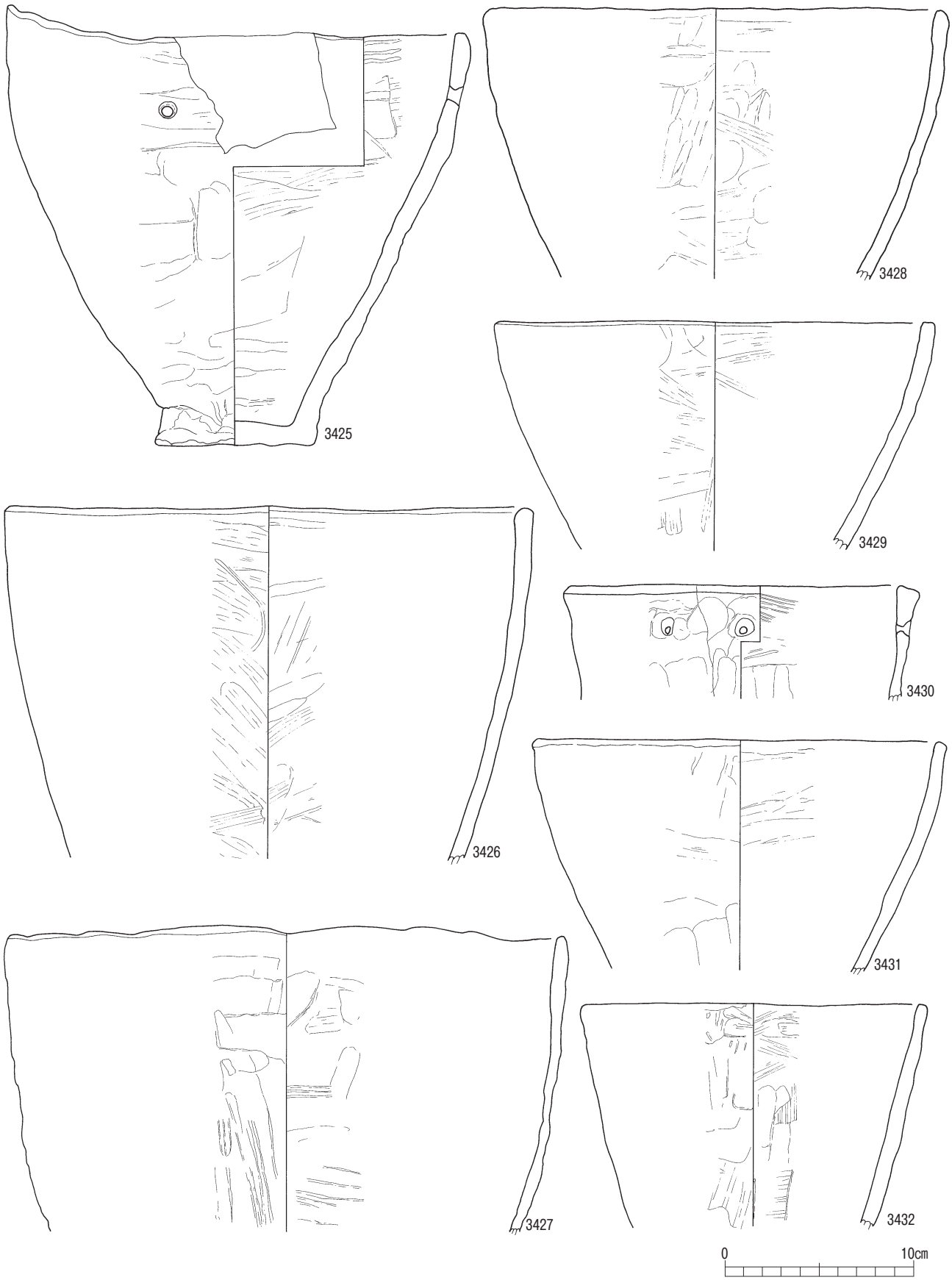
第440図　指宿式土器（284）Ⅶ類⑩



第441図　指宿式土器（285）Ⅶ類⑪



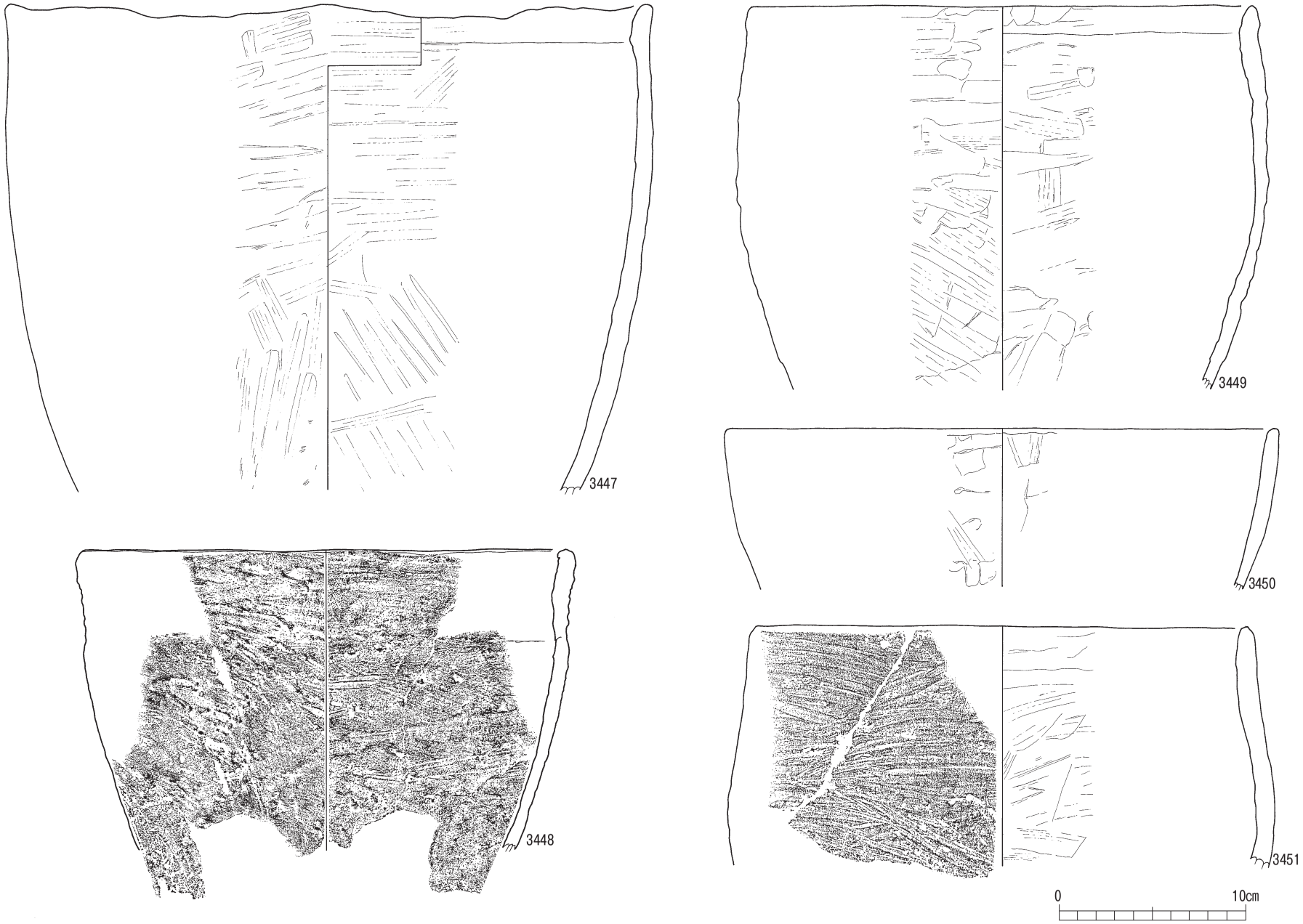
第442図　指宿式土器（286）Ⅶ類⑫



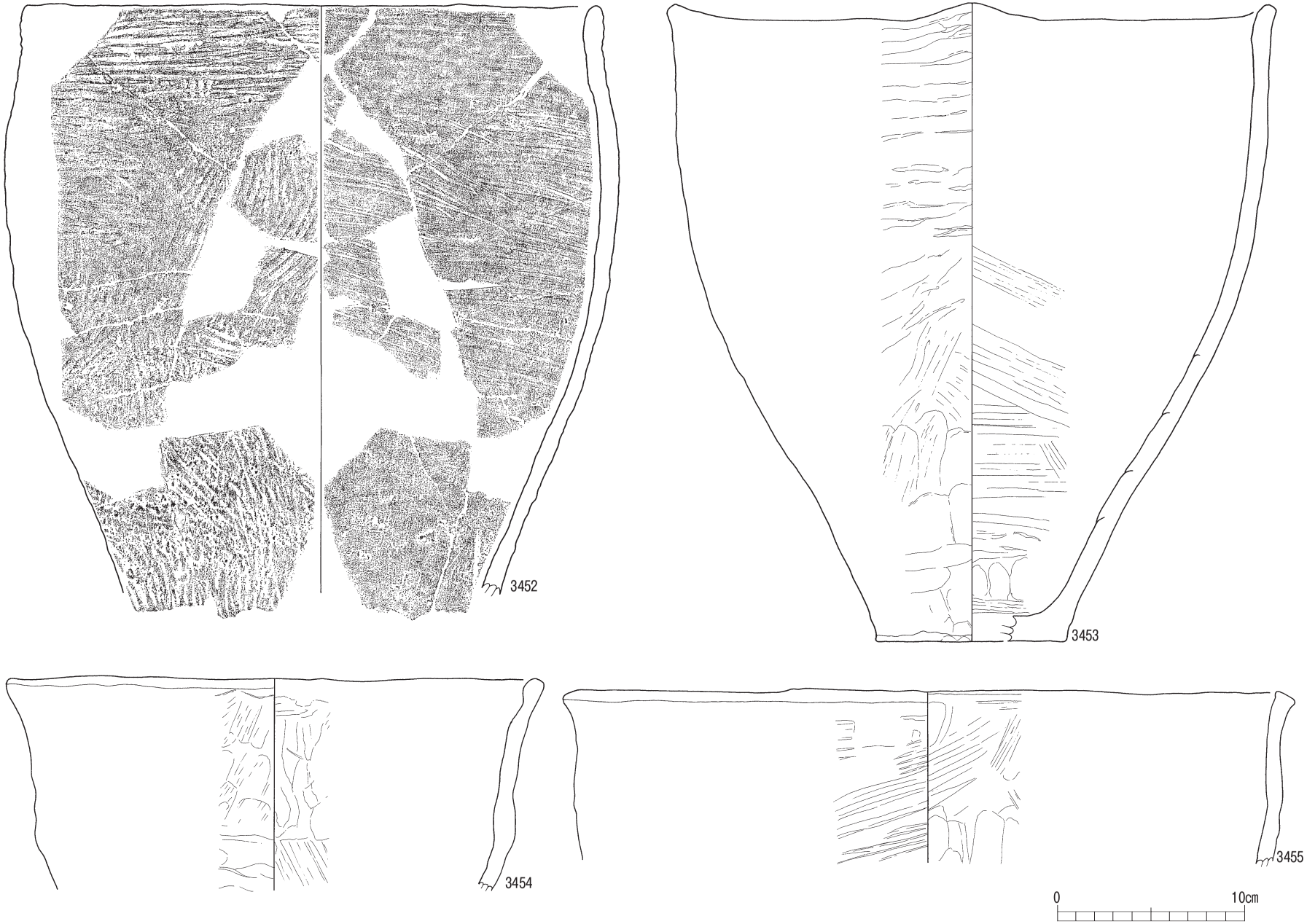
第443図　指宿式土器（287）Ⅶ類⑬

第444図　指宿式土器（288）Ⅶ類⑭

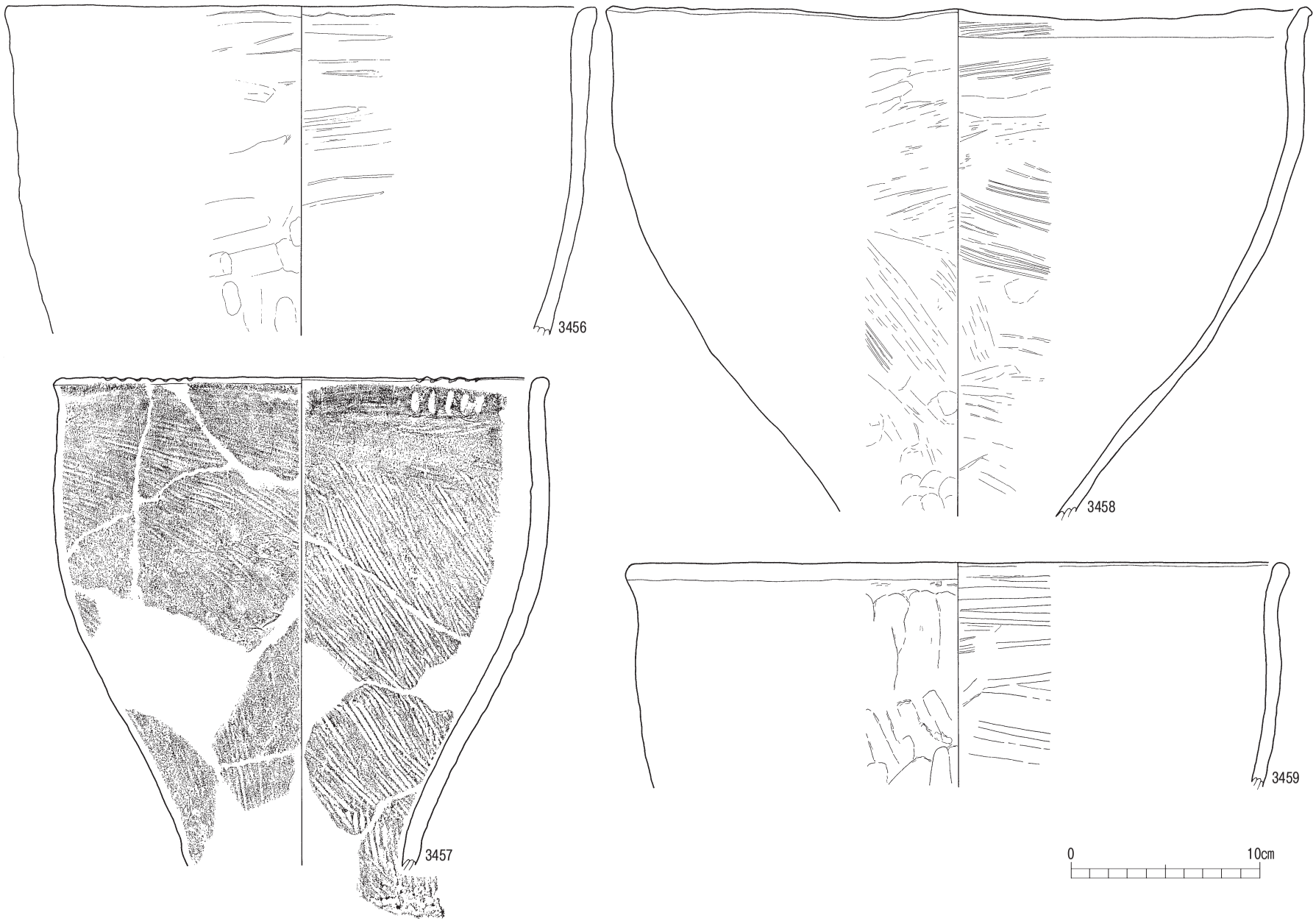
第445図　指宿式土器（289）Ⅶ類⑮



第446図　指宿式土器（290）Ⅶ類⑯



第447図　指宿式土器（291）Ⅶ類⑰



第448図　指宿式土器（292）Ⅶ類⑱

3467・3468は山形突起で，3467は口径18.6cmで，突起は低い。3468は中央に巻貝による入組文があり，その脇に左に８つ，右に５つ以上のヘラ刻みがある。

イ　鉢（第451図～第453図　3473～3499）

頸部がくびれる壺形のものと，コップ状にまっすぐ伸びるもの，浅鉢状のものなどがあり，小型のものもある。

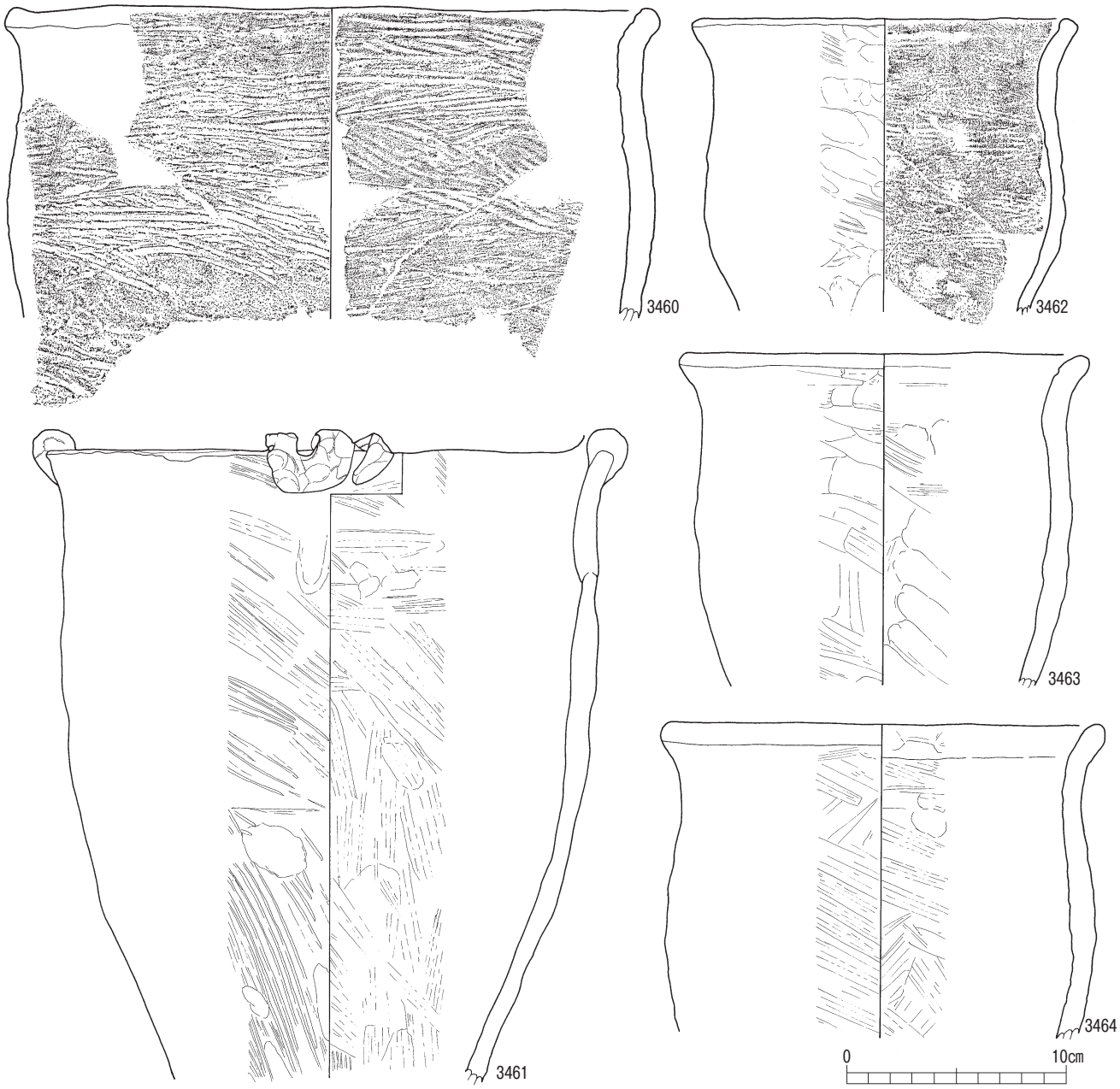
3473～3478は壺形を呈するもので，3478は無頸壺状である。3473～3475は口径が18.8cm～22.4cmである。3475は口縁端部に二枚貝刺突文がある。3476は７か所に小突起があり，突起内面に両側からつまんだこぶ状突起がある薄い作りで口径は16.6cmである。3477は逆Ｌ字状口縁となり，口径は15.8cmと小さい。3478の口径は14.5cmである。

3479～3484はまっすぐ伸びる器形で，平底のものと，ややあげ底になるものがある。

3479の突起部は分厚く，底は網代の痕をナデ消している。口径が10cm，高さが12.4cmである。

3480～3484は口径が13.1～17.8cm，底径が8.2～9.6cm，高さが11～15.5cmと小型である。3481は網代底で，口縁部はでこぼこしている。3482はややあげ底で，繊維状圧痕がある。3483の口縁端にはヘラ刻みがある。3484の底は網代痕をヘラでナデ消し，白粉を付けている。

3485・3486は浅い器形で，3485は口径16.6cm，底径9.6cm，高さ6.6cmで，口縁端内面は内へ飛び出す。3486



第449図　指宿式土器（293）Ⅶ類⑲

第450図　指宿式土器（294）Ⅶ類⑳

は口径が29.8cmと大きく，底は網代痕が残っている。

3487は口縁部がやや外反し，底部は外へ張り出す。

3488は丸みをおびており，底は外へ張り出す充実高台風の雑な作りをし，網代底で，外面にふきこぼれ痕がある。

3489は２か所に小さな突起がある。

3492は不整形の低い脚台の付くもので，外面下部に円文がある。積み上げ痕が内外ともくっきり残っており，口縁２か所に粘土紐の貼付突起がある。

3493・3494は内反ぎみの器形で，3494は分厚い。3495・3496は丸底の小型土器である。3497は直口する小型の土器である。

3498はややあげ底で，口縁端がやや外傾している。

3499は外へまっすぐ開くやや傾いた鉢で，１か所に小さな突起がある。底部に突帯を貼り付け，６か所に透かしのある脚台が付く，１か所の透かしは貫通していない。

ウ　手づくね土器（第453図 3500・3501）

3500は底部が分厚く，内反ぎみの鉢部の口縁近くに三角突帯が貼り付けられて受け状になっている。底は網代痕をナデ消している。

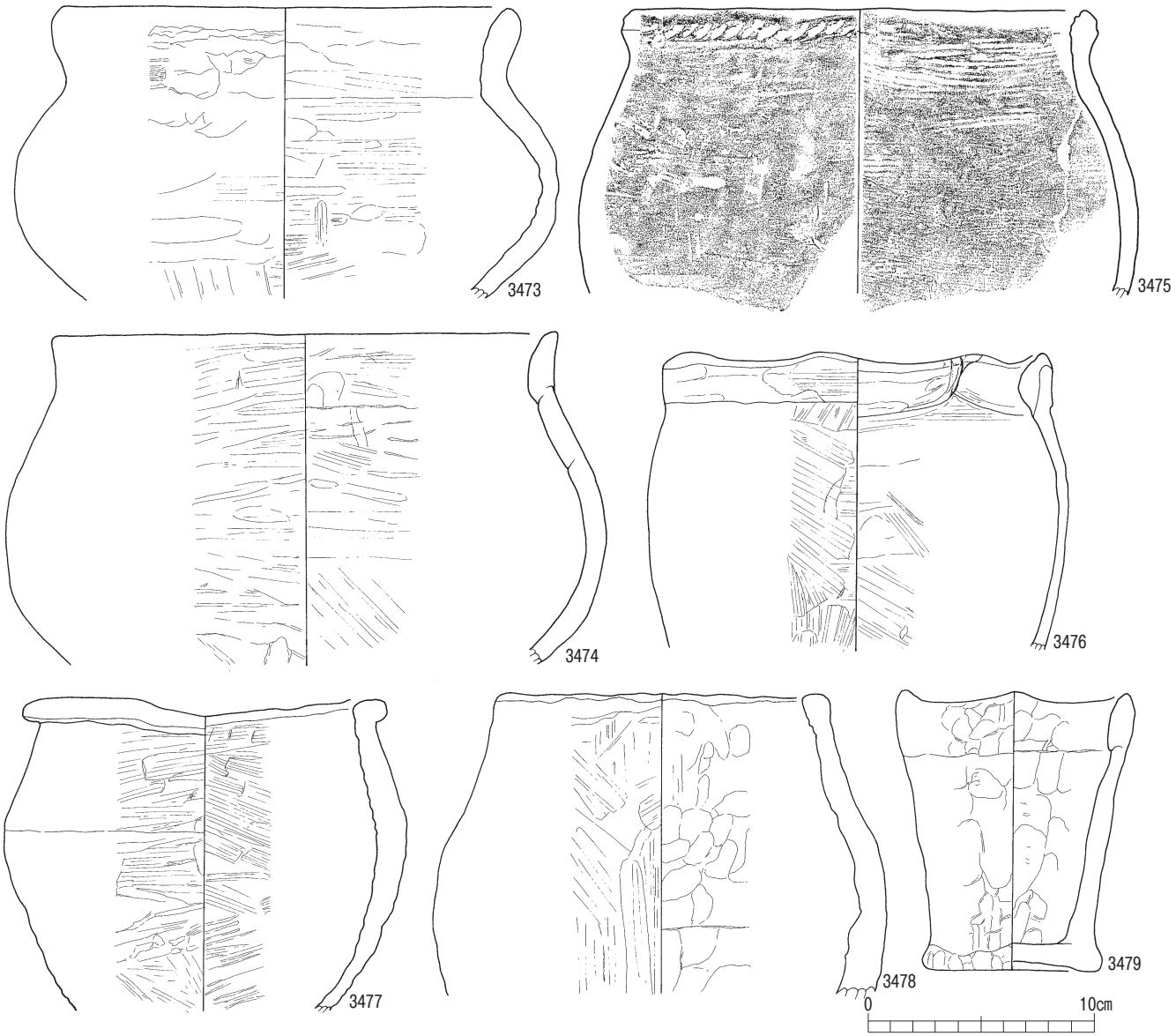
3501は口縁がでこぼこし，丸みをおびた底部で，向かいあわせに一対の透孔がある。

エ　突起（第453図 3502・3503）

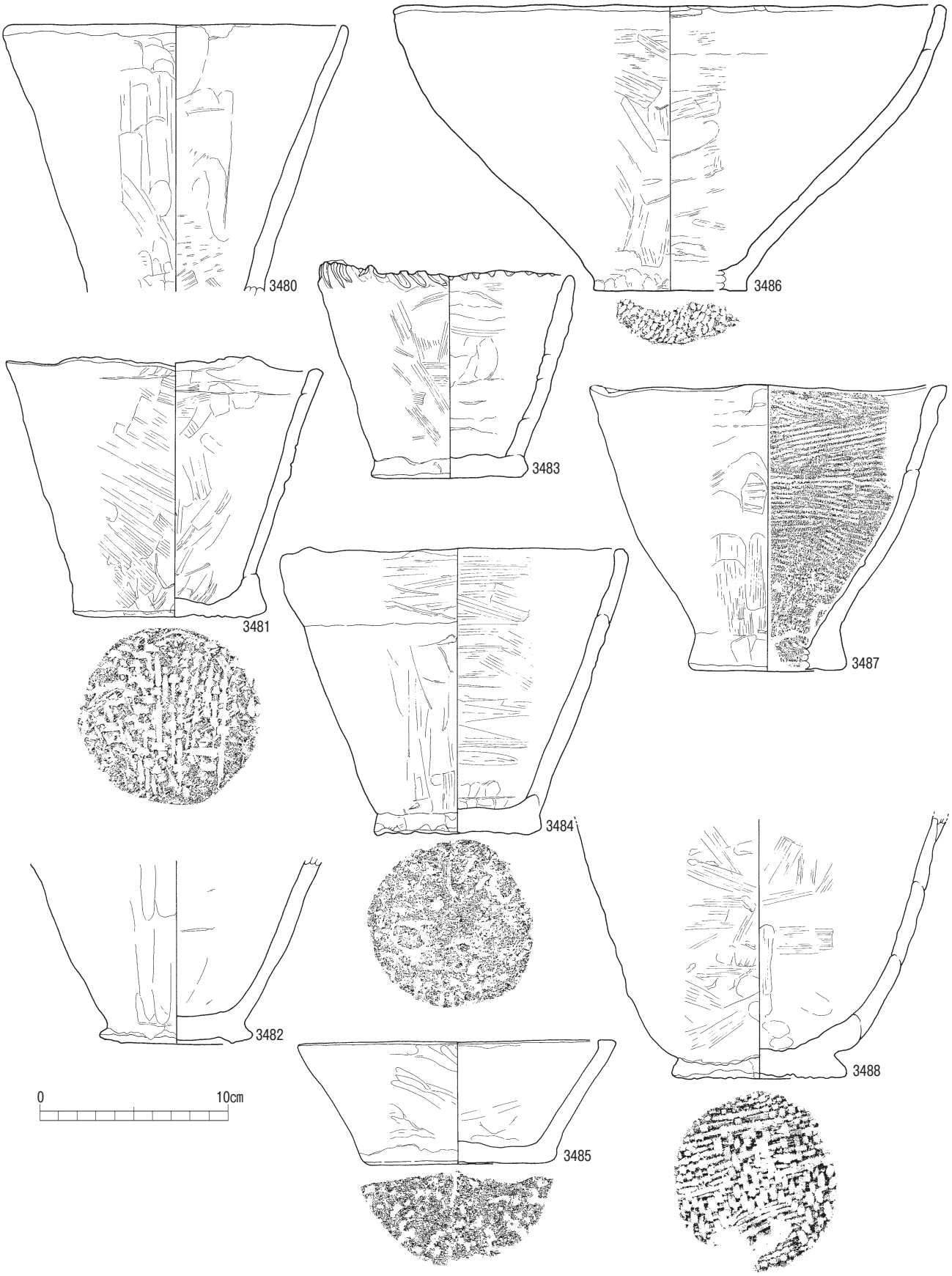
ともに小型の鉢である。

3502は口縁端に沿って横方向に粘土紐を貼り付け，さらに，それと直交する方向に２本の粘土紐を貼って突起とするものである。

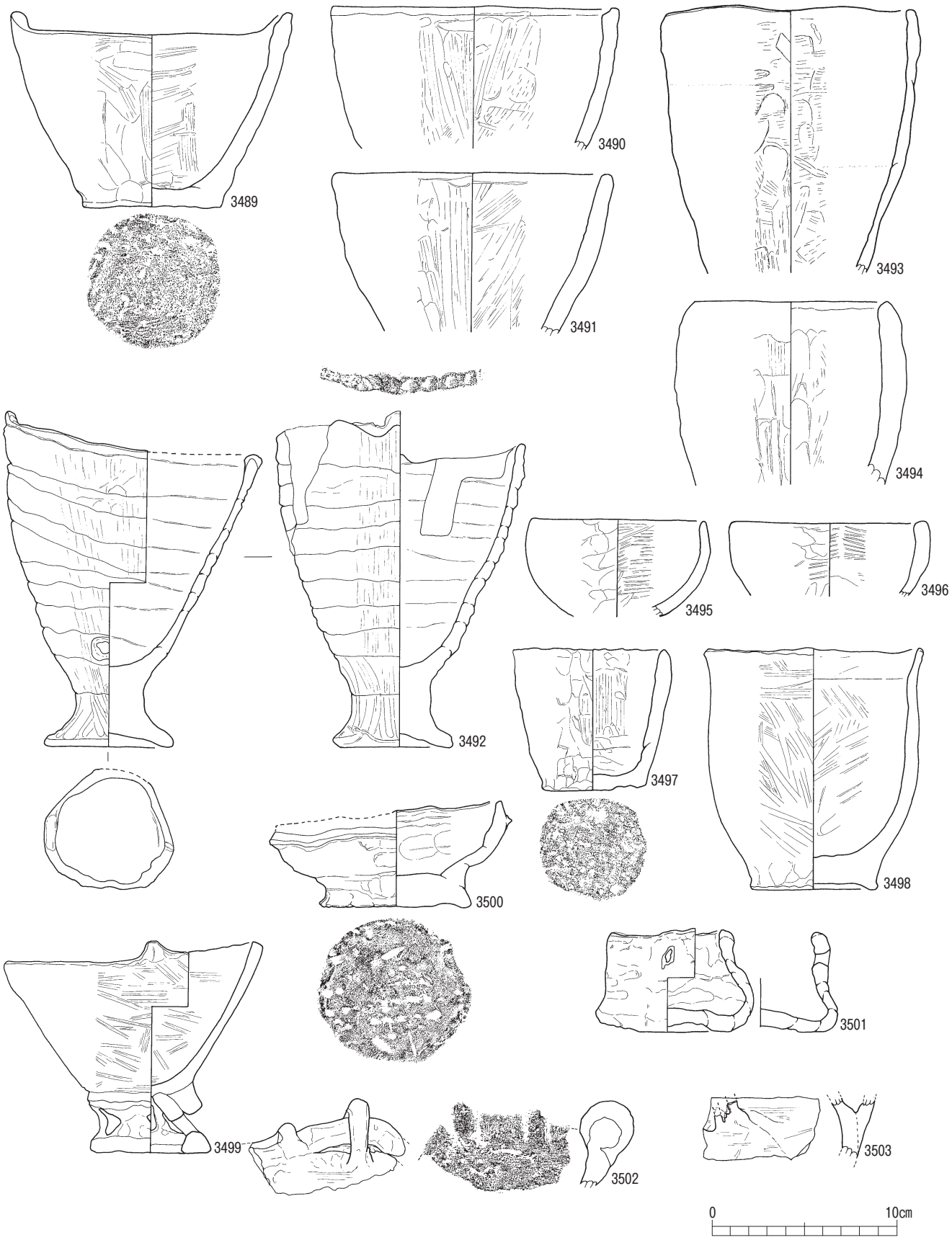
3503は粘土紐２本を貼り付けて，橋状把手とするものである。



第451図　指宿式土器（295）Ⅶ類㉑



第452図　指宿式土器（296）Ⅶ類㉒



第453図　指宿式土器（297）Ⅶ類㉓

（８）底部（第454図～第473図）

底部は，底の模様から鯨底，木葉底，ナデ底，高台，網代底に分け，さらに高台を除いて底部端部の形状から，以下の３型に分類し，掲載している。

Ａ型：底部接地面の端部を調整することなく，外側に張り出すタイプ

Ｂ型：底部接地面の端部を調整し，外側に張り出すタイプ

Ｃ型：底部接地面の端部を調整し，外側に張り出さずに胴部へと立ち上がるタイプ

このように，形態によって３型に分けた理由としては，底部だけでは後述する市来式土器との判別が難しいことがある。特にＣ型の底部は，底部端部の丁寧な調整から市来式土器の可能性もあるが，胴部の外反が欠損しているため判断できず，指宿式土器の中に組み込んだものもある。

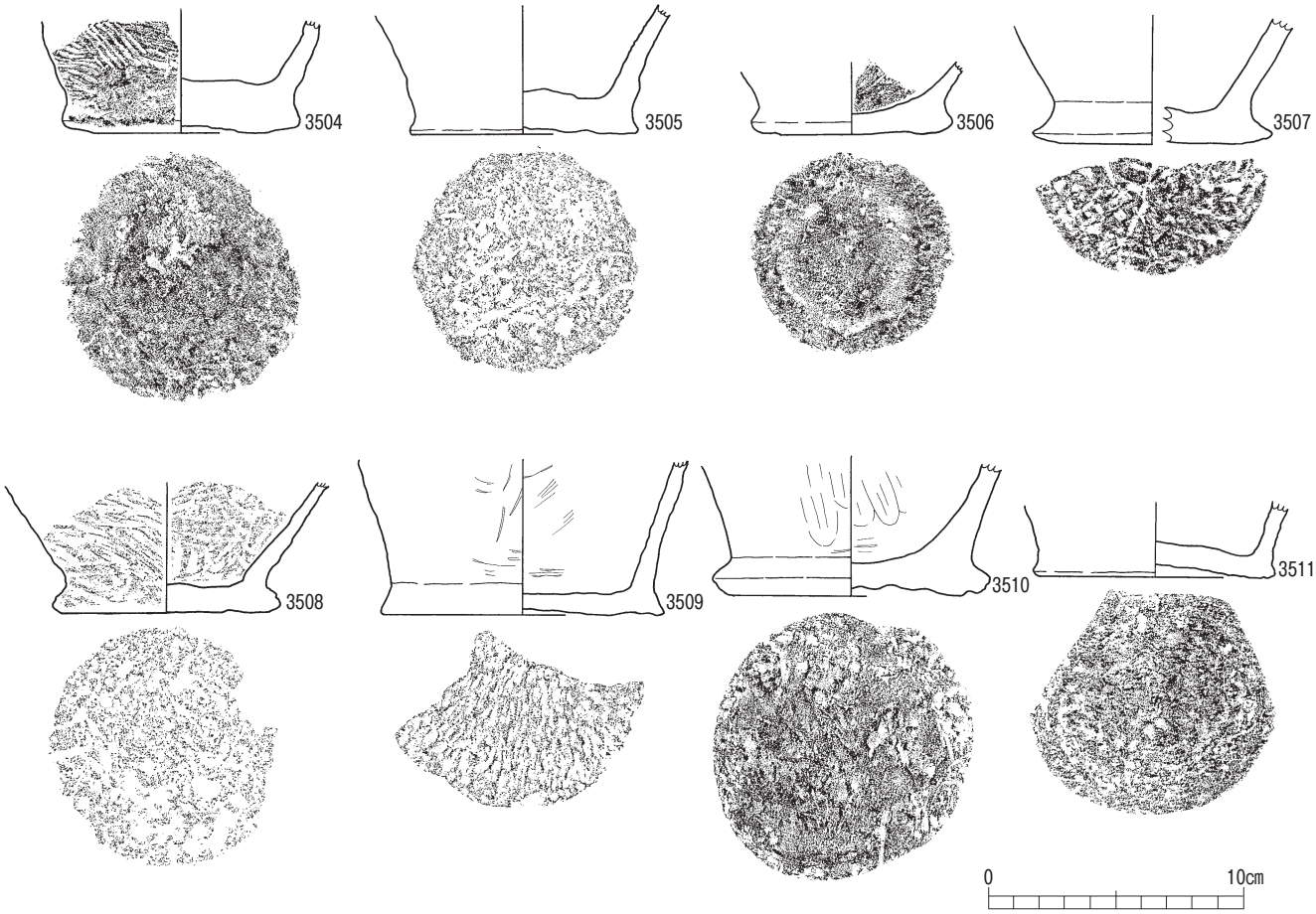
ア　鯨底（第454図・第455図 3504～3517）

鯨底については，14点を図示した。

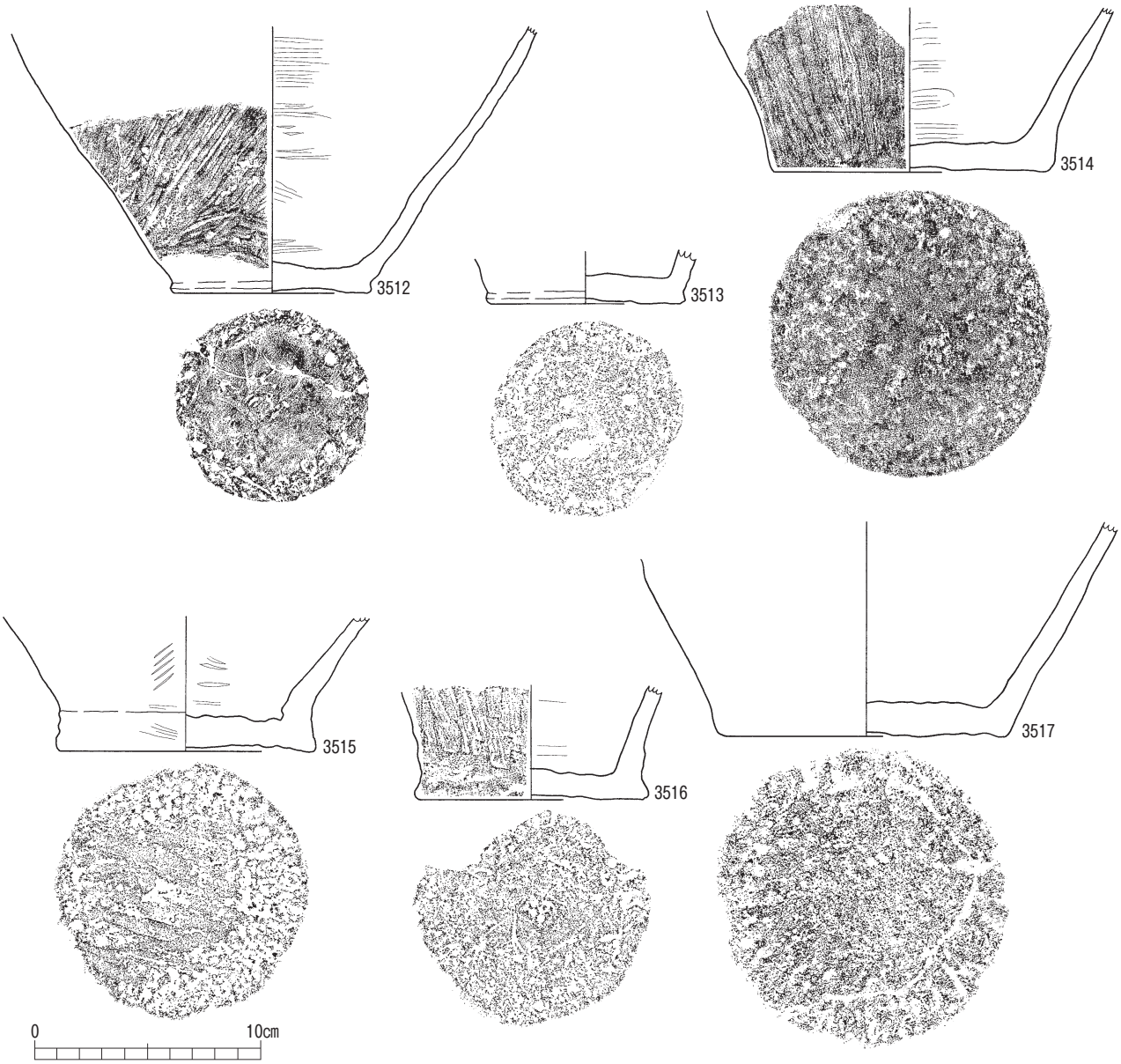
3504～3510はＡ型である。3504・3505・3507・3508には白粉が付着している。3504は外面に貝殻条痕の調整が見られるが，底部端部まではその調整が至っていない。同様に3508も，内外面に貝殻条痕の調整が見られるが，底部端部まではその調整が至らず，底部端部はヒダがついたような形を持つ。3506は，鯨骨の中央部で，緩やかな突起が多く残る。

3511～3514はＢ型である。3511は厚みが均一なまま底部に至り，華奢な感じを与えるものである。底部全体に白粉が付着し，中央が上げ底のようになっている。3512の底部は，縁辺部と中心部の間に指で押した緩やかな凹みが見られる。これは底部から胴部を積み重ねる際，親指と人差し指で底部をつまむように調整した結果，成形されたものと考えられる。3513は割れ方から底部上面に胴部を重ねるように積み上げている。3514は内外面とも丁寧にナデ調整がおこなわれている。ただ，底部端部までは調整が至っていない。

3515～3517はＣ型である。3515は底部から胴部へはスラリと立ち上がっているが，調整は粗い。底部外面中央部にはナデ痕があることから，骨髄の膨らんだ部分を平坦になるよう調整したと考えられる。3517は，底径が13.4cmある大きな底部である。焼成は悪く，触るとボロボロと崩れてくる。



第454図　指宿式土器（298）底部①



第455図　指宿式土器（299）底部②

イ　木葉底（第456図～第460図 3518～3580）

木葉底については，63点図示した。

3518～3525はＡ型である。Ａ型は底部端部を調整していないため，木葉の痕跡が，他の型に比べてはっきりと分かるものが多い。3518・3520は網状葉脈が見られる。3519は白粉が多量に付着した網状葉脈が見られる。3522は緩やかな丸底の底部であり，うっすらと網状葉脈の痕跡が見られる。3521は白粉が付着した平行葉脈である。3523～3525はシダ科の植物であるオオタニワタリの底部圧痕である。これらの３点は，底部の上面に積み重ねるように胴部が成形されている。

3526～3550はＢ型である。3526～3538は網状葉脈の痕跡をもつ木葉底である。3533はブナ科の葉を３枚重ね合わせた上に底部を乗せている。3534～3536も，3533と同様に網状葉脈の葉を複数枚重ね合わせた上に底部を乗せている。3542～3547はオオタニワタリの底部圧痕が残る。3542・3544・3546・3547の底部には白粉が付着している。3544は緩やかな上げ底になっており，底部中央の厚みが薄くなっている。3550は底部中央がナデ調整を施されているためにはっきりとしないが，木葉とシダ類の葉を敷いて土器を製作した様子がうかがえる。

3551～3573はＣ型である。3551はシダ類の葉が圧痕として見える。3555は底部内部に複数枚のブナ科の葉跡があり，底部縁辺部に鯨骨の跡が見られる。3564は底部外縁の調整を断ち切るように葉脈の跡が残っているので，土器製作が終了した後，乾燥させる段階で木葉の上に完

成品を置いたことがうかがえる。3562は底部全体が白粉で覆われている。3566～3571は平行葉脈の痕跡をもつ木葉底である。3572はシダ類の葉を広げ，その上で土器を製作していた可能性がある。3570・3571はオオタニワタリの底部圧痕である。

3574～3580は底部中央のみでいずれの型かは判別できないが，葉脈が見えるので掲載している。3576はオオタニワタリの底部圧痕で，葉を２枚重ねし，その上で土器の製作を行っている。

ウ　ナデ底（第460図～第462図 3581～3631）

ナデ底については51点図示した。

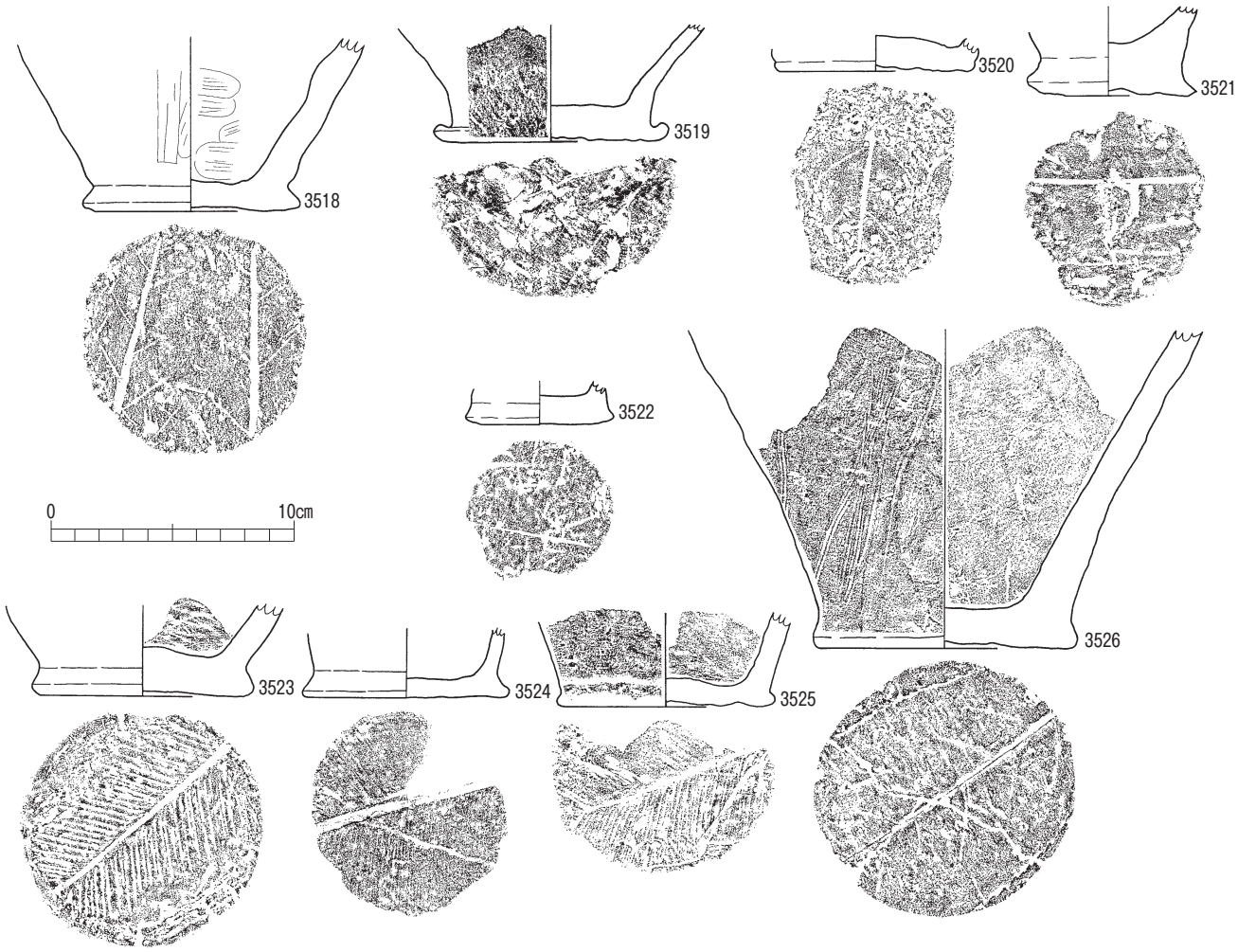
3581～3585はＡ型である。ナデ調整が底部にあるため，底部端部の立ち上がりも調整してあることが多く，Ａ型の個数は少ない。3581は外面に指ナデによる調整が見られ，その調整が底部縁辺部に及ばないために，横に膨らんだＡ型のナデ底となっている。3582は底部縁辺部から１cmほど内側に入り胴部が形成されており，底部内面中央から押し上げるように底部と胴部をつなぎ合わせている。また，底部中央部にはヘラによるケズリ痕があり，底部の厚さが胴部の厚さよりも薄くなっている。3583は厚さが約3.5cmある肉厚の底部である。

3586～3615はＢ型である。3587は底部及び胴部全体をヘラでナデている。3590は底部縁辺部に鯨骨らしき跡が微かに見られ，それをかき消すように調整がされている。3596・3597・3600・3602は底部中央がうっすらと浮き上がる上げ底の形状であり，反対に3608・3609・3612は緩やかな丸底の底部である。3614は底部縁辺部に爪先で等間隔に押しつけた跡が残る。

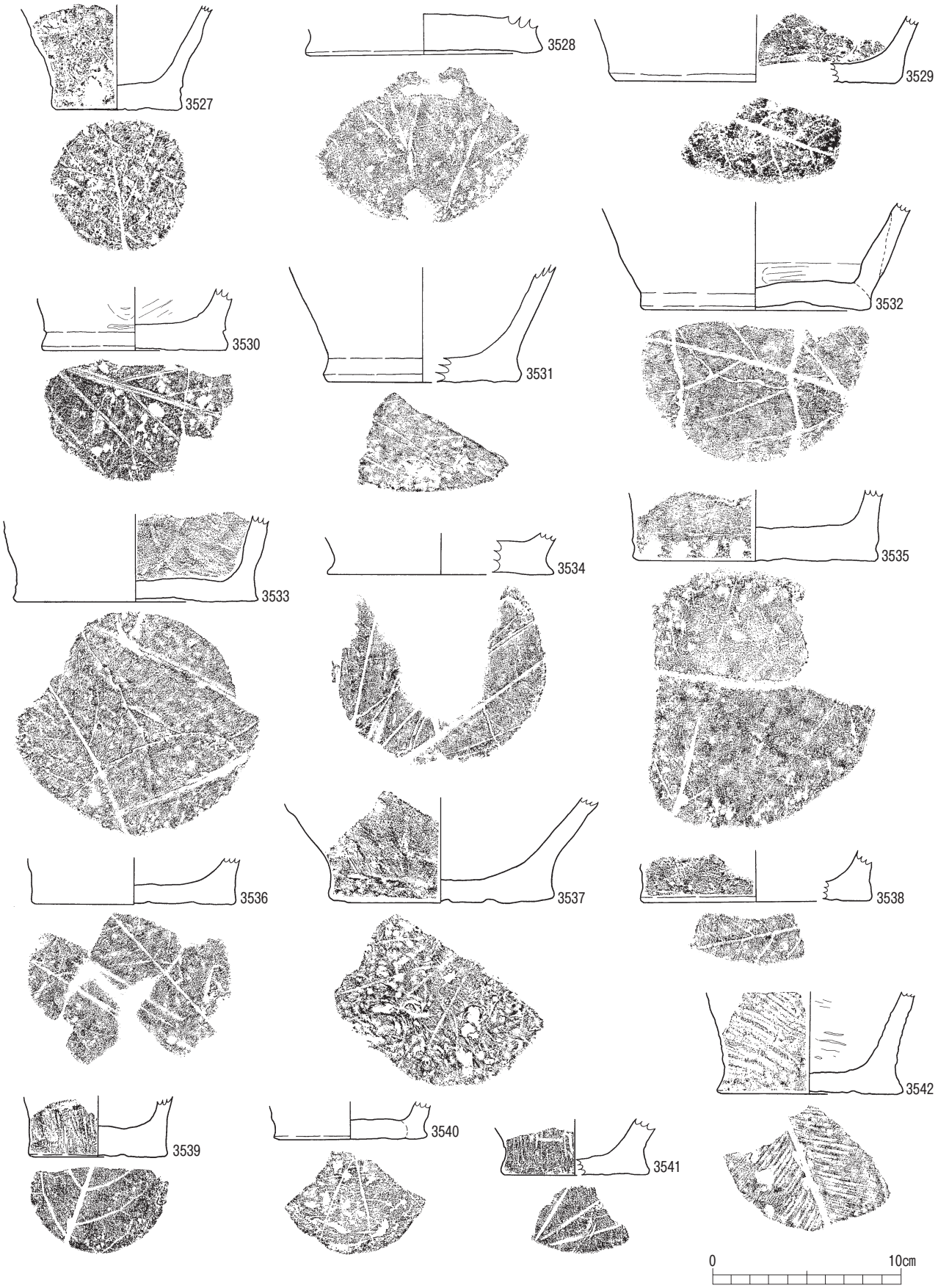
3616～3631はＣ型である。3621は内部を補強するかのように，底部近くの内部側面に貼り付けている。これは，底部と胴部の接着面の補強と考えられるが，はっきりとしない。

エ　高台（第462図 3632～3635）

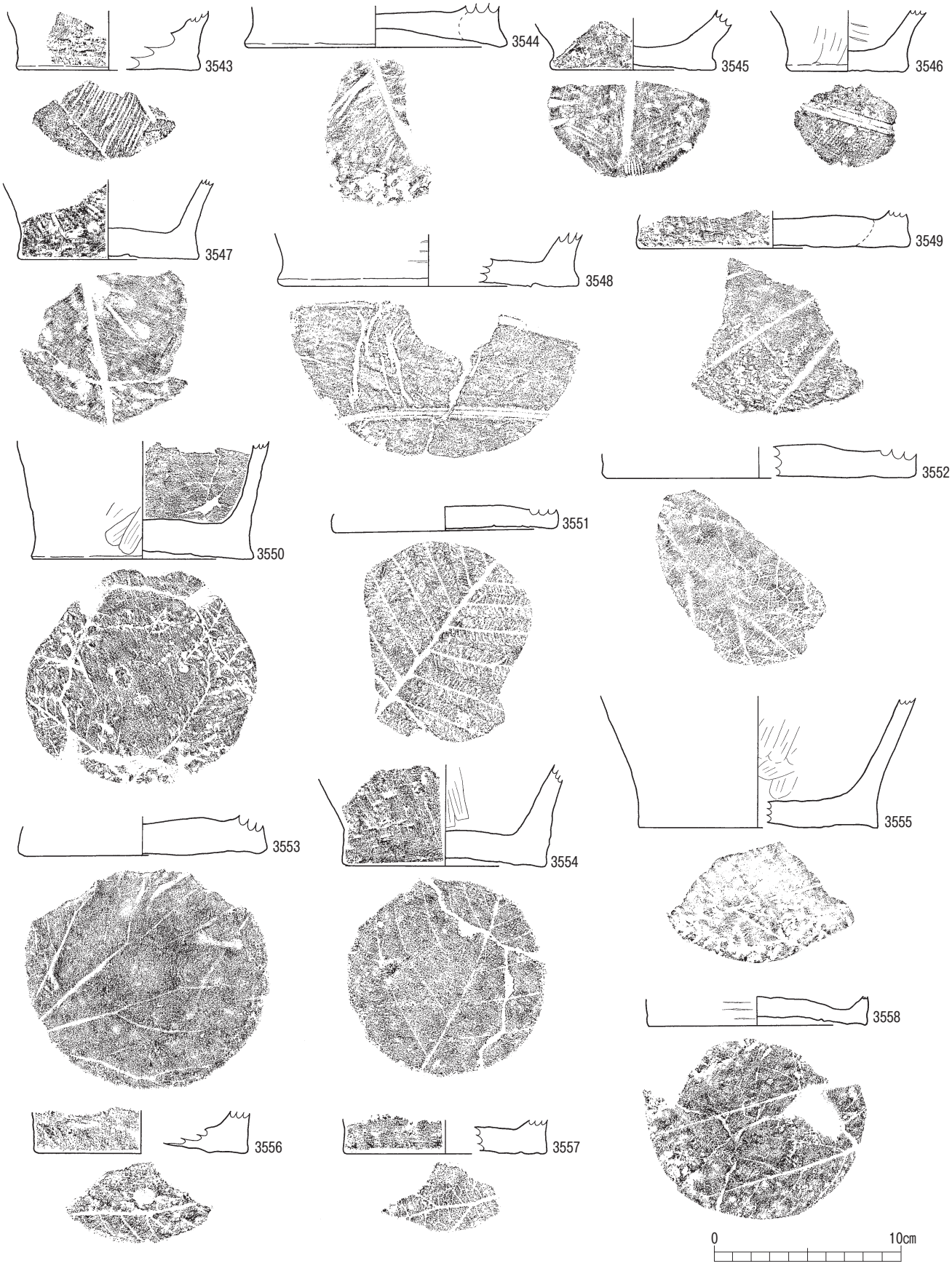
3632～3635は高台の底部である。3632はＡ型の横に広がった底部の張り出しを，指で押し込むように整え，脚部を成形している。3633と3634は脚部の低い高台である。



第456図　指宿式土器（300）底部③



第457図　指宿式土器（301）底部④



第458図　指宿式土器（302）底部⑤